
薔薇のマリア
Ⅶ.SINBREAKER MAXPAIN
十文字青 Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
Ⅶ.SINBREAKER MAXPAIN
私はロシュの声を聞く者です。ロシュの意思に従う者です。ロシュに成り代わり〝裁き〟を為す者です。私はアロンズ・ニードルスピア。ロシュは人の子に救いをもたらすべく私をこの地上へとつかわしました。私はあなたがたを救うでしょう。あなたがたは救いをえるためにここへやってきたのです。ロシュに導かれるがままに。


サンランド無統治王国
ジェードリ・マーマン地区
〝洞窟—ゲヘナ聖堂〟
「歌でもうたうか」
唐突だった。
先頭のトマトクンが言いだしたのだ。
ああ、そんな台詞を、どこかで聞いたことがある。
どこでだろう。いつだっけ。
誰が言ったんだったか。
「……歌——って。トマトクン、何か知ってる歌でもあるの」
「うむ。そうだな」
トマトクンはしばらくの間、考えこんでいた。
歌いだしたのも、やはり突然だった。
錆びついていた
崩れそうだった
ぼろぼろの心(ハート)は
乾ききっていた
干からびそうだった
ひりひり痛いくらい
何かを感じて
誰かと話して
それが苦痛なほど
微笑みを返して
誰かを愛して
ぜんぶできやしなかった
そのうち大丈夫になるさ、
なるさ、なるさ
そのうちきみを好きだ、
好きだ、好きだって
うるさいくらい
わめきちらすから



ドームは、特殊な塗料でも塗られているのか、それとも、材質のせいなのか、その全面が緑色がかったほのかな光を放っていた。

たしかに、椀をひっくり返したような半球形だ。直径は五十メーテルほどもあって、かなり広い。その中心にある天井まで達する筒状のものが、おそらく昇降機だろう。

そして、やつらは昇降機を囲むように整列して、マリアローズたちを待ちかまえていた。

「——あれが、魂集め(たましいあつめ)百七号……」

薔薇のマリア

Ⅶ．SINBREAKER MAXPAIN

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ⅶ
—SINBREAKER MAXPAIN—
Ao Jyumonji

First published 2007 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration：*BUNBUN*
design work：*design CREST*

A BRAVE HEART OF RED ROSE

VII

CONTENTS

CONTENTS

あとがき

A BRAVE HEART OF RED ROSE VII

MAIN CHARACTERS



Tomatokun
トマトクン

ZOOの園長（マスター）。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者（クラッカー）。



Twaning
トワニング

イカレマッチョ。



Pimpernel
ピンパーネル

ZOO所属の元暗殺者。



Yurika Snow-white
ユリカ・白雪

ZOO所属の医術士。



Alpha
アルファ

白狼。



Rom Four
ロム・フォウ

深い森の黒真珠。



Jean-Jacques de Joker
ジャン・ジャック・ド・ジョーカー

でたらめ貴族。



Ciro Pancaro
チーロ・パンカロ

エンツォ・パンカロの三男。



"Sir Judas" Aronz Needlespear
〝サー・ジューダス〟アロンズ・ニードルスピア

血塗れ聖堂騎士団団長。



Daidarun Soenorg Musaw
ダイダラン・ソーノーグ・ムソー

元オストロス神殿筆頭僧主。



Soal
ソオル

彷徨える者。



Luca
ルカ

ジェードリの少女。



Carlo Bossi
カルロ・ボッシ

パンカロ・ファミリーの若頭。

and the others

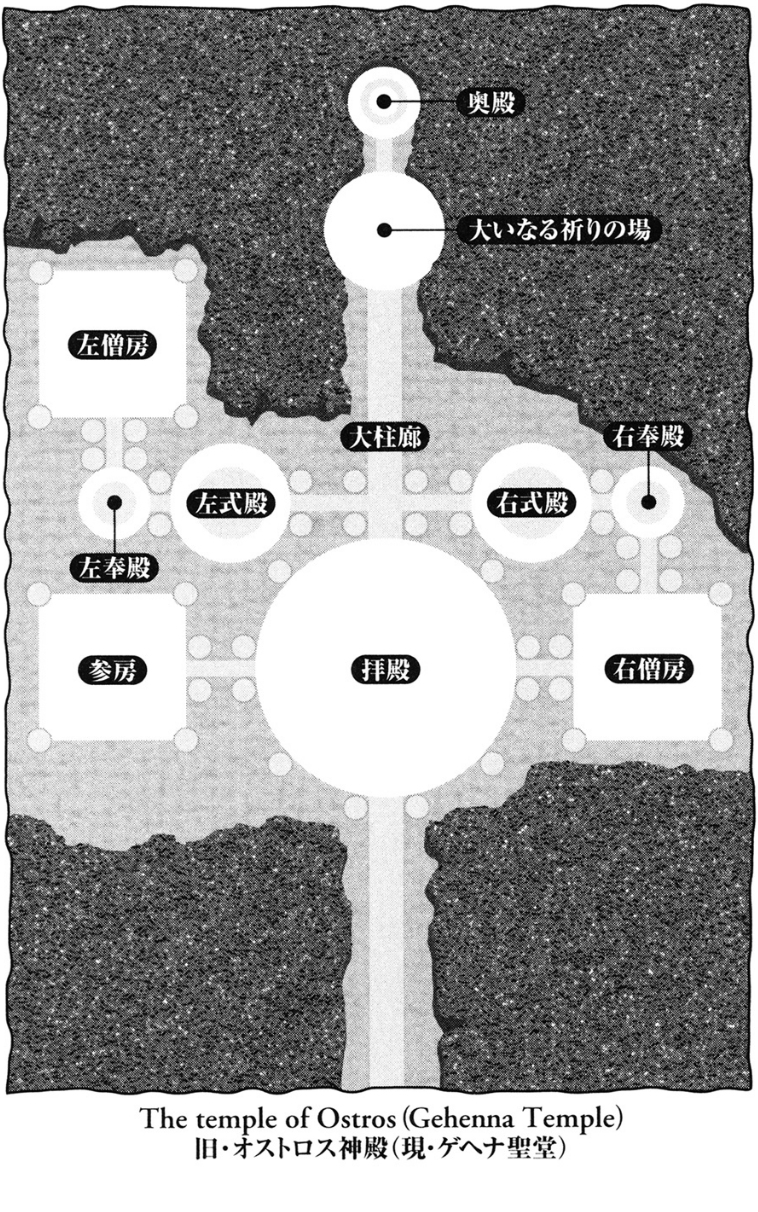
Safinia&Claudia
サフィニア&クローディア

Ricou
リク

"Sir James" Daredevil&BTK
〝サー・ジェイムズ〟デアデビル&血塗れ聖堂騎士団

Ros
ロシュ

and etc.



The temple of Ostros (Gehenna Temple)
旧・オストロス神殿(現・ゲヘナ聖堂)

罪咎（つみとが）

the past day

母と二人でジレンビー地区の借家に移り住んだ。もう何年も使われていない廃はい屋おくだった。他ほかの人の手は借りずに、二人だけでゆっくりと時間をかけて隅すみ々ずみまで掃そう除じした。たまにあの頭痛が襲おそってきた。我が慢まんして母には気づかせまいとした。母は十分苦しんだ。これ以上母の気苦労を増やしたくはない。このところ、何の前まえ触ぶれもなくいきなり泣きだすようなことはずいぶん減ってきた。たまにはぼくに微笑ほほえみかけてくれることもある。ずっとスープしか飲んでくれなかったのだが、給料が出なくても辞やめないと言い張っていた家政婦頭がしらのジョスリンが実家の事情でやむなく帰郷してから、状じよう況きようが変わった。ぼくが見よう見まねで用意した食事を、少しずつではあるものの口に入れてくれるようになった。もともと、ぼくがつたない手つきで作ったものならば、母も食べてくれるのではないかと期待していた。そのとおりになった。ぼくは幸せではなかった。ぼくも母も幸せであろうはずがなかった。しかし、母がぼくの料理を食べて、おいしいわ、と言ってくれることが、ぼくには何よりも嬉うれしかった。依い然ぜんとして、時折ぼくの頭は叫さけびだしたくなるくらい痛んだが、耐たえることは苦痛ではなかった。ただ、ぼくがこの痛みに冒おかされて死んだら、母を守る者がいなくなる。それだけが気がかりだった。

いや、心配事はまだあった。

ぼくと母には金がなかった。

父は生活に必要なぶん以外の金はすべて、国中の施し設せつに寄付するか神に捧ささげるかしていた。また、父はみずから騎き士しの位を返上したので、恩給なども一いつ切さい出なかった。当初、ぼくも母もそのことを深刻には受け止めていなかった。そんな余よ裕ゆうがなかったし、そもそも金のことを意識した経験がなかった。実のところ、我が家の家計について一番よくわかっていたのが家政婦頭のジョスリンで、彼女が給金はいらないなどと言ったのは、金がないことを知っていたからだった。ぼくと母は今やただの貧びん乏ぼう人にん一歩手前だった。借家もジョスリンの伝手つてでただ同然の朽くちかけた家を見つけてもらった。当面は、帰郷の前夜、ジョスリンが涙なみだながらに、これは旦だん那な様からお預かりしていたものです、とぼくに手て渡わたした金でやりくりしなければならなかった。正直、その金にどれくらいの価値があり、どのくらいの間、生活できるものか、ぼくにはほとんど想像がつか

なかった。母も実感がわかないようだった。父がいないというだけでも心細いのに、ジョスリンもいなくなり、金もなく、世知もない。ぼくたちは幸せではなかった。ぼくの頭はたびたび痛んだ。せめて母に笑って欲しかった。金が欲しかった。

　しばらくして、ジョスリンから手紙がきた。老父の具合がよくないので、当分は戻もどれそうもないと書かれていた。こちらは大だい丈じよう夫ぶだから心配しないで欲しいと返事を書いた。金は半分に減っていた。ぼくは意を決して父の両親のもとを訪ねて援えん助じよを求めた。にべもなく断られた。母が内職の仕事を始めた。ぼくは廃品回収を手伝ってわずかな駄だ賃ちんをもらった。

　ある日、ぼくの頭がふだんよりもひどく痛んだ。ジョスリンの実家から手紙がきた。訃ふ報ほうだった。老父ではなくジョスリンが死んだ。急死だったという。過労が原因ではないかと書かれていた。ぼくと母はひとしきり泣いて、お悔くやみの手紙を書いた。金はもう尽つきかけていた。母が父の同どう僚りようだった騎士の家々を訪ねて援助を求めた。いくばくかの金をもらい、一晩中泣いていた。ぼくは痛む頭で考えた。金が欲しい。どうすれば金が手に入るだろう。初めて父を恨うらんだ。すぐに悔いた。

　父は悪くない。父は誇ほこり高い騎士だった。神に仕える純潔の騎士だった。

　父はよく神のことを話してくれた。神がもたらす救いについて語ってくれた。まぶしい笑顔で神の正しさを教えてくれた。

　しかし、父は戦いに敗れた。たとえいかなる理由があろうとも、騎士として敗北は恥ち辱じよくである、と父は騎士を辞めた。私は命いのち乞ごいなどしなかったが、哀あい願がんして命を拾ったと世人に言われるのは耐えがたい苦痛である。犯おかしてもいない過あやまちを口々に言いたてられるのは屈くつ辱じよくである。かけがえのない我が息子むすこを不義の子とそしられることには憤いきどおりを覚える。誰だれもが罪人であるのに、自身の罪を省かえりみず、他者の罪ばかり責めたてる濁じよ世くせに絶望する。

　父は狂くるっていった。戒いましめをといて、きつい酒を浴びるように飲んだ。声を荒あらげることも、暴れることもなく、静かな狂きよう気きに身をゆだねていった。裁きを求めて飲酒しながら神に祈いのりを捧げた。それをもって、邪じや宗しゆうの祈りであると陰かげ口ぐちをたたかれた。聖教会が異い端たん審しん問もんを

行おうとしているとの噂うわさも流れた。父は愛あい剣けんでみずからの腹を割さき、首を斬きって、血ち塗まみれで死んだ。

　母は憐れん憫びんと嘲あざけりと侮ぶ蔑べつを浴びせられながら、父のかつての同僚、友人たちに、その夫人に、金をせびって歩いた。わざと薄うす汚よごれた恰かつ好こうをして、こうすると、たくさんお金をくれるのよ、あの人たち、と母は笑ってみせた。ちょろいものよ、と、わざと下世話な言い方をしてみせたりもした。ぼくの頭は痛んだ。ぼくはまだ子供だった。大金を手に入れるのは困難だった。どうすればいいだろう。金が欲しい。ぼくは考えた。いつもそのことばかり考えていた。考えたあげく、ぼくは母の真似まねをして、父の同僚だった騎士のもとを訪ねた。ジョン・マウザー卿きようは快くぼくを迎むかえ入れてくれた。生前の父は、ジョン・マウザーについて、神に仕える聖堂騎士としてはともかく、武人としては尊敬すべき優ゆう秀しゆうな騎士であると語っていた。ぼくは正直に尋たずねた。ぼくは母を養わねばなりません。ぼくは子供なのでいい知ち恵えが思いつきません。何か方法はないでしょうか。それとも、ぼくでは母を助けてあげられないのでしょうか。

　お父上のことは本当に気の毒だった、とジョン・マウザーは言った。沈ちん痛つうな面おも持もちだった。私もノーマン卿のご家族のことは気にかかっていたのだ。こちらからお訪ねしようと考えたことも一再ではない。残念ながら、その機会には恵めぐまれなかったが、お父上のことは今でも友人だと私は思っている。むろん、私にできることであれば、何でもしよう。微び力りよくながら、手伝わせてもらおう。そうか。お母上を。なるほど。人の子として当然の務めではあるが、感心なことだ。方法。そう。いい方法がある。騎士になるのだ。むろん、いきなりは無理だ。私の側そば仕づかえの騎士見習いに取り立ててあげよう。給金も出す。十分お母上を養ってさしあげられる額だ。騎士になるのだ、アロンズ・ニードルスピア。お父上のような聖堂騎士に。

　家に帰って、母に伝えた。ぼく、騎士になろうと思うんだ。騎士になれそうなんだ。お給料だってもらえるよ。お父さんみたいな誇り高い、正しい聖堂騎士になりたいな。なれるかな。

　きっと喜んでくれるだろうと思っていた母の表情が、凍こおりついた。ぼくの心も冷たくなった。ぼくは何か間ま違ちがったことをしたのだろうか。よくないことだったのか。浮うき立った気持ちはあっという間に沈しずんでしまった。名案に思えたが、母を苦しめ

るのだとしたら、何の意味もない。母は、しかし、すぐにぼくを抱だきしめて、そう、そうね、と言った。身体からだを離はなし、ぼくの頬ほおを両手でつつんで、笑って、と笑え顔がおを浮かべてみせた。笑って、アロンズ。お願いだから、そんなに悲しそうな顔をしないで。笑って、アロンズ。騎士になるのね。そうね。あなたなら、きっと立派な騎士になれるわ。お父さんみたいに立派な騎士に。ううん。もっと立派な騎士になれるに決まっているわ。お父さんも、そう願っていたのよ。あなたを騎士にしたかったのよ。あなたなら、神様のお声をしっかりと聞いて、神様の御み心に添そって、世界を救えるはずだって、お父さんはおっしゃっていたわ。大おお袈げ裟さかしらね。でも、何度も、何度も、そうおっしゃっていたのよ。

　ぼくは途と端たんに嬉うれしくなって、母にうなずいてみせた。よかった。ぼく、騎士になるよ。絶対に立派な騎士になってみせるよ。ジョン・マウザーさんが、約束してくれたんだ。ぼくを側仕えの騎士見習いにしてくれるって。

　母がぼんやりと呟つぶやいた。

　──ジョン・マウザー……ですって……？

　ぼくが首を傾かしげると、母は、何でもない、というふうに首を振ふった。その夜、とてつもなく頭が痛くなって目が覚めた。どうしても耐たえられなくなり、母の部屋へ向かった。ドア越ごしに何度か呼んだが、返事はなかった。母は首を吊つって死んでいた。

　悲しみに暮れるぼくをジョン・マウザーが慰なぐさめた。母は、笑って、とぼくに言い残して死んだ。であれば、笑わなければならない。ぼくはジョン・マウザーの側仕えの騎き士し見習いとなり、やがて騎士となった。ぼくの頭は時折ひどく痛んだ。ずっと痛みつづけた。ぼくは知らなかった。長らく聞いていなかったあの声をふたたび聞くまで、ぼくは何も知らずに痛みをこらえて笑みを絶やさなかった。

Omenage 897 11th revolution 9th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ヤスパー地区

〝回転海豚（スピニングドルフィン）〟

chapter.1

認めたくない

今日はどうして世界全体がこんなに暗いんだろう。

胸の表面あたりが、ちくちく、ぢくぢく、痛い。

でも、その痛みが薄うすっぺらい皮ひ膚ふを突つき破って心臓まで達することは絶対にない。

僕は表面的に痛がっているだけだ。痛みを、正面から、ごまかさずに、しっかりと受け止めることを拒きょ否ひしている。言い訳をしつづけている。他ほかの誰だれかに対してじゃない。僕は自分に対して延々と申し開きをする。

こんなことなら、泣いてしまえればいいのに、と思う。

いっそ、泣き暮らすことができれば──、

いったい、どうなるっていうんだ。

どうにもならない。

どうしようもない。

僕のちゃちな痛みは単なる自己弁護だ。僕の言葉はただの繰くり言だ。僕の目は僕にとって都合のいいものだけを映す欺ぎ瞞まんに満ちた不良品のレンズだ。僕の鼓こ膜まくは嘘うそばかり響ひびく破れかけた太たい鼓こだ。僕の手は汚きたならしい偽ぎ善ぜんのねばねばした雫しずくをすくって自分自身だけを飾かざり立てようとする気色の悪い触しよく手しゆのようなものだ。僕の足はろくでなしで厚こう顔がん無む恥ちな僕を立たせて運ぶだけの粗そ末まつな車輪にすぎない。僕はたしかに息をしている。どうして息をしているのかわからない。なんで息をしないといけないんだろう？　そうやって、僕はまた自分を痛めつけるふりをして、自分を慰めようとしている。ああ、まったく僕ってやつは、救いようがない。救えない。

空が、暗いよ。

晴れているのに。

こんなにも青い空なのに。

突きぬけるような青い空なのに。

暗いんだ。

世界はこうして進んでゆくんだろうか。誰かが大事なものを失っても、世界はつづいてゆく。そんな残ざん酷こくな真実を僕らに突きつけながら、世界は一方向に突き進んでいって、決して後あと戻もどりすることはない。だったら、僕は取り残されてしまいたい。僕を置いていってくれていい。置き去りにして欲しい。だって、怖こわいんだ。怖い。怖いよ。怖くて仕方ないよ。知っているからだ。わかっているんだ。何を？　何を、だって……？　白々しい。わかっているくせに。そう。わかっている。

僕だ。

僕なんだ。僕が悪い。僕のせいだ。ぜんぶ、何もかも、僕のせいなんだ。

責められてもしょうがない。非難されて当然だ。心の底からそう思っている。だから、僕を糾きゆう弾だんして欲しい。みんな僕に怒いかりをぶつければいい。お前のせいだ、お前が悪い、お前なんか消えろ、いなくなれ、死んでしまえ、と罵ば声せいを浴びせて欲しい。そうしたら、僕はおとなしくどこかへ行くから。もう誰にも迷めい惑わくをかけないように、姿を消すから。一人でやってゆくから。きっと、そのほうがいいんだ。むしろ、そうしたい。本当に？　本当に。

嘘だ。

嘘っぱちだ、嘘をつくのもたいがいにしろ。

僕は恐おそれているじゃないか。一人きりになることを、こんなに怖がっているじゃないか。その証しよう拠こに、結局、僕はここにいる。ジェードリに。ヤスパー地区。「回転スピニング海豚ドルフイン」。飛び海豚いるかの間。僕は窓まど際ぎわの椅い子すに腰こしかけて、暗い、あくまで暗い、晴れ渡わたっているのに暗い空を見ている。ぼんやりと、空だけを眺ながめている。そんなふりをしている。

やがて僕は、たぶんあの空よりも暗い色をしているだろう僕の目を窓から引きはがす。飛び海豚の間にはベッドが二台ある。一台に

はサフィニアが、もう一台にはクローディアが寝ねている。違ちがう。寝かされている。彼女たちはあれ以来、目を覚ましていない。クローディアは大いなる禍まがゞまがしい鎌かまグリムサイズの一いち撃げきで、サフィニアは屠と竜りゅう獄ごく滅めつ改かいで、それぞれ二人とも力を使い果たして、昏こん睡すい状態に陥おちいっている。

彼女たちは、自分にできることを、最大限のことをやってみせたんだ。僕とは違う。そんなことを考えてしまう。そして僕は気づく。ようやく、遅おそまきながら、気づかされる。

暗い。

そうだ。暗いのは、あの空じゃない。僕だ。僕自身だ。僕がどす暗く、どす黒い。

ようするに、僕の見る空が暗いのは、そのせいなんだろう。

「マリア」

ドアが開いた。小さなユリカが入ってきた。洗面器やタオルや水差しなどを満まん載さいしたトレイを持っている。ユリカはそれらをサイドテーブルの上に置くと、マリアローズの前まできて、少し身をかがめた。顔をのぞきこまれている。マリアローズは怯ひるんで、冷や汗あせをかきながら目をそらした。

「うん……」

顔をそむけておいて、うなずいてみせるなんて、意味不明だ。

「大だい丈じよう夫ぶ？」

「あ、うん。べつに……」

「本当に？　しょうは見えないけど」

「大丈夫だよ。だって、僕は……何も。怪け我がだって、ユリカが治してくれたし」

「しょう。でも──」

ユリカは何か言いかけて、やめた。

マリアローズはユリカの顔をちらりと見た。表情が微び妙みようにゆがんでいた。

僕のせいだ。

「医い術じゆちゆ式しきで治しぇる傷きじゆと、しょうじゃない傷きじゆがあるから。心も……身体からだも」

マリアローズは答えられない。返事なんか思いつかない。黙だまって、唇くちびるの端はしをゆるめた。微笑ほほえんでみせた。僕は、なんてことだろう、僕ってやつは、笑っている。

バカみたいだ。

いや、正しよう真しん正しよう銘めいバカなんだ。どうしていいかわからないから、笑ってごまかすなんて。だいたい、よくも笑えるものだ。こんなときに。あんなことがあって。笑うなんておかしい。笑えるなんて変だ。

ユリカは一つため息をついた。どんなため息だろう。わからない。マリアローズはもうユリカを見ていない。下を向いて、膝ひざの上で組みあわせた自分の両手に目を落としている。さっきから、左手の人差し指と中指の間を、右手の人差し指が、ぐっ、ぐっ、と何度も押おしていた。ユリカはサフィニアとクローディアの様子を確かめはじめたようだ。ずっとそうだ。あのときも、あのあとも、今も、ずっと、ユリカは自分にできることをしっかりやっていたし、やっている。マリアローズのように、無む為いに時をすごすことはない。逃にげたりしない。すべてを受け止めて、前を向いている。マリアローズを気づかってくれさえする。

すごいね。

そう思っただけだった。そのつもりだった。それなのに、口に出してしまっていた。

「すごいね」

自分の顔が引きつるのを感じた。両手にぎゅっと力が入った。額の毛もう髪はつの生え際のあたりから汗がじっとりとにじみだしてきた。唇が、震ふるえる。喉のどの奥が細かく痙けい攣れんして、歯がカタカタ鳴った。

　ユリカは、おそらく、動きを止めてこっちを見ている。視線が痛い。痛くてたまらない。息が荒あらくなって、どうしようもなくて、このままではいられなくて、マリアローズはもう一度、繰くり返した。すごいね、と。ユリカは、すごいね。

「えらいよ、ユリカは。僕には、とても真似まねできないよ。できるはずないけど。だって、僕は医術士じゃないし。でも、そんなことじゃなくて──そうじゃなくて、ユリカは、すごいね。冷静だし。自分の役割を知ってるってかんじで。いつでも、どんなときでも、最善をつくして、それがあたりまえ、みたいな。すごい、と思うよ。僕には……できない。僕は、無理だよ。ぜんぜん、ダメだ。ダメすぎるね。ユリカと比べたら、僕なんか──」

「しょんな──しょんなことないわ、マリア、わたしだって」

「違うよ」

　マリアローズはうつむいたまま首を振ふった。

「違うって。ユリカと僕は、違うよ。違いすぎるよ」

「違うからって、どうだっていうの？　違って当とう然じえんじゃない。しょうだとしても」

「そうだね。分相応ってやつだよね」

「マリア……」

「だって、そうでしょ？」

　マリアローズは小こ馬ば鹿かにしたような笑みを浮うかべた。誰だれを？　ユリカを？　ありえない。それじゃあ、自分を？　そうかもしれない。なんだかもうどうでもいい。

「違ちがうってことは、そういうことだよ。もしかして、ただ違うってだけで、それは優ゆう劣れつじゃないんだって、ユリカは言いたいの？　でも、そんなのきれいごとでしょ。ユリカにできることはたくさんあって、僕には何もない。僕はこうしてぼーっとしてることしかできない。何も、できなかった。何も。それどころか──」

「しょうやって！」

　両りよう肩かたを強く押さえられた。駆かけよってきたユリカが、両手でマリアローズの肩をつかんでいた。それでも、マリアローズはユリカの顔を見なかった。

「──しょうやって、卑ひく屈ちゆに、自じ虐ぎやく的になって！　しょれで気が晴れるなら、いいわ、好しゆきなだけ、いくらでも言いなしゃい！　わたしのことも、自分のことも、傷きじゆちゅけたいだけ傷きじゆちゅければいい！　しゃあ、遠えん慮りよしなくていいわ！　わたしはちっとも怖こわくない！」

「僕は……」

　ユリカ。ああ、ユリカ。結局、そうなんだ。わからない。きみにはわからないと思う。僕みたいに、ちっぽけで、貧ひん弱じやくで、ショボくて、とるにたらない、愚おろかで無価値な出来損そこないが考えることなんて。

「僕は……怖い！　怖いんだよ！　傷つけるのも、傷つけられるのも、やだ！　怖い！　それなのに、こんなふうにユリカに八つ当たりしちゃう、自分が……嫌きらいで、大嫌いで、嫌いや気けがさして、仕方なくて」

　だから──、

「やめて欲しいんだ」

　マリアローズはユリカの手の上に自分の手を重ねた。小さい。なんて小さな手だろう。今さらそんなことに驚おどろいて、肋あばら骨ぼねの裏側にナイフを差しこまれたような、冷たい気分を味わうなんて。僕なんか、このまま解体されてしまえばいいんだ。そのナイフに力をこめて、僕の身体をガバッと切り開いて、内臓をとりだして、さらしてくれていい。無む惨ざんな死体こそが、僕にはふさわしい。

「やさしく、しないでよ」

　マリアローズはユリカの手を乱暴に振り払はらって、椅い子すから立ちあがった。苦しい。呼吸がうまくできない。ここはダメだ。ここの空気は、僕にはあわない。マリアローズは逃げだした。走って、マリアローズを呼び止めようとするユリカの声に耳をふさいで、何かわけのわからない言葉を発しそうな口を閉じて、部屋から

飛びだした。思いきりドアを閉めた。目が回っているかのようだった。くらくらした。でも、一刻も早くここから離はなれないと。逃げろ、逃げるんだ。走れ、走れ、僕の足。進もうとしたが、何かにぶつかった。壁かべ。違う。人だ。抱だきとめられた。しなやかな腕うでだ。やわらかい胸だった。

見上げると、清らかで、澄すみきっていて、それなのにどこまでも深い、エメラルドグリーンの瞳ひとみがあった。

「……ロム・フォウ」

「平気かい？」

首を横に振りそうになって、耐たえた。どうにか我が慢まんすることはできたものの、大だい丈じよう夫ぶ、平気だなんて、とても言えなかった。

強がりさえ言えない自分の軟なん弱じやくさに、反吐へどが出る。

「……なん、でも——」

そこまで口にするのがやっとだった。マリアローズはロム・フォウの腕を振りほどいて、また駆けだそうとした。その矢先に、ロム・フォウのすぐ後ろにいたアルファが抗こう議ぎでもするかのように「うおん！」と吠ほえた。「——ひっ」マリアローズは驚きよろめいて、危あやうく壁にぶつかりかけた。なんとかこらえたが、情けなくて、恥はずかしかった。みっともないったらない。これ以上、ロム・フォウの前で醜しゆう態たいをさらしたくない。耐えられない。マリアローズは歯を食いしばって、振り返らずに廊ろう下かを走った。

でも、僕はどこへ行くつもりなんだろう。

いったいどうしようっていうんだろう。

わからない。

とにかく、やだ。いやで、いやで、たまらない。ここにいたくない。

だけど、どこへ行ったって、きっと同じだ。変わらない。変えら

れない。逃にげても、逃げても、自分自身からは逃げられない。そんなことはわかっているのに、わかりきったことなのに、逃げずにいられない。廊下を駆け抜ぬけて、階段を下りて、ロビーを突つっ切って、回転海豚から飛びださずにいられない。

　何も思い出したくないんだ。

　何も考えたくない。

　感じたくない。

　青くて暗い空も、硬かたい石いし畳だたみの地面も、海につづく坂も、何もかもをのみこんでしまいそうな青黒い海も、嫌いや味みたらしく輝かがやく黄色っぽくて憎にくたらしい太陽も、いかにも偽ぎ善ぜんっぽくそよぐ風も、我々があなたがたを生かしてやってるんですよみたいな態度で押おしつけがましいったらない空気も、嫌いだ、ぜんぶ嫌いだ、大嫌いだ、僕は、何より、自分自身が一番嫌いだ。

「──なんで……」

　こんなことになってしまったんだろう。もう何度も、飽あきるほど繰くり返した、繰り返さざるをえなかった問いを、免めん罪ざい符ふのように口にして、立ちつくした。声に出してみただけだ。考えてなんかいない。どうせ無む駄だだからだ。理由？　原因？　そんなものが何の役に立つだろう。立たない。くつがえしがたい結果の前では、何もかもがあまりに無力で、無益だ。

　マリアローズは道みち端ばたに座りこんだ。

　膝ひざを抱かかえて背中を丸めてみた。

　そういえば、前、サフィニアがいってたっけ。サフィニアのお父さんとお母さんは、隕いん石せきに当たって死んじゃったんだって。僕もそうならないかな。今すぐ隕石が落ちてきて、僕の頭に命中すればいいのに。でも、僕はわかってるのかな。サフィニアがその出来事でどれだけ深く傷ついたか。わかってるよ。いくらなんでも、さすがにわかってる。それなのに、そんなこと考えたりして、最低だね、ああ、最低だよ、それがどうかした？　知ってるよ。もうとっくに骨身にしみてる。やっぱり、僕はダメなんだって。ようするに、またいい気になってたんだ。そういうことなんだ。仲間が

できた。みんなが好きだ。大好きだ。いろんなことがあった。思い出ができた。たいせつな思い出が。僕はすっかり浮うかれていた。与あたえられた幸運に、幸福に満足してヘラヘラしているだけで、たいして感謝もしないで、それを守るために力をつくすこともしなかった。いや、していたつもりだった。でも、足りなかった。まったく、さっぱり、足りなかったんだ。言い逃のがれはできない。結果がその事実を物語っている。

　そして、何よりも救いがたいのは、僕が、本当の意味で、心底から、真しん剣けんに、本気で、無念に思い、後こう悔かいして、反省してはいないことだ。

　僕は彼の遺体を安置してある部屋には一度も足を踏ふみ入れていない。

　彼のために涙なみだの一ひと滴しずくすら流してない。

　彼が死んだとき、僕は自分の右足を押さえて顔をゆがめていた。

　言い訳でもするみたいに、この足のせいなんだ、足が痛かったから、こんなことになったんだ、だから、僕のせいじゃないんだ、とでもいうように。

「僕は、クソだ」

　笑いがこみあげてくる。こうなったらもう笑うしかないってところだろう。マリアローズは髪かみの毛を数本つまんで引っぱった。当然、痛い。もっと引っぱった。ブチッと抜けた。自分がどうしてそんなことをしているのか理解できないし、理解したくもなかった。ただ、もっとだ、と思った。何本も、何本も、髪の毛をつまんでは引っぱり、引っぱってはブチブチ抜いた。だんだんイライラしてきた。右手を握にぎりかためて、拳こぶしで殴なぐった。自分の右みぎ頰ほおをぶん殴って、無意識に手加減しているらしい自分自身に腹が立って、今度は顎あごを殴りつけてみた。結構いい音がした。でも、たいしたダメージじゃない。僕は非力だ。自分で自分を思いきり殴っても、とうてい壊こわせそうにない。頭にくる。苛いら立だちが頂点に達して、両の拳で頭をガンガンガンガンぶっ叩たたいた。僕はクソだ。クソだ。クソだ。クソまみれのクソだ。クソ。クソ。クソッ。超最低ＳＵＣＫだ。この超最低ＳＵＣＫヤロウ！　いったいどのツラさげてのうのうと生きてるんだ……！

「よせ」

　不意に頭上から低い声が降ってきた。両手が封ふうじられている。マリアローズの両手首をがっちりとつかんでいる手は、ずいぶん大きくて、力強い。

　マリアローズは肩かたで息をしながら顔を上げた。すぐに視線を地面に落とした。目なんかあわせられない。誰だれかの目を見て話すことなんて金輪際できそうもない。

「……放してよ」

「駄目だ」

「放せ」

「まだ殴り足りんのか」

「しないよ。もう、しないから……」

「そうか」

　マリアローズは自由になった手で頭を抱えて、しっかりと目を閉じた。なんでいるんだよ。ここに。どうしてきたんだよ。いいから、どっか行ってよ。一人にしてよ。そばにいないでよ。だが、もっと切実な願いでさえ叶かなわないのだ。都合のいい、くだらない、ちっぽけな願望どおりに事が運ぶはずがない。彼は去らない。しばらくじっとしていて、あげく、マリアローズの隣となりに腰こしを下ろしてしまった。何のつもりだよ？　そんなことをしたって、僕は喋しやべらない。喋ることなんかないんだ。

　僕はもう何もしない。

　このままここでじっとしている。いつまでも。死ぬまで。

　だから、お願いだから、どっか行ってよ。そうじゃないと、僕は━、

「……僕の、せいなんだ」

　我が慢まんできなくなる。

もう我慢できない。

我慢の限界なんてとっくに超こえていた。

「僕のせいだ。ぜんぶ……僕の。僕の！　僕の……！」

おかしかったんだ、と僕は叫さけんだ。感じてた、なんか変だったんだ、うまく説明できないけど、変だったのは間ま違ちがいないんだ、上の空だった、ふわふわしてて、地に足がついてないみたいなかんじで、旅行気分だったんだ、だって、旅行だったしさ、バカみたいだけど、ほんとにバカだけど──、

楽しみだったんだ。

きっと、おもしろいことがいっぱいあるんじゃないかって。あるに違いないって、思ってた。期待、してて。それを、裏切られて。むかついたっていうか、拍ひよう子し抜ぬけしたっていうか。いけないって思ってたよ？　嘘うそじゃないよ？　だけど、どうしようもなくて、どんどんいろんなことが起こって、なんだか、すごく、すごく悪い予感がして。よくわかんないけど、本当に思ったんだ。

帰ったほうがいいんじゃないかなって。

エルデンに帰りたいって。

たしかに、結果論かもしれないよ？　でもさ、あのとき、帰っちゃえばよかったんだ。そう思わない？　思うよね？　思うでしょ？　だって、そうしてたらさ──そうしてたら、こんなことにはならなかったよね。

違う、違うよ、そうじゃない、そういうことじゃないんだ、僕だよ、僕のせいなんだ、僕が間抜けだったせいで、怪け我がした足、さっさとユリカに治してもらえばよかったのに、その時間はあったはずなのに、絶対、あったのに、それで、それで──、

「違う」

「何が違うのさ！　違わないよ！」

「いや。違う」

「違わない！」

「お前のせいじゃない」

「僕のせいだよ！　だって、僕が合図をしたんだ！　サリア・ベルは僕の声を聞いて……！　それで、こっちに気づいて──」

「そうだとしても、お前のせいなんかじゃない」

　否定する声はあくまで落ちついていて、聞きわけのないこどもを諭さとすような口調にも聞こえた。話にならない。何を言ってもしょうがないんだ。やってられないよ。マリアローズは立ちあがった。

「どこへ行くんだ」

「……どこでもいいだろ」

「よくはない」

「うるさい。うるさい。うるさい！　うるさい……！　やなんだ、ぜんぶ、すべて、何もかも。一人になりたいんだ。放ほっといてよ、僕のことなんか、もう……！」

「放ってはおけん」

　腕うでをつかまれた。無理でもなんでも、一発見み舞まって払はらいのけるつもりで振ふり返った。

　できなかった。手が動かない。彼はすでに立ちあがっていた。マリアローズを見下ろしている。眉み間けんに深い縦皺しわを刻んで、すぼめた黄玉トパーズの両眼を爛らん々らんと輝かがやかせ、頬ほおが引きつっていた。気のせいか、髪かみの毛が少し逆立っているようにも見えた。

「……トマト、クン……」

「お前は仲間だ」

　トマトクンは奥歯を噛かみあわせた。すごい音がした。よく見ると、目が充じゆう血けつしている。浅黒いからよくわからないが、目の下に隈くまもできているようだ。明らかに憔しよう悴すいしている。こんなトマトクンを見るのは初めてだった。

「そして、俺はＺＯＯの園長マスターだ」

　俺だ。

　俺のせいだ。

　俺が決めたんだ。すべて俺が決断したことだ。責任は俺にある。

　だから、マリア、お前のせいじゃない。

　俺のせいだ。

　トマトクンは平板な声で、だが、血ち反吐へどを吐はくように繰くり返した。マリアローズの腕をつかむ手にどんどん力が入ってきた。ボディスーツの生き地じ越ごしでも、指が食いこんで痛いほどだった。痛い。ああ、痛い。痛いよ。痛くて、目の周りが熱くなってきた。鼻の奥がつんとした。横おう隔かく膜まくが痙けい攣れんを起こした。しゃっくりみたいだった。なんで、こんなときに。



「いた……痛い、よ」

「お前のせいじゃない」

「わか──った、か……ら」

「俺のせいだ」

「ぃたい……って」

「俺が」

　突とつ然ぜん、トマトクンの顔がめちゃくちゃにゆがんだ。しゃっくりがひどい。痛い。弾はじけてしまいそうだ。腕が。裂さけてしまう。胸が。助けて。ねえ、誰だれか、助けてよ。こらえきれない。無理だ。誰か押おさえて。崩くずれそうだから。壊こわれてしまいそうだから。

　違う。

　そうじゃなくて、もうあふれだしている。「う、う、う」声がもれた。嗚お咽えつだ。こんなにトマトクンの顔がぐちゃぐちゃになっているのは、涙なみだのせいだ。泣いている。泣いてしまっている。「あ、あ、ああ……！」マリアローズはとうとう大声を出してしまった。苦しくて。どうしたらいいかわからなくて。どうしようもなくて。トマトクンの腕がマリアローズの肩かたを、背中を押さえた。バラバラになってしまいそうなマリアローズを、なんとか繋つなぎ止めようとして。マリアローズの中で何かが弾け飛んだ。プチン、と切れてしまった。ダメだ。もうダメだ。もう立っていられない。僕を支えていた何かが消失してしまった。僕は認めたくなかったんだ。目をそらそうとしていた。その事実を口に出すことさえ恐おそろしかった。

　マリアローズはトマトクンの胸に顔を押しつけて、しっかりと抱だきしめられながら、ようやく、しぼりだすように、彼の名を叫さけんだ。

　カタリ。

　ああ、カタリ。

　どうしよう。

　カタリが。

　死んじゃった。

　死んじゃったなんて。

やだよ。

カタリ。

Omenage 897 11th revolution 9th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

〝裸足の海岸〟

chapter.2

信じることで

生きてる。

リクは、生きてる。

カルロ・ボッシは間ま違ちがいなくそう言った。

根こん拠きよはわからない。いくら尋たずねても教えてくれなかった。でも、口からでまかせを言ったわけじゃないと思う。きっと何かあるんだ。リクは生きていると確信させるような何かが。

裸足はだしの海岸に夕ゆう闇やみが迫せまっている。ルカは冷たい砂をすくって、打ちよせる波に向かって投げつけた。リク。リク。リク。リクのことしか考えられない。どこにいるの？　本当に、生きてるの？　生きてるよね。だったら、出てきてよ。会いにきてよ。あたしだけじゃないよ。みんな、待ってるよ。心配してるよ。心配はしてるけど、誰も絶望はしていないよ。カルロ・ボッシなんかに言われるまでもない。リクは生きてる。ずっとそう思っている。帰ってくる。それどころか、今だって、いる。近くにいる。すぐそばに。ほら、そこに──、

振り向いてみた。

ため息が出た。

そこにはたしかに人がいた。でも、リクじゃない。

一度ルカと目があったけれど、彼女はすぐに下を向いてしまった。そのままコートの襟えりを立てて早歩きで近づいてくる。

ルカは黙だまって待った。リクじゃなかった。あたし、何か感じたのに。リクがいるって、思った。でも、違った。リクじゃなかった。なんだか身体からだに力が入らない。頭がぼうっとして、波の音がいやに大きく聞こえる。リク。会いたいよ、リク。

「寝ねぼけてるみたいな、ぼんやりした顔して」

ステラはルカの前で足を止めると、顔をしかめて首を振ふった。

「あんた、わたしたちよりもよくわかってるはずでしょう。今、危ないって。それなのに、一人でふらふらして。こんなところで、何

やってるの？」

「……ごめん」

「思ってもいないくせに、謝られてもね」

「ごめん」

「だから、口先だけで謝るのはよしてって言ってるでしょう。やめてよ」

「うん。ごめん」

「あんた……」

　ステラは声を荒あらげかけたけれど、寸前でこらえて空を見上げた。一秒。二秒。三秒。それで自分を抑おさえてしまうステラはすごいとルカは思う。

「──わからなくも、ないけど。あんたの気持ちも。だけど、あんた一人じゃないのよ」

「そう……だよね」

「あ、そ、そういう意味じゃなくて──ほら、ラッチャとテッドは名人街の後片付けに出ずっぱりだけど、最近、おじいさんがしょっちゅうきてくれて、ミミの相手してくれてるおかげで、アンナが手伝ってくれるし。家のことは、平気よ。そうじゃなくて」

「あたしだって、何かしないと、ね」

「そうじゃないって言ってるでしょう？　人の話、ちゃんと聞いてる？」

「……あんまり、自信ない」

「つまり、わたしはあんたのそういうところが」

「あたしの……？」

「し、し、しっ……」

　なぜかステラの顔が真っ赤だ。ルカを指さしながら、何か言いた

いことがあったようだけれど、結局、途と中ちゅうでやめてしまった。ステラは疲つかれ果てたようにがっくりと肩を落として、踵きびすを返した。

「──とにかく、帰るわよ、家に。夜になったら、また何か起こらないともかぎらないし。そうじゃなくたって、若い女二人でぶらぶらしてたら危険なんだから」

「うん。そうだね」

「そうよ」

「でも」

　ルカは自分の胸に手をあてた。

　なんだかすごく痛いけれど、大だい丈じよう夫ぶだ。あたしはまだしおれていない。信じてる。

　リクは、きっと、絶対に戻もどってくるって。

「あたしが、守るから」

　ステラが振り返って眉まゆをひそめた。

「あんたが？」

「行こ」

　ルカは先に歩きだした。吹ふっ切れたわけではないけれど、一人でぐじぐじしていたところで、何がどうなるわけでもない。それに、ちゃんとしていないと、ステラや他ほかのみんなだけでなく、きっとローラだって心配する。生きている間は、世話ばかり焼かせて、一つも恩返しができなかったのだ。せめて、これ以上、気をもませたくない。ローラを思って泣くよりは、ローラの思い出で笑ってあげたい。今は無理だけれど、いつかみんなで笑いながら話せるようになりたい。そこには、ステラがいて、ラッチャがいて、テッドがいて、アンナも、ミミもいて、そして──、

　ルカは足を止めた。

　首の後ろあたりが少しむずかゆいような、じんわりとあたたかい

ような、何かにさわられているような、不思議な、奇き妙みような感覚があった。

　ルカはその場所を手で押おさえて、振り向いた。

「……リク？」

　自然と口から滑すべりだした。言ってから、気づいた。

　そうだ。リク。リクだ。リクの視線だ。リクに見られている。リクが見ている。

　ルカは海のほうへ視線を向けた。砂すな浜はまのそこかしこに散らばっている船に目をやった。けれど、いない。見つけられない。隠かくれているのかもしれない。探そう。探さないと。ルカは走りだそうとした。ステラに腕うでをつかまれた。

「ちょっと、あんた、どこに――」

「わからない」

「わ、わからないって」

「わからないけど、リクが……！」

「落ちつきなさいよ、ルカ。もしそのへんにいたら、出てくるでしょう。なんで隠れなきゃならないの？　そんな理由、どこにもないじゃない」

「でも」

　ルカはステラの手を振り払はらおうとして、思いとどまった。

　消えていた。

　あの感覚が失うせていた。もう見られていないのだ。リクは近くにはいない。

　ルカはうつむいて、うなずいた。座りこんでしまいそうだった。ちゃんとするつもりだったのに、早くもくじけてしまいそうだ。あたしはなんて弱いんだろう。情けない。ダメだ。こんなことではいけないと思っても、力がわいてこない。ただでさえ弱いのに、どん

どん弱くなってゆく。おそらく、傍はたから見てもわかるくらいに。それで、ステラは支えようとしてくれたのだと思う。

　抱だきよせられて、頭を撫なでられた。

　やめてよ、と小声で言った。ステラはあたしのお母さんじゃないんだから。ローラじゃないんだから。そんなに頑がん張ばらなくていいよ。そこまでしてくれなくていいよ。そんなにやさしくされたら、泣きたくなっちゃうから。

「泣きなさいよ」

　ステラも涙なみだ声ごえだった。

「そのかわり、わたしも泣くから」

　抱きあって二人で泣いた。ずいぶん泣いて、もうあたりは真っ暗だったから、帰り道は手をつないだ。リクは生きているとあらためて思った。

　帰ってくるよね、リク。

Omenage 897 11th revolution 9th day

サンランド無統治王国ジェードリ・マーマン地区

〝ゲヘナ聖堂〟

chapter.3

覚悟はいいか？

「ぎん♪　ぎん♪　ぎぎ～ん♪　ぎん♪　ぎん♪　ぎぎ～ん♪」

　いやはや快調。絶好調。どんな言葉でも十分には表現しきれないほど調子がいい。そりゃあ歌の一つも歌いたくなるって。もちろん、オリジナルな。作詞・オレ。作曲・オレ。編曲・オレ。編曲？　なんだ？　編曲って。わかんねーけど、ま、いっか。とにかく、ぜんぶオレだ。オレ・オールスターズ。頭ん中はスッキリハッキリしてるし、身体からだはやけに軽い。気合いなんかもう入りまくりで変な液が出そうなくらいだ。もうすぐグオングオン唸うなるぜ、オレの恋こい人びといや相棒っつーか愛すべき凶きよう器きハンマーパンチ壱いち號ごう。首とか顔とか薄うす汚よごれた烏賊いか臭くせえ股こ間かんとか、しっかりピッカピカのビカビカになるまで洗って待ってろよ、畜ちく生しようどもめ。

「ぎ～んぎんぎんぎぎぎんぎんぎん♪　ぎ・ぎ・ぎ・ぎぎ～ん♪」

「……チーロ坊ぼつちゃん。お静かに」

「あ？　なんで？」

「気づかれます」

「いーんだよ。べつに、見つかったってよ。どうせやっちまうんだからな。同じこったろ」

「私は──やはり、反対です」

「カーッ！　カルロってばアレだな！　慎しん重ちよう派っつーの？　オトナの態度ってやつかね」

「どうとってもらってもかまいませンが」

「でも、ダーメ」チーロは唇くちびるの端はしを舌先でぺろりと舐なめた。「決めんのはオレだかんな。パンカロの頭かしらはオレだっつったの誰だれよ？　カルロ、てめーだろ？」

「それはそうです。ですが、まだ目が覚めたばかりで、身体も──」

「ところがさ。ぜんぜん平気なんだな、これが。なんでかね。もしかして、目め一いつ杯ぱいたまってっからかな？　ぎゃはは。パ

ワーあまりまくり。あとな。カルロ、てめーのオレの呼び方な」

「はい？」

「坊ちゃんはもうナシな。示しっつーの？　つかねーべ。やっぱさ。オレも呼ばねえから。カルロのこと、前みたく兄貴とかな。そういうのは、もうやめだ」

　なぜだかオレは変わっちまっていた。親おや父じが、クソ兄貴どもが、ジョゼッペが、命いのち懸がけでオレを守ってくれたあのときから、オレはこうなることがわかっていた。しばらくの間、意識こそなかったものの、こうならざるをえないって、オレは魂たましいの根っこの部分で理解していた。オレはもう、パンカロ家の図ずう体たいばかりでかくて頭は足りない洟はな垂たれで甘ったれの三男坊ぼうじゃいられない。長い長い子供時代は終わったんだ。オレはオトナの階段を上らなけりゃならない。

　だって、オレはエンツォ・パンカロの息子むすこだ。ウーゴ・パンカロの弟だ。ニーノ・パンカロの弟なんだ。

　そして、親父や兄貴たちはもういない。

　死んじまった。

　オレも死にかけたが、それでもしっかりわかっていた。シックタウンの新しい隠れ家で目を覚ましたオレは、カルロやイビツやボボ・ファッチョや他ほかの連中が呆あつ気けにとられるくらい落ちついていた。カルロからこの数日間に起こったことを聞かされても、まったく取り乱さなかった。ふむ、ふむ、ふむ、なるほど、ってなもんだった。さあて、もろもろあいわかりまくったから、そんじゃあいっちょ仕事にとりかかるか。何はともあれ、片づけとかなけりゃなんねー仕事ってのが目の前にあるわけだし。マルハゲにかぎりなく近い頭を左手で撫でながらそう言ったオレを見て、仕事、ですか、とカルロが戸と惑まどい気味に眉まゆをひそめたのがちょっぴり愉ゆ快かいだった。そーだよ仕事だよ仕事仕事。バッカてめーわかんだろそれくらい？

　ぶっ潰つぶすんだよ。

　復ふく讐しゆうだよ。

　オレたちゃ誰だ？　何者だ？

天下のパンカロ・ファミリー様！　様！　様だろ？

わかってんだろ？

血には血を、だよ。

わかったら、野や郎ろうども、さっさとコートを着やがれ。帽ぼう子しをかぶれ。剣けんを持て。気合いを入れろ。何人いるんだ？　何？　今すぐだと必死こいてかき集めても四十七人？　そんだけかよ。ま、いいや。なんとかなんだろ。ならなくたって、なんとかするのがパンカロ・ファミリーのドドンが首ド領ンだろ。つまり、オレだろ。それがオレの責任で、義務で、仕事だろ。だったら、やるっきゃねえだろ。オレがやるっつったら、てめーらはついてこなきゃだろ。なんてったって、オレはあのエンツォ・パンカロの跡あと継つぎなんだから。

そんなこんなで、チーロはカルロ、イビツ、ボボ・ファッチョ以下パンカロ・ファミリーの四十七名を引き連れて、元大海王神オストロス神しん殿でん前の坂道に迫せまっていた。もう少しだ。人々を神殿へと導く表参道の両りよう脇わきには、古い石造りの建物がガチャガチャと連なっている。チーロたちは、夜の闇やみとそれらの建物に身を隠かくしながらここまできたのだが、もーいいんじゃね、という気がしていた。うずうずして仕方ないのだ。この気持ちは、たぶん誰だれにも理解できないだろう。カルロでさえわからないと思う。わからなくてもしょうがない。

オレは、受け継がざるをえなくなった荷物の重さに押おし潰されてしまいそうで、怒いかりだの憎にくしみだのが今にもドタマのてっぺんを突つき破って夜空を真っ赤っかに染め抜ぬいてしまいそうで、だけど、どういうわけか満ち足りていて、誇ほこらしい気持ちで。

オレは冷静で、昂たかぶっていて、ブチキレそうで、やけにクールだ。

それが気持ち悪くて、どうにかして欲しい。どうにかしたい。

そのためには、実際のところ、ぶっ殺すっきゃねえんだ。

「ヨォーシ。んじゃ、一発ぶちかますか」

「ちょっ──待ってください、チーロ坊ぼつちゃん」

「だぁーかぁーらぁーっ！　それはナシッつったべ、カルロ！　オレのことは今度からボスと呼べ！　ボスだぞ！　いいな！」

「に、似合わないっすね」

「うっせえぞデブ・フトッチョ殺すぞてめー！」

「ひいっ、ごめんなさい！　でもデブ・フトッチョじゃなくてボボ・ファッチョです……」

「せやけどボス、一発ぶちかますて、そんなたいした用意もあらしまへんのに──」

「バーカ、イビツ、用意なんかバッチシガッチリバッチグーだろーが！」

「へ？」

「心の準備はもうパッキパキにできまくってんだよ」

　チーロはハンマーパンチ壱いち號ごうで自分の頭をガツンと殴なぐった。いってえ！　涙なみだが出そうだったが、オレはボスだ。手下どもの前で泣くわけにはいかない。そうだろ、親父、クソ兄貴ども、ジョゼッペ。見ててくれよな。オレ、やるから。バビッとやってみせっから。絶対泣いたりしねえから。

「オレがこいっつーまでオール待機な」

　言い捨てて建物の陰かげから飛びだした。コソコソするつもりなんて端はなからなかった。チーロは雄お叫たけびを発しながら坂道を駆かけ上がっていった。

　オレの姿を見ろ！

　オレの声を聞け！

　オレは誰だ！

「チーロ・パンカロ様だあああああああああああああああああぁぁぁぁ……！」

　敵は誰だ！

「ファッキンブラァァァァァッッドテェェェェンプル
ナァァァァァァァアイツッッ……！」

　敵を、オレはどうする。

「ぶうううぅぅぅっ殺してやっから出てきやがれっ！　かかってこおぉぉぉぉぉい……！」

　チーロは坂道の中ほどで足を止め、ハンマーパンチ壱號を思いっきり石いし畳だたみに叩たたきつけてみた。いい音がした。いい感かん触しよくだった。石畳は半径五十サンチくらいの範はん囲いにわたって粉こな微み塵じんとなり、気持ちよく陥かん没ぼつした。自信が確信に変わった。なんかよくわかんねーけど、マジでパワーアップしてんな。あれかな。生命の危機に瀕ひんしたことで、壁かべを突き破やぶったってかんじかな。やっちまったな、オレ。もしかして、今のオレ、最強じゃね？

　元オストロス神殿現ゲヘナ聖堂に目をやると、入口あたりに動きがあった。もともと十人かそこらの衛兵が突っ立っていたのだが、そいつらはその場にとどまり、中から別の連中が出てこようとしている。しかし、やけに静かだ。このチーロ・パンカロ様がわざわざきてやったってのに、騒さわぎたてるでも殺気立つでもない。なーんかミョーだな。頭の隅すみを不ふ審しんの影かげがちらりと横切っていったような気もするが、すぐにどうでもよくなった。

　きた、きた。ぞろぞろ出てきやがった。

　とはいえ、二十人、いや、三十人くらいだろうか。たいした人数ではない。さてはこの最強チーロ様を嘗なめてやがんな？　だいたい、どいつもこいつも衛兵よりもみすぼらしくて、やけに統一感のない恰かつ好こうをしている。一応、思い思いの武器やら防具やらを身につけているし、赤地に黒十字の布を首に巻いたりチョッキを着たりもしているが、どうもインチキくさい。たとえていえば、山さん賊ぞくか海賊のたぐいが血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツのふりをしている。そんな風ふ情ぜいだ。

　ただし、統とう率そつはとれている。あんな下品そうな連中が一糸乱れず行進しているさまは、見ていてちょっと気味が悪い。もしかして、一見して他ほかの者たちとは違ちがうとわかる先頭のやつが、ものすごいリーダーシップを発揮していたりするのか。

　あの女が。

　女か。

「うーん。女ぁ殺すのは趣しゅ味みじゃねえけどな。まっ、しょーがねえや」

　敵は敵だ。チーロは唇くちびるをぺろりとなめて、ゆっくりと歩きだした。目を凝こらして敵を見た。すげえ金きん髪ぱつだな。豪ごう華かだ。あの露ろ出しゅつしまくりの革かわ鎧よろいって、意味あんのかな。エロいな。でも、刺青いれずみがすげえ。あと、顔もインパクトがある。篝かがり火びに照らされた左半面だ。あれは、火傷やけどか。医術士とかいんのにな。わざと治してねーのかね。時間たつと、治しづらいとか聞いたことあるけどな。右半面は美人だけどな。やれるかやれないかっつったら、余よ裕ゆうでやれるな。もちろん、殺やれるか殺れないかっつったら、余裕で殺れっけどさ。女でも容よう赦しゃはしてやらねえ。

「ヒイヒイ言わせちゃるぜい」

　チーロは左手をあげて、下ろした。

「──カマーンだ野や郎ろうども！　オレにつづけやファッキンガァァイズ……！」

　振ふり返ってカルロたちがちゃんと出てくるかどうか確かく認にんする必要はなかった。血は繋つながっていないものの、彼らとは兄弟の間あいだ柄がらだ。まだ正式に宣言したわけではないが、パンカロ・ファミリーの新しい首ド領ンとなったチーロにとって、〝子のマル親になるフエツ儀式トウ〟でエンツォ・パンカロの子となった彼らは、年ねん齢れいに関かかわりなく全員弟ということになる。弟たちが信用できないくらいなら、とっくに人間をやめている。

　チーロは駆けた。あの女以下、約三十人のインチキ兵隊どもはまだゆるゆる動いている。鈍どんくさいのか、落ちつき払はらっているのか。女が腰こしの左右に吊つるしていた何かに手をのばした。紐ひも状のものだ。ぐるぐる巻きにしてある。手にとると、ほどけた。鞭むちか。あの太さ。曲がり方。質感。鉄てつ鞭べんだ。女は両手にそれぞれ一本ずつ鉄鞭を持って、静かに命じた。

「ロシュの御おん為ために、あの者たちを挽ひき潰つぶしておやり」

　インチキ兵隊たちも静かに応こたえた。というか、いくらなんでも静かすぎる。普ふ通つう、返事くらいするだろ。ハイとかオウとかイエッサーとかオッシャーとか、何か一声くらいあってもよさそうなものなのに、ただ黙だまって剣けんや斧おのを振り上げ、あるいは無言で槍やりを前に突つきだし、誰だれからともなく一いつ斉せいに走りだすなんて、そんな兵隊いるかよ。おかしいだろ、絶対。そうだ。やっぱり変だ。何が変なんだ？　顔つき？　身のこなし？　雰ふん囲い気き？　それとも、ぜんぶか？

　何にせよ、インチキ兵隊どもは押おしよせてくる。一人だけ悠ゆう然ぜんと歩いている女を次々と追い越こして、刻一刻と距きょ離りをつめてくる。うなじのあたりがチリチリした。心臓はバックンバックンいって、全身の筋肉がメキメキしている。チーロは足を速めてハンマーパンチ壱いち號ごうをグルグル回しまくった。後ろからカルロたちの雄叫びが聞こえる。オーィエスッ！　だんだんハイになってきた。インチキ兵隊どもの最前列と衝しよう突とつするまで、あと三秒くらいか。そのときだった。ようやくというべきか、インチキ兵隊どもがいきなり鬨ときの声をあげた。

「フォォォォロオオオオオオオォォォォォォォォォォ――――――――――――シュッ……！」

　ロシュのために。彼らは一人の例外もなくそう叫さけんだ。やばい、と思った。何がどうしてやばいのかわからないが、チーロの身体からだは逆に加速していた。三秒だったはずのところを、二秒で間合いに入った。

「いっくぞぉらあああぁぁぁぁ……ッ！」

　チーロは跳とんだ。空中で独楽こまみたいに高速回転して、インチキ兵隊どもの剣やら槍やらをハンマーパンチ壱號で薙なぎ払った。その勢いで兵隊の頭をドリャァッと蹴け飛とばして着地するなり、恋こい人びとではなくて凶きよう器きの右手をさらに暴れさせた。やつらの足を叩き折った。肋あばら骨ぼねを砕くだいて頭ず蓋がいを割った。ハンマーパンチ壱號に殴おう打だされた顎あごは粉々になった。

　それなのに。

なんだこいつら。

どういうことだ。

「んがああっ！」

叩いても、叩いても。

「──でえいくそッ！」

吹ふっ飛ばしても、ぶっ倒たおしても。

「しっつけえぞ……！」

インチキ兵隊は起きあがってくる。

血はドバドバ出ているのだ。骨だって折れている。折れた骨が皮ひ膚ふを突き破ってコンニチハしているやつもいるから、それは間違いない。にもかかわらず、やつらはロシュロシュロシュロシュ叫びながら、倒れても立ちあがり、よろめいてもすぐに態勢を立てなおして、絶え間なくどんどん襲おそいかかってくる。しかも、やつらは妙みように動きがいい。キレがあり、粘ねばりがあって、動作に迷いがないのだ。達人の洗練された技わざの冴さえみたいなものは感じないものの、一ひと太刀たち一太刀に明確な必殺の意志がこめられているので、一いつ瞬しゆんたりとも気が抜ぬけない。隙すきを見せたら、殺られる。オレが？　このチーロ・パンカロが？　絶好調で最強っぽいのに？　そうだ。やばい。この敵はまずい。見た目はどうもだらしないが、侮あなどれない相手だ。というか、こいつらは普通じゃない。

「チーロ坊ぼつちゃんを掩えん護ごしろッ……！」「かかれえ！　ボスを助けるんや！」「──おおおおおおおおおおおおお……！」

カルロたちの声を聞いて、チーロは振り返りかけたが、我が慢まんした。

余裕がなかったのだ。チーロは自分の目の前にいる、いや、右にも左にも後ろにさえもいる敵に対処しつづけなければならなかった。それに、気になることがまだ他ほかにもあった。あの女だ。あの女がインチキ兵隊の隊列に追いついてこようとしている。もう追いついた。

「道をお空け」

　女が二本の鉄鞭で地面を叩たたいて静かにそう命じると、インチキ兵隊どもは即そく座ざに従った。

　その瞬間ではないと思う。ずっと何かがチーロの頭の隅すみっこのほうに引っかかっていて、ようやくそれが何かわかった。あの女だけじゃない。兵隊たちもだ。敵の全員だ。

　額に傷がある。

　丸い傷だ。

　まだ治りきっていない、新しい傷きず跡あとだ。

　何だあれ、なんてことは考えなかった。直感的に、あれが原因だと悟さとった。チーロは危険を承知で後ろを見た。カルロは愛刀の蓮れん華げで敵を押しているが、他のやつらは明らかに苦戦していた。結構腕うでが立つイビツでさえ、負傷を恐おそれず向かってくる敵に戸と惑まどっている様子だった。デブ・フトッチョにいたっては尻尾しつぽを巻いて逃にげだしていた。あんにゃろ。あとでとっちめてやらねーと。でも、フトッチョが逃げる姿を見て、ほっとしている自分もいた。だって、耐たえられない。ガルシアが肩かたのあたりに突きを食らって、敵に押し倒された。右腕をちょん斬ぎられたハンフリーは、それでも敵に組みついていった。オイオイ。やめとけって。無茶だって。痛いべ。オレも経験者だからわかっけど。無理すんなって。そんなに頑がん張ばんなって。

　けどな、よく考えたら、ぜんぶオレのせいなんだよ。オレが決めたんだから。オレがみんなを連れてきたんだから。誰だれが悪いって、そりゃあオレなんだよ。オレ以外に悪いやつなんていやしねーんだよ。

　──重ッ……。

　親おや父じ、重いよ。何、この重さ。ひょっとして、あれか？　命か？　みんなの命がオレの肩にのしかかってやがんのか。やっべーよ、親父、重すぎだって。親父はずっとこんなもの背負ってたのかよ。それどころか、もっと大勢の命を。オレには無理だよ。助けてくれよ。頼たのむって。カルロ。そうだ。カルロ。やっぱカルロの兄貴がやってくんねーかな。頼むわ。オレ、頭足りてねーから

さ。わかってなかったんだよ。こんなに重いなんて、想像もしてなかったよ。だいたい、なんでだよ？　みんな、どうしてオレなんか助けたんだよ？

『子を守るのは親としてあたりまえのことだ』

　いや、それはそうかもしれねーけどさ……。

『頭は悪いが、仮にもお前は弟で、俺はお兄ちゃんだからな』

　お、お兄ちゃん……。

『長ちよう兄けいとしてこんなことしかしてやれなかった私を許してくれ』

　許すよ。許すっつーか、べつにウーゴ兄ちゃんのこと恨うらんだりしてねーし……。

『お元気で』

　元気だよ。みんなのおかげで死ななかったよ。元気にやってるよ……。

『チーロ、あとは頼む』

　うわ。頼まれちゃってたか。名指しかよ。そっか。うへー。まいったな、オイ。

「──カルロォォッ……！」

　チーロは正面から突つっこんできたインチキ兵隊を蹴飛ばして、左の兵隊に足あし払ばらいをかけ、右のやつにハンマーパンチ壱いち號ごうを見み舞まってから、左袖そでで目のあたりをぬぐった。

「退ひけえええ！　みーんな逃げろ！　死ぬなよ！　死なねーで逃げまくれえっ……！」

　ごめんな。頭の悪いボスでごめんな。たぶん器うつわじゃないボスでごめんな。まだ未熟だから勘かん弁べんしてくれよ、なんて言うつもりはない。言う暇ひまがあったら、死ぬ気で足を動かす。手を動かす。ハンマーパンチ壱號を振ふり回す。一人でも二人でも多くの敵を蹴け散ちらして、大事な大事なパンカロ・ファミリーの弟

たちが少しでも逃げやすいようにしてやる。カルロもインチキ兵隊どもを撫なで斬りにして、なんとか退路を確保しようとしている。イビツも周りに声をかけて頑張ってくれている。そんな中で、デブ・フトッチョが引き返してきた。いや、いいって。てめーはいいって。だが、デブじゃなくてボボはよくやった。兄弟の背中に剣けんを振り下ろそうとしていた敵に、泣きわめきながらスライディングタックルを食らわせたのだ。

「──イビツゥッ！　ボボを……！」

「へい、ボスッ！」

「トマーゾォ！　ハンフリー背負ってやれ！」

「任してくだせえ、ボス！」

「いーか振り返んじゃねーぞ！　逃げろぉっ！　ムチャクチャ逃げろおっ……！」

　チーロは声を限りに叫さけびながら、襲いくるインチキ兵隊どもをかわして、よけて、反はん撃げきした。少しずつ後退しているが、まだ逃げるつもりはない。チーロは最後だ。ボスとしてボスにふさわしい仕事もできないロクデナシなのだから、せめてしんがりくらいはやる。インチキ兵隊どもを自分一人でバッチリ抑おさえてみせる。そのつもりだったのに、気がつくとチーロは一人ではなかった。

　カルロだ。

　いつの間にか、返り血まみれのカルロが隣となりにいて、顔色一つ変えずに蓮華を振るっている。

　どうよ、こんな状じよう況きようで、この落ちつきっぷり。肝きもが据すわっているだけでなく、強いし、機転も利きく。自分の息子むすこではなく、カルロに跡あとを継つがせようとひそかに考えていた親父の気持ちが、わかりすぎるほどわかる。でも、頼まれちまったしなあ。あれは、親父の声で。兄貴たちの声でもあって。だったら、やるっきゃねーよな。

「カルロ。オレ一人じゃ無理っぽいからさ。力、貸してくれよな。悪わりぃけどさ」

「当然です」

　カルロは蓮華でズバッとインチキ兵隊をまっぷたつにして、薄うすく笑った。

「坊ぼつちゃんがお嫌いやでも、そうさせてもらうつもりです」

「そうかよ」

「ええ」

「坊ちゃんはやめろよなぁ」

「気をつけます」

　頼むぜ、マジで。やっぱ坊ちゃんじゃカッコつかねーからよ。早くなってみせっからさ。パンカロ・ファミリーの首ド領ンにふさわしい男に。親父みたいにはなれねーかもだけど、オレなりに精せいーいつ杯ぱいやってみっからさ。

　ま、カルロがいてくれたら、百人力ってかんじだけどな。実際、しんがりどころか、二人でやっちまえるんじゃね？　もうあと五メーテルくらいの距きよ離りにまで迫せまっているあの女だって、所しよ詮せん、女だし、余よ裕ゆうじゃね？　さくっと始末しちまうか？　そんな浮うかれ気分は、だが、すぐにしぼんでしまった。

　女がゆったりと両りよう腕うでを持ちあげて、鋭するどく振り下ろすと、ものすごい音がした。

　見れば、足あし許もとの石いし畳だたみが無残なまでに破は壊かいされている。もちろん、女が手にしている二本の鉄てつ鞭べんの仕し業わざだろうが、正直、チーロはまったく目で追えなかった。目は結構いいほうなんだけどな。どんだけ速はえーんだよ。マッハかよ。あの速度で、あの威い力りよくって、それ反則だろ。

「そろそろ、なんつーか、いいかんじだし……オレらも逃にげっか」

「……そうですね」

　チーロとカルロは「せーの」で踵きびすを返した。振り向きざまに、ハンマーパンチ壱號と蓮れん華げが血肉を撒まき散らした。あ

とはもう全速力で逃げた。結局オレら何しにきたんだよと思わなくもなかったが、目覚めたとき以上に覚かく悟ごは決まっていた。

　親おや父じ。ウーゴ兄ちゃん。お兄ちゃん。ジョゼッペ。他ほかの死んでいった兄弟たち。あと、おふくろ。見ててくれよ。

　オレ、やるから。絶対、やってみせっから。

　いろんなやつらの力を借りて、オレが、このチーロ・パンカロが、必ず守ってみせるぜ。

　オレたちのパンカロ・ファミリーを、さ。

Omenage 897 11th revolution 9th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ヤスパー地区

“回転海豚（スピニングドルフィン）”

chapter.4

友だちだった

　きつく握にぎりかためた拳こぶしを胸に押おしつけて、深呼吸をした。

　限界まで息を吸って、肺が痛くなるまで吐はいて。

　何回繰くり返しても決心がつかない。

　もう目の前なのに。このドアを開けて、部屋に足を踏ふみ入れるだけでいい。灰色海豚の間。彼はここに眠ねむっている。おそらく、寝しん台だいに横たえられてじっとしている。でも、そんなのきみには似合わないよ。黙だまっているのは苦手なはずじゃないか。静かにしてろって言われたら、余計に騒さわぎたくなるのがきみの性しよう分ぶんじゃないか。それとも、だからなの？　いつもどおりこちゃこちゃ動きまわって、耳をふさぎたくなるくらい、怒ど鳴なりつけたくなるくらい、喋しやべって欲しい。きっと、みんなそう思っている。だから、わざときみはじっとしてるのかな。そんな気もする。そう思いたいだけだって、わかってる。でも、信じたくないし、信じられないんだ。もう二度と元気なきみに会うことができないなんて。

　──ま、そうゆうなや、マリアローズ。わしかて意外やけどな。死にマニアのわしがな。いや、死にマニアで死に慣れテーラーやから、こんなんなってもうたんやけどな。今回ばっかりは死んでもうたらシマイやて、わかっとったんやけど、身体からだがな。気がついたら、ズババーッと動いとって。しゃあないわな。わしの自じ業ごう自じ得とくや。あんま落ちこむなや。

「……落ちこむよ」

　落ちこむに決まってるだろ。何、言ってるんだよ。勝手なこと言わないでよ。きみの声なんか聞こえるはずがない。それなのに、はっきりと聞こえる。そんな妄もう想そうさせないでよ。なんかもう僕の頭がおかしいみたいじゃないか。僕は違ちがう。きみとは違う。まともだよ。迷めい惑わくなんだよ。きみってやつは、本当に迷惑すぎるよ。

　死なないでよ。

　勝手に死ぬな。

バカ。

どうすればいいんだよ。僕のせいだ。トマトクンもぜんぶ俺のせいだって自分を責めていた。たぶん、みんな思っている。あのときああしていたら。こうしていたら、結果は違っていた。あれが間違いだった。これも間違いだった。一つ一つの選せん択たくが重くのしかかってくる。無意味だとわかっていても、やめられない。少しの悔くいも残らないほど、すべてにおいて最善の策をとってきたはずだと言い張れる人が、いったいどれだけいるだろう。少なくとも、僕には言えない。間違いだらけだ。かえりみても、どれが正解だったのか見当もつかないくらいだ。

友だちだった。

かけがえのない仲間で、友だちだったんだ。

会いたいよ。カタリ。きみに会いたい。

マリアローズはドアを開けた。

灰色海豚の間は、ベッドランプが一つともっているだけで、薄うす暗ぐらかった。

二台あるうちの奥の寝台に、ピンパーネルが腰こしかけている。

髭ひげが床ゆかであぐらをかいていた。瞑めい想そうでもしていたのだろうか。固く閉とざされていた目が開いて、マリアローズを見た。

「少しは落ちついたか」

「……どうかな」

マリアローズは無理に苦笑いを浮かべようとした。視線が揺ゆれて、ピンパーネルと目があった。ピンパーネルの眼まな差ざしはうつろだった。いつものような、穏おだやかとは少し違う、静かな、どこか乾かわいた、とらえどころのない表情ではない。すり減っている。ぐったりしている。そんな顔つきのピンパーネルを見てしまうと、苦く笑しようなんてあっという間に消し飛んでしまった。

引き返したい。

　ダメだ。ここまできたんだ。行かないと。

　マリアローズは下を向いて足を進めた。一歩ごとに両足が重くなってゆくかのようだった。頭も重い。肩かたも重い。呼吸が乱れる。僕は意い気く地じなしだ。でも、歩く。歩かないと。

　手前の寝台のすぐ前で立ち止まった。

　寝台に顔を向けた。

　カタリが眠っていた。

　安らかな、満足そうな顔をしている。傷はない。きれいだ。ただ、今にも起きあがってきそうだなんて思わない。明らかに違う。息をしていないとか、動かないとか、そんなことじゃない。もう生きていない。死んでいる。一目見ただけで、はっきりとそうわかる。それはどうやっても否定できない事実だ。思い知らされた。それでも、マリアローズは確かめずにはいられなかった。

　寝台の脇わきにしゃがみこんで、カタリの頰ほおに手をのばした。

　ふれるかふれないかのところで、手が引っこんだ。

「低温に保っておるのだ」

　髭がちょっと言いづらそうに言った。

「どうするにせよ、そのままにしておくわけにはゆかぬ」

「……そ──っか。そう、だよね」

　マリアローズは自分の右手を左手でぎゅっとつかんで、カタリの身体を眺ながめた。カタリは綿入れのようなものを着せられていた。たぶん、中に綿ではなく冷れい却きやく剤ざいが入っているのだろう。頭の下にも氷こおり枕まくらが置かれている。布ふ団とんはどけられて、保温材らしきシートが敷しかれていた。よく見ればわかることなのに、まったく気づかなかった。

　もう一度手をのばして、今度はちゃんとさわった。

　つめたいね。

すごく、つめたい。

こんなにつめたいなんて。

「祭さい壇だんは」

髭が耐たえかねたように大きく息を吐はいた。ずっとピンパーネルと二人でここにいたのだとしたら、ろくに会話もなかっただろう。もともと無口とはいえない髭にとっては、もしかしたら我が慢まんの限界だったのかもしれない。

「きわめて高価だ。また、その製造はＭ．Ｔ．Ｄ．が一手に引き受けておる。ゆえに、誰だれしもが手に入れられるわけではない。たとえば、ラフレシア第三帝てい国こくは大国だが、かつて彼かの国の皇帝が目もく論ろんだ国有蘇そ生せい式機関の創設をＭ．Ｔ．Ｄ．が良しとしなかったため、ごく最近まで祭壇が存在しない国であった。現在でもなお、普ふ及きゅうしているとは言いがたかろう。エルデンには第十三区の高層寺院群があるゆえ、人々の感覚もまた異なろうが──」

そうした説明はユリカから聞いた。マリアローズもすでに理解していることではあるのだが、髭を止めようとは思わなかった。神に仕える身の髭でさえも、やはり平静ではないのだ。妙みように力がこもった口調や言葉の端はし々ばしから、それが伝わってくる。止められるわけがなかった。

「世界のほとんどの地域では、いまだ蘇生式は〝神の御み恵めぐみによってなる奇き跡せき〟なのだ。大海王神オストロス神しん殿でんは、ここジェードリとその一帯で、唯ゆい一いつの奇跡の担にない手であった」

しかも、庶しょ民みんでも手が出るような値段で、質の高い施せ式しきを行うとなれば、第二第三の担い手は出現しづらい。商売だったら、競争相手がいないとなれば、価格をつり上げて暴利をむさぼるチャンスだが、オストロス神殿はそうしなかった。誰も彼もがオストロス神殿に蘇生式を求める状じよう況きようを維い持じしつづけた。このサンランドで無防備を貫つらぬいていられたのは、そのおかげだろう。また、身を守る武器すら持たなかったのは、オストロス神殿が大海王神と公共のために存在しているのだということの表明でもあったのかもしれない。

血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツにすべてぶち壊こわされたのだ。

「人はその死後約一時間でいわゆる魂たましい、アニマが肉体を離はなれる。これを一次喪失イニシアルロストと呼ぶ。アニマはその一時間後にマグニデア・プール表層部サーフエス１に到とう達たつし、浸しん透とうを開始する。表層部サーフエス13を突とつ破ぱしてマグニデア・プール外套部マントルに達するまでは、個人差はあるが、平均しておよそ四十八時間かかるとされておる。これを拙せつ僧そうらは二次喪失セカンドロストと呼ぶ。一いつ般ぱん的な意味での死は一次喪失イニシアルロストだが、蘇生式の手がほぼ確実に及およぶのは、この二次喪失セカンドロストまでと考えてよい。ただし、まだ望みは残されておる。アニマがマグニデア・プール深層デプスに到達するまではな。深層デプスに落ちてしまえば、もはや手て遅おくれだ。現在の蘇生式では、いかなる手段をもってしても、アニマをサルヴェージすることはできぬ。これを拙僧らは完全喪失パーフエクトロストと呼ぶ。理論的な永久死パーマネント・デスはまさにこの時点で訪おとずれる。やはり個人差はあるものの、九十六時間から百二十時間、つまり、確実を期するならば死後四日が蘇生式のタイムリミットだ。そして、このジェードリから四日以内でたどりつける範はん囲いに祭壇はない。少なくとも、拙僧が見聞きしたかぎりではな」

マリアローズは髭の話を聞くともなく聞きながら、ずっとカタリの頬に手を押おしあてていた。つめたくて、つめたすぎて、かわいそうだ。少しでもあたたかくならないかな。そんなことをしても無む駄だだとわかっている。自己満足にもならない。満足できるはずがないのだ。

何をしても、カタリは生き返らないんだから。

僕は友だちを失ったんだ。

だいじな友だちが死んじゃった。

嘘うそみたいだ。

これが現実だなんて。

「ワタシ」

　気配は感じなかった。ピンパーネルは、まるで何時間も前からそこにいたかのように、マリアローズの隣となりに立っていた。そして、とても長い間ためこんでいて、ようやく吐きだすみたいに、すごくやさしい響ひびきの言葉をつむいだ。

「好き・でシタ」

　意外だとは思わなかった。決して饒じよう舌ぜつではないピンパーネルが、カタリにはよく喋しやべった。それだけでも、ピンパーネルがどれだけカタリに親しみを感じていたか想像はつく。

「うらやまシ・かっタ」

　ただ、やはり少しだけ驚おどろいた。

　マリアローズは目をそらすべきか迷った。結局、そのままピンパーネルを見上げていた。

「悲しイ・でス」

　ピンパーネルの両目から、涙なみだが一筋ずつゆっくりと流れ落ちた。

　それは床ゆかに小さなしみをつくった。

　涙が僕らの悲しみを洗えれば、いいのに。

Omenage 897 11th revolution 10th day

サンランド無統治王国ジェードリ・シックタウン

〝ラルモンド〟

chapter.5

四人目の父

衣服も眼鏡めがねも靴くつも下着までも妻のアドバイスに従って決めることにした。とりあえず、秘書たちの評判は上々のようだ。自分でも、見み栄ばえ云うんぬんより、精神的なゆとりというか、落ちつきのようなものが生まれたのではないかと思う。

無理をする必要はないのだ。当然、リスクを冒おかして勝負に出なければならない局面はあるが、常に身の程ほどをわきまえていなければならない。夢みたいなことばかりうそぶいて、広げるだけ広げた大おお風ぶ呂ろ敷しきを適当なところで大おお雑ざっ把ぱにたたみ、なんとなく大人物の風格を演出してみせることに長たけていた父とは違ちがう。あのいいかげんな背中を反面教師として育ったケヴィン・バルモアは、もともときわめて現実的な人間だ。地に足が着いた経営がモットーで、遠くを見るよりまず足あし許もとを見て、一ダラー儲もうけながら一ダラーの無駄を省き、結果的に二ダラー稼かせいでみせる。吝りん嗇しよく家かと陰かげ口ぐちをたたかれようが、地味だと嗤わらわれようが、堅けん実じつは臆おく病びようの同義語だとそしられようが、私はこれがバルモア商会千年の繁はん栄えいに資するのだと信じている。

ああ、だが、カトリーナ、愛する我が妻よ、なんたることだ。なんたることだろう。

私は落ちついているが、同時にいささか混乱もしている。見てしまったからだ。本社ビルの社長室の窓から、あれを目もく撃げきしてしまった。どうやら、責め苦のサリア・ベルとかいうらしい。贄にえの園そのとやらの住人だという。ようするに、異界の生物だ。化物だ。エルデンでもあるまいし、どうして我がジェードリに化物が。どうにも信じがたいことではあったが、私は現実的な人間だ。見たものは見たとおりに信じるしかない。

まあ、そのサリア・ベルは、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーが大量の白い砂と化さしめた。くわしいことはわからないが、彼の部下に強力な魔ま術じゆつ士しがいて、彼の命令により、その者がサリア・ベルを始末したのだという。また、我がバルモア商会の私兵隊は、サリア・ベルを本社ビルに近づけまいと奮ふん闘とうした。彼らはまったく勇ゆう敢かんに戦ってくれた。死傷者や遺族への補ほ償しようを考えると頭が痛いが、やむをえまい。さらに、前もって私兵隊に多くの情報を与あたえ、部隊の配置についても助言してくれたド・ジョーカーの功績も認めざるをえない。感謝もして

いる。従って、その彼から面会を求められれば、断ることはできず、ともに昼食をとろうと言われれば、はいわかりましたと答えるしかなかった。正直、彼のことは苦手というか、どうも調子が狂くるわされるというか、この男を前にしていると、自分がやけにちっぽけに、青あお臭くさい餓が鬼きのように思えて、また、実際、そのような扱あつかいを受けるものだから、できれば二度と顔をあわせたくないのだが、行きがかり上、そうもゆかない。それは承知しているものの、やはりこの状況はどうなのかと思わざるをえないのだ、カトリーナ。

「どうした。まさか、口にあわんか」

「……い、いえ、そんなことはありませんが」

　嘘ではない。この子羊のオレンジソースも、その前のシタビラメのムニエルも、奇きをてらったところのないシンプルな品なのに、驚くほど美味だった。前菜がまた格別だった。臭くさみのないフォアグラのソテーとベーコンと生ハムが、数種の野菜とやさしくマッチしていながら、非常に刺し激げき的な味わいだったのだ。きっと、ソースに秘密があるのだろう。あいにくケヴィンは美食家ではないので、その秘密を解き明かすことはできなかったが、料理上手のカトリーナであればどうか。いや、ただカトリーナにもこの品々を食べさせてあげたい。そのうち是ぜ非ひ連れてこよう。そう思わせるほどの味ではあるのだが、店のたたずまいがなんともこぢんまりとしているというか、むしろ、これはごく普ふ通つうの一いつ軒けん家やに毛が生えた程度ではないのか。

　はっきりいって、とても落ちつく。

　ケヴィンは贅ぜい沢たくが嫌きらいだ。ごてごてした調度や装そう飾しよく品ひんを見ていると、頭が痒かゆくなってくる。カトリーナも一いつ緒しよで、現バルモア商会社長夫妻の住まいは、いまだに新しん婚こん当初から二人で暮らしている小さな二階建てのままだ。どうか何とぞ分相応の生活を、と側近によく言われるが、現状で不便を感じないのだからしょうがない。

　この家、いや、店は、少し我が家に似ている。

　おかげで、こうしてド・ジョーカーとテーブル越ごしに向かいあっていると、我が家に招き入れているようなかんじがして、どうも気まずいのだ。

「とてもおいしいと思います。その、失礼ながら、店の雰ふん囲い気きにそぐわないくらい」

「ふん。うまいのは当然だ。この己おれが贔屓ひいきにしている店なのだからな」

「正直に申しあげて……やや意外ですが。ド・ジョーカー、あなたはもっとこう──」

「店構えか。愚おろかなことを言うやつだ。よく見るがいい。ここは住まいをほんの少し改造しただけだが、完かん璧ぺきなまでに清潔さが保たれている。家具の趣しゅ味みも派手ではないだけで悪くない。どれも丹たん念ねんに手入れされた年代物だ。余計な気どりなど微み塵じんもなく、手間をかけた丁てい寧ねいな素材選びに加えて、奇き抜ばつさがもたらす浅せん薄ぱくな新しん鮮せん味みを遥はるかに凌りよう駕がした絶ぜつ妙みような味つけが持ち味の料理と、少しも矛む盾じゆんしておらん。つまり、必要なものを足し、不要なものを削けずり、その飽あくなき試行錯さく誤ごの果てにたどりついた、これこそが現時点での最善なのだ。それがわからんのは、貴様が盆ぼん暗くらだからだ」

　ケヴィンは反論できなかった。言われてみれば、たしかにそのとおりだと思えたからだ。いや、もしそうだとしても、だからどうだというのだ。この料理はうまい。ここはその料理にふさわしい場所だ。それだけのことだ。かしこまることはない。ド・ジョーカーのペースに乗せられてはいけない。ケヴィンはナプキンで口の周りをふいて、一つ咳せき払ばらいをした。

「ところで、そろそろ本題に入っていただけませんか。よもや、本当に昼食をともにするためだけに私を呼んだのではないでしょう」

「もし貴様が大おお間ま抜ぬけにもそう思っていたとしたら、貴様の父御ごは取り返しのつかぬ過あやまちを犯おかしたことになるだろうな」

「さいわい、そうは思っておりません。べつに嬉うれしくもなんともありませんが、跡あと継つぎに私を選んだ父の決断は間ま違ちがっていなかったようですね」

「まだだ。ケヴィン・バルモア。貴様はまだ何を成し遂とげたわけでもない。急せいては事をし損じるというぞ。先んずれば人を制

す、また、虎こ穴けつに入らずんば虎子を得えずともいうがな。ともあれ、まずは十年、職責を全まつとうしてみせろ。貴様に対する評価などはそのあとのことだ」

「私は本来、堅けん実じつを旨むねとする人間です。父とは違う。言われずともわかっています」

「そうかな。そうとは思えんがな」

　ド・ジョーカーは悪戯いたずらっぽい輝かがやきを青みがかった黒い目にともして、よどみのない優ゆう雅がな動作で子羊の最後の一切れを口に放ほうりこんだ。

「まあ、過誤は人生につきまとう業ごうのようなものだ。失敗から決して目をそらさず、学ぶことだな、ケヴィン・バルモア。凡ぼん庸ようと非凡の分かれ目は、存外、そのようなところにあるものだぞ。貴様とて、歴史あるバルモア商会の社史にその名をしかと刻みこみたかろう。男子たる者、その程度の野心はあって然しかるべきだ」

「……何をおっしゃりたいのです」

「ジェードリの救世主になりたくはないか」

「は？」

「ジェードリには三人の父がいる、と巷ちまたでは言われているそうではないか」

「それが……何か」

「一人はジェードリの祖ともいうべきマルセル・ルオー。そして、新しん埠ふ頭とうを建設したエドウィン・バルモア。さらに、赤線地区を統一したエンツォ・パンカロ。全員、鬼き籍せきに名を連ねている。英えい雄ゆうも死ねばただの死人だし、たとえ千年語り継がれようと、本人にとっては何の恩おん恵けいもなさそうだがな。どうやら世人はそう思わぬらしい。名めい誉よ、か。くだらぬ。が、それを欲ほつしてやまぬ者の、いかに多きことか。貴様はどうだ、ケヴィン・バルモア。四人目の父になりたくはないか」

　ド・ジョーカーの言葉の真意を測りかねている間に、食器が下げられ、コーヒーとデザートが運ばれてきた。ケヴィンはコーヒーを

一口飲んだ。思わず唸うなった。コーヒーまで絶品だったからだ。カトリーナ、そのうち絶対、君をこの店に連れてくる。

「――まあ、それは……野心などまったく持ちあわせていないとは申しませんが」

「ふん。では、今のジェードリで、だ。いったい何をなせば、英雄になれると思う」

　すぐにぴんときた。ようするに、ド・ジョーカーはまた何かケヴィンにやらせたいのだろう。それをなしとげれば、ケヴィンは名声をえる。自分のためになることなのだから、頼たのまれなくてもやってみせろ。きっと、そう言いたいのだ。

　とはいえ、その結果、英雄に、四人目の父になれるというくらいだ。たやすくやってのけられることではあるまい。簡単に首を縦には振ふれない。ある面ではたしかに有能なのかもしれないし、まったくこれっぽっちも信用できないかというと、それは少し違うが、とにかくこの男は要注意人物だ。

「英雄、ですか」

「わからんか。このジェードリに住まう者たちのためになることだ。おそらく、市民のほとんど誰だれもが喜ぶだろうよ」

「市民の――」

　ケヴィンは右手の人差し指と中指で眼鏡めがねの位置を慎しん重ちょうに直して、かすかに首をひねった。

「たとえば、神しん殿でんを再興するとか」

　自分で口に出してみてから、なるほど、と思った。これはいい。

　オストロス神殿を建てさせたのは、港町ジェードリの建設者であるマルセル・ルオーだ。それを、ジェードリ中興の祖、エドウィン・バルモアの子孫であるケヴィン・バルモアが再建する。市民だけではなく、ジェードリの周辺一帯に住む者たちもこの偉い業ぎょうを大いに讃たたえるだろう。ただでさえ落ち目になっているルオーの名はすっかり霞かすんで、バルモアの名が燦さん然ぜんと輝く。ケヴィンは四人目の父と呼ばれる。悪くない。個人的には英雄など柄がらではないと思うが、名前が売れれば機会が増える。知名

度をいかして商売を拡大する方法は無限にあるのだ。

　ケヴィンは肩かたをすくめて首を振った。

「いや、自分で言っておいてなんですが、それは無理ですね。神殿には、依い然ぜんとして連中が居座っている。あの血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツが。他ほかの場所に寺院か何かを建てるにしても、この状じよう況きようでは悠ゆう長ちように工事なんてしていられないでしょう。我が社の新社屋建設も延期せざるをえないかもしれない」

「そうだな。いっそ思いきり延期することだ。神殿の再建が先だろう」

「ですから、この状況では」

「状況を変えればよかろう」

　ド・ジョーカーの青黒い目が何か得体の知れない不気味な光を宿した。

　そっちか、とケヴィンは思った。そういうことか。最初から、この男の望みはそれか。

　ケヴィンは眉まゆをひそめて、テーブルに目を落とした。

　たしかに、現状をより良い方向へと変化させることができれば、そして、それがバルモア商会の手によってなされれば、市民は拍はく手しゆ喝かつ采さいするだろうし、その決断を下したケヴィンを英雄扱あつかいするだろう。ただ、実際にやるとなれば、相応の代だい償しようを覚かく悟ごしなければならない。金銭面だけではなく、人的被害もだ。

　多数の犠ぎ牲せい者しやが出る。

　人が死ぬのだ。

　先日の戦せん闘とうでどれだけ死んだと思っているのだ。

　オストロス神殿が健在であれば、彼らのうち何割かは蘇そ生せいしただろうに。いや、神殿があのざまだからこそ、こんなことになったのだ。すべて血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツのせ

いだ。連中こそが諸悪の根源なのだ。わかっている。排はい除じょできるものなら、排除してしまいたい。そうしなければ、やつらはまたジェードリを破は壊かいするだろう。市民を殺すだろう。社員たちが、その家族が死ぬだろう。

カトリーナの身にも、危険が及およぶかもしれない。

おお、カトリーナ！　そんなことは耐たえられない！　冗じょう談だんではない！

逃にげたほうがいいのか。いっそジェードリを捨てるか。

無理だ。

私は会社を捨てられない。今すぐ会社をどこかへ移すことなどできるはずもない。私はここで、このジェードリで、会社を、カトリーナを守らなければならない。そのために、できうるのならば、あの野や蛮ばんで残ざん忍にんで非道な血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツを皆みな殺ごろしにしてやりたい。

できるのなら、だ。

「……成算があっておっしゃっていますか。勝てるのですか」

「勝つのだ」

「精神論など聞きたくありません」

「バルモア商会私兵隊の総員に、パンカロ・ファミリーの残党をあわせ、さらに己おれと己おれの手下どもの手を貸してやる。これで勝てぬとしたら、現時点では他に手は思いつかんな」

「それは……そうかもしれませんが──待ってください、パンカロ・ファミリーですって？」

「使えるやつが幾いく人かいる。この際、利用しない手はなかろう。駒こまは多いに越こしたことはないからな。そして、勝利した暁あかつきには、貴様は赤線地区の復興に資金援えん助じょすることで、新しい清潔な歓楽街に影えい響きょう力を持ち、パンカロ・ファミリーとの提てい携けいでベアフット地区の安い労働力を大量に手に入れる」

　ド・ジョーカーはテーブルの上に肘ひじをついて両手を組みあわせ、かすかに笑ってみせた。

　不思議なほど屈くつ託たくのない、愉たのしげな笑えみだった。

「そろそろ新市街ニユータウンだの旧市街オールドタウンだのといったくだらん黴かびの生えた差別意識は捨てることだ。そんな不合理なものを捨てて、利益をとる時だ。それを貴様が率そつ先せんして示し、流行に祭りあげてしまいさえするのだ。貴様は英えい雄ゆうとなり、父と呼ばれ、もはや偶ぐう像ぞう視される。貴様は市民の多大なる支持と協力をえて、暴ぼう虐ぎやく非道の輩やからに焼き払はらわれた名人街その他、ジェードリ各地区の大規模な再開発に乗りだすことになるだろう。むろん、神殿も再建してやらねばならん。ちょうど己おれの手下に腕うでのいい僧そう侶りよがいる。オストロス神殿の元僧正だ。やつにも手伝わせればよかろう。テーマは、これだ。ジェードリ新生。そう、バルモア商会による、ケヴィン・バルモアによる、ジェードリ新生だ。どうだ。悪くない響ひびきだろうが」

Omenage 897 11th revolution 10th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ヤスパー地区

“回転海豚(スピニングドルフィン)”

chapter.6

つまらなくて笑えない

　──わたしは、すごくなんかない。ぜんぜん、ちっとも、えらくない。

　あのあと、しばらくしてから謝りにきたマリアローズに、ユリカは「いいのよ」と言った。

「気にしないで。わたしも気にしてないから。こんなときだし。いいの。仲間でしょう。わたしは大だい丈じよう夫ぶだから。しょれより、平気？　目が真っ赤だわ。ちゃんと冷やしておくのよ。しょうしないと、腫はれてしまうわ。こんなときだからこしょ、自分をだいじにしてあげないとダメよ。あまり自分を傷きじゆちゅけてはダメよ。しょんな悲しいこと、しないでね」

　何様のつもりだろう。えらそうに。ああ、わたしはえらくない。えらそうにしている。えらぶっているだけだ。

　だって、嘘うそだ。気が晴れるなら、いくらでもわたしを傷つければいいと、遠えん慮りよしなくていいと、わたしは怖こわくないと言いながら、本当は怖かった。怖いのに、傷つけて欲しかった。ぼろぼろになりたかった。立っていられないほど、めちゃくちゃになってしまいたかった。

　わざとマリアを挑ちよう発はつしたのだ。

　それに、怒いかりもあった。マリアはずるい。自分が悪い。自分のせいだ。自分は何もできない。できなかった。そうやって自分を責めたところで、何にもならないと知っているくせに、そうやって。そうやって、逃げて。現実を直視しないで。カタリに会おうともしないで。そうやって、うだうだ言って、ぐずぐずして、時間を稼かせいで。

　そんなマリアが、うらやましい。

　わたしにはできない。弱音を吐はけない。八つ当たりなんかできない。そんなことをしたら、自分が崩くずれてしまいそうで。わたしがわたしでなくなってしまいそうで。

　でも、いっそ壊こわれてしまいたかった。壊してもらいたかった。

　そのために、マリアを利用しようとした。

　わたしは、ずるい。

「……ごめんね、マリア。ごめんなしゃい」

　こうして、一人でそっと呟つぶやくことしかできない。

　わたしはずるい。

　人前ではできるだけ笑顔で、慌あわてず、取り乱さず、気丈なユリカ・白雪スノーホワイトでいる。

　いつも、何を考えているのか、できるだけ見せないようにしている。

　見せたくないのだ。憎にくしみ。恨うらみ。嫌けん悪お。どろどろしたもの。封ふうじこめてしまいたい。悲しみはもういらない。わたしは×××じゃない。

　──名は。

　トワニングに問われたとき、わたしは答えられなかった。自分が誰だれかわからなかった。わたしは×××。この記き憶おくは間ま違ちがいなく×××のもの。でも、わたしは×××？　本当に？　この身体からだは？　わたしは誰？　×××だと思う。違う。じゃあ、誰？　この身体は誰のもの？

　さっき、少し外の空気を吸ってから、サフィニアとクローディアが昏こん々こんと眠ねむりつづけている飛び海豚の間へと戻もどる前に、灰色海豚の間に立ちよった。

　カタリの顔を一目見ただけで、ピンパーネルやトワニングとは話さなかった。

　灰色海豚の間を出ると、トワニングが追ってきた。

　トワニングは何も言わなかった。ひどい顔をしていた。あのときみたいだった。

　いい気味だ。

　あなたはわたしがとても深く傷ついていることを知っている。わたしが見かけほど平気じゃないことにも、おそらく気づいている。だから、あなたはすごく困こん惑わくしている。どうしていいかわからないでいる。

　いい気味だ。

　わたしを見るたびに、あなたは罪の意識に苛さいなまれる。でも、逃にげない。結局、あなたは賢かしこいからだ。立ち向かい、受け止めることが最善だと知っているからだ。でも、あなたは人の情を知らない。頭では理解していても、本当のところはよくわかっていない。あなたは自分の気持ちさえ把は握あくしきれない。だから、すぐに混乱する。それか、無理やり抑おさえこんでしまう。

　あなたは知っていますか。

　百万言費ついやしても言いつくせないこの恨みを、わたしはあなたにまったく伝えていない。

　それは罰ばつです。

　あなたは考えつづける。一生悩なやみつづける。自分のしたことを後こう悔かいしつづける。

　わたしが鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術を教えて欲しいと頼たのんだときの表情なんて、傑けつ作さくだった。

　あなたは怯おびえていた。うろたえていた。わたしを恐おそれていた。

　いい気味だ。

　あなたは繰くり返し繰り返し確かく認にんする。咎とがにふさわしい償つぐないを、自分はしただろうか。しているだろうか。あなたはわたしに訊ききたいだろう。恨んではおらぬか。もうよいか。まだか。まだだな。そうであろうな。終わらぬ。終わるはずもない。でも、訊かせない。自分で考えればいい。死ぬまで考えつづければいい。あなたは×××を生かした。×××は死んでいたはずなのに。わたしが×××として生きられるはずがない。これは×××の身体じゃない。だって、たぶん、ありえないと思うけれど、もう願ってもいないけれど、もし父さんと再会できたら、わたしはどうすれば？　あの子は死んだ、わたしは生き残ったと言うの？　この

身体で、この顔で？　できない。そんなこと、できっこない。わたしはあの子だ。せめてあの子にこの人生を捧ささげようと思う。でも、苦しい。わたしは誰？　とても苦しい。この苦しみを、あなたにも味わわせたい。あなたのせいだから。あなたがしたことだから。あなたは賢いから受け止める。それが最善だと信じて。苦しんでいる。わたしのために、ずっと苦しんでくれている。

　そんなあなたを、嫌きらいになんかなれるはずがない。

　大丈夫。

　ユリカはそれだけ言って、さしのべられたトワニングの手から逃げるように飛び海豚の間へと駆かけこんだ。サフィニアとクローディアの様子を確かめてから、窓まど際ぎわの椅い子すに腰こしを下ろすと、否いや応おうなく小さな自分の身体を意識する羽目になった。何もかもがいやになった。

　わたしはすごくない。

　えらくなんかない。

　──助けられなかった。

　無理だ、と判断してしまった。

『む、無む駄だや……！　はは、は……！』

　無駄じゃなかったとしたら？

『……そ、んなん、ユ、リカ、お前じぶんが、一番わかっと、やん、か、はは……！』

　傷の状態はひどかった。出血の量も尋じん常じようではなかった。どう見ても致ち命めい傷しようだった。

　でも、本当に？

　何か手はなかっただろうか。何かできなかったか。たしかに手て遅おくれだったかもしれないが、落ちついて考えてみると、やれることが皆かい無むだったとは思えない。手をつくしたとはとてもいえない。できることもやらずに、あきらめたのだ。あきらめてしまった。もしかしたら、千分の一か万分の一かの可能性はあったか

もしれないのに。

『ユリカは、すごいね』

　だから、すごくなんかない。

『冷静だし』

　そうしていないと、壊こわれてしまいそうで、怖こわいだけだ。

『自分の役割を知ってるってかんじで』

　役割さえ果たしていれば、安心だからだ。

『いつでも、どんなときでも、最善をつくして、それがあたりまえ、みたいな』

『しょんな――しょんなことないわ、マリア、わたしだって』

　できなかった。できていたら、こんなことにはならなかったかもしれない。

　ダメだ。

　じっとしていると、いつまでも考えてしまう。動いていたほうが楽だ。

「……しょれが、わたしの正体」

　ユリカは自じ嘲ちよう気味に呟つぶやいて、椅子から立ちあがった。正直、何をしたらいいのかわからない。することなんて何もないのかもしれない。寝ねている二人の顔や身体からだをふいてあげたり、着き替がえさせたり、部屋を掃そう除じしたり、一度や二度ならともかく、そんなことを絶え間なくやりつづける必要がどこにあるだろう。

　ようするに、誰かのためではないのだ。

　自分のためだ。

　膝ひざから力が抜ぬけた。

　ユリカは転んだ。

　その音で目が覚めたのだろうか。

「……はっ……」

　声というよりも息だった。ユリカは起きあがって、サフィニアの寝しん台だいに駆けよった。サフィニアは目を一いつ杯ぱいに見開いていた。唇くちびるがかすかに震ふるえている。名前を呼んだ。一度。二度。返事はなかった。聞こえていないのか。軽く肩かたをゆすってみたが、やはり反応はない。脈はあるものの、呼吸もしていないようだ。

　やがて、サフィニアの瞼まぶたがゆっくりと閉じていった。

　静かに息を吸って、吐はく音がした。

「サしやフィニア……？」

「……い……」

　ほとんど聞きとれないくらいのかぼそい声だったが、はい、と答えたようだ。

　ユリカはため息をついて、サフィニアのおでこをそっとなでた。体温がまだかなり低い。生命を維い持じする機能がひどく低下している。極度の衰すい弱じやくだ。ジョーカー曰いわく、回復するまで寝かせておくしかないというクローディアと比べても、どちらがより深刻な状態かさえわからない。栄養剤ざいの注射や、鵺流古式戦闘術の内気功なども目に見える効果は現れなかった。命に別状はないはずだが、意識が戻もどるまで予断を許さないと思っていただけに、ほっとした。

「気がちゅいたのね。よかった。お水みじゆ、飲めしょう？　あ、でも、無理はしないで。今は身体を休やしゆめるのが第一だから」

「……から……だ……」

「しょうよ。何も心配しなくていいわ。ここは安あん全じえんよ。だから、ね？」

「…………も……」

「え？」

「……でも……」

　サフィニアは顔をゆがめて弱々しく首を振ふった。まさか、と思った。ああ、だけど、十分ありうる。サフィニアは並みの魔ま術じゆつ士しではない。あの巨きよ大だいな魔術を発動させながらも、あるいは、力を使い果たして気を失う間際に、あの場面を目にしたのかもしれない。何が起こったのか、もう知っているのかもしれない。

　どうしよう。

　わたしはどうすればいいだろう。

　ユリカは呆ぼう然ぜんと立ちつくしていた。サフィニアの身体をさすってあげて、気を落ちつかせようとか、そんな最低限の、この場合は義務に近いような、あたりまえのことすらできなかった。できるはずもなかった。わかっていたからだ。

　今はどんな言葉を口にしても嘘うそになる。どんな声で話しても、真心がこもっているようには聞こえない。何をしても、誰だれかを慰なぐさめることなんてできない。

「……カタリ、さん……」

　そう。

「……やっぱり……そう……なんです、ね……」

　そうよ。

「……どう、して……」

　どうしてもこうしても、なくて。

「……わたし、が……もっと……早く……魔術を、完成……させていれば……」

　あなたのせいじゃないわ。サフィニアは悪くない。あなたは精一杯やったじゃない。力つきて倒たおれるまでやったじゃない。誰もサフィニアを責めたりしないわ。カタリだって、責めないわ。きっと、笑っているわ。いやあごっつうドデカイ魔術やったなあ、って。最さい期ごにえらいもん見せてもろたわ、眼福眼福、さん

きゅーや、って。カタリ、笑って死んだのよ。バカだわ。笑って死ぬって決めてたんだって。すごく満足そうな顔で。

「バカね」

　こっちまで笑えてきた。

　でも、声がひどく震えている。

　急に視界がぐちゃぐちゃになった。

　もう何も見えない。

　かわりに、カタリの顔が思い浮うかんだ。

「ほんとに、バカなんだから……！」

　胸が熱くなって、何かが噴ふきだしてきた。

「し、死んだらっ、おしまいなのに！　わ、笑う、なんて……！　ひ、ひとりで、笑ってれば、いいのよ！　いちゅもしょうなんだから！　おもしろくないのよ！　カタリの冗じよう談だんなんて、じぇんじぇんちゅまらないのよ！　だ、誰も、わ、笑わないんだから！　笑えないのよ！　笑えるはじゅないでしょう！」

「……ユリカ……」

「わっ、わ、笑えるはじゅ――」

　そうよ。笑えないわよ。無理よ。笑うなんて、できないわよ。そうでしょう、サフィニア。だからでしょう。

　なぜだかやけに視界が悪いので、目のまわりを袖そでででぬぐって見ると、サフィニアがむせび泣いていた。涙なみだだけではなく、鼻水も、よだれまで流しながら、全身を引きつらせて泣いている。ひどい泣き方だ。顔をふいてあげようとした。その顔に、液体がぼたぼた落ちた。大量の水のようなものだった。サフィニアが薄うすす目めを開けて、両手をのばしてきた。また何も見えなくなった。力が抜ぬけ、声が出て、ようやく気づいた。わたし、ずっと我が慢まんしてたんだ。もうダメかもしれない。限界かもしれない。サフィニアにしがみつくようにして、物心がついて以来初めて、赤ん坊ぼうみたいにわんわん泣いた。サフィニアが自分も泣きながら頭をな

でてくれた。マリアローズの気持ちが少しだけわかった。

　やさしくしないで。

　涙が止まらないから。

Omenage 897 11th revolution 10th day

サンランド無統治王国ジェードリ・マーマン地区

〝ゲヘナ聖堂〟

chapter.7

ある救世主の肖像

「なんだかちょっと懐なつかしいな。こうしてると──」

　ヘンリーは大いなる祈いのりの場を見み渡わたした。一角に藁わらが敷しかれていて、サー・ジューダスの愛馬アバドンがくつろいでいる以外は何もない。サー・ジューダスと俺とリリアン、地べたに腰こしを下ろして三人だけの作戦会議か。いったい何年ぶりだろう。覚えていないが、最初はあの地じ獄ごくみたいなトーロク山さん岳がく戦だ。あれはすさまじかった。今でもたまに夢に見るくらいだ。何しろ、戦線もへったくれもなく、狡こう猾かつなファー・セルジナの狐きつね野や郎ろうどもと血みどろになって互たがいの補給物資を奪うばいあい、いかに飯を食うか、武器を調達するか、生き残るか、それだけの毎日で、バタバタバタバタおもしろいように人間が死んだ。身分も階級も人格も無関係だった。しいていえば、弱いやつ、運の悪いやつが死にやすかった。気がつけば、まともな士官はこの三人だけだった。他ほかはバラバラだった。バラバラに戦う馬ば鹿かは死ぬしかなかった。利口な兵隊は俺たちに従った。俺たちはほとんど独立部隊だった。俺たちだけが勝ちつづけた。

「なあ、サー・ジューダス。いや、アロンズ・ニードルスピア。一回訊きいてみたかったんだがな。あんた、あのころから考えてやがったのか。この戦いのことを」

　いくらもう他の連中の目を気にする必要はないといっても、リリアン・イヌテロは規律にうるさいやつだ。こんな言葉遣づかいは気にくわないだろうが、顔をしかめながらも黙だまっている。やつも興味があるのだろう。だが、アロンズはあぐらをかいて目を伏ふせたまま答えない。まあ、本来あまりぱっぱと喋しゃべる男ではないから、ヘンリーとリリアンはゆったりと待っている。たっぷり十秒は経過したころ、アロンズがわずかに口くち許もとをゆるめた。

「どう思いますか」

　そう、その笑えみだ。やつはいつも笑っていた。どんなにやばいときだろうと、だ。最近は少し違ちがっていた。らしくなかった。もとに戻もどったってことか。ヘンリーは癖くせのある髪かみの毛を引っかきまわして鼻を鳴らしてみせた。

「質問に質問で返すのはナシだろ」

「私はロシュの声に耳を傾かたむけ、その御み心こころに添そう道を歩んでいるだけです」

「つまり、べつに自分自身の考えはねえってことか」

「私も人の子です」

「そいつは知らなかったな。俺はまた、あんたは神様の子供なんじゃねえかと疑ってたよ。神様に子種があるのかどうかなんて知らねえけどな」

「父はノーマン。母はエマ。両親とも神ではありません」

「ノーマン・ニードルスピア、か……」

　ヘンリーはある噂うわさを知っていた。傭よう兵へいあがりで異色の聖堂騎き士しだったリリアンはあまり耳にしたことがないかもしれないが、わりと有名な話だ。

　ノーマン・ニードルスピア。元トレイン公国聖堂騎士団東騎士館長で、廃はい騎士。つまり、騎士の位を返上した男だ。

　ファー・セルジナ王国とハッツフォー独立軍領、トレイン公国が三竦すくみ状態に陥おちいっていたカラム盆ぼん地ちを制圧するという大功を立て、副団長に推おされたが、これを拒きよ絶ぜつして東騎士館長職にとどまったという、ノーマンの逸いつ話わは有名だ。もっとも、のちにファー・セルジナの蛮ばん人じん将軍ザガルドに敗れて囚とらわれの身となり、捕ほ虜りよ交こう換かんで帰国したが、屈くつ辱じよくに耐たえきれず自死したという非ひ業ごうの男でもある。

　その養子アロンズは、じつは不義の子らしい。ロシュ聖教が幅はばを利きかせていたトレイン公国において、一応、姦かん淫いんは犯罪だ。死ぬ前のノーマンは、そんなたぐいのくだらない誹ひ謗ぼう中傷を雨あめ霰あられと浴びて、国辱とさえ呼ばれていたらしい。もちろん、剛ごう直ちよくの騎士だったはずのノーマン卿きようが、虜りよ囚しゆうの辱はずかしめを甘んじて受けたことに対する失望や非難がそのおおもとだったようだが、戦史をひもといてみれば、ノーマンがザガルドに敗れたエクタラス会戦でのトレイン軍の動きには不ふ審しんな点がいくつもある。あれでは負けようとして負けたとしか思えない。だいたい、太陽の光の下もとでは聖人の

仮装をして、夜の闇やみの中では金や利権や女をあさりながら、競争相手の悪口に花を咲さかせるのが聖堂騎士様の圧あつ倒とう的多数派だ。

　ノーマン・ニードルスピアは、他の追つい随ずいを許さないほど、清せい廉れん潔けつ白ぱくで優ゆう秀しゆうで理想的な聖堂騎士だった。模も範はん的すぎたのだ。だから、とうてい模範的とはいえない卑いやしい騎士どもに、妬ねたまれ、逆さか恨うらみされた。あげく、連中の陰いん謀ぼうによって、名めい誉よだけでなく、個人的な幸福さえも奪われた。まさしく、非業の騎士とは彼のことだ。

　そんな噂が囁さささやかれるなか、ノーマンの子アロンズ・ニードルスピアは、淡たん々たんと着実にありとあらゆる任務をこなし、金どころか女の話すら一いつ切さいせず、ひたすら国と神に奉ほう仕しする変わり者の聖堂騎士となった。上はあの男を殺したがっているのではないかと囁く声もあった。当時の団長ジョン・マウザーは、かつてのノーマン・ニードルスピアの同どう輩はいで、軍功よりむしろ政治力に物を言わせて昇しよう進しんした男だった。ノーマンが健在であれば、マウザーは副団長止まりだっただろう。ことによると、ノーマンを罠わなに嵌はめたのは、マウザーその人ではないか。

　噂。あくまで噂だ。しかし、アロンズが常に最前線をうろついていたのは事実だ。味方殺しとも呼ばれた。当然だ。誰だれよりも長い時間、一番多く人が死ぬ場所で戦っていれば、敵と同じだけ味方も殺すことになる。一人の戦士として、指揮官としては図ず抜ぬけていたが、その下につきたがる者も、肩かたを並べて戦いたがる者もほとんどいなかった。世せ俗ぞく的な趣しゆ味みを持たない男だから、人づきあいが悪いどころか、望んで誰かと交際することも皆かい無むだった。地位にも興味はなかったようで、役職はことごとく固辞し、ただの一等騎士として現場指揮官でありつづけた。その姿は父よりも禁欲的に見え、俗人には理解しがたく、また他人に理解を求める姿勢もなく、周囲からの称しよう賛さんや懐かい疑ぎや不審や尊敬や侮ぶ蔑べつの眼まな差ざしはすべて空回りしていた。

　トーロク山さん岳がくは、そんな得体の知れないアロンズ・ニードルスピアや、口八丁手八丁のせいでまんまと誰かの恨うらみを買ったヘンリー・ブラックモアや、生き真面目まじめだが黒い肌はだで傭兵出身で異い端たんの騎士リリアン・イヌテロをぶちこんで、ファー・セルジナの狐きつね野や郎ろうどもと一いつ緒しよに

ごった煮ににしてしまうための大おお鍋なべだった。誰が何と言おうと、ヘンリーは確信している。あれは邪じや魔ま者、厄やつ介かい者、余計者、嫌きらわれ者どもを合法的に始末するために用意された罠だったのだ。そうとしか思えないくらい馬鹿げた戦争だった。

　だって、考えてもみろ。あんな険しい山の上に建てられた、大昔のぼろっちい砦とりでを手に入れて、いったい何になる？

　実際、砦は、ファー・セルジナからトレインへ、またその逆へと主あるじを代えたころには、雨風もしのげないような有様になっていた。頭のいかれたイリートとかいう山岳民族が、誰彼かまわず襲おそいかかってくるのもまいった。鬼人オーガの群れにも悩なやまされた。やつらが飼うイヌどもは、人がいる野営地にもかまわず駆かけこんできて、容よう赦しやなく乾かん燥そう肉だの干飯だのを食くらいまくった。兵隊たちが腹を空すかせていると、たまに講和の噂が流れて、すぐに否定された。期待を裏切られてがっかりすると、ファー・セルジナの連中をぶっ殺すくらいしか立ちなおるすべがなかった。憎にくしみが憎しみを生んで、眠ねむいから寝ねる程度の理由でずる賢がしこい狐野郎どもを殺せるようになり、そのうち腹が減っては殺し、むかついては殺し、疲つかれては殺すようになった。賭かけてもいいが、相手も同じだろう。そうやって、大量の人間があの大鍋で煮られ、まずいに決まっているので食われることもなく、ただ捨てられたのだ。

　楽しい思い出だ。

　本当に楽しくて、愉ゆ快かいすぎて、思い出すと血の混じった胃液が逆流してきそうだ。

　あの山を知っているのは、もうこの三人しかいない。あとは全員、今日までの戦いでくたばった。トーロク山岳戦のあと、アロンズに個人的な忠誠を誓ちかい、聖堂騎士団団長ジョン・マウザー以下二百人以上を惨ざん殺さつした〝血の水曜日〟や、大聖堂を焼き払はらった〝火の日曜日〟に参加した者もいる。だが、皆みな、死んだ。もう三人だけなのだ。だからそれがどうしたって話ではあるけどな。

「私は親を知らない」

　リリアンがぽつりと言った。突とつ然ぜんだったから、少しばか

り驚おどろいた。

「兄が一人いる。幼いころに生き別れたきりだから、どこでどうしているのかわからんが。会えるのならば、会ってみたいものだ」

「兄貴ねえ」

　ヘンリーは九人兄弟の八番目だ。兄は五人いて、そのうち一人はチンピラに殴なぐり殺され、行方ゆくえ不明になったやつもいれば、監かん獄ごく送りになったやつもいる。兄にかぎらず、肉親のおかげで得をしたことは一度もないから、会いたいどころか、死んでもやつらのツラは拝みたくない。ただ、そんな家庭環かん境きようが標準的だとはヘンリーも思わないし、兄弟がいるなら、ろくでなしよりも、人間的にマシなやつであったほうがいいに決まっている。リリアンはどうだったのか。そう悪くない兄貴だったんだろうな。少なくとも、記き憶おくの中では。

「どうだ、アロンズさんよ。他ほかならぬお前さんだけに剣けんを捧ささげてる腹心の部下の頼たのみだ。神様に訊きいてやってくれよ。こいつは兄貴に会えそうか。それとも、さすがにそんなちまちましたことまではわからねえか」

「私はべつに頼んでなどいない。ただ会えるものなら会いたいと言っただけだ」

「うっせえな。細かいんだよ、リリアン、お前さんはよ。話のつまってやつだろ」

「会話を盛りあげたいのなら、貴公自身のおもしろおかしい身の上話でもするがいい」

「残念なことに、他人様に話して聞かせるほどたいそうな半生じゃねえんでな」

「そうだろうな。反省しない男のくだらん半生などには興味がない」

「……いや、お前さん、なんでそんな自信満々なんだ？　さっぱり笑えねえぞ？　つーか、そんなので笑えるわけねえだろ？」

「笑いの感覚はたゆまぬ鍛たん錬れんにより鋭えい敏びんになる。自じ堕だ落らくな貴公は退化し鈍どん化かしているのだ」

「お前さんのギャグで腹抱かかえて笑っちまうようになったら、人として終わりだと思うがな」

「むしろそこからがスタートだ」

「いいよ、俺は。一生スタートできなくても。勝手に死ぬまで走っててくれ」

「貴公に言われるまでもない。もはや私は貴公から見れば遥はるか地平線の彼方かなたにいる」

「たしかにそんなかんじがするな。すぐそばにいるってのに、手が届きそうな気がぜんぜんしねえよ」

　ヘンリーは顔をしかめて頭を掻かきながら、アロンズを見た。

「──で、どうなんだ。神様ってやつはそんなことには答えちゃくれねえか」

　アロンズは返事をせずに、柱の向こうの空に目をやった。何かを探すような眼まな差ざしだった。果たしてその何かとやらは見つかったのか。しばらくすると、アロンズはリリアンに顔を向けて、何秒かの間、やつの瞳ひとみをのぞきこむようにじっと見つめていた。

「会えるといいですね」

　意外な言い種ぐさだった。だが、ヘンリーはなんとなく察した。リリアンもおそらく同じだろう。たぶんアロンズは、どうにかして答えを見つけたのだ。あえてそれを伝えなかった。会えるとも会えないとも明言しなかった。それはすなわち、会えないということだろう。リリアンの兄がもうこの世にいないのか。それとも、兄弟の運命が交差する可能性がゼロなのか。わからないが、二人が再会することはない。アロンズはそう知って、しかし、そのことを口にしなかった。やつが受けとる御ご神しん託たくの正確性はともかく、やつの選せん択たくはやつ自身のものだ。

　私も人の子です、か。

　わかってるさ。

　アロンズ・ニードルスピア。お前さんは神でもその眷けん属ぞく

でもない。人だ。だから、復ふく讐しゅうした。養父とはいえ、立派な親おや父じだったノーマン・ニードルスピアを陥おとしいれたジョン・マウザーの罪を、その命で償つぐなわせた。神の名のもとに愚ぐ行こうのかぎりをつくす馬ば鹿かどもに次々と鉄てつ槌ついを下した。お前さんは静かに否定するかもしれないが、俺はそう思ってる。お前さんは人だ。人であるがゆえに汚けがれを憎み、正しい人であろうとして、どんどん人から遠ざかる哀あわれな人間だ。

お前さんを見てると、人ってのも案外、信じられるんじゃないかと思わされる。自じ浄じよう作用ってやつだ。みずからの内に悪を見つけ、みずから手を汚して悪を裁いてゆけば、いつかこの世界もきれいになるんじゃないか。

その世界は、どうしようもない戦せん闘とう狂きようで、毎日目の前で人が死なないと生きている実感が持てない俺みたいな人間には生きづらいかもしれない。どうせ俺は駄だ目めだ。俺は自分が幸福になれないことを知っている。俺みたいな人間は屑くずだ。俺は戦いたい。スリルが欲しい。切った張ったのでたらめな暮らしをいつまでもつづけていたい。そして、いつかみじめに死ぬ。それだけの命だ。ちっぽけだ。それでいいと思ってはいる。仕方ないと。

でも、本当は俺だって救われたい。愛し、愛され、慈いつくしみとやさしさにつつまれて、いつも平へい穏おん無事で、親父とおふくろがにこにこしていて、兄弟は仲がよくて、きっぷのいい女にょう房ぼうがいて、目に入れても痛くない餓が鬼きがいて、かわいらしい孫がいて、眠ねむりに落ちるように死ぬ。そんな人生があってもいい。俺にだってあってもよかった。運悪く、そうはならなかった。誰だれのせいとか、そんなせこい話じゃない。世界全体が汚れているからだ。汚れきっている。それなのに、誰も彼も見て見ぬふりをしている。容よう認にんしている。あきらめている。積極的にもっと汚そうとする。これじゃあ駄目だ。おしまいだ。世界はいつか終わる。ぐずぐずに腐くさって崩ほう壊かいする。神様なんかじゃなくても、そんなことはわかる。さして頭のよくない俺にだってわかることだ。皆、気づいているはずだ。薄うす々うす気づいていながら、誰も手をあげようとしない。勇気を出さない。根こん性じようを見せない。覚かく悟ごしない。逃にげてばかりいる。

こいつだけだ。

一人、アロンズ・ニードルスピアだけが目をそむけずに手をあげ

た。

　この男は、すべての罪をその身に背負い、滅ほろぼすことで何もかもを救おうとしている。

　俺みたいな虫けらさえも救おうとしている。

「お二方に話しておかなければならないことがあります」

　アロンズはヘンリーとリリアンを交こう互ごに見た。

　それは、すっかり闇やみに包囲されたトーロクの山中で、どうファー・セルジナの狐きつね野や郎ろうどもをぶちのめすか、敵の耳を警けい戒かいして囁ささやくように話しあったときの声こわ音ねに、どこか似ていた。

「私がこれから言うことを、お二方とも必ず守ってください。必ず、です──」

Omenage 897 11th revolution 10th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

〝集会場〟

chapter.8

ハニワ

周囲にひしめく粗そ末まつな家屋と比べれば、やや古びて傷いたんではいるものの、ずいぶん大きくてそれなりに頑がん丈じようそうな建物だった。

もう一度、地図と突つきあわせてみた。間ま違ちがいなさそうだ。ここだ。鍵かぎがかけられている様子もなく、扉とびらは簡単に開いた。中は結構な人数を収容できそうな円形のホールで、思ったよりきれいだった。今は誰もいないようだが、長い間放置されていたら、もっと荒あれているはずだ。明らかに人の手が入っている。ごく最近まで何かの目的で利用されていたのかもしれない。

だとしたら、ここもハズレだ。

いや、決めつけるのは早い。もしかしたら、どこかに隠かくしてあるかもしれない。ぱっと見ただけであっさり諦あきらめるくらいなら、最初からこんなことをするなという話だ。マリアローズは気をとりなおしてホールを見まわした。奥に引き戸がある。行ってみると、やはりただ引くだけで開いた。倉庫か何かだろうか。カビくさいし、埃ほこりくさい。ここは使われていないのか。

違う。よく見ると、床ゆかに降り積もった埃に足あし跡あとがある。床。何かおかしい。そう、床だ。あの床板は外れそうだ。というか、ずらして、戻もどした形けい跡せきがある。何のために？　わからない。わかるはずもない。ごちゃごちゃ考えるよりも、確かめてみればいい。

ひょっとして、と期待しなかったわけではない。ただ、マリアローズの力でもたやすく持ちあげることができた床板は、せいぜい一メーテル四方だった。小さすぎる。無理だ。これではとうてい運びこめない。床板の下には四角い縦穴があり、梯子はしごがかけられていて、下りると地下室があったが、やはり狭せまかった。上の部屋よりもずっと狭苦しい。これでは物置にしても手狭だろう。いったい誰がこんなものを造ったのか。あるいは、造らせたのか。何も考えていない間ま抜ぬけか、計算のできないバカか、頭のおかしいやつか。いずれにせよ、意味がわからない。意味不明すぎて、腹が立つ。腸はらわたが煮にえくりかえり、もうこらえられそうもなくて、これ以上こらえる必要性も見いだせずに、マリアローズは壁かべを蹴けった。妙みように軽い音がした。

「――この壁……」

　向こうに何かある。マリアローズは生なま唾つばをのみこみ、壁に耳をつけて、籠こ手てで叩たたいてみた。やっぱりだ。カン、カン、というかんじの、軽いというか、尖とがった音がする。他ほかの壁も調べてみたが、少しこもった音だった。最初に蹴った壁だけ音が違う。その意味するところを考えた。ものすごい勢いでいろいろなことを想像した。そうだ。この地下室を造ったのは、アホでもバカでも狂きよう人じんでもない。ちゃんと理由が、目的があって造った。隠すためだ。そいつはおそらく、地下にそれを隠してから、あとで出入口を設けた。だから狭い。狭くてもいいんだ。

　どうしよう。見つけちゃった。望みなんてこれっぽっちもないと思っていたのに。やった。やったよ。僕ってば、すごいかも。えらいかも。やった。ダメだ。待て。落ちついて。まずはこの壁をどうにかしないと。壊こわす？　破は壊かいする？　ぶっ壊す？　どれも一いつ緒しよだ。てゆうか、無理だ。僕は髭ひげみたいに力持ちじゃない。じゃあ、どうする？　とりあえず、さわってみる。さわりまくる。押おす。思いっきり押してみる。押してダメなら、引いてみる。引けない。指がどこにも引っかからない。引き戸。そうだ。引き戸かもしれない。両手を壁に押しつけて、右方向に力を入れてみた。びくともしない。今度は逆だ。体勢を変えて、左方向に壁を押っつけてみた。

　手て応ごたえがあった。

　気のせいなんかじゃない。壁が動いた。ほんの少しだが、本当に動いた。

　マリアローズはさらに力を入れた。もっと力を入れた。髭になったつもりで力をこめた。

　ぐ、ぐ、ぐ、と少しずつ壁がずれていった。

　開いた。

　やはり隠し扉だった。

　明かりは上から射さしこむわずかな光だけなのでよく見えないが、壁の向こうには部屋があった。あった。あったんだ。ほら、あった。やった。秘密の隠し部屋だ。きっと、何かを隠すための部

屋に違いない。そうでなければ、こんなふうに見つけづらく、入りづらくする必要はないはずだ。

　そして、ここはかつて寺院だった。

　もうずいぶん前だが、根こん源げん光こう教きよう団だんという宗教団体がこの寺院を建てて布教活動を行ったものの、結局、多くの信者を獲かく得とくすることはできなかった。教団は撤てつ退たいし、からっぽの寺院が残された。ジェードリには同じような寺院の跡地がいくつもある。ここはその中の一つだった。

　ここは寺院だったのだ。

　寺院にあるもので、もっとも高価な、貴重な、大事なものといえば、だいたいあれだ。それだけに、撤退するにあたって、普ふ通つうはあれも撤去してどこかへ持ってゆくだろう。しかし、そうしたくてもできなかった場合だってあるかもしれない。何しろ、サンランドだ。何があってもおかしくない無統治王国だ。そうでなくとも、人が抱かかえる事情や置かれる状じよう況きようは千差万ばん別べつだ。異常に思えること、ありえないだろうと思うことも、絶対にないとは誰だれもいいきれない。可能性はどれほど小さくてもゼロではない。実際、ほら、あったじゃないか。

　マリアローズは半分ほどまで開けた壁の向こうに足を踏ふみ入れた。目はだいぶ闇やみに慣れてきているが、さすがにこの暗さではほとんど見えない。震ふるえる手でベルトの物入れから燐寸マツチをとりだし、床に擦こすって火をつけると、少しだけ明るくなった。いいものを見つけた。ランプだ。足あし許もとに転がっていた。オイルは残っているようだ。持ちあげて燐寸マツチの火で点火する間ま際ぎわ、心臓が激しいダンスを始めた。唇くちびるが乾かわいている。喉のどもカラカラだ。唾だ液えきが分ぶん泌ぴされない。マリアローズは一度目をつぶり、開けた。息を吸って、吐はいた。

　ランプがついた。

「……なんだよ、これ」

　そこは合成骨材コンクリート剝むきだしの広い部屋だった。

　あちこちに、黒っぽく汚よごれた布きれがたくさん散らばってい

る。床に敷しかれている布もある。手にとって確かめてみないことには何ともいえないが、それほど古いものではなさそうだ。誰かがここにいたのだ。数年前か。数すう巡じゅん月げつ前か。もしかしたら、もっと最近かもしれない。しかも、一人や二人ではないだろう。おそらく、大人数だ。

あとはランプがいくつか転がっているだけで、他には何もない。

それだけだった。

たったそれだけの、ほとんどがらんどうといってもいいような部屋にすぎなかった。

祭さい壇だんなんてどこにもなかった。

あるはずがない。

わかっていた。そんなことはマリアローズだってわかっていたのだ。髭が言っていた。祭壇は値段が高い。金さえあれば誰でも買えるというものでもない。何があろうと、そんな貴重なものを置いてゆくはずがない。でかくて運うん搬ぱんするには不便だろうが、祭壇のない地域に持ってゆけば、蘇そ生せい式商売で一ひと儲もうけできるのだ。絶対、持ってゆく。意地でも持ってゆくに決まっている。それに、仮にとてつもない幸運に恵めぐまれて祭壇を発見できたとしても、人手が足りない。髭は蘇生式を独力でなしとげるが、あれはあくまで自分専用の祭壇を使っているからだ。一人で施せ式しきするために、髭は年中祭壇にこもって何やら作業をしているらしいのだ。

蘇生式だの祭壇だのになると、マリアローズにとっては、わかるような、わからないような話だけれど、とにかく、これだけはハッキリしている。

カタリは生き返らない。

もう打つ手はない。

僕がやっていることはぜんぶ、すべて、何もかも、無意味で、無意義で、無む駄だだ。

マリアローズはランプから手を放した。ランプが床ゆかに落ちて割れ、ぶちまけられたオイルが燃えだした。しばらく炎ほのおを眺

ながめていた。馬ば鹿か馬鹿しくなり、部屋を出て、梯子はしごを登った。床板をもとの位置に戻もどしかけて、面めん倒どうくさくなってやめた。ホールの真ん中あたりまで歩いた。それさえもなんだか億おつ劫くうだった。息をついて、天てん井じようを振ふり仰あおいだ。今まで気づかなかった。気づいたのはそのときだった。

　天井いっぱいに、黒い塗と料りようで巨きよ大だいな十字が描えがかれていた。

　黒十字。

　あいつらの紋もん章しようだ。

　どうしてそんなものがここに。

　一いつ瞬しゆん、目の前が真っ白になった。

　なんだよ。いったいなんのつもりだよ。どういうことだよ。誰だよ。誰がやったんだよ。誰かの悪戯いたずら？　それとも、やっぱりやつらが？　あいつらのせいで、あいつらが、それなのに、また、ここでも、なんで、あいつら──あいつらが、あんな連中のせいで、こんなことに。

「ふざけるな……！」

　マリアローズは力ちから一いつ杯ぱい床を蹴けった。バカにするな、と叫さけんだ。いいかげんにしろ。嗤わらうな。僕を嗤うな。そうやって行く先々で僕を見てるんだろう。嘲あざ笑わらってるんだろう。もとはといえば、お前らのせいなのに。お前らがぜんぶ悪いのに。お前らさえいなければこんなことにはならなかったのに。バカにして。バカにしやがって。何様のつもりだよ。殺してやる。お前ら全員殺してやる。皆みな殺ごろしにしてやる。許さない。絶対に許すもんか。マリアローズは床を蹴った。足が痛くなっても蹴った。何度も蹴りながら叫んだ。喉が破れてしまいそうなくらい大声を出した。わかっていた。これも無意味だ。無意義で無駄なことだ。わかっていても、自分を止められなかった。疲つかれ果てるまでつづけるしかなかった。

　こんなことばかりだ。僕はこんなことばかりやっている。

　昨夜、カタリの顔を見たあと、眠ねむろうとしてなかなか寝ねつけず、寝しん台だいの中でいろいろ考えているうちに、祭壇を探す

ことを思いついた。日が昇のぼるのをじりじりしながら待って、宿の主人や近所の人々から情報を集めて回った。とくに宿の主人は事情通で、いつごろどこそこに寺院ができてすぐに潰つぶれたとか、なんとかという教団がどこだかを拠きよ点てんに活動しようとして失敗したとか、よく知っていた。昼前には五ご箇か所しよもの寺院跡あとが地図に書きこまれていた。場所はおおよそだが、周辺の住民に聞きこみをすれば、なんとか特定できるだろう。ロム・フォウが手伝ってくれるというので、二箇所の確かく認にんをお願いした。残りの三箇所のうち二箇所は建物自体なくなっていた。三箇所目がここだった。ここで最後だった。

　きっと、ロム・フォウも無駄足を踏ふんで、今ごろはもう宿に帰っているかもしれない。自分一人でぐだぐだやっているだけならまだしも、他人まで巻きこむなんて、まったく迷めい惑わくな話だ。いや、本当は手伝って欲しくなんてなかった。どうせ無駄だと思っていたからだ。そうでなければ、トマトクンにも、ピンパーネルにも、髭ひげにも、ユリカにも頼たのんでいる。宿を出ようとしていたところをロム・フォウに呼び止められ、心配されたものだから、つい口を滑すべらせてしまった。ロム・フォウだって、聞いてしまった以上、ああそう、がんばって、ですませるわけにもゆかなかったのだろう。マリアローズにしても、話してしまったからには、あくまで自分だけでやりたいとは言えなかった。一人よりも二人でやるほうが効率がいいのは明らかだからだ。せっかくの申し出を断ったら、ばれてしまうかもしれない。

　僕は、本当は、期待なんかしてないってことが。

　僕はただじっとしていられないだけだ。なんでもいいから、とにかく何かしていたいだけだ。そうしているうちに時がすぎて、やがてタイムリミットがきて、否いや応おうなくあきらめるしかなくなる。苦しくても、つらくても、悲しくても、寂さびしくても、泣いてもわめいても、そこですべてが終わる。最悪の結末でも、決着はつく。あとはそれを受け容いれるだけだ。忘れていったり、たまに思い出したり、泣いたり、ちょっと笑ったりして、時間はかかるかもしれないけれど、だんだんと慣れてゆくんだ。

　ようするに、僕は逃にげている。この痛みから、このせつなさから、きみが死んだ、死んでしまったという現実から逃げているうちに、取り返しがつかなくなることを願っている。

　マリアローズはホールを出て、道みち端ばたに座りこんだ。相変

わらず、晴れ渡わたっているのにやたらと暗い空だ。なんだか全身が重くて、やけにだるいので、背負い袋ぶくろを地面に下ろした。膝ひざを抱かかえて地面をじっと見つめた。退たい屈くつになってきたから、少しでこぼこした石いし畳だたみと石畳の境目を目で追ってみた。こんなことでも時間は潰せるんだ。何もわざわざ忙いそがしく動き回る必要はない。黙だまっていられないのなら、背負い袋の中でも整理すればいい。もともと、きっちり物が収まっていないと気がすまないタチだ。時間的な余よ裕ゆうがあれば、納なつ得とくいくまで何度でもやりなおす。今がまさしくそのときじゃないか。好都合だ。

　背負い袋を開けた。

　ピンク色の包装紙と赤いリボンで飾かざりつけされたものが目に入った。

　手にとって、リボンをほどき、ゆっくりと、破かないように、包装紙を剝はいだ。

　ハニワだった。

　カタリが買ってくれた。

　身体からだは人間だけれど、頭は魚みたいだ。龍りゆう州しゆ産うさんの魚人ハニワだ。

『逃げて何が悪いん』

　カタリがここにいたら、やはりそう言ってくれるだろうか。

『そら、誰だれやって逃げたいときくらいあるやろ』

　あのときみたいに。

『お前じぶんも軽い気持ちでやっとったらええねん』

　──でも、無理だ。

『一人やないっちゅうことは、そういうことやろ。明るく、楽しくな。くだらんことでも笑て話せる相手がおるっちゅうことや』

　その相手こそがカタリだった。

　ダメだよ。もう笑えないよ。笑えるわけがない。きみは生きていたころも笑えないやつだったけど、今のほうがもっと笑えないよ。笑わせてよ。ねえ。お願いだから。少しでいいよ。ほんの少しでいいから。笑いたいよ。泣くのはやだ。誰かの泣き顔を見るのもやだよ。こんな気持ちはもうたくさんだよ。慰なぐさめて欲しい。誰か、僕を抱だきしめて、かわいそうに、もういい、もういいから、と言ってくれないかな。誰でもいいよ。モリー。ベアトリーチェ。ああ、この際、あいつでもいい。あいつは僕にはやさしいから。僕のことが好きだから。僕を大事にしてくれるから。あいつなら、たとえそれが一時の気の迷いですらないとわかっていても、僕にやさしくしてくれるだろう。僕がもういいと言うまで、抱きしめていてくれるだろう。そのことでどれほど深く自分が傷ついても、僕を慰めてくれるだろう。だから、僕はいやなんだ。傷つくことを恐おそれないきみが怖こわいんだ。僕は卑ひ怯きようだから。ずるい僕は、きっと自分のためにきみを傷つける。さんざん傷つける。今までもそうしてきた。もういやなんだ。それでも平然としている、少なくとも平気なふりをしているきみが恐ろしいんだ。違ちがう。僕は、僕が怖いんだ。弱くて、卑ひ劣れつで、意地汚きたなくて、意い気く地じなしで、すぐ自分を正当化しようとして、誰かのせいにして、失敗して、形ばかり自分を責めて、それですまそうとする、僕は僕が嫌きらいで、怖い。



『あんまりな。頑がん張ばりすぎたらあかんで』

「……ぜんぜん、頑張ってないから。頑張ってるふり、してるだけで……」

　本当に頑張っている人は、喋しやべるはずもない魚人ハニワに向

かって返事をしたりしない。そんな間の抜ぬけたことをやっている暇ひまがあれば、頭を、身体を動かすはずだ。

　マリアローズはうつむいてハニワをぎゅっと胸に押おしあてた。

　その感かん触しよくで生きていることを確かめられる自分が疎うとましい。

　息を止めてみる。

　このまま呼吸しないでいれば、楽になれそうな気がする。

　どうせすぐに苦しくなって、我が慢まんできなくなるのに、そんなことをする。

「あの」

　驚おどろいて、思わず息を吸ってしまった。

　肩かたを叩たたかれたのだ。慌あわてて顔を上げた。

「……あ」

　知っている女の子だった。顔立ちは整っているのに、亜あ麻ま色いろの髪かみの毛も服装もなんだか無造作で野や暮ぼったい。名前は知らないけれど、チーロ・パンカロらとともにパンカロ屋や敷しきの地下室に身をひそめていた女の子だ。サンブレイク・ホテルから避ひ難なんしたときも一いつ緒しよだった。

「きみ、は」

「通りかかって──具合でも、悪いのかな、と思って。大だい丈じよう夫ぶ……です？」

「や、あ……具合は、べつに……」

「そう、なら、いいけど」

　女の子はマリアローズから目をそらして、なおも釈しやく然ぜんとしない様子ではあったものの、軽くうなずいてみせた。人見知りが激しい子なのだろうか。あのときも若じやつ干かん感じたが、妙みようにびくびくしていて、こっちまでいたたまれない気分になっ

てくる。ただ、彼女は一人ではなかった。連れがいた。しかも、文字どおり、手を引いて連れているようだ。

「あ……でも、ちょうど、よかった━ていうか……」

　女の子はぼそぼそとそんなことを言いながら、連れをちらりと見た。でも、どういう関係なのか。友だちではないだろう。家族か。というより、むしろ先祖といったかんじだ。彼女の連れは、杖つえをついていて、ものすごくしわくちゃで、かなり腰こしが曲がっていて、だいたい何歳くらいかさえわからない、老人だった。

「会いに、行くつもりで。その、途と中ちゆうだったから」

「……僕に？」

「では、ないけど」

「え、じゃあ……誰に？」

Omenage 897 11th revolution 10th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ヤスパー地区

〝回転海豚（スピニングドルフィン）〟

chapter.9

人間らしくたって

気がつくと一人だった。

髭ひげはどこへ行ったのだろう。ピンパーネルは。さっきまでこの部屋にいたはずだが、そもそも、さっき、とはいつのことだ。ロム・フォウと何か話をした記き憶おくもある。マリアローズともどこかですれ違った。そうだ。サフィニアが目を覚ましたとか何とか、ユリカが言いにきた。あれはどれくらい前だろう。ずいぶん昔の出来事のような気もする。ほんの少ししかたっていないようにも思える。顔を見に行ってやらんとな。そんなことを考えた覚えもある。

いつの間にか、一人になっていた。

いや、一人じゃないか。

「お前がいるな」

笑ってみたのだが、自然に笑えているだろうか。それ以前に、笑う場面なのか。

相変わらず、俺は何もわかっていないようだ。

寝しん台だいにカタリが寝ねている。違ちがう。カタリはもう息をしていない。心臓も動いていない。死体だ。カタリは死んだ。何度もその原因について考えた。どうしてカタリは死んだのか。死ななければならなかったのか。移り変わる状じよう況きようと各人の判断が一つ一つ積み重なり、絡からみあって、こういう結果になった。いずれにしても、最終的な責任は他ほかの誰だれでもない、ＺＯＯの園長マスターである自分にある。あたりまえのことだ。あのときああすべきだった、こうしていたらこの事態は防げた。思いつくことはいくらでもある。後こう悔かいもしている。しかし、そんなことに何の意味があるのか。ない。何もない。これっぽっちもない。

お前、調子に乗っていると、いつか本当に死んじまうぞ。いいかげんにしておけよ。

何度そう忠告しただろう。

死なないとわからんのか。いや、死んでもわからん。それがお前

だったな。

　いつだったか、そんな言い方をしたこともある。

　投げやりとは違うが、自分の命を安く見て、軽く扱あつかうようなところがカタリにはあった。軽けい率そつなのではない。何を大事に思うかの問題なのだろう。カタリにとっては、我が身よりも仲間や愛する者のほうが大切だった。だからこそ、注意はしていたつもりだ。自分の命だけ安いなんて考えるな。そう口に出して伝えたこともある。感情らしきものに任せて殴なぐりさえした。それが正しいやり方だったのかどうか、わからないし、今となってはどうでもいいことだが、どちらにしても、カタリは変わらなかった。自分自身の生き方をあくまで貫つらぬこうとした。貫いた。貫かせてしまったのだ。

「随ずい分ぶん人間らしくなったものだね」

　声が聞こえた。

　すぐそばからだ。

　驚きはしなかった。いつの間に、とも思わなかった。

「非ひ道どい顔だ」

「そんなにひどいか」

「ああ。君まで死人みたいだよ」

　答えずに、ゆっくりと顔を右へ向けた。灰色海豚の間には寝台が二台ある。そのうちの一台にはカタリが横たえられていて、その男はもう一台のほうに座って足を組んでいた。男の姿を認めてから、気づいた。俺はずっと寝台と寝台の間に突つっ立ってカタリを見下ろしていたのか。いつからだろう。まるで覚えていない。やつはどうしてここに。どうでもいい。

「何か用か」

「座ったら」

　男は自分の左隣を、右手でぽんと叩たたいてみせた。異様な光景だが、男がそうだということはとうに知っている。知らなくても見

ればわかることだし、最初は誰でも我が目を疑うだろうが、そういうこともあるのだと納なつ得とくするしかない。信じられないのなら、何度でも確かめればいい。純白の布を目深にかぶった男は、袖そでのない軽そうな衣ころもを身につけているだけなので、両りょう腕うでは剝むき出しだ。その左腕のような右腕と、右腕のような左腕が。

　逆さまの腕を持つ男の隣となりに腰を下ろすと、勝手にため息が出た。

　男の右手のような左手が頰ほおにそっとふれた。

　まるで人のような指の感かん触しよくとぬくもりだった。

「少し疲つかれているようだね」

「さあな」

「久しぶりだ。元気だったかい」

「どうだかな」

「少なくとも、今は元気ではなさそうだ」

「かもしれん」

「随分人間らしくなったものだね」

　男はさっきの台詞せりふを繰くり返して、指を離はなした。

「それはきっといいことなのだろうね。君は望んでそうしているのだろう」

「そのつもりだが」

「常にこうありたいと強く願うことだよ、大量の死の上に立つ者よ。存在とはそう確たるものではない。天と地とその狭はざ間まで絶えず揺ゆれ動くものだ。誰もかくあるべしと念じることなくかくあることなどできない。この世界は想念と認にん識しきによってつくられてゆくのだよ」

「くだらん講こう釈しやくなんぞには興味がない」

「だったら、君も興味が持てそうな話をしよう」

　男はそれから沈ちん黙もくを愛めでるようにしばらく黙だまっていたかと思うと、不意に立ちあがって窓まど際ぎわまでゆっくりと歩いていった。カタリのことがあるので、灰色海豚の間は昼でもカーテンを閉めきったままだ。男はカーテンを少しだけ開けて、こちらに顔を向けた。

「君もなんとなく感じているかもしれないけれど」

「何のことだ」

「僕の同族のことだよ」

「お前の……？　こっちには介かい入にゅうしないのが大原則だろう」

「そう。でも、僕のようなものもいる」

「お前は追放されたんじゃなかったのか」

「それは遥はるか遠き海の果てミリアルダの伝説だよ」

「謀たばかったのか」

「かつて僕の同族で人になろうとしたものがいた。僕は彼女を追って地上に降りた。しかし、彼女は彼女が創つくった楽園レアンダリスに閉じ籠こもって、僕と会ってはくれない。悲しいことだ。とても寂さびしいことだ。ミリアルダの歌いさまよう者たちが僕らのことを歌にしてくれたのだよ。僕はそれを君に話して聞かせてあげた。美しい物語で、とても気に入っているのでね」

「……お前は、何を企たくらんでいる」

「心外だな。何か企んでいるのは僕ではない。君たちだろう」

「俺には関係ない」

「君はそのつもりでも、運命の輪はすでに廻まわりはじめている」

「お前が運命を語るのか」

「運命とは原初より定まっているものではない。生きとし生けるも

のが定め織りなすものだよ。輪が廻るのはそれを廻すものがいるからだ」

「俺は望んじゃいない」

「だとしても、君は逃のがれられないだろう」

「お前と似たようなことを言ったやつがいる」

「引く手数多あまただね」

「迷めい惑わくな話だ」

「君たちは実に面おも白しろいことを考える」

　男はカーテンを閉めて、また隣に腰こしを下ろした。

「人でありながら竜りゆうとなり、その力を利用してマグニデア・プールに侵しん入にゆうしてみせる。よもやそのような方法で大原則が破られるとは、僕らは想像だにしていなかった。生きてその果てに死を迎むかえるものとして儚はかなくつくられた命が、脆もろさを捨てて何か別種のものになろうとしている。その弱さこそが命の尊さや気高さ、そして強さの根源であるというのにね」

「それはお前の理り屈くつだろう」

「僕というよりも僕らの理屈だ。僕らは君たちの変化を驚異というよりも脅威として受け止めている。少なくとも一部のものたちはね。何か手を打たねばと彼らは考えている」

「そこからさっきの話につながるわけか」

「そう。もちろん、由々しき事態だけれどね。君たちはすでに入口を設ける技術を手に入れている。エニグマ・リングといったかな。願う者と願われる者との利害が一いつ致ちすれば、君たちにとっては大変なことになるね」

「知ったことじゃない」

「言っただろう。運命の輪は廻りはじめていると」

「やめてくれ」

「君の口からそのような言葉を聞くとはね。本当に、随ずい分ぶん人間らしくなったものだ」

「皮肉か」

「違ちがうよ。喜ばしいことだと僕は思っている。友人としてね」

「おもしろい冗じよう談だんだ」

「冗談は嫌きらいかい」

「いや……嫌いじゃない」

　自分の髪かみの毛をぎゅっとつかんで、天てん井じようを仰あおいだ。

　はっ、と声とも息ともつかないものがもれた。

「つまらん冗談が好きだ。冗談だか何だかわからなくて、笑えばいいんだか、呆あきれればいいんだか、迷うような──無む駄だに威い勢せいだけよくて、まったくひねりがきいてない、くだらん冗談がわりと好きだ」

「そういうのが流行はやっているの」

「さあな」

「でも、果たしてそれは冗談と呼びうるものなのかな」

「呼べるさ」

　首を振ふってみた。おそらく、何かを振り払はらいたかったのだ。無理だった。

「──笑えない冗談ってやつだ」

「人の世はいろいろと難しいようだね」

「ああ」

　だが、そうだと理解するためだけの時間だったとは思いたくない。

今、俺は愚ぐにもつかないことを言おうとしている。わかっている。お前の笑えない冗談よりもずっとくだらないことだ。

お前が聞いたら、きっと笑うだろう。

そんなん似合わへんで、何ゆうとんのや、そないなボケいらんがな、と笑うだろう。

笑われてもいいさ。

いくらでも笑うがいい。

むしろ、大笑いして欲しいくらいだ。

「ソオル」

「何だい」

「そいつを生き返らせてやってくれ」

「……本気で言っている？」

「本気だ」

「できないよ」

「だろうな」

「悪いけれど、マグニデア・プールは古き竜たちの領域だ。僕の手は及およばない」

「ああ」

「君に頼たのまれると、なんとかしてあげたくなってしまうけれどね。残念ながら、不可能なことは不可能だと言うしかない」

「わかってる。いい。すまなかった」

「力になれなくて──」

「いいんだ」

お前のことを言えた義理じゃない。

何しろ、俺にはこれが精せい一いつ杯ぱいだ。

「冗談だ」

くだらん冗談だ。

冗談にまぎらすしかない、俺の本心だ。

目をつぶって、深く息を吸い、少しずつ吐はいた。

ドアをノックする音がした。

瞼まぶたを押おしあげて、部屋の中を見まわすと、逆さまの腕うでを持つ男はもういなかった。

ドアが開いた。

「……あれ？　一人？」

入ってきたのはマリアローズだった。不ふ審しんげに眉まゆをひそめてきょろきょろしている。話し声でも外にもれていたのか。それほど大きな声は出していなかったし、壁かべもドアも薄うすくはないはずだが。

「ああ。どうした」

「え……あ、うん、ちょっとお客さんがきてて。なんか、髭ひげのお師し匠しようさんなんだって。一応、挨あい拶さつくらいしておいたほうがいいんじゃないかなって、思って。余計なお節せつ介かいかもしれないけど。──本当に、トマトクン一人？」

「誰だれかいるのか。俺の他ほかに。俺には見えんが」

「そう……だよね。いないよね。僕の気のせい、かな」

マリアローズは目をあわさずに少しだけ口くち許もとをゆるめて、おそるおそるといったかんじの足どりで寝しん台だいのそばまできた。胸にぐっと手を押しつけて、ちらりとカタリを見たとき、一いつ瞬しゆんだけだが、今にも崩くずれてしまいそうに顔がゆがんだ。

「──もしかしたら、カタリかもね。幽ゆう霊れいとかって、いるの

かな。いないか。でも、カタリなら化けて出てきてもおかしくないよね。もともと、何かに化けてるみたいなものだったし」

　返事ができずにいると、マリアローズは何か言おうとして口ごもり、踵きびすを返した。

「行こ」

「……ああ」

　うなずくことしかできない自分がもどかしかった。

Omenage 897 11th revolution 10th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ヤスパー地区
〝回転海豚(スピニングドルフィン)〟

chapter.10

石ころにはなれないから

たぶん、ゆうに百歳を超こえているんじゃないかと思う。

髪かみの毛は一本もなくて、真っ白い髭はやたらと長いけれど量は少ない。目はやはり白い眉まゆ毛げに隠かくれてしまっていて、顔全体がしわくちゃというか、皺しわ以外の顔を構成する要素を探すのが難しそうだ。歯はすべて抜ぬけてしまっているのか、皺がより集まってできたような口がくちゃくちゃ動いている。これまた白っぽい粗そ末まつな上下を身につけ、腰こしが思いっきり曲がっていて、持っているというよりしがみついている杖つえがなければ、歩くことさえ難しそうだ。

「おお、トマト、紹しよう介かいしよう。こちらにおわす御お方かたこそが拙せつ僧そうの恩師、ダイダラン・ソーノーグ・ムソー元大海王神オストロス神しん殿でん筆頭僧主であらせられる」

ところが、この元筆頭僧主とやらのご老体、いつご臨終を迎むかえてもおかしくないような外見や、むやみに偉えらそうな肩かた書がきとは裏腹に、かなり軽いというか、くだけている。今も、大海豚いるかの間のソファにうずまったまま、友だちに挨拶でもするようにひょいと手をあげてみせた。

「ムソーじゃ。ほうほう、ぬしゃトワニンに負けらんのう。でっかいのう。よろしうな」

そんなかんじだから、とてもすごい人には見えない。ちなみに、言わずもがなのことではあるけれど、トワニンとはトワニングのことだ。どうせならもっとズバッと省略すればいいのに、妙みょうに中ちゆう途と半はん端ぱで適当感が漂ただよう。それでいて、このご老体の前だと、あの髭が借りてきた猫ねこみたいにおとなしくて、飼い馴ならされた犬のように従順なのだから、わからないものだ。

あるいは、マリアローズに見る目がないだけなのか。

「はじめまして。俺はトマトクンといいます。髭――トワニンから、お話は何度か」

「ほうかえ、ほうかえ。ぬしゃトマットクンかえ。ほしたらトマクンじゃなあ。トワニンめ、あのくそじじいがとゆうておったじゃ

ろ。あひはは」

「いえ。そんなことは」

　トマトクンが屈かがんで差しだした右手を、ムソーのほとんどミイラみたいな右手がそっと握にぎった。その瞬間だった。

　ムソーがいきなり目を剝むいてトマトクンを凝ぎよう視しした。

　でも、あれが老人の目なのか。白目は白いというより青白いくらいだし、黒目にもまったく濁にごりがない。まるで赤ん坊ぼうの目みたいだ。

　そんな澄すみきった目にじっと見つめられて、怯ひるまずにいられる者がどれだけいるだろう。

　すべてをあるがままに映す鏡は残ざん酷こくだ。

　人が隠しているものを暴あばきだしてしまう。

　トマトクンもわずかにたじろいだ。

　それでも、目をそらすことはしなかった。

　ムソーは顔をくしゃっと縮めて笑え顔がおらしきものをつくり、みずからの右手で握ったトマトクンの大きな手を、左手でぽんぽんと叩たたいた。

「重ちよう畳じよう、重畳。おっ死ちぬ前にええもん見せてもろたわ。トマクンよ、トワニンを頼たのむな。これはほんに不ふ肖しようの弟で子しじゃ。せやけどわしゃかわいいてたまらんくてのう。わしによう似とるでなあ。ほうは見えよらんかもしれんが、よう似とるでなあ。頭の出来がたいそうええところとかなあ。ほんだのんに大事なことがわかりよらんのよ。なんでか気づかれんのよ。人はのう、生まれてきよるとき、ええもんたあんと持たされても持ちきらんのんじゃ。ほいで落っことしてしまうのよ。落っことしたもんは拾いなおさなあかんのう。ええとこばっかりに見えよるもんでも、悪いとこぎょうさんあるもんじゃ。トワニンはのう。あのまんま神殿におっても大事なもんは拾えんかったろう。ぬしらに出会えんかったろう。せやからなあ、わしゃありゃあれでえかったんやろて思とるよ」

「……いや、俺こそ、髭にはいろいろと」

「相あい身み互たがいゆうてなあ。お互い様じゃ。わしもなあ、トワニン見とってわかったこともあるのんよ。百二十四年生きてきてなあ。まだわからんことだらけじゃ。なあ、せやろうが」

「はい……そうですね」

　トマトクンは軽くつつむように左手でムソーの両手を握り、口くち許もとをゆるめてうなずいた。

　なんだか不思議な光景だった。トマトクンが敬語なんか使っているからだろうか。さりげなくムソー老人が百二十四歳という超ちよう高こう齢れい者しやだと判明したからだろうか。

　しかし、あいにく老人の知り合いはいないので、比ひ較かく対象があるわけではないが、ずいぶんとまあ達者な百二十四歳だ。見かけやどこの訛なまりかわからない喋しやべり方はともかく、話の内容はしっかりしているし、眉毛の奥からのぞくあのきれいな目には、まばゆいばかりの知性の輝かがやきが宿っている。さすがに髭ひげのお師し匠しよう様というだけあって、長く生きているだけのおじいちゃんじゃない。それどころか、きっとただものじゃないんだ。

　まあ、ユリカが淹いれたハイアット茶をすすりながら、ロム・フォウをしげしげ見つめたり、アルファにちょっかいを出して吠ほえられたりしている姿は、老人というより無む邪じや気きな幼児みたいだが。

　ムソー老人は人の名前を縮めて呼ぶのがとことん好きなようで、そんなところもやや子供めいている。なお、ユリカのことはリカちゃん、ロム・フォウはフォウちゃん、アルファはアル、ピンパーネルのことはパーネン、マリアローズのことはマリヤちゃんと呼ぼうとして、当然、ふだんよりは控ひかえめだがそれなりに猛もう烈れつな抗こう議ぎがあったため、マリヤで落ちついた。

「──でも、さ」

　マリアローズはムソーの隣となりで居い心地ごこちが悪そうにしているあの女の子に目をやった。名前だけはさっき教えてもらった。ルカというらしい。

「なんで、その、ムソーさんと……きみが？」

「あ、えっと……」

　ルカはムソーをちらりと見てから、マリアローズと目をあわせかけて、慌あわてたようにうつむいた。ムソー老人とは正反対で、さっぱりくつろげていないようだ。

「近所、で。おじいちゃんとは、家が。ベアフットの。前から、知ってて。ローラが──なんていうか、あたしの、お母さん──じゃないけど、お母さんみたいな人が、こないだ、いろいろあって……死んじゃって。それから、おじいちゃん、結構うちにきてくれて。小さいこどもとか、いるから。世話とか、手伝ってくれて。それで……たまたまあのときのこと、話したら、なんか自分の弟子みたいだから、会いたいって。おじいちゃんが。だから──」

　ルカは心配そうにマリアローズたちを見まわした。

「……通じ、てます？　あたし──ごめんなさい、話とか、うまくできなくて」

「や、大だい丈じよう夫ぶだよ。なんとなくわかったから。つまり、ムソーさんはきみのご近所さんで、僕らのことを話したら、偶ぐう然ぜん、ムソーさんが髭のことを知ってた、それで会わせてあげるために連れてきたってことだよね」

「うん……あ、はい」

「いいよ、べつに。そんな無理して丁てい寧ねいな言葉とか使わなくても。てゆうか、あんまり使えてないし」

「……な、慣れてないから。ごめんなさい」

「そんなことで謝らなくていいってば」

　あのサンブレイク・ホテルの一室で、マリアローズたちの宿しゆく泊はく場所についてはちらっと話題にのぼった。たしか、どこに泊とまっているのかとカルロ・ボッシに訊きかれて、トマトクンが回転海豚いるかの名前を出した。そのあと、このホテルのスイートをこちらで用意しようとか、それには及およばないとか、そんなやりとりがあったはずなので、あの部屋にいたルカがここを知っていてもおかしくない。また、髭はいつもオストロスの僧そう服ふくを

着ているから──上はたまに、いや、結構よく脱ぬいでしまうものの、下は穿はいたままだし、外見にも行動にも特とく徴ちようがありまくりなので、ルカの話を聞いたムソー老人が「おお、それはまさしく我が弟子トワニンじゃ」と思いあたったとしても変ではないだろう。とりあえず、あやしむようなところはなさそうだ──なんて考えてしまうのは、マリアローズの性格が悪いからだろうか。そうかもしれないけれど、たぶん、それだけじゃない。

　くだらなくてもいい、無む駄だでもいい、なんでもいいから、とにかく頭を一いつ杯ぱいにしたいんだ。そうすれば、その間は忘れていられるから。ぼんやりしていると、カタリのことばかり思い浮うかぶ。考えてしまう。それがつらくてたまらないから。

「ほへ。どないしたんじゃ、マリヤちゃん」

「──ねえ、髭、一応きみのお師匠さんみたいだから許可とっておこうと思うんだけど、このおじいちゃん一発だけどついていい？」

「い、いや、師父は非常なご高齢であらせられるがゆえ、乱暴狼ろう藉ぜきはどうかつつしんでくれ。昔から天てん真しん爛らん漫まんな御お方かたで、悪気は微み塵じんもおありにならない──はずだ」

「ひょへひょほひょひょ」

「なーんか信用できないんですけど……」

「ときに人を揶や揄ゆして悦えつに入る高僧らしからぬ癖くせはおありになるのだが、それとてあくまで茶目っ気にすぎぬのであって──」

「筋肉ナルひスト馬ぶわ鹿かのトワニンにゆわれたかぁないのう。ふひふひょ」

「む、むむむ！」

　髭が顔を赤らめて目を白黒させている。本来なら笑うところなのかもしれない。でも、今は唇くちびるを笑う形にゆがめる程度で精一杯だ。髭にしても、やや無理をしているように見えなくもないし、他の面々も、もともとよく喋るメンツではないにせよ、自分から口を開くことはほとんどなくて、雰ふん囲い気きは暗く、空気が重い。

あるいは、そんな気配を感じとって、会話のきっかけでも作ろうとしたのかもしれない。

「そういえば」

　ルカが部屋の中に視線を巡めぐらせて、少しだけ首をかしげた。

「あの、杖つえみたいなのを持った銀色の髪かみの女の子と、
ちょっと目が離はなれ気味の──その、黒い髪の、男の人、は……」

　尻しりすぼまりになった声は、まもなく消え入るように途と絶だえてしまった。まあ、どんどんうつむいてゆくマリアローズたちを見ていれば、そうならざるをえないだろう。とはいえ、ルカに責任はない。かえって気の毒なくらいだ。ルカは何も知らないんだから。

「銀色の髪の──サしやフィニアは」

　気まずすぎる沈ちん黙もくを破ったのは、ユリカだった。

「魔ま術じゆちゆ士しなんだけど、大きな魔ま術じゆちゆを使ちゆかったしぇいで、起きられないの。じゅっと眠ねむっていて、
しゃっきようやく目を覚しやましたけど、まだ当分動けしょうもないわ」

「あ……そう、なんですか」

　ルカは少しほっとしたように息をついて、慌てたように眉まゆをひそめ、唇を噛かんだ。その気持ちはよくわかる。きっとルカは、あの雰囲気から最悪の事態を予想していた。だけれど、そこまでひどくはなかった。それで安あん堵どした。でも、残念ながら、安心するのはまだ早い。

「黒い髪の、男の子のほうは……カタリ、は──」

　ユリカの声が揺ゆれた。マリアローズは耳をふさぎたくなった。聞きたくない。その言葉を耳にしたくない。聞かなくたって、事実は何も変わりはしないのに。

「戦いで。しゅごく、激しい戦いだったから。犠ぎし牲えい者しやなんて、一人も出ないほうがいいに決まってるけど、しょうはいかなくて……」

　ユリカも同じなんだ。僕が聞きたくないのといっ緒しよで、ユリカも言いたくなくて、つらくて、あんなに顔をゆがめるくらい悲しいんだ。それなのに、僕はひどいことをした。慰なぐさめてくれようとしたユリカを拒こばんだ。わたしだって、と言いかけたユリカを、僕とは違ちがうと否定した。違わないのに。それどころか、僕よりユリカのほうがずっとこたえている。ユリカはカタリを弟みたいに扱あつかっていた。いつもカタリを心配していた。カタリもユリカには逆らえなかった。

「死んじゃったんだ」

　あのときだけだった。

　声を出さないで。笑わないで。言うことを聞きなさい。そう叱しかりつけるユリカに、カタリは従わなかった。奇くしくもあの日、マリアローズに語って聞かせた信念に殉じゆんじるために、あえてカタリはユリカにそむいた。

「カタリは、死んじゃったんだ。僕をかばって、死んだんだ。僕は命拾いしたんだ。カタリのおかげで、今、僕は生きてる」

　こんなことが償つぐないになるとは思っていない。でも、せめて受け止めよう。たとえ無様に押おし潰つぶされる結果になったとしても、目をそらさず、逃にげないで、受け止める態勢だけは整えよう。何事もなかったかのようにふるまうなんて無理だし、弱音を吐はいてしまうことだってあるかもしれないし、寝ねつけない夜がつづくかもしないけれど、いつまでも下を向いているわけにはゆかない。涙なみだでくもって何も見えなくても、前を向いて一歩でも二歩でも進まないといけない。そうじゃないと意味がない。カタリに救われたこの命に価値がなくなってしまう。それに、ただでさえ悲しみを我が慢まんして苦しんでいるユリカに、これ以上心配をかけたくない。

　だけど、大きいよ。

　この穴はすごく大きくて、大きすぎて、埋うめられる気がしないよ。

　前へ進むと心に決めたそばから、くじけちゃいそうだよ。

「……ごめんなさい──あたし……」

　ルカが自分の肩かたを抱だいて顔をしかめた。

「なんか、余計な、こと……」

「いいのよ」

　ユリカの微笑ほほえみは痛々しかった。その笑顔をむしばむ悲しみも、いつか次し第だいに薄うすれてゆくだろうなんて、今はまだ考えられない。ユリカもきっとそうだろうと思う。

「──いいの。気にしないで。あなたも、最しや近いきん、お母しゃんがわりの方を亡なくしたって、しゃっき言っていたわね。何の慰なぐしやめにもならないかもしれないし、寂しやみししゃとか苦ししゃは同じじゃない、人しょれじょれだと思うけど、ちゅらいのはたぶん一緒だわ」

「そう……です、ね」

「あたりまえのことなのにね」

　ユリカは窓のほうへ目をやって、ため息をついた。

「死んでしまった人がもう戻もどってこないなんて、本当は当とう然じえんのことなのに。いちゅからしょうじゃないみたいに思うようになってしまったのかしら。どうして、しょのうちカタリが起きあがってくるんじゃないかって、いまだに考えてしまうのかしら」

　ルカは歯をくいしばって必死に涙をこらえているようだった。不意に低く鳴いたアルファの頭をロム・フォウが軽く撫なでている。ピンパーネルは悄しよう然ぜんとしていて、置物みたいに存在感がない。ユリカと同じように窓の外を眺ながめているトマトクンも、いきなり立ちあがっていつものように笑うカタリの姿を白昼夢に見たりするのだろうか。

「──神しん殿でんが健在であれば」

　髭ひげが呻うめくようにそう言ってから、頭かぶりを振ふった。

「否いな、これこそが人の傲ごう慢まんなのだろうな。アニマの生まれる場所であり、アニマの行きつく先でもあるマグニデア・プールは、本来、我々人間の手が及およぶ領域ではないのだ。拙せつ僧そうらは蘇そ生せい式を神の御おち力から添ぞえによる奇き跡せき

であると称しようし、またそのように信じてもおるが、実際のところは祭さい壇だんの仕組みさえつまびらかには知らぬ。拙僧がお仕えしておるのは大海王神オストロスただ御おん一柱だが、我々が奉ほうじたてまつる神々の総数は、邪じゃ神しん、悪神をふくめ、一説では万の柱にものぼるという。そもそも、それらすべての神が蘇生の御み恵めぐみを人にもたらしうる存在なのかどうか。拙僧はもとより、人はあまりに無知で度しがたい。橋の先に何があるのか知りもせぬのに、どうやら渡われそうだからと渡ってみる。その橋とておのが手で架かけたものではないのにもかかわらず」

「ほへほへ。ぬしもだいぶん大人んなったのう、トワニン」

　ムソーがくしゃっと顔を縮めて膝ひざを叩たたいた。

「たしかにぬしの申すとおり、蘇生式が人の世にもたらしたものは善のみにあらず悪のみでもまたあらずといったところじゃとわしも思うよ。せやから、わしらはできよるかぎりわしらの信ずるところの善に近づかんとして心身を律し行いを戒いましめにゃあならん。神にお仕えいたすのんはむしろそのための一つの方便じゃ。だいたい祭壇はのう、ありゃあ違う。神の御力なんぞまるきり関係ないわい」

「……師父、それは」

「ぬしとて薄うすうすは気づいとるんじゃろう。ぬしが気づきよらんはずはないわなあ。ぬしゃあ頭はむやみによいからのう。なあ、せやろうが、トマクンや」

　トマトクンはムソーの視線を受け止めただけで、何も言わなかった。

　でも、どういうことだろう。祭壇に神の力は関係ない、だって？　まあ、マリアローズは髭と違ちがって不信心者だから、神様が助けてくれるとか、神様にお祈いのりをしていればいいことがあるとか、そんなことはまったく信じていない。とはいえ、苦しいときの神かみ頼だのみという言葉がある。現金な話だが、いざというときは神様にすがるのが筋だろう。蘇生式はまさにそれだ。マリアローズはそう思っていたし、似たような考えの人は結構多いと思う。ムソー老人はそれをあっさり否定したのだ。

「わしゃもはや確信しとるよ。ありゃあ神さんの仕し業わざじゃあ

ない。神さんはあないに下品なことはようしよらん。いのちはのう。まわり、めぐり、くりかえすものじゃ。長あく生きとるとなあ。初めて会おうたもんがどこぞの誰だれそれに似とるなんちゅうことがようある。ぼけとるわけやのうてなあ。何十年も前に死んでもうたあのじじばばに、顔とも背せ恰かつ好こうとも口ぶりともようゆわれん、たましいのかたちみたいなもんがのう、そっくりじゃゆうことがようあるんよ。それ以外の証しよう拠こもないではないんじゃがなあ。ともかく、マグニデア・プールの深層デプスにすっかり沈しずんでもうたアニマは、再利用される。わしゃそないな仮説を立てとる。それが世界のありようなら、神さんともあろうものが蘇生式をよしとはせえへんじゃろ。そうは思わんかえ」

「しかし……だとするならば、拙僧らの祈りはあまりにも――」

「無む駄だにはならんよ、トワニン。ほらあ無駄やと思うたら無駄になりよるじゃろうがのう。生かすも殺すもおのれ次第じゃ。よって、わしゃ蘇生式をも否定はしよらん。わしらは僧である前に人であるからのう。人であれば欲がある。欲をまったく消し去り生きることはできよらんじゃろう。欲が消しよう滅めつしたあとに残るのんは、無への希求じゃ。したが、それさえも欲であろう。無を求めずただ無であるとするなら、それは石ころと同じじゃ。人は石ころにはようなられんとわしは思うのう。百年生きても、ほれ、このとおり人は人じゃ。千年生きよったら、どないになるんかのう。ほんでも人は人であるしかないのんとちゃうんかのう。祭壇、か」

　ムソーは口をくちゃくちゃさせながら、頭を左右にひねった。

「神殿の左右式殿はもうすっかりあかんのかえ」

　トマトクンの一いち瞥べつを受けて、ピンパーネルが首を横に振ってみせた。

「式殿・入レナなかっタ。入口モ・壊こわされテまシタ」

「彼奴等きやつらの持つ黒十字はロシュの印。ロシュ聖教の教義では蘇生式を神の意に逆らうものとして一いつ切さい認めておらぬはず。祭壇は真っ先に破は壊かいされましょうな」

「もったいないのう。新しい祭壇じゃったのに。とゆうても、もうずいぶんたつか。みんなして、ええかげん古うて使いづらいゆうもんで、新式の祭壇設置しよるのんにあわせて式殿増築したんは――あ

りゃあ、いつじゃったかのう。トワニンは知らんじゃろなあ」

「存じませぬ。拙僧が下僧として僧そう籍せきの末席を汚けがしたころには、すでに式殿は──」

　髭が目を瞠みはって恩師を凝ぎよう視しした。

「古くて使いづらい？　増築、ですと……？　それは、つまり──」

　胸がときめいた。違う。いや、違わない。マリアローズは胸に手をあててみた。ほら、こんなにも高鳴っている。すごい動どう悸きだ。汗あせもにじんできている。髭がごくりと生なま唾つばをのみこんでから、たぶんこの場にいる誰も彼もが訊ききたいことを震ふるえる声で尋たずねた。

「式殿以外にも、祭壇が？」

「ふひょひょほ」

「あるの？」

　マリアローズは気の抜ぬける笑い声で答えたムソーにかすかな殺意を覚えながら、畳たたみかけるように重ねて訊いた。

「ないの？　あるの？　どっちだよ、それが大事なんだよ、あるのとないのとじゃ──」

「ある」

　ムソーは真っ白い髭をしごきながら、わざとらしく首を傾かしげてみせた。

「──と思うがのう。百二十四年生きてきたわしが、ぼけとらんかったら、じゃが」

Omenage 897 11th revolution 10th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

“a former buccaneer's den”

chapter.II

届かぬ証明

何か証拠が欲しい。自分が自分だという証あかしが欲しい。でも、自分とは何だ。わからない。わからない。思いきり開いた両手をじっと見つめた。すごい爪つめだ。長くて、鋭するどくて、たやすく獲え物ものに突つき刺ささり、簡単に引き裂さくことができるだろう。ちょうど喰くらいやすい大きさにするのに、この爪は便利だ。そのための爪だ。鎧よろいのような硬かたい皮ひ膚ふは、さらにもっと、どんどん硬くなってきている。この身体からだは生きようとしている。生き抜こうとしている。この身に宿った醜しゅう悪あくないのちを、なんとしてでも存続させようとしている。

紫むらさき色いろの太陽みたいに不可解で気色悪くて激げき烈れつでおぞましい生存本能だ。

おれの意志さえ無視して、この身体はどこまでも突き進もうとしている。

あるいは、それがおれの正体か。そうかもしれない。きっと、そうなんだ。ルカ。ああ、ルカ。おれはすっかり変わってしまったよ。顔だけはかろうじて人間のふりをしていたんだけどな。あのひとの真似まねをしていたんだけどな。

だけど、おれはこの爪であの顔をぐちゃぐちゃにしてしまった。偽にせ物ものの顔がとにかくいやだった。おれはおれだけのちゃんとした顔があると思っていたんだろうか。だとしたらどうしようもない間ま抜ぬけだが、おそらくあのときは何も考えていなかった。それが真相だろう。おれにはもともと知性なんてない。あるのは衝しょう動どうのみだ。そのことを知られたくなくて、ずっと仮面をかぶっていた。あの人の姿を借りて、自分を騙だまし、周りの人々を欺あざむいていた。ルカ、おれは生まれながらのペテン師なんだ。

昨日、裸足はだしの海岸でおまえの夢を見たよ。

おれは大きめの船の陰かげに身をひそめて、遠くからおまえの様子をうかがっていた。

あれは夢だろう。現実ではないだろう。現実でなければいい。なぜなら、おまえをじっと見ているうちに、おれは思ったんだ。

欲しい、と。

喰いたい、と。

おれはいったい何ものだ。わからない。わからない。わからないふりをしている。いつもおれはすべてを偽いつわって、ごまかそうとしている。できっこないのにな。無駄なのに。

今、おれが、ルカ、おまえのことを好きだなんて言っても、誰だれが信じるだろう。

おれだって信じないよ。この身を疼うずかせる食欲のほうがもっと現実味があって、信じられる。たしかなものは、それだけなんだ。たったそれだけなんだ。

おまえがおまえを好きだ喰らいたい。

うまそうな死し臭しゅうに満たされたこの洞どう窟くつで身を横たえていると、地べたを這はい回るちっぽけな虫のような生き物だったころを思い出す。同どう胞ほうだろうとそうでなかろうと、喰らえるものはすべて喰らっていたあのころを懐なつかしく思う。おれはそのように生みだされたものたちの中では圧あつ倒とう的な勝者だった。喰らい、喰らわれる生存競争に倫りん理りや善悪などなかった。突き動かされるままに喰らい、そのことが何にもまして喜びだった。いつからだ。そう。あのひとに会ってからだ。

『生きることでしかボクはボクを証明できない』

証明。あのひとはあのひとを証明する。ならば、おれはおれを証明するのか。あのひとは美しかった。他ほかの連中とはまるで違ちがっていた。お笑い種ぐさだった。あのひとはあのひととしてそこにあるだけで、すでに特別だった。証明されていた。あのひとに憧あこがれていた。おれだって、あのひとのようになりたい。なれるのなら、なってやりたい。あのひとに近づきたかった。おれだって、求められたい。愛されたい。あのひとになろうとした。この街で、ひととして生きようとした。あのひとが憎にくかった。所しよ詮せん、あのひとにはわかるまい。おれのようなもののことなどわかるまい。何もかも、あのひとに狂くるわされたんだ。おれはあのひとに踏ふみにじられて殺されるべきだった。そうしていたら、おれの死し骸がいはおれのようなものに喰らわれて、その血肉になっていただろう。もしくは、あのひとがおれを抱だきあげてくれれば

よかった。そうしていたら、おれはあのひとの忠実なしもべとなって、あのひとを守るために生きるという自分自身の証明を手に入れることができただろう。

　あのひとはこう言っただけだった。

『キミも生きたいのか。だったら、生きるがいい』

　たしかに、おれは生きたい。おれの身体は生きることを希求している。でも、生きたいというだけで生きてゆけるほど、このいのちには値打ちがない。何か欲しいんだ。欲しくてたまらないんだ。おれは、生きたいんじゃない。生かして欲しい。生きることを誰かに、何かに望まれたい。それこそが、おれに必要な、おれの証明なんだ。

　ルカ。

　おまえを好きだなんて、きっと嘘うそだ。

　おれはおまえに好かれたい。おれを求めて欲しい。おれのために。おれだけのために。

　このあくまで利己的ないのちに、価値なんてあるはずがない。

　でも、じゃあ、おれはおまえを喰らいたいだけなのか。

　だとしても、そう思うのはせつなすぎるよ。

　人間のように、この胸が痛むんだよ。

　おれは怪かい物ぶつにすぎないのに、痛みが消えてくれないんだよ。

　ただひたすらこの痛みを消したい。

　そのために、おれは何をすればいい。

Omenage 897 11th revolution 10th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ヤスパー地区
“回転海豚（スピニングドルフィン）”

chapter.12

勝手にしやがれ

「ところで、その黴かびかけた干ひ物もののような木乃伊ミイラめいた御ご老体は、いったいどこの馬の骨の残ざん骸がいなのだ」

　いくらなんでも、干物や木乃伊扱あつかいした上に、馬の骨、しかもその残骸呼ばわりするのは失礼きわまりないと思ったが、当の元オストロス神しん殿でん筆頭僧そう主しゅダイダラン・ソーノーグ・ムソー殿どのは愉たのしげにひょへひょへ笑っているので、まあいいか。

　でも、老人を恩師と仰あおぐ髭ひげの破は戒かい僧そうはたいそうご立腹の様子だ。

「ジョーカー。一度だけは赦ゆるそう。だが、次にそのような無礼千せん万ばんな物言いをしおったときには、お前の襤褸ぼろ雑ぞう巾きんのごときくそたわけたちんけな命はないと思え」

「なんだ、先天性脳腐くされの生なま臭ぐさ坊ぼう主ず、貴様の縁えん者じゃか。ふむ。ということは、オストロス神殿の隠いん居きょ坊主あたりだな。姿は即そく身しん成じょう仏ぶつ一歩手前といったところだが。ああ、即身成仏といっても、貴様らのような無む知ち蒙もう昧まいの輩やからには何のことやらわからんか」

「ふひょひょほ」

「何が可笑おかしいのか知らんが、笑えるということは最低限生きてはいるようだな。めでたいことだ」

「──ジョーカー！　これ以上、大恩ある我が師父を侮ぶ辱じょくするような真似まねは赦さぬと申したであろう！」

「いきり立つな、馬ば鹿かめ。貴様の恩師とやらの御ご坊ぼうを見てみろ。己おれの戯ざれ言など微み塵じんも意に介かいされず、実に悠ゆう然ぜんと笑っていらっしゃるではないか。徳のある高僧とは元来そのようなものだぞ。貴様は修しゅ行ぎょうが足りん」

「ひょはほほひょほ。なかなかにおもひろいやっちゃのう」

「これはこれは、御坊のごとき御おん徳とくいと高き御お方かたにそうおっしゃっていただけるとは、身に余る光栄です。名乗るほどの者ではございませぬが、名乗らぬも不ふ遜そんと愚ぐ考こうし、

あえて御ご前ぜんにて我が名を申しあげる慮りよ外がいをお許しください。わたくしはジャン・ジャック・ド・ジョーカーと申す者。以後、何とぞお見知りおき願えればと存じます」

「ひゃひゅひょ。わしゃムソーじゃ。よろしうな。ジャンカーどの」

　そんな奇き妙みような略し方をされても、表情一つ変えないどころか、わざわざムソー老人の席まで歩いてゆき、うやうやしくその手を握にぎって丁てい重ちように礼をしてみせるあたりが、ジョーカーという男の嫌いや味みなところだ。そう出られると、髭としてはもう手出しするわけにもゆかず、顔を真っ赤にしてひたすら憤ふん懣まんをこらえるしかない。まったく、なんてやなやつなんだろう。

　だいたい、連れのクローディアが飛び海豚いるかの間で眠ねむりつづけているというのに、ジョーカーは今の今まで行方ゆくえ不明だった。一応ユリカには一言あったようだけれど、いくらなんでもこんなときに勝手すぎる。しかも、ちょうどよく、いいタイミングで回転海豚に姿を見せたと思ったら、どういうわけか一人じゃなくおまけつきで、そのおまけの中に、よりにもよってあの男がいた。

　これはもう嫌がらせとしか思えない。

　借り切った回転海豚の食堂に、まだ起きられそうもないサフィニアと、一向に目を覚ます気配がないクローディア、それに──起きあがれないカタリをのぞいたＺＯＯの面々と、ムソー老人、それからパンカロ・ファミリーの偏へん屈くつで無愛想なカルロ・ボッシ、さらにはやたらとガタイのいい、ほとんど禿はげ頭あたまに近い坊主頭のチーロ・パンカロが雁がん首くびを並べているさまは、はっきりいって異様だ。というか、意味不明すぎる。いったい何なんだよ、このメンツ。

「それで、御坊ともあろう御方が、何なに故ゆえ斯か様ような薄うす汚ぎたなき場所で不ふつ束つかなる我が手下どもとわびしき食しよく卓たくを囲んでいらっしゃるのだ。よもや、己おれと顔つなぎをするためでもあるまいしな」

「……や、その前に、きみこそ何？　って話なんだけど。いきなりそんなやつら引き連れてきてさ。説明くらいするもんじゃない、普ふ通つう？　てゆうか、誰だれが手下だよ。あんまりふざけたこと

ぬかしてると、その髪かみ三つ編みにしてピンク色のリボンとか結んで顔白しろ塗ぬりにしたあげく赤い口紅と頬ほお紅べに塗ぬりたくってその髭もチョビ髭風にカットした威い厳げんもクソもへったくれもない姿とか想像して個人的に楽しんじゃうよ？　いいの？　もう想像しはじめてるけど」

「やめろ。己おれまで思わず想像してしまいそうになったではないか」

「それ、きみだけじゃないから。ほらほら、もうみんな想像しちゃってるよ」

「なんだと」

　ジョーカーが首こうべを巡めぐらすと、目があう先々で「ぷっ」とか「くっ」というかんじの控ひかえめな笑いがもれた。

「……貴様」

「ふふん。きみたちみたいに腕わん力りよくに訴うつたえてどうこうするってのは僕向きじゃないし、やりたくてもどうせできないけどね。それならそれで、物事にはやりようってのがあるんだよ」

「下衆げすの猿さる知ぢ恵えというやつだな。くだらん──が、れ劣つじ弱やく無力を口実にただ袖しゆ手うし傍ゆぼ観うかんしているだけの惰だ弱じやくにして卑ひ劣れつで屑くず以下の有害無益な愚物よりは万倍見こみがありそうではないか」

「きみなんかに見こまれたって、嬉うれしくもなんともないから。対象物がひどすぎて、一万倍でもぜんっぜんたいしたことなさそうだしさ」

「ずいぶん威い勢せいのいいことだ。ふむ。そういうことか」

　ジョーカーは顎あごをつまんでトマトクンと髭、それにムソー老人をちらりと見た。

「──まあ、よかろう。己おれは己おれで、むろん用があって此こ奴やつらを連れてきた。貴様らのごとき暇ひま人じんではないのでな。無む駄だに時を費ついやす趣しゆ味みもなければ、己おれを求めてやまぬありとあらゆる事物がそれを許してもくれん。とはいえ、己おれという高こう尚しよう、高こう雅が、高貴にしてとてつ

もなく稀き少しような存在がただ息をしているだけで、全世界にとって無意味にはならんのだがな」

「とりあえず、めったやたらにくだくだしい喋しやべりでむやみに時間を浪ろう費ひするのは、誰がどう見てもまぎれもなく悪あく趣しゆ味みだから、いいかげんやめといたら？」

「ふん」

　ジョーカーは椅い子すに座って足を組み、食堂の入口あたりにたたずんでいたチーロ・パンカロを一いち瞥べつした。チーロは少しの間、口をへの字に曲げ、左手で頭をぺしぺし叩たたきながら何やら考えこんでいたが、不意に「ははっ」と笑って、いきなりその場で土下座をした。

「ざぁーっす！」

　いや、突とつ然ぜんすぎて、さっぱりわけがわからないし。

　一同、呆あっ気けにとられていると、チーロはがばっと顔を上げて、なんだか凶きよう悪あくそうなのだが、どこか憎にくめない、一種の愛あい嬌きようのようなものを備えた笑みを満面に浮うかべてみせた。

「──つーわけで、なんつーかその、オレのこと助けてくれてあっりがっとさんっ的な気持ちをオレなりに表現してみたんだけど、どーよ？　ま、とにかく、アレだからよ。タマにはタマっつーのがパンカロ流なんで。あ、ちなみにこのタマってあのタマじゃなくてイノチのほうな。そんなわけだから、えーとなんだっけ、そーだ、ＺＯＯだっけか、あんたらはオレの命の恩人なわけで、受けた恩はバビッと返さねえとすっきりしねーし、いつかパカッと清算すっからよ。覚えてろよってなかんじで、夜よ露ろ死し苦く！　ニャハハハ！」

「……申し訳ありません、病やみ上がりなモンで」

　遅おそまきながらカルロ・ボッシがフォローに入ったが、本当に遅すぎて手て遅おくれだった。

「なーんだよ、カルロォ。オレはこのとーりピンピンしてんべよ。下はもーいつでもどこでもレッツラゴーってかんじでビンビンだしな。アッハハハ！」

「坊ぼつちゃん……」

「だっ！　かっ！　らぁっ！　坊ちゃんはやめろっつったべ！　ボ！　スッ！」

「──ボス、恩義のある方々の前なンで、礼れい儀ぎってものを考えていただきませんと」

「んんん～？　オレ的にはバリバリ礼儀正しくしてみたつもりだけどなぁ。もしかして、ちょびっと足りなかった？」

「いえ、程度の問題ではなく、方向性が」

「んだよめんどっちぇーなぁ。わーったよ！　んじゃ、たとえばこんなかんじかよ」

　チーロは立ちあがり、「うえっおっほん」と大おお仰ぎような咳せき払ばらいをしてから、両足を思いっきり開き、義手の右手を天てん井じように向けて、左手の人差し指でズバッとこっちを指してみせた。

「ジャビーンッ！　感謝のポォォォォォ──────────ズッ！」

「……余計に失礼です、ボス」

「うっそぉーん！」

「もういいです。私が申しあげますから、ボスは黙だまっていてください」

「て、てめー、えらそうだな、カルロォ。んだよぉ。ボスはオレ様だぞ！」

「そういうことは、礼くらいまともにできるようになってから言ってください。いいかげんにしねえと、俺も堪かん忍にん袋ぶくろの緒おが切れますよ」

　これまでチーロに対して慇いん懃ぎんだったカルロの言動が急変した。もともときわめて目つきの悪い男だが、その両眼に研とぎ澄すまされた剃刀かみそりのような眼光が宿ると、気の弱い者が見たら金かな縛しばりに遭あってしまいそうな恐おそろしさだった。こ

れにはめちゃくちゃなチーロ・パンカロもびびったようだ。

「……お、怒おこんなって。ちょ、ちょっとした冗じよう談だんだろぉ？」

「時と場合ってのがあります」

「わ、わーったよ。気をつけっからさ」

「そう願います」

　カルロはすごすごと引き下がったチーロと入れ違ちがいに前へ出て、ＺＯＯの一人一人と順々に視線をあわせていった。さっきみたいな「殺す気か」と叫さけびたくなりそうな眼まな差ざしではなかったが、やっぱり怖こわいことは怖い。でも、頭を下げる間ま際ぎわの表情には、何かこう、見る者の胸を熱くさせるような真しん摯しさがあった。

「お陰かげ様さまで、二代目はこのとおり壮そう健けんです。本来なら、ファミリーの全員があなたがたの前で頭を下げるべきでしょうが、こんな状じよう況きようです。ただ今はどうか何とぞこれきりにてお許しください。ありがとうございます。このご恩は必ず返させていただきます」

　正直、どう反応すればいいのやら、というかんじだった。マリアローズが「いえいえ、どうか気にせず」なんて言うのも変だし、第一印象が最悪に近かったカルロにそういう態度をとるのもなんだか気まずい。誰だれか何か言ってくれないかな。とくに園長マスターとか園長マスターとか園長マスターとか。

　とはいえ、最初からたいして期待はしていないし、見れば、その園長マスターは顎を撫なでながらぼんやりカルロを眺ながめているだけで、何かしそうな気配はまったくない。こういうときは、アレなのかな。結局、僕がどうにかするしかないのかな。そう思いかけたころに、ユリカが出し抜ぬけに拍はく手しゆをしはじめて、ああ、ユリカ、どうもありがとう、そうだよね、ユリカはしっかり者だもんね──でも、それはちょっとどうなのかな。拍手って……。

　というか、ただちにユリカにならって手を叩きだしたボケ園長マスターは、もっとどうかと思う。

　そうなると、髭ひげも「うむ」とうなずいて従い、ピンパーネル

もつづいて、なぜかロム・フォウまでぱちぱちやりはじめた。いや、そこまではまだいい。ムソー老人がひょへひょへ笑いながら拍手しだしたのも許す。ジョーカーが上に向けた左手を右手で軽く叩く上品な拍手をしてみせているのは、邪じや悪あくそうな微び笑しようを浮かべていることからしても、お得意の嫌いやがらせに類するものだろう。

　だが、チーロが右手の義手を左手でバンバン叩たたいているのは、どう考えても大いに間違えまくっている。きみが拍手してどうするんだよ。

　やがて顔を上げたカルロ・ボッシはかなり赤面していた。

　さすがに少々かわいそうだったけれど、見物だったし、思わず笑ってしまった。

　そう、僕は声をあげて笑った。こんなときなのに、笑ってしまった。笑えるような精神状態だった。たぶん、ユリカが拍手なんかしたのも、同じ理由からだと思う。きっと、今、僕らはちょっとおかしい。多少おかしくてもしょうがない。何しろ、こんなときなんだから。

「まあ、貸しはいつか何かで返してもらうって話はしたはずだしな」

　トマトクンが片方の眉まゆをつりあげて、空いてる席を顎あごで示した。

「よくわからんが、とりあえず適当に座れよ。ずっと突つっ立ってるのもなんだ」

　チーロとカルロが一礼して言われたとおりに椅い子すに腰こしかけると、非常に珍めずらしいことが起こった。本来、それが驚おどろくに値あたいすること自体が驚きなのだろうが、やっぱり意外だったし、奇き異いに感じさえした。トマトクンはみずから話を進めるべく、ジョーカーに向きなおったのだ。

「──で、お前のことだ。礼を言わせるためだけに連れてきたわけじゃなかろう」

「仮にそう思うのだとしたら、以前から絶ぜつ滅めつの危機に瀕ひんしていた貴様の脳のう細さい胞ぼうがようやくきれいさっぱり死

滅した記念にせめて祝しゆく杯はいでもあげねばならんな」

「残念だが、そいつは当分お預けみたいだ」

「ふん。この期ごに及およんで貴様の脳死記念など祝わずとも、貴様らはやけに浮うかれているようだしな。想像がつかぬでもないが、種も仕し掛かけも割れている低級で拙せつ劣れつな手品を見せられているようで胸むな糞くそが悪い。まずはその理由を聞かせてもらおうか。己おれの話はあとでいい」

「そうか」

　トマトクンは天井を見上げて、頭を掻かきながら一つ息をついた。

　食堂が静せい寂じやくにつつまれ、全員の視線がトマトクンに集中した。

　なんだかこっちまで緊きん張ちようしてしまうような雰ふん囲い気きだったが、トマトクンはさらりと言った。

「カタリを生き返らせてやれるかもしれん」

「そんなことだろうと思った」

　ジョーカーの反応もあっさりしたものだった。

「祭さい壇だんでも見つかったのか。そのことに髭達磨だるまのお師し匠しよう殿どのが関かかわっておられるというわけだな。どこだ。神しん殿でんか」

「よくわかったな」

「くだらんことを言うな。いくら貴様らが愚ぐ鈍どんな頓とん馬までも、神殿以外の場所であれば、いたずらに時間を空費せずとっくに動いているはずだろうが。わかって当然だ。しかし、オストロス神殿の左右式殿に四基ずつ、計八基あった祭壇は、すべてあの血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツに破は壊かいされたと聞くぞ。それ以外にもあったということか。そうか。祭壇とてあまりに古くなれば新しいものと替かえる。下取りには出さなかったわけだな」

「ひょほふぉひょ。たしかにそのような声もあったよ。古いのんを下取りに出したったら新ひいのをなんぼか安うく買えよるでのう。せやけど、いろいろあってのう。まあ、わしが血道をあげて組んだプログラムがようさん入っとる祭壇もあったで、わしも反対はせなんだよ。一人で蘇そ生せい式やったろう思うて、だいぶん苦労したもんで、もったいなくってのう」

「一人で……？」

　それって髭の得意技わざだ。ムソー老人はそういう意味でも師匠なのか。マリアローズの視線を受けて、髭がうなずいてみせた。

「拙僧のダイアモス召しよう喚かんプログラム〝T-Dummies〟は師父の発想を継けい承しようしたものだ」



「や、いきなりてぃーだみーとかいわれても、意味がわかんないんですけど」

「簡単にいえば、施せ式しき中に、拙僧とまったく同じではないにせよ、部分的に同等の働きをするダイアモス──分身のようなものをつくりだす。我が師父はこれをディーモンと呼んでおられた。師父

は十七体のディーモンを使し役えきし、お一人で蘇生式を成し遂とげられた最初の方だ」

「す……ごいんだね。あんまりそうは見えないけど」

「ひょへひょへ」

「ふん。何がすごいものか。どれだけ貴重な時を費ついやし猛たけき情熱を燃やし創意工夫を凝こらしてみたところで、所しよ詮せん、貴様らはあの竜りゆうもどきの掌てのひらの上だ。もがけばもがくほど奴やつめに嘲ちよう笑しようされ愚ぐ弄ろうされるということがなぜわからん」

「ほひょひょ。わしはべつにかめへんのう。たといどこの誰だれに嗤わらわれようとも、わしはわしが信ずるに値すると思うたものを信じ、わしのしたいことをするまでよ。それがオストロス神にお仕えすることであり、蘇生式の腕うでを磨みがくことであったのじゃ」

「つまるところは、それぞれに歩む道が違ちがうということでしょうな」

「違ちごうても、たまに交わることもあれば、遠くから手を振ふることもできようて」

「さすがは年の功というやつだ。押おしても引いても手て応ごたえがなく、実に気色が悪い。今のところは御ご坊ぼうに逆らうのはやめておきましょう。何、あと数十年どころか数年で御坊も墓の中だ。戦わずして勝つは兵法の上策。時すぎゆけば絶えるのがいのちの定め。あまりに愚おろかで、くだらなく、儚はかないが、それが人というものだろう。ただし、必ずしも無価値ではない」

　ジョーカーは突とつ然ぜんやけに真しん剣けんな表情になって、人差し指でテーブルをコツコツ叩いた。

「我々はおのが価値をおのれで決めることができる。それこそ人が人として持ちうる知性というものだ。信ずるもの、愛するものに殉じゆんずることもできる。我々にはそれを決定する自由が与あたえられているのだ。あの下手物は、みずから望んで死んだのだろう。そうすることでおのが道を貫つらぬこうとしたのだろう。余人がそれを嗤うのも勝手だ。早計だ、愚かだ、とんだ馬ば鹿か者だ、どう

とでも言える。だが、己おれは嗤わん。ただ生きて死ぬだけの人生なのにもかかわらず、おのれの意志で決着させることがどれほど困難か。唐とう突とつに降りかかってきた死に、悲鳴をあげながらのみこまれ、気がつけば死んでいた。たいがいの終わりはそんなものだ。しかし、あの下手物は違ったのだろう。素晴Via らしい boltte！」

　さっきは上品ぶっていたが、今度は短いけれども力強い拍はく手しゆだった。

　マリアローズは半ば呆ぼう然ぜんとしながら、あのときのことを思い出していた。

　そして、カタリの死に顔を。

「己おれであれば」

　ジョーカーは全員を見まわして両手を広げてみせた。

「おのが意志で、みずから望んで完結させた人生を、他者に踏ふみにじられたくはないな。そこらで足を滑すべらせてくたばったのならともかく、すべて覚かく悟ごした上での選せん択たくと結果とを、余人が無理やりねじ曲げるような真似まねをしていいものかどうか。己おれであれば、冗じよう談だんではないと断固として拒きよ否ひするがな」

　やけに満足げな顔をしていた。

　カタリは自分が信じるもののために精せい一いつ杯ぱい生きて、笑いながら死んだのだ。

「……でも」

　マリアローズはジョーカーの目を見すえた。いや、ねめつけた。

「間違ってるかもしれないけど、傲ごう慢まんかもしれないし、そんなことカタリは望んでないのかもしれないけど、それでも──僕は、やっぱり、それが可能なら、できるんだったら、もう一回、カタリに会いたい。生きてるカタリに会いたいよ。生き返って欲しいっていうよりも、生き返らせたい。わかってるけど。死んだ人がいっぱいいて、たくさんの人がたいせつな人を失って、みんなつらくて、悲しくて、僕もその中の一人で、もしかしたら、耐たえな

きゃいけないのかもしれないって、わかってるけど──だけど、ほんの少しでも可能性があるなら、あきらめたくない。違う。僕はあきらめない。誰がなんて言っても、絶対に、あきらめない」

　正直、怖こわかった。何がそんなに怖いのか、最初は自分でもよくわからなかったけれど、ジョーカーとにらみあっているうちに、だんだんと見えてきた。

　とりあえず、少なくとも、ジョーカーが怖いわけじゃない。こんなカッコつけでひねくれ者で口八丁のオッサンなんかどうでもいい。カタリの意志を無視してしまうかもしれないことが気になるわけでもない。むしろ、思いっきり無視してやりたいくらいだ。生き返らせてやって、ざまあみろと言ってやりたい。残念でした。いいかんじで死ねて、きみはそれで満足だったかもしれないけど、そうはいかないから。そんなの許さないから。許してやるもんか。

　僕は怒おこってるんだ。ものすごくカタリにむかついてる。

　なんでそんなに死にたがるんだよ。そりゃありがたいよ。守ってくれて、嬉うれしいよ。すごいと思うよ。漢おと道こみちだかなんだか知らないけど、思っててもできるものじゃないから、気合い入ってるなって思うよ。それは認めるけど、死ぬな。死なないでよ。死ななきゃ助けられないくらいなら、助けてくれなくていい。こっちだってつらいんだよ。悲しいんだよ。きみが死んじゃって、ショックでかすぎだよ。

　こんなことなら、僕が死んでいたほうがずっとマシだったって、心の底から思う。

　きみがそうすることを選んだように、僕だって選びたかった。

　勝手すぎるよ。

　何、死んでるんだよ。

　だから、カタリのことなんてぜんぜん怖くない。

　そうじゃなくて、怖いのは──、

　あきらめないこと。望むこと。願うこと。実際に、その望みを、願いを叶かなえるために、何かをすること。だって、何もかもがうまくいけば、もちろん言うことはない。最善だ。幸せだ。でも、わ

からない。粉ふん骨こつ砕さい身しんして、たとえこの身すべてを犠ぎ牲せいにしてもいい、石にかじりついてでもやり抜ぬいて、絶対になんとかしてみせる。そう意気込んで事にあたっても、わからないからだ。うまくゆくとはかぎらない。保証がない。失敗するかもしれない。そもそも、いくらかあると思っていた可能性も、本当はゼロかもしれない。

　もしダメだったら、どうしよう。

　どれほどの痛手だろう。

　そのとき僕は立っていられるだろうか。思わずへたりこんでしまったら、また立ちあがれるだろうか。立ちあがるために、乗り越こえなければならないものがどれだけあるだろう。

　臆チ病キ者ンだから、怖いんだ。

　勇気がないんだ。

　さっさとあきらめてしまって、頭のてっぺんまで絶望に浸ひたりきって、息ができなくても、溺おぼれても、そのままやりすごしたほうがまだ楽なんじゃないかって、思ったりもする。悪い結果ばかりが頭をよぎるから、それならいっそ、手をつけないほうがいいんじゃないかって。どうせ無理なんだから、やめておこう。そうやって、僕はいくつもの傷をまぬがれて、同時に、もしかしたら手に入れることができたかもしれないたくさんのものを、ただ見送ってきた。通りすぎてゆく背中を、物欲しげな顔で、指をくわえて眺ながめていた。

　いやだ。

　もういやだ。

　そうはいかない。

「……話したいことも、一いつ緒しょにやりたいことも、まだたくさん、いっぱいあるんだ。カタリは納なっ得とくしてるのかもしれないけど、僕は納得できてない。何か面めん倒どうなことがあったときも、明日、みんなで笑うために頑がん張ばるんだって、カタリは言ってた。でも、これじゃ笑えない」

　またきみとくだらないことを話したいよ。きみがクソつまらない

ジョークを言って、すかさず僕がつっこんで。バカバカしくて、いつも呆あきれていた。だけど、心地ここちよかった。そんなどうでもいいようなことが、すごくだいじだったんだ。

「カタリがいないと、笑える気がしない」

　ユリカがうなずいてくれた。ピンパーネルもだ。

　トマトクンはじっとマリアローズを見つめている。目をつぶって腕うで組ぐみをしている髭ひげも、黙だまって聞いてくれているのだと思う。椅い子すではなく床ゆかに腰こしを下ろしているロム・フォウは、アルファの頭を撫なでながら、何か考えこんでいる様子だ。

　ジョーカーが両手を組みあわせて「ふん」と鼻を鳴らした。

「明日、皆みなで笑うため、か。下手物らしい脳天気な痴しれ言だな。まあ、よかろう。貴様の考えはわかった。それで、祭さい壇だんはいったい何処どこにあるのだ」

「大いなる祈いのりの場だ」

　髭は大きく息を吐はいて、ゆっくりと目を開けた。

「正確には、その直下にもう数十年間使われておらぬ旧ふるい式しき殿でんがある。つまり、以前、師父らがお使いになられていた祭壇は、撤てつ去きよされることも、移動されることもなかった。左右式殿完成後に式殿ごと封ふう鎖さされ、以後、奥おく殿どのの筆頭、第二、第三僧そう主しゅのみが定期的に立ち入るだけで、その存在すらも秘ひされておったのだ。それゆえに、拙せつ僧そうもこのたび師父からお教えいただくまでは知らなんだ」

「なぜ秘密にする必要がある。御ご坊ぼうがそのように取り計らわれたのか」

「いやあ、わしゃその時分は大僧正で、奥殿にはおらんかったからのう。合議には参加さしてもろうたが、決定したのんはわしではない」

「ディーモンだ」

　髭がわずかに顔をしかめて師し匠しょうのかわりに答えた。

「これは拙僧の推測にすぎぬが、当時の奥殿は、祭壇に記録されておる師父のディーモン召しよう喚かんプログラムを秘伝として保管しようとしたのであろう。そして、僧主にのぼりつめた者だけが、その秘伝に接することが叶ったのだとすれば、話のつじつまがあう。拙僧のダイアモスにしても、師父のディーモンが着想になっておるとはいえ、はばかりながら実際の設計そのものは拙僧の独創だ。奥殿の下にある僧たちにとって、ディーモンはいわば伝説であったのだ」

　ムソー老人は口をくちゃくちゃさせるだけで、否定も肯こう定ていもしなかった。よくわからないけれど、髭の推測とやらは、それなりに的を射ているということなのかもしれない。

　髭が一息ついてから話をつづけた。

「いずれにせよ、万ばん難なんを排はいして旧式殿に入りこむことができれば、蘇そ生せい式は可能だ。ただし、当然のことながら、カタリの亡なき骸がらも運びこまねばならぬ。さらに、師父のご同行も必ひつ須すだ」

「御坊をお連れするだと？」

「左様。いくらすぐれたプログラムでも、使いこなすことができねば役に立たぬ」

「貴様は使いこなせんのか」

「一度も実物にふれたことのない拙僧では、今ここに祭壇があるとしても、構造を理解し使用法を検討している間に時間切れとなろう。師父のご指導があれば別だがな」

「期限はいつなのだ」

「十二番日零れい時じまでに施式を終えられれば、可能性はある」

「猶ゆう予よはそうないわけか」

「一刻を争うといっても過言ではない。早ければ早いほど確率は高まる」

「だったら、さっさとその大いなる祈りの場とやらを目指せばよかろう」

「いくつか問題があるのだ」

　髭が眉まゆをひそめて唇くちびるを引き結び、鼻から息を吐いた。

「──いや、いくつも、というべきか。多くの問題がある」

「ふん。それはそうだろうな。貴様の戯たわ言ごとをざっと聞いただけでも疑問点だらけだ。そもそも、神殿は無人の野ではなく、血に飢うえた野や蛮ばんな狂きよう信しん者どもに占せん領りようされている。大いなる祈りの場に到とう達たつするためには、連中の目を盗ぬすんで侵しん入にゆうするか、排除しつつ押おし入るしかないが、いずれもただでさえ厄やつ介かいだろうに、そのうえ死体を引きずり、死にかけのご老体を背負いながらとなれば、困難を通り越こして実現性を論じることすら絵空事に近い。誇こ大だい妄もう想そう狂きようでもなければ可能だとは思わんだろうさ」

「……しかも、それだけじゃなくて」

　マリアローズはジョーカーの目を見ることができなかった。

「ムソーさんが言うには、旧式殿に入るための鍵かぎが、奥殿にあるみたいなんだ。だから、少なくとも一人は奥殿に行かなきゃいけない。奥殿の様子はピンパーネルも見れなかったから、鍵が無事だっていう保証もない」

　そう。

　僕らがこの手に握にぎっているのは、本当に小さな、見落としてしまいそうなくらい小さな、息を吹ふきかければ飛んでいってしまいそうなくらい小さな、単なる可能性でしかない。

　でも、ゼロよりはいい。比べものにならない。そう信じたいだけなのかもしれないし、信じることさえやっぱり怖こわいけれど、僕はもう決めたんだ。

　このちっぽけな希望を最後まで握りしめていよう。

　自分から手を放すことだけは絶対にしない。

　あきらめなければ、きっとなんとかなる、なんて思っているわけじゃないけれど。

「ちょっといいですか」

　少なくとも、こんなふうに予想外の人物が思わぬ情報をもたらしてくれることもあって、それらが積み重なってゆけば、開ける道だってあるかもしれない。

「役に立つかどうかはわかりませンが」

　口を開いたのはカルロ・ボッシだった。

「世間ではオストロス神殿の僧は皆殺しにされたってことになっていますが、じつはそうじゃなかった。あンなざまになった神殿から逃にげおおせた坊ぼうさんを一人だけ知っています」

「……なんと」

　髭ひげが低く呟つぶやいて、ムソー老人も口をくちゃくちゃさせるのをやめた。

　カルロは二人を一いち瞥べつしてから、ほんの少しだけ顔をゆがめた。何か苦い思い出でもあるのかもしれない。

「カクワンという名の第三僧主です」

「──カクワン……あのカクワン殿どのか。拙僧が僧そう籍せきにあったころは、大僧正であらせられたが。で、カクワン殿は、今？」

　カルロが首を横に振ふってみせると、髭は「そうか」と呟いて瞑めい目もくした。ムソー老人もどことなく悄しよう然ぜんとしているように見える。

「私の記き憶おく違ちがいじゃなければ」

　カルロは気をとりなおすためか、ネクタイの位置をなおす仕し種ぐさをした。

「たしか、奥殿の隠し通路から逃げたと言っていました。出てこられるってことは、そこから入ることもできるンじゃないですか」

「隠し……通路？」

　マリアローズは鸚おう鵡む返しに言って、ムソー老人を見た。マリアローズだけではなかった。ユリカも、トマトクンも、ピンパーネルも、ロム・フォウも、アルファさえもムソー老人に視線をそそぎ、髭にいたっては目を大きく見開いて、押し殺したような声で恩師を呼んだ。

「師父……！」

「ふぅむ」

　ムソー老人は杖つえを抱だくようにして腕うで組ぐみをし、ゆっくりとうなずいた。

「すっかり忘れちょった」

　相手は高こう齢れいだし、年をとれば衰おとろえるのは仕方ないし、そのことを責めるのはかわいそうというか、責めてもしょうがないというか、とにかく、頭にはくるし、ズッこけている場合でもないわけだから、ここは深呼吸でもして気持ちを落ちつけよう。さあ、一回。二回。三回。

「──って、こんなんで落ちつけるかぁっ……！」

「ま、待つのだ、マリアローズ！　よせ！　冷静になれ！　師父には悪気はない──と、思わなくもない！」

「うっさい黙だまれ髭山髭彦！　きっと忘れてることがまだいっぱいあるに違いないんだから！　この際だからぜーんぶキリキリ思い出させてやる！」

「かえってみぃーんな忘れてしもうたりしてのう。ひょへひょへ」

「そしたらもうさっぱり役に立たないんだから、ちゃんと墓に埋うめてあげるよ！　丁てい重ちように！」

「トワニンにお祈いのりでもしてもろうてなあ。それも悪うないなあ」

「だーれが楽に死なせるかぁ！　これから一働きしてもらわないといけないってのに！」

「ふふぃひょ。わしゃどうすりゃええのんかのう」

「とりあえず頭しゃっきりさせてこれ以上大事なこと忘れてないかよぉーく考えて思い出したら洗いざらい喋しやべって、あとはせいぜいたっぷり長生きすればいいんじゃないの！」

「まあ、落ちつけ、マリア」

　トマトクンは冷静というよりも、いつになく真しん剣けんな顔つきだった。

「隠し通路、か。奥殿ってのは僧主しか入れないんだったな、髭」

「うむ。それゆえに、拙僧はそうした通路の存在など聞いたこともなかった。師父はご存じなのですな」

「知っとるよ。ああ、思い出した。奥殿の下から洞どう窟くつやら下水道やらに通じとる。奥殿に入ったあとで教えられるんじゃ。ジェードリの地下は迷めい路ろのようになっとるでのう。ひっかり道順覚えんと迷うてしまうで、一度や二度は実際通ってみよるのが習わしでなあ」

「じゃあ」

　マリアローズはぎゅっと両の拳こぶしを握りしめた。

「その通路を使えば、直接、奥殿に行けるんだね」

「ほれはどうかのう」

「え？」

「出るのんは簡単じゃが、入るのんはむつかしい」

「……なんだよ、それ」

　いや、でも、考えてみれば、あたりまえのことだ。洞窟やら下水道やらに繋つながっていて、たやすく出入りできてしまうようなら、部外者が神しん殿でんの奥殿に迷いこんでしまうことだってありうる。出るは易やすし入るは難かたしの仕し掛かけを施ほどこしておかないと、不用心きわまりない。

「通せんぼしよるもんがおるのんよ」

「門番、とか？」

「そのようなもんじゃなあ。人間ではないが。地獄蓮華ヘルロータスゆう香こうがあってのう。奥殿から出よるときにはそれを焚たいてくんじゃ。ほしたらおとなしうなぁんもせえんで通してくれよる」

「ヘル、ロータス……」

　皆みなを見まわしてみた。とくに、妙みようなところで物知りだったりするトマトクンや、嫌いや味みたらしく博識らしいジョーカーには少しだけ期待していたのだが、どうやら二人とも心当たりはないようだ。植物の名だろうから、ロム・フォウはどうかとも思ったけれど、残念ながらやはり知らないらしい。

「せやけど、まあ」

　ムソー老人が弟で子しに顔を向けた。

「わしゃええのんは頭だけじゃが、トワニンは腕っ節もえらい強いからのう。僧としては、もひかしたらそれがよくはなかったんかもしれへんけどなあ。こういう場合は役に立ちよるのう。トワニンじゃったら、あるいはやっつけてしまうかもしれんしなあ」

「……それって、つまり、血塗れブラツド聖堂テンプル騎士団ナイツを正面から突とつ破ぱするよりは難しくないってことだよね」

「わしにゃあ喧けん嘩かや戦いくさのことはようわからん。坊ぼう主ずじゃからのう。もうしばらく前にやめてもうたが。ただなんとなぁーくそのように思うだけじゃ」

　マリアローズはトマトクンを見た。

　トマトクンはしっかりと目をあわせてうなずいてくれた。

　決まりだ。

　カタリを運ぶ役は髭ひげにやってもらって、マリアローズとユリカがムソー老人の面めん倒どうを見る。トマトクンとピンパーネル、それにロム・フォウを主戦力として、何かあったときはマリアローズとユリカがカタリをカバーし、髭にも前に出てもらえばいい。サフィニアは無理だ。とても動ける状態じゃない。きっとサ

フィニアとしてもつらいだろうけれど、休んでいてもらうしかない。アルファはどうするのだろう。アルファ次し第だいか。クローディアはまだ目を覚ましていない。あとは、ジョーカーだ。いけ好かない男だが、いてくれたらいてくれたで心強いことは間ま違ちがいない。

「愚ぐの骨こつ頂ちようだな」

　でも、しぶとくて、図太くて、偉えらそうで、本当にいけ好かないやつで。

　ジョーカーは眉まゆをつりあげて唇くちびるをゆがめながら、首を傾かたむけてみせた。

「鈍才はLutouel天才の noa 夢をIdora 見ないVidor、という言葉がある。阿あ呆ほうはどこまでいっても阿呆で、夢の中でさえ賢けん人じんにはなれんというわけだ。当然のことではあるがな。愚者が思い描えがく賢者は真の賢者たりえぬ。仮に賢者の何たるかを知っているとしたら、その者はそもそも愚者ではない。まあ、異論を差し挟はさむ余地が塵ちりほどもないかといえばそうとは思わんが、ともあれ、貴様らは愚かだ。これ以上は時間の無む駄だだな。阿あ呆ほらしくてかなわん。そろそろ己おれの話をするとしよう」

　この男はいったい何が目的で、そんなふうに水を差すような真似まねをするんだろう。全身の血が煮にえ立ちそうだが、沸ふつ騰とう寸前で止まっている。止めるものがあるのだ。それが何か、わからないわけじゃない。考えればすぐにわかる。わかってしまうのがいやだから、考えまいとしているだけだ。

　ともりはじめた希望の火は、小さな吐と息いきでさえ消えてしまいかねないほど弱々しい。

　僕はそのことから目をそらそうとしている。

　時間も限られているし、確実性を求めようとしたら、きりがないから。

　いや、むしろ、あとは野となれ山となれで突つっ走ってしまったほうが、楽だからだ。

　ジョーカーはまるでそれを見み透すかしているかのように、マリアローズを鼻で笑ってみせてから、すらりと長い脚あしを組みなお

した。

「結論から言えば、己おれはあの無ぶ粋すいで糞くそ生意気な身の程ほど知らずの狂きよう信しん者どもを完かん膚ぷ無きまで叩たたきのめし、この地上から滅めつ却きやくすることにした」

「……そんなこと、簡単に──」

「すでに、バルモア商会の私兵隊と、ここにいるチーロ・パンカロ以下パンカロ・ファミリーの諸君が協力を約束してくれている。その総員をもって神殿を攻せめれば、勝機は十分あろう。我らがＺＯＯ最強の魔ま術じゆつ士し殿どのがあの化物を斃たおしてくれたおかげだ。どれだけ数をそろえようと、通常戦力ではあのような超ちよう常じようのものには対たい抗こうしがたいからな。その意味では、ようやく膳ぜん立だてが調ととのったともいえよう」

　クローディアを放置して行方ゆくえをくらましていたと思ったら、そんなことを企くわだてていたのか。マリアローズは呆ぼう然ぜんとしてしまったが、一いつ瞬しゆんで我に返った。

　もし、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツを叩き潰つぶして、やつらの手から神殿を奪だつ回かいできれば、旧式殿の祭さい壇だんを使うことができる。しかも、隠かくし通路の門番とやらのことや、カタリやムソー老人の安全、それから、何よりも奥殿に侵しん入にゆうしてからのことは、少なくとも考えなくていい。とくに、奥殿までたどりつくことができたとしても、神殿の中にひしめいているだろう敵の妨ぼう害がいをくぐり抜けて、ちゃんと旧式殿に行きつけるのか。その点については、マリアローズがあえて頭から追い払はらおうとしていた。だが、常識的に考えれば無視していいはずがない懸け念ねん材料だ。それが解消されるのだ。

「己おれが思うに、今こそ奴やつらを殲せん滅めつする絶好の機会だ」

　ジョーカーはよく手入れされた指で細い顎あごをつまんだ。

「奴らは最近、海路から増ぞう援えんをえたとの報しらせもある。時が移れば状じよう況きようが変わる。否いな。刻一刻と変化している。実際、先夜、パンカロ・ファミリーが神殿を襲しゆう撃げきした折、奴らの兵どもが何やら異状を呈ていしていたそうだ。その件に関してはあとで説明させるが、砂時計の砂が落ちるごとに不確

定要素が増えると考えるべきだろう。人の手で時の流れを堰せき止めることは能あたわぬ以上、こちらが早く動くしかない。とはいえ、そこらを散歩するのとはわけが違う」

「……どういう意味？」

「パンカロ・ファミリーはともかく、私兵隊の動員には相応の手間がかかる」

「それは……」

　当然といえば当然の話なのだろう。具体的なことはわからないが、そう言われて否定するだけの根こん拠きよは持ちあわせていない。

「奇くしくも己おれは十二番日の零れい時じを想定し、その刻限を目標にしての準備を依い頼らいしていた」

「でも、それじゃ間に合わないよ」

「最初にこれ以上無理だと提示されたのが十二番日の十二時だった。半日早めさせたのだ」

「だけど──」

「さらに半日はいくらなんでも酷こくだろうな。これぱかりは交こう渉しようでどうにかなるものでもない。物理的に可能か不可能かの問題だ」

　ジョーカーは顔をしかめて、煙けむりでも払うように手を振ふってみせた。

「まあ、いい。いずれにせよ、己おれは神殿を攻める。本当は貴様らも駆かりだす予定だったのだがな。どうせ貴様らなどこの己おれの添そえ物にすぎん。勝手にするがいい」

Omenage 897 11th revolution 10th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ヤスパー地区
“回転海豚（スピニングドルフィン）”

chapter.13

あしたのために

1

　素す直なおじゃない男だと思ってはいたけれど、わざわざあんな言い方をしてみせたのは、おそらくマリアローズのことが気に入ったからだろう。

「とことんひねくれ者なんだ、あの男は」

　呟つぶやくと、アルファが少しだけ首をもたげて低く喉のどを鳴らした。ふうん。人間は面めん倒どうだな。

「そうでもないよ。面倒にしたい人が、面倒にしているだけじゃないかな」

　変な生き物だ。おまえたちは。

「それは、あたしも思うことがある」

　おまえは違ちがうのか。

「どうだろう」

　おまえは違うな。

「そうかな」

　ああ。

「……だと、いいね」

　ロム・フォウはアルファの腹に顔をうずめて思いきり息を吸いこんだ。獣けものの匂においを嗅かいでいると、こんなにも落ちつく。回転海豚の手入れが行き届いた庭の芝しば生ふの上で、こうしてアルファの腹を枕まくらに身を横たえている自分は、やはり他ほかの人とはどこか違うのかもしれない。たとえば、木々が芽め吹ぶく季節に建物の中にいると、ひどく憂ゆう鬱うつになる。夏の暑い盛さかりに素すっ裸ぱだかで川を泳ぐのが好きだ。今こ宵よいのようなもう終わりかけた肌はだ寒ざむい秋の夜長に、土のかすかなぬ

くみや獣の体温を感じていると、父のあたたかい記き憶おくが蘇よみがえってくる。

　α大陸出身の母は、暗黒大陸の港町オンプチスカで貧ひん者じやの救済に尽じん力りよくし、ラッショナロの聖母と呼ばれたこともあったらしいが、ロム・フォウが知る彼女は、夫と娘むすめを心の底から愛する一人の女でしかなかった。どこまでもやさしかった母のことも愛しているが、どうしてか父にまつわる思い出のほうが多い。きっと、似ているからだ。たぶん、あたしは父によく似ている。愛して、憎にくんで、生きて、死ぬ。それが人生のすべてだと語っていた父は、自然とともに生きて、恋こいした母を奪うばうように山へと連れ去り、娘を愛して、家族に害をなす敵を憎み、勇ゆう敢かんに戦って死んだ。あたしもそのように生き、死ぬだろう。ごちゃごちゃしたことを考えようと思わないし、考えられない。おそらく、あたしは父と同じなのだろう。

「あの人が好きだ」

　すっと口から出た言葉だった。

　アルファが唸うなった。

　ああ、そうなんだ、と思った。

　あたしはあの人が好きなんだ。とても好きなんだ。だから、あまり器用とはいえないあの人が、ゆっくりと、少しずつ築きあげてきたＺＯＯが、なんだか家族みたいに思えて大切だ。カタリが死んでしまって、すごく動どう揺ようしているあの人がかわいそうだ。なんとかしてあげたいと思う。でも、何か言葉をかけても、たとえ抱だきしめたとしても、あの人を慰なぐさめてあげられるわけではないだろう。あの人はそんなことなど求めていないだろう。

「きみはいいんだよ、アルファ。人間の争いなんかにつきあう必要はない」

　おまえに命令されるいわれはない。

「そう」

　好きにするさ。

「きみは生まれながらの王様だからね」

　おれはおれに従うのみだ。

「うん。あたしも同じだよ。きみはあたしに似ているのかな」

　ロム・フォウはアルファを強めに撫でながら目を閉じた。寒くないのか、とアルファに訊きかれたので、抱きついて眠ねむることにした。しょうがないやつだ、と言われた気がした。

2

「では、参れ」

「はい」

　水平に構えた極限クライマツクス九手ナイン棍ボールの先にはトワニングがいる。

　隙すきだらけに見えて、まるで隙が見いだせない立ち姿だ。

　それに、大きい。なんて大きくて頑がん丈じようそうな身体からだだろう。自分があまりにも小さいからだろうか。しかし、鵺流古式戦闘術の極ごく意いは、剛ごうには柔じゆうで抑おさえ、柔は旋せんにて崩くずし、旋は突とつして止め、突されれば流りゆうすることにある。つまり、どのような相手であっても、方法さえ誤らなければ対処しうるというのが鵺流の教えだ。体格差を理由にしてはならない。

　敵はむしろ、みずからの内にある恐おそれや迷いだ。

　自分自身に打ち克かてなければ、敵を打ち倒たおすことなどおぼつかない。

「どうした。かかって参れ」

　うなずくかわりに駆けだした。

　周りの音が聞こえなくなった。

　空の、月の、星の、道の、余計な色しき彩さいが失うせた。

　自分以外のすべてが停止しているかのように見えた。

「──破っ……！」

　棍こんで突いた。

　トワニングに向かって、ではない。とっさに棍を立てて地面を突いた。棍を軸じくにして身体を回転させ、トワニングの足首あたりを狙ねらって蹴けりを放ったのだが、よけられた。軽かろやかに跳ちよう躍やくしたトワニングは、着地するなり反はん撃げきしてくる。その前に棍から手を放し、遠心力を利用して前へ飛んだ。棍を捨てたのだ。思いきった判断だったが、不安はなかった。地面を蹴って方向転てん換かんし、こちらに背中を向けているトワニングに襲おそいかかった。いや、トワニングはすでに振ふり返っていた。まるで体重がないかのような身のこなしだ。

「破は汰た汰た汰た！　破汰！　破汰汰汰汰……！」

　拳こぶしの連撃も、回し蹴りと後ろ回り蹴りも、さらなる突きの連打も、たやすくかわされ、受け流され、あるいは弾はじかれた。それでも、トワニングがわずかに下がった隙に、地面に転がっていた棍を蹴り上げることができた。

「疾シツ！　疾ッ疾ッ疾ッ……！」

　ふたたび手にした棍で突く。突いて、突いて、とにかく突きまくる。気と機が熟するときを待つのだ。心身の焦しよう点てんがだんだんとあってきているのがわかる。トワニングの呼吸と自分の呼吸のタイミングがほとんど一いつ致ちしている。

　今だ。

　爆ばく発はつさせる。

「──羅らあああぁぁぁっ……！」

　渾こん身しんの力をこめて棍を回転させながら突きだした。

　鵺流古式戦闘術奥おう義ぎ〝衝しよう天てん気き〟。

　これに対して、トワニングはなんと、目を閉じた。

　ゆるやかにさえ見える動作だった。

　トワニングは身体半分横にずらすだけで棍をよけた。

　勢いあまってつんのめりかけたユリカの身体を、トワニングの腕うでが受け止めた。

「今のは拙せつ僧そうも目を閉とざし雑念を払はらわねば回かい避ひしきれなかったやもしれぬ」

「……ありがとう」

「うむ。成長したな、ユリカ」

「しょうだといいけど」

「背も、少々伸のびたのではないか」

　ユリカはトワニングの腕から離はなれて、軽く下した唇くちびるを噛かんだ。何か答えなければいけないと思った。でも、言葉が出てこない。

「すまぬ」

　トワニングがうなだれるように頭を下げた。両の拳がきつく握にぎりかためられている。

「拙僧は━愚おろかなことを」

「……気に、しないで」

　笑ってみせたつもりだけれど、うまく笑えただろうか。自信がない。

「わからないわ。まだ。身体が……ちゃんと、馴な染じんでないだけかもしれないし。わたしが無理をししゅぎたしぇいかもしれない、とも思うの」

　だから、あなたのせいじゃないわ。

　そこまで言い切ろうとしないわたしは、ずるいですか。

　笑え顔がおの裏で舌を出すような真似まねをしなくてもよかった

昔のことを懐なつかしく思う。

　自分の中にある憎にくしみや怒いかりと向きあう必要もなかった幼いわたしをかわいらしく思う。

　だけれど、どちらがいいかなんて言えない。わたしはたくさん失ったかわりに、多くのことを学んで、いろいろな人と出会い、大切なものができて、今はそのためにとても悲しんでいる。あのころに戻もどりたい、とは必ずしも思わない。今この手の中にあるものを残らず捨ててしまうことを考えると、とてもつらいから。

　あなたと出会わなければ、こんな苦しみを味わわずにすんだ。

　でも、あなたや他ほかの仲間たちに出会うことができてよかったとも思う。

「稽けい古こをちゅけてくれて、ありがとう。なんだか、しゅっきりしたような気がしゅるわ」

「……そうか。それはよかった。では、もう寝ねるがいい。明日があるゆえ」

「ええ。しょうね」

　だから、あなたのせいじゃないわ、と、せめて心の中でひっそりと呟つぶやく。

　いつか口に出して言える日がくることを信じて。

3

　何もせず、じっとしていることはさして苦痛ではない。慣れている。そのはずなのに、今は流れ去ってゆくはずの時間がむしろ積み重なって、どんどん肩かたにのしかかってくるように感じられる。

　重くて、押おし潰つぶされてしまいそうだ。

「いたのか」

　ドアが開いて誰だれかが部屋に入ってきた。

　恩人であり、主あるじでもある男だった。

　男は彼が腰こしかけている寝しん台だいのところまで歩いてきて、その隣となりの寝台に目を落とした。

　彼はじっと男を見上げていた。

「おかしなもんだな」

　やがて男は少しだけ目を細めて吐と息いきのような声をもらした。

「俺は数えきれんくらい殺してきた。目の前で誰かが死ぬことは特別じゃなかった。もしかしたら友と呼べるのかもしれないやつも死んでいった。俺は慣れちまってたのか。よくわからん。デニスが死んだときも、こんな気持ちにはならなかった。あいつはあいつなりに筋を通したからか。あのカス野や郎ろうの薄うす汚ぎたない罠わなに嵌はめられて殺やられたってのは気にくわんが。いや──」

　彼は男から目を離して寝台に横たえられているカタリを見た。

　男が身を屈かがめて手をのばし、カタリの頭を軽く撫なでた。

「こいつだって、こいつらしく生きて死んだ。ジョーカーの言うとおりだ。べつに長く生きればいいってわけでもなかろうしな。まだ早いだのもっと先があっただのと考えるのは、死んだ本人じゃなく残されたやつらだ。こっちの勝手で、俺たちの都合だ。俺が俺としてどう思うかだ。カタリ、お前は──お前たちは、どうやら俺にとって違うらしい。うまく言えんが、少なくともお前たちが死ぬことは、俺にとって特別みたいだ」

　男は姿勢を戻して両の目め尻じりを右手の人差し指と親指で軽くぬぐった。

「えらく時間がかかったが、ようやくわかった。こういうとき、どうすればいいか。いや、違ちがうな。何か考えて、どうこうする必要はない。自然とそうなる」

「はイ」

「高い授業料だ」

「返しテ・もらいマス。耳ヲ・そろえテ」

　男はしばらくの間、上を向いていた。

「──そうだな」

　それから彼の肩を叩たたいて、部屋から出てゆく前に、一度、立ち止まった。

　男はかすかに笑ったようだった。

「利子をつけて返してもらうさ。相手に返す気がないなら、ふんだくるまでだ」

4

　さっさと寝ないといけない。しっかり身体からだを休めて、明日に備えないと。それはわかっているのだが、寝台の上で毛布にくるまって目をつぶっていても、いろいろなことが次から次へと思い浮かんで、ついついごちゃごちゃ考えてしまい、とても眠ねむれそうになかった。

　明日は早起きしないといけないわけじゃない。なかなか寝つけないからといって、べつに焦あせらなくてもいい。そう自分に言い聞かせて緊きん張ちようをときほぐそうとしてみたりもしたのだが、あまり効果はなく、いいかげん疲つかれてきて、それなのに睡すい魔まは一向に訪おとずれなくて、なんだかもう黙だまっていられなくなった。何か目的があったわけではないけれど、とにかくじっとしているのに耐たえられなくて、毛布をかぶって部屋を出た。客室のドアが並んでいる廊ろう下かをうろついていてもしょうがないから、一階に下りて、食堂の窓まど際ぎわの席に腰を下ろしたのが、どれくらい前だろう。三十分くらいたっただろうか。もっとか。

　食堂の窓から見み渡わたせる庭に、アルファとロム・フォウが寝ている。いや、アルファは起きているようだ。さっき、こっちを見て「邪じや魔まするなよ」みたいな恐おそろしい視線を送ってき

た。でも、寒くないのだろうか。普ふ通つう、寒いと思うけれど。マリアローズだって、寝ね間ま着きの上に毛布をひっかぶっているからいいようなものの、そうでなければ震ふるえているかもしれない。まあ、ロム・フォウは野外生活に慣れているみたいだから、少し感覚が違うのだろうが。

　月明かりに照らされたアルファの真っ白い被毛は、すごくきれいだ。まるで月の粒りゅう子しを身にまとっているかのように見える。そんなアルファにロム・フォウがぴったりと寄り添そって眠っている光景は、ちょっと現実離ばなれしていて、いつまで眺ながめていても飽あきない。

　ふと、眠れるかもしれない、と思った。

　眠れそうだ。

　もう目が閉じかけている。

　椅い子すの上で膝ひざを抱かかえ、毛布にくるまったまま眠りに落ちるのも、悪くない。

　意識が遠のいてゆきかけていて、何が悪くないのか、よくわからないけれど。

　なんだかお日様の下にいるみたいにあたたかいし。

　身体が軽い。

　横に傾かたむいてゆくのがわかった。

「マリア」

「──はっ！」

　やばかった。もう少しで椅子から転げ落ちるところだった。よだれが出ているような気がして、慌あわてて口の周りを袖そででふいたが、どうやら出ていなかったようだ。まだ息が荒あらい。動どう悸きがしている。びっくりした。

「さ、サフィニア」

「……ごめんなさい……寝てた……？」

「あ、うん、寝そうだったかも──てゆうか、こんなとこで寝るのがアレだし、ぜんぜんいいんだけど、サフィニアはもう大だい丈じょう夫ぶなの？」

「……起きるだけなら、なんとか……」

「そっか。よかった」

　とはいえ、あからさまに衰すい弱じやくしていて、寝間着の上にガウンを羽織った身体は、ふれたら消えてしまいそうなほど頼たよりなく見える。本当は起きているのもつらいだろう。マリアローズは隣となりの椅子を引きだしてサフィニアを座らせた。

「寝られないの？」

「……寝すぎ、かも。目が、冴さえて……」

「あんまり寝ると、かえって疲れたりするもんね」

「マリアは……？」

「僕は──どう、かな。なんか、緊張っていうか、興奮っていうか、もちろん、不安なのもあるけど、ぜんぶかな。考えても仕方ないのにね。考えちゃって」

「……わたしも……同じ」

「うん。しょうがないよね」

「わたしは……やっぱり、行けないから。足手まといに、なるだけだから……余計、頭の中だけで、いろいろ……」

「──そっか」

　わかるよ、と言いそうになった。でも、サフィニアの気持ちを考えると、軽々しくそんなことは言えない。だって、卑ひ下げするわけではなく、冷静に考えて、マリアローズなんていてもいなくてもたいして変わらない。サフィニアは違ちがう。サフィニアの魔術は困難な局面を一気に打開してしまえる可能性を持っている。言い方はちょっと悪いけれど、マリアローズとは比べものにならないくらい、サフィニアは役に立つ人材なのだ。サフィニアが明日の作戦に参加できないことは、最初から織りこみ済みとはいえ、やはりもの

すごく痛い。サフィニアもそれがわかっているだけに、つらいだろう。

　サフィニアのぶんまで、僕が頑がん張ばるから。

　そう言ってあげられたら、どれだけいいか。

　でも、実質をともなわない言葉では、気休めにもならない。

　だから、それ以上何も言えなくて、ずっと黙っていた。

「……手を」

　サフィニアが手をのばしてくるまで、微び動どうだにできなかった。

「手を、かして」

「……手？　僕の？」

「そう……マリアの」

「うん」

　マリアローズは右手をサフィニアのほうへと差しだした。

　その手を、サフィニアのさらさらした両手がそっとつつんだ。

「……おまじない」

　サフィニアは目をつぶった。べつに呪じゅ文もんを唱えるでもない。ただお互たがいの手の温度が同じになるまで、そのままじっとしていた。やがて目を開けたサフィニアは、静かに微笑ほほえんで、でも、手を離はなそうとはしなかった。マリアローズも離して欲しくなかった。

「魔ま術じゅつ？」

「……ううん。ただの、おまじない。わたしのじゃ、逆効果かも……しれないけど」

「そんなことないよ」

「だと……いいけど」

「大丈夫」

　マリアローズはサフィニアの両手に左手をそえて、力をこめた。

「力、もらったから。やれるだけのことは、しっかりやれそうな気がする」

「……うん」

「ありがと」

　サフィニアは弱々しく首を横に振ふってみせた。今にも泣きだしそうな表情だったけれど、結局、泣かなかった。そうだ。涙なみだなんかもういらない。一度は決まりかけた明日の姿を否定するためには、泣いてなんかいられないんだ。進まないと。サフィニアのおまじないを胸に抱だいて、僕は、僕たちは進む。明日、みんなで一いつ緒しよに笑うために。


ぎゅっ

　飛び海豚いるかの間を訪おとずれたのは、ほんの気まぐれだ。寝しん台だいの上で寝ね息いきを立てているのかどうかさえ定さだかではない女の顔を一目見て、すぐに立ち去るつもりだった。だが、どういうわけか、サフィニアもユリカもいなかったので、長居とまではゆかないが、無む駄だに時を費ついやしてしまった。女を眺ながめていても、それで何がどうなるわけでもない。踵きびすを返そうとした。ため息が出た。

「……ます……たー……？」

　蚊かの鳴くような声だった。聞こえなかったことにして、このまま去ってもいい。女が薄うす目めを開けなければ、実際、そうしていただろう。

「……ます、たー……」

「ああ」

　やむをえず女の頬ほおにふれてやった。やけにつめたいが、凍いてつく森のローク・ララウィー城で女を見つけたときほどではない。

「……ごめ……な……さぃ……」

「愚おろか者め」

　女の髪かみを梳すいて、額や顎あごを指でなぞった。

　女はゆっくりと目を閉じた。

「謝る必要がどこにある。己おれがいつ貴様を責めた」

「……はぃ……」

「謝るな、クローディア」

　女の唇くちびるに自分のそれを重ねた。

「眠ねむれ」

　女はうなずいた。

　口づけは一度でいい。

二度ではあまりに多すぎる。

Omenage 897 11th revolution 11th day

サンランド無統治王国ジェードリ・マーマン地区

〝ゲヘナ聖堂〟

chapter.14

ヘンリーと猫

気持ちのいい朝だった。こんなに熟じゆく睡すいしたのはどれくらいぶりだろう。昨日、大将が奇き妙みようなことをぬかしやがったもんだから、寝酒に街で調達しておいた蒸留酒を少し飲やったせいか。

顔を洗って、丁てい寧ねいに髭ひげを剃そり、歯を磨みがいて、乾かんパンと干し魚をコーヒーで胃に流しこんだあとに一休みしてから、青空の下で少し身体からだを動かした。トレイン公国の聖堂騎き士しだったころ、よく邪じや道どうだの卑ひ怯きようだのと陰かげ口ぐちをたたかれた型破りの剣けん術じゆつだが、ヘンリーとしてはでたらめのつもりはないし、理にかなっていると思っている。右と見せかけて左。左と見せかけて右。その程度のことは基本中の基本で、右だと叫さけんで股こ間かんを蹴けりつけ、左を見て相手の注意をそちらにそらした隙すきにバッサリやるのは、応用編どころかずる賢がしこいってか？

理解できねえよ。

だから、あいつらは弱いんだ。ちょっと策を弄ろうすればすぐに油断して、あっさり寝首を掻かかれる。振り下ろされる剣の前で命いのち乞ごいをしたって無駄だ。もう遅おそい。もっと前に気づけ。

死ってのは、振り向けばそこにいる一番の、そして最悪の隣りん人じんだ。やつらは虎こ視し眈たん々たんと狙ねらってやがる。気を抜ぬけば襲おそいかかってくる。俺たちは生まれた瞬しゆん間かんから死神とのダンスを強要されているようなものだ。それは死ぬまでつづく。死にたくなければ、うまく踊おどりつづけることだ。間ま違ちがえて足でも踏ふんづけてみろ。そこで終わりだ。失敗せず、できるだけ華か麗れいに、できれば楽しく、陽気に踊れ。踊りながら歌うのもいい。ただし、上手に歌え。お前さんの下手くそな歌が死神の癇かんにさわったら、悲劇的な、あるいは喜劇的な結末ってやつが待っている。だからといって、余計なことは一いつ切さいせず、びくびくしながら、慎しん重ちように、おもしろみのない単調なステップを延々踏みつづけるだけの人生がお前さんの望みか？

俺はいやだね。

糞くそ食くらえだ。

死し臭しゅうに満ちた山で同どう僚りようの腐くさった死体を眺めながら、腐りかけた飯を食っているときも、俺は死にたいとは一度も思わなかった。そりゃあ、死ぬかもな、と思ったことはある。だが、もうこのダンスをやめちまいたいと捨て鉢ばちになったことは一度たりともない。たとえどれだけやばい状じよう況きように置かれたとしても、もはやこれまで、なんて考えることは、俺にかぎって絶対にないと断言できる。まあ、しょうがねえか、そんなふうに思っても、身体が勝手に動きやがる。冗じよう談だんじゃねえ。死んでたまるかよ。わかってんのか、ヘンリー・ブラックモア。あの臭くせえ死体を思い出せ。餓が鬼きのころプチプチ潰つぶした蟻ありだの蠅はえだのの無価値さを思え。死んだらあんなふうになっちまうんだぞ。考えろ。考えなおせ。死にたかねえだろ？

「単純なことだよな」

ヘンリーは左奉殿と参さん房ぼうの間の草っ原に腰こしを下ろし、布で汗あせをぬぐった。ここから見ても、見張りについている兵や、柱だけで天てん井じようを支えている廊ろう下かを行き交かう兵の姿はあるが、誰だれも声をかけてこない。やつらはもう、余計なことは一切しない。神の名のもとに命じられたことを命じられるがままに行い、戦場では神の敵を殺しつくすまで我が身をかえりみずに戦う狂戦士となる。ただ、おもしろ半分にいろいろ試ためしてみたところ、話しかければそれなりに受け答えするし、寝て起きて食べる、排はい泄せつするなどの行動に関しては普ふ通つうの人間と一緒だ。性格もそれぞればらばらで、自分が誰かも一応わかっているらしい。それにもかかわらず、どいつもこいつも似たように見えるのは、全員感情らしきものをほとんど表に出さないからか。

いずれにせよ、やつらは名実ともにアロンズ・ニードルスピアの単なる駒こまになったのだ。ロイ・チャーチルが悲鳴をあげた瞬間は誰も彼も震ふるえあがったが、少しして、平然と立ちあがったやつが神への忠誠を誓ちかう言葉を口にしたあとは、もう雪崩なだれみたいな勢いだった。いやがる者は糾きゆう弾だんされ、無理やり順番を先回しにされて、やはり神の栄光とそのために身命を捧ささげる旨むねを力強く宣言した。ヘンリーとリリアンは列の整理に忙ぼう殺さつされた。あれにはまいったな。つーかな。すげえよ。アロンズ。あんたはすげえ。こんな奥の手があったとはな。〝罪そのもの〟がやられちまったときは、さすがにちょっとやべえと思ったんだがな。まあ、血の水曜日はともかく、火の日曜日の計画を聞い

たときは、正直そりゃ無理じゃねえのと少々腰が引けた。それをまんまとやりとげて、お前さんは〝真のザ・リ預言アル・者ワン〟になりおおせちまったわけだしな。

　想像を絶するやつだよ。

　愉ゆ快かいすぎる。

「なあ、お前さんもそう思うだろ──って……」

　ぎょっとした。

　いつの間にか、すぐ隣となりにそいつがちょこんと座っていたからだ。

　思わず剣の柄つかに手がのびた。だって、おかしいだろ。あやしすぎる。俺はそう物覚えのいいほうじゃねえけどな。ほんの何日か前のことだ。はっきり覚えてる。気のせいなんかじゃねえ。お前さんはたしかにあのとき見かけたやつだ。間違いない。

　赤い首輪をつけている灰色の猫ねこだ。

「どこから入ってきやがった」

　いや、少し前まで神しん殿でんだったこの大おお仰ぎような建物は、お偉えらいさん専用の奥おく殿どのや祭さい壇だんがあった式殿以外は隙すき間まだらけだ。それに、相手は人間じゃない。猫だ。ただの畜ちく生しようだ。誰も見み咎とがめまい。理由なんてわかるはずもないが、とにかくぶらりと入りこんできた。ありえない話じゃない。そう思うこともできる。偶ぐう然ぜんだと。本当に？　それで納なつ得とくできるか？

「──できるはずがねえだろ？」

　ヘンリーは笑いながら片かた膝ひざ立ちになって剣を振ふるった。名めい匠しようダグラス・トゥースの「庸よう明めい」に獣けものの、しかも小動物の血を吸わせるのはいささかしのびないが、こいつはただの猫じゃない。ヘンリーの勘かんがそう告げていた。奇くしくもあの日のロイ・チャーチルは正しかったのだ。

「チィッ……！」

　それを証明するかのように、猫は目を疑うような素す早ばやさでヘンリーの剣けんから逃のがれた。怯おびえている様子はない。驚おどろいているふうでもない。ヘンリーの間合いの外で悠ゆう然ぜんと尻尾しっぽを振っている。嘗なめやがって。だが、あの身のこなしがまぐれじゃないとしたら、どうやったって剣はやつに届かない。鋭するどく踏みこんで、やつ以上の速さで剣を振る。できるか？　さっきの光景を思い返せ。検討しろ。どうだ。できそうか……？

　無理だ。

　なんてこった。

　俺はあの猫を殺せそうもない。

「お前さん、何ものだ……？」

　にゃー。

　まるで、ただの猫ですよ、とでも答えるように鳴いて、猫は走り去っていった。そのタイミングがまたよかった。飛びかかろうとする寸前で、追い打ちをかけようとしたときにはもう遅おそかった。猫め。猫かよ。あれが。そんなわけはねえよな。違うだろ。あの猫はすでに参房の床ゆか下したに駆かけこんで姿が見えない。でもな。考えてみろ。人間ってやつは小利口で道具を使えるってだけで、他ほかの動物と比べてさほど力が強いわけでもなければ、素早くもなく、持久力が飛び抜ぬけているわけでもない。そりゃあ、猫と取っ組みあって殺されるとは思わねえけどな。逃にげまわる猫をとっつかまえるのは結構骨だ。猫ごときと考えるのは、俺の思い上がりか。

　そうかもしれない。

　人なんざ、たいしたもんじゃねえ。

　害悪ばかり垂れ流す、害虫以下の愚ぐ物ぶつだ。

　べつに嫌きらいじゃねえけどな。

「しかし、あれだな」

　ヘンリーはちぢれている髪かみの毛を引っかきまわしながら、一

つ息をついた。

「黒猫が目の前を横切ると不ふ吉きつだとかって昔からよくいうが、灰色の猫はどうなんだろうな」

Omenage 897 11th revolution 11th day

サンランド無統治王国ジェードリ・マーマン地区
〝ゲヘナ聖堂〟

chapter.15

罪破る者よ、大いなる痛みよ

1

　旧市街のベアフット地区北西部にカラナクと呼ばれる一帯がある。もともとベアフット地区自体、貧しい人たちが住んでいる場所らしいが、カラナクはとくにひどい。風が吹ふけば飛んでしまいそうなバラックが、崩くずされた城じよう壁へきの向こうまで折り重なるようにびっしりと建ちならんでいる光景は、変な話だけれど、ちょっと壮そう観かんだ。エルデン第六区の屑くず街がいも似たような貧ひん民みん窟くつだが、あそこはもっと雑多で統一感のない眺ながめなので、また違ちがうおもむきがある。

　とはいえ、空すきっ腹を抱かかえたこどもがうろついていたり、けばけばしい恰かつ好こうをした女の人がだらだら歩いていたり、死にそうな顔の男が道みち端ばたにうずくまっていたりするのは、お馴な染じみの情景だ。マリアローズもかつて彼らと似たりよったりの境きよう遇ぐうにあったし、今もモリーのところへ行く途と中ちゆうにはそうした街を通る。その意味でいえば、見慣れた街並みでしかない。

　マリアローズたちは、そんなカラナクを横切って海岸に出た。トマトクン、髭ひげ、ピンパーネル、ユリカ、ロム・フォウとアルファ、それにマリアローズとムソー老人の七人と一頭からなる一行はさすがにちょっと人目を引いて、さっきまではこどもたちを引き連れての行進状態だったが、このあたりはのどかな砂すな浜はまではなく、なんだか寂さびしげな岩場で、そうとう足場が悪い。おかげで、追いかけてくるこどもの姿は見えなくなった──のはいいとしても、これ以上、ムソー老人を歩かせるのは酷こくだろう。よし、こうなったら誰だれかがおんぶしてあげよう、という話になったのも、まあ、やむをえまい。

　でも、弟で子しである髭は、保温袋ぶくろの中に密みつ封ぷうされたカタリを担かついでいるから無理だ。トマトクンやピンパーネルは、いざというときのため、手を空けておくべきだろう。それが危機管理というものだ。で、残りのメンバーの中だと、ユリカは体格的に厳しい。アルファの背中に乗せてもらうという手もあるけれど、振り落とされたら命が危ない。そうなると、もう二人しか残らないわけで、マリアローズとしては、すぐさま「じゃあ、あたし

が」と手をあげてくれたロム・フォウに「あ、そう、だったらお願い」とはやっぱり言えないじゃないか。

「や、僕に任せて。大だい丈じよう夫ぶだよ。疲つかれたら、かわってもらうしさ」

「二人とも別べつ嬪ぴんはんじゃから、わしゃどっちでもかまわんけどのう」

「うん。とりあえずさ、その口閉じててくれる？　次に別嬪とかわけわかんないこと言ったら、息の根止めるわけにはいかないから、上うわ唇くちびると下唇縫ぬいあわせるからね？　わかった？」

「ひょほひょほ。ぬしゃ見かけによらずおっかないのう」

　まあ、百二十四年生きてきた肉体はいろいろなものが枯かれたり失われたりしているのか、やたらと軽かったので、背負って歩くのはそれほどつらくなかった。耳みみ許もとで口をくちゃくちゃやられるのも、耳みみ障ざわりではあったけれど、歯がないから仕方ないのだろうと思って我が慢まんした。ただ、よほどマリアローズの背中がお気に召めしたのか、それとも振しん動どうが心地ここちよかったのか、そのうちスースー寝ね息いきを立てて居い眠ねむりを始めたのは、おいおーいというかんじだった。いくらなんでも、身体からだから力を抜かれると、さすがに重くてかなわない。勘かん弁べんしてよ。

「ここかな」

　実際上の理由からも、ムソー老人に眠っていられては困るわけだし。

「……起きてよ、おじいちゃん。きみの記き憶おくに頼たよるしかないんだからさ」

「ほひょ。ひゃひゃ。こらすまなんだのう。おお、ここじゃここじゃ─たぶんのう」

「間違ってたら、悪いけど百二十五年目はないと思ってね？」

「心しよう」

　その言い方が、なんとなくそれまでより真しん剣けん味みがあっ

て、しっかりしているように聞こえたので、思わず信じてしまいそうになった。

　いや、でも、まだだ。まだ隠かくし通路に繫つながっているという洞どう窟くつの入口にたどりついただけで、先は長い。きっと長いなんてものじゃない。

「──てゆうかさ、だいたい、おじいちゃんの記憶に頼るしかないってのがね……正直、一番の不安材料だよ」

「やむをえまい。洞窟や人工の地下道がジェードリの下に張り巡めぐらされておるとの話はわりあい有名だし、むろん拙せつ僧そうも存じておるが、その実態はほとんど知られておらぬ。なおかつ、師父がおっしゃるには、隠し通路については僧主から僧主への口く伝でんとのことだ」

「まあ、それはわかってるんだけどさ。でも、念のため、もう一回確かめときたいんだけど、ほんっとうにちゃんと覚えてるんだよね？　隠し通路までの道順」

「……たぶんのう」

「なんか自信なさげじゃなかった、今？」

「き、気のせいじゃろう。ひょほごほごほごへげふ」

「しっ、師父！　お咳せきが！」

「マリア、わたしに診みしゃしぇて！」

「や、ユリカ、騙だまされないで。このおじいちゃん、たぶん見かけより丈じよう夫ぶだから。すっごい噓うそくさい咳だったし。ほら、もう平気そうだし」

「ひょへへ」

「──ったく。これだけ元気なんだから、記憶力のほうも大丈夫だって思いたいけど……」

　安心はできない。できるはずがない。そもそも、ほとんど出たとこ勝負みたいなものだし、すべてが終わるまでほっとすることなんてないだろう。それでも、決して破れかぶれにならず、自分にでき

ることを一つ一つ、慎しん重ちようにこなしてゆかないといけない。確率を上げるためには何でもして、可能性があるかぎりは絶対にあきらめない。

　またきみのたいして笑えもしない冗じよう談だんを聞くために、僕らは行くんだ。

　あのハニワはサフィニアにあずけてきた。

　ちょっとだけかわいいことは否定しないけれど、もうハニワは一個家にある。

　それに、きみにそっくりのハニワなんて、僕はいらない。

　ちゃんと直接突つっ返してやる。

　最終的に、ジョーカーたちが神しん殿でんを攻こう撃げきしはじめる刻限は十八時に決まった。

　現在時刻は十二時。マリアローズたちは、最大六時間かけて洞窟から隠し通路に入り、奥おく殿どのに侵しん入にゅうする。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツが神殿の防衛に忙ぼう殺さつされている隙すきに、奥殿の地下室で旧式殿の鍵かぎを手に入れ、一気に大いなる祈いのりの場まで押おし入る計画だ。そうして、施ブ式レ者ンをつとめてもらうムソー老人と補ほ佐さ役の髭ひげは、カタリを運びこんだ旧式殿に閉じ籠こもってもらう。旧式殿はかなり堅けん牢ろうな造りらしいが、さすがに全員が中に入ってしまっては、外から何をされるかわからない。他の人員は、ムソー老人と髭が蘇そ生せい式を行っている間、神殿を内側から攪かく乱らんして、外から攻せめているジョーカーたちを支し援えんすることになるだろう。死後の経過時間から最高に近い難度を予想して、施式には四時間程度を要するだろうとのことだ。つまり、マリアローズたちは、二十時までには旧式殿にムソー老人らをたどりつかせなければならない。ジョーカー部隊の攻撃開始時刻はもう早まらないし、連れん絡らくをとりあって時間を調整することもできないので、十八時以降の奥殿突とつ入にゅうは動かせない。よって、十八時から二十時までの二時間が一番の山場となる。あくまで、一番の、だ。山はその前にいくつもある。

「行くか」

　トマトクンが全員を見まわしてから、海岸の絶ぜつ壁ぺきに口をあけている洞窟に足を踏ふみ入れた。

　先頭はトマトクンで、ピンパーネル、髭、ムソー老人を背負っているマリアローズ、ユリカ、ロム・フォウ、アルファとつづく。狭せまい洞窟だ。横に二人は並べないから、一列で進む。

　各人が小型の携けい帯たいランプを手に持ったりどこかに引っかけたりしているので、足許は見えるが、行く手の闇やみは光を吸いこんで苛いらつくほどに暗い。

　本当は暗視鏡を用意する案も出たのだが、まさかこんなことになるなんて思ってもみなかったから、マリアローズをふくめて誰だれも持ってきていなかった。買ってもよかったけれど、アンダーグラウンドがあるエルデンとは違ちがって需じゅ要ようがないのか、すぐには確保できそうもなかった。それに、ムソー老人もその昔、ランプの明かりを頼りに通路だの洞窟だのを通ったらしい。記憶の再現性という観点から考えても、暗くら闇やみでの戦せん闘とうを想定しているわけではないという点からも、無理をしてまで暗視鏡を使用する必要はないだろう。果たして、その判断が正しかったのかどうか。

　まだわからない。

　これからだ。

　手ざわりのないこの闇の先に不定形の未来が隠れている。

　洞窟は相変わらず狭苦しいままの一本道だ。

　皆みなの足音やアルファの呼吸音がやけに大きく聞こえる。

　誰も喋しゃべろうとしない。

　こんなときにカタリがいたら、たぶんくだらない雑談でもしはじめるだろう。

　うるさくて、マリアローズが怒おこる。ユリカもたしなめる。ピンパーネルが短く何か言う。

　だはは、みんなしてそんなかたいことゆうなや、という声が聞こえるような気がする。

「そろそろかわろうか、マリア」

「……うん」

　後ろから声をかけてきたロム・フォウに、あっさりうなずいてしまった。心が弱りかけていたのかもしれない。まあ、限界に近かったことも事実だけれど。というか、ひょいとマリアローズの背中から降りて、素す早ばやくロム・フォウの背中に跳とび乗ったあのジーサンは、おんぶしてやらないといけないほど衰おとろえているのだろうか。岩いわ浜はまで歩くのに難なん儀ぎしていたのも、じつは演技じゃないのか。

　マリアローズはピンパーネルに持ってもらっていた背負い袋ぶくろを受けとって、軽くため息をついた。釈しやく然ぜんとしないところもあるが、おじいちゃんは今回の作戦の最重要人物だ。どうもそのあたりをちゃんとわかった上で、ちやほやされている状じよう況きようを楽しんでいるようにも見えるけれど、立場としてはこっちが圧あつ倒とう的に弱いわけだから、仕方ない。何しろ、お願いして協力してもらっている、しかも、危険を冒おかしてもらっているのだ。

「こりゃフォウちゃんのほうが乗り心地ごこちがええのう。ひょほひょ。極ごく楽らく、極楽」

「うん。でもさ、セクハラとかしたら叩たたき落としちゃっていいからね、ロム・フォウ」

「そうするよ」

　うぉん！

「な、なんじゃ。これでもわしゃ僧そうじゃぞ」

「元でしょ」

「そうじゃったなあ。おお。せやったら何してもええとゆうことか」

「自分の足で歩きたいんならいいけどね」

「そりゃ勘かん弁べんじゃ。昨日今日でいっぱい歩いたもんじゃから足あし腰こしが痛いとうてのう」

「だったら黙だまっててよ」

「ぐー」

「寝ねるな！」

「なんじゃ。ぬしゃやかましいのう」

「きみがおとなしくしてれば、僕だって何も言わないよ！」

「まあそう怒るでない。まだなぁんも始まっとらん。りらーっくす。りらーっくすじゃ」

　もしかして、そのために。

　なんて思ったマリアローズが馬ば鹿かだった。

「疲つかれるじゃろ。わしが」

「……こっちもすっごく疲れるよ」

「ひょへひょへ」

　さすが、髭の恩師だというだけのことはある。まともじゃない。まあ、あのジョーカーでさえやりづらそうにしていたくらいだから、マリアローズが太刀たち打うちできる相手じゃないということか。

　それでも、正直、おじいちゃんと愚ぐにもつかないやりとりをつづけていたほうが、気が楽だけれど。

　おんぶする役をロム・フォウにかわってもらって、少しだけ後こう悔かいしている自分がいる。

　重い、クソ、重いんだよ、つらい、苦しい──そんな愚ぐ痴ちで頭の中がいっ杯ぱいになっていれば、余計なことを考えなくてすむ。

「歌でもうたうか」

　唐とう突とつだった。

　先頭のトマトクンが言いだしたのだ。

ああ、そんな台詞せりふを、どこかで聞いたことがある。

どこでだろう。いつだっけ。

誰が言ったんだったか。

「……歌──って。トマトクン、何か知ってる歌でもあるの」

「うむ。そうだな」

トマトクンはしばらくの間、考えこんでいた。

歌いだしたのも、やはり突然だった。

錆さびついていた　崩くずれそうだった　ぼろぼろの心ハートは

乾かわききっていた　干ひからびそうだった　ひりひり痛いくらい

何かを感じて　誰だれかと話して　それが苦痛なほど

微笑ほほえみを返して　誰かを愛して　ぜんぶできやしなかった

そのうち大だい丈じよう夫ぶになるさ、なるさ、なるさ

そのうちきみを好きだ、好きだ、好きだって

うるさいくらい　わめきちらすから

意外にも、下手ではなかった。身体からだが大きいから声に深みがあるし、場所が場所だけに音おん響きようもいいせいで、伴ばん奏そうなしでも結構聴きけた。

歌でもうたうか。

誰が言ったんだっけ。

「……変な、歌」

「そうか」

　トマトクンは顔だけ振ふり向かせて、片方の眉まゆを大おお仰ぎようにつり上げてみせた。

「二番もあるはずなんだがな。覚えてない」

「そんな歌、うたえないよ。なんか……難しそうだし」

「そうでもないんだがな」

　トマトクンは前に向きなおって後ろ頭をボリボリ掻かいた。そのときだった。一いつ瞬しゆん、誰だかわからなかった。まさか、と思った。鼻歌だ。トマトクンがうたった歌の旋せん律りつをなぞっている。

　ピンパーネルだった。

「な。簡単だぞ」

　トマトクンが少し笑いながら言った。

　歌でもうたうか。

　いつだっけ。

　ユリカが、ぐすっと鼻をすすった。

　ようやく思い出した。

『景気づけにいっちょ歌でもうたおか。みんなでこう、声をあわせてな』

　Ｄ13上層のテトルアープに行ったときだ。

　マリアローズとピンパーネル、ユリカ、そして、カタリの四人だった。

　あれはカタリの言葉だった。

「ね、トマトクン」

「む？」

「もっかいうたって」

　トマトクンは振り返らずに「ああ」と答えて、またうたいだした。

2

　正直、ものすごく後悔している。

　朝目覚めてからずっとそのことばかり考えていて、ほとんど誰とも口をきいていない。

　シックタウンのアジトは、今は亡なきエンツォ・パンカロと親交があったラフレシア第三帝てい国こくの政商クロード・メシアンから借り受けた豪ごう邸ていだ。クロードの片かた腕うでらしいフィリップ・メシアンとかいうやつが、まだ若いのになかなか気の利きく男で、ただの屋や敷しきをあっという間に荒あらくれ者たちのねぐらに変えてくれた。といっても、大量の二段ベッドだの日用品だの食料だのを手配して運びこませただけなのだが、そういう仕事をぱっぱとやってみせるのは案外簡単ではない──ような気がする。なんとなく。よくわからないが。いや、カルロがそう言ってたからさ。なんつったっけ。たしか「あれは切れ者です」とか何とか。見た目はべつにごくフツーの金きん髪ぱつ青年っつーかんじだったけどな。なんか、黙だまってっと、何拗すねてんの、みたいに見えて、幼い印象さえ受けた。んなこたどーでもいいんだけどな。それよっか、あれだ。

　後悔してんだよ。

　リビングのソファに浅く腰こしかけて、マジでずーっとあのことばかり考えている。

　周りの連中も話しかけてこない。そりゃそうだ。こちとら真しん剣けんだしな。何しろ、とてつもなく大事なことだ。これ以上、大事なことなんてあるのかな。ねーな。たぶん。

「──やっぱ、昨日、寝ねる前に何パツか抜ぬいとくべきだったよなぁ……」

　チーロがそう呟つぶやいた途と端たん、ソファの脇わきで直立不動の姿勢を保っていたカルロの身体がわずかに揺ゆれた。その隣となりに立っていたイビツにいたっては思いっきりズッこけて、向かいのソファでピッツァをモリモリ食べていたボボ・ファッチョは、慌あわてて口を押おさえたが、咀そ嚼しやくしていたものを結構噴ふきだしやがった。

「ん？　なんだよてめー汚きたねーな、フトッチョ野や郎ろう。食いもん粗そ末まつにすんじゃねーよ」

「……ず、ずびばぜん」

「バッカてめーすいませんですんだらパンカロいらねーんだよ。アホだなぁ、てめーは」

「あ、あの、ボス、もしかして今朝から考えこんどったの、そのことなんでっか？」

「たりめーだろ。何言っちゃってんだよイビツてめー。だってすげー大事だべ？　なんつーの、男としてさ。まずそれありき、みたいな」

「え、いやあ、状じよう況きようが状況ですし、他ほかにもまだ考えることあるんちゃうかなあ、とか……」

「ねーよ、バカ。考えることなんてよ。何があんだよ。ゼロだろ、ゼッ！　ロッ！」

「私は」

　カルロの眼まな差ざしは愛刀の蓮れん華げに負けず劣おとらずの鋭するどさだった。

「ド・ジョーカーの目もく論ろ見みに荷か担たんするというご決断について、割り切れていない部分でもおありになるのかと思っていました」

「ハッ。もう決めたことだろ。いったん決めたらあとはゴーだよ。オールでゴー」

「ですが、連中は手て強ごわい。実際にやりあってみて、よくわかったンじゃありませんか」

「だからって、あいつら野放しにしとくわけにもいかねーだろ。体てい裁さいっつの？　メンツかな。どっちでもいーけど、そんなのもあるしよ。気持ち的にも、あいつら全殺しにしねーと気がすまねーだろ。みんなそうだろが？」

「それはそうです」

「わかってんよ。カルロ。てめーの言いたいことはよ」

　チーロは一つ伸のびをしてから、唇くちびるをぺろりと嘗なめた。

「あんまガキ扱あつかいすんな。オレだって自分がパンカロのドドンが首ド領ンだっつー自覚くらいあるよ。足りてねーかもしんねーけどな。そこはてめーらに補ってもらわにゃしゃーねーべよ。すぐには無理だしな。でも、わかってんよ。現実だよな。現実ってやつをこの目でバッチシ見て、ガッチシ考えなきゃいけねえ。やるぞ！　やっちまうぞ！　いーんか！　みたいなノリでバリバリ突つき進むわけにゃーいかねえ。だろ？」

「はい」

「だけどな。やっぱ親おや父じや兄弟たちの仇かたきは討うつ。現実的に、だ」

「現実的に、ですか」

「オレにゃー似合わねえけどさ」

　チーロは左手の人差し指でこめかみのあたりをトントン叩たたいてみせた。

「使うっきゃねーよなあ。ここをさ。親父もそうだったろ？」

　大切なものを守るために、いったいどれだけの犠ぎ牲せいを払はらわなければならないかなんて、今まで考えたこともなかった。その犠牲を最小限にとどめるためには、いったい何をどうすりゃいいんだ。惚ほれてる女とファミリーと、もしどっちか一つを選ばないといけないとしたら、オレはいったいどうする？　いやだ！　どっちも！　それもアリだ。可能なら。でも、どうやっても絶対に無理だったら？　オレは選ばないといけない。主に腸なんかがねじ切れそうな思いをしながら、女を犠牲にして、ファミリーをとらなけ

りゃならない。

　オレはボスだからだ。

　オレはどうしようもねえバカだけど、バカなりに賢かしこく立ち回らなきゃならない。

　オレがボスだからだ。

　ずっと前だ。ルイジ・エルコラーニという男がいた。ファミリーの古株で、エンツォ・パンカロの片腕と目されてさえいた。当時、ファミリーと対立していたマンフレッド一家は、仁義もへったくれもない連中で、女子供を狙ねらって拉ら致ちする戦術をよくとっていた。そんななか、運悪くエルコラーニの女にょう房ぼうが標的にされた。マンフレッド一家の要求は、エルコラーニ自身の身み柄がらと引き換かえに女房を返すという無茶なものだった。それでもエルコラーニは応じようとしたが、エンツォ・パンカロがこれを認めなかった。当然といえば当然だ。外げ道どうのマンフレッド一家が約束を守るはずがない。エルコラーニがのこのこ出向いていっても、女房ともども殺されるだけだろう。ただ、エルコラーニに同情する者も多かった。行かせてやってはどうか、という声もあった。チーロも子供心に覚えている。そりゃ行きたいよな。わかるよ。うん。

　だが、エンツォ・パンカロは、親父は、非情な決断を下した。

　マンフレッド一家が指定してきた場所に、ファミリー総員で突とつ入にゅうしたのだ。

　結局、その場にやってきたマンフレッド一家の数十名を皆みな殺ごろしにした代だい償しようとして、エルコラーニの女房が殺され、無茶をして女房を救いだそうとしたエルコラーニ自身も死んだ。エルコラーニ夫妻の葬そう儀ぎは、カレーナ人らしくない、湿しめっぽくて陰いん鬱うつなものだった記き憶おくがある。たぶん、エンツォ・パンカロを陰かげで非難する者もいたはずだ。少し前のチーロなら、そんなはずがない、親父を責めるやつなんか一人もいなかったと思いたがっただろうが、今は違ちがう。そんな簡単なものじゃない。大事の前の小事だ、冷静に考えればあの判断は正しかった、そうした理り屈くつが通じないときだって人間にはあるのだ。

それに、親父の決断が間違いなく最善だったと言いきれるかどうか。

もしかしたら、もっといい手があったかもしれない。エルコラーニとその女房を二人とも死なさずにすむ方法が、一つくらいはあったんじゃないか。

だいたい、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツに復ふく讐しゆうするという親父の選せん択たくは、本当に正しかったのか？

正しかった、絶対に、と断言することは、きっと親父にとっても難しかっただろう。

それでも、ボスだから、決断しなけりゃならない。

自分なりに考えて、責任を持って、決めないといけない。

それならせめて、あまり出来はよくねえけど、このへなちょこい頭をフル回転させて、とりあえず自分が納なつ得とくできる、いろんなやつを納得させられる選択ってやつをしねーとな。

「ハッキシ言ってさ。オレらだけじゃ無理だよ。あいつらは殺とれねえ。まともにやりあったらこっちが全ぜん滅めつだ。だってアレだろ。おかしなクスリでもやってキマりまくってんのか、それともデコに穴あけて脳みそギュルルーンとかってパワーアップしたのか、まあよく知んねーけど、オレとカルロくらいだったからな。フツーに一対一サシでやつらをぶっ倒たおせんのは。あとはダメだ。三人でようやく一人くらいだべ。お話になんねーよ」

「だったら──」

「だから、だよ、カルロ。だから、このチャンスにやつらをぶっ潰つぶしちまうんだよ。いーか。考えてみろって。てめーはオレよっか頭いいんだからさ、わかってんだろうけど、あいつらはやべえよ。頭イカレてんだろ。仮にオレらが白旗上げて降こう伏ふくしたって通じねえ。やるか、やられるか、だよ。誰だれかがあいつら殺しつくさねーと、ジェードリが終わる。だから、この際さ、オレらはジョーカーっちを利用するわけだよ」

「利用……ですって？」

「そ」

　チーロは右手のハンマーパンチ壱いち號ごうで左の掌てのひらをガッシンと叩いた。

「オレらのテーマはズバリッ！　生き残ること、だ。つまり、サバイバルな。そんでもって、親父たちの仇を討つ。ついでに、オレらの街を救う手助けもちょっとはしてやる。まあ、オレとかカルロは前に出てビシバシやっけどな。オレらもやってっぞーってアッピールしねえと。で、あとは死なねーようにテキトーにやってりゃいい。な？　現実的、だろ？」

3

　今日はよく晴れていて、朝方は冷えこんでいたけれど、午後になると気温も上がってきたから、寒くはない。

　ただ、もうずいぶん長い間、家の前に座っているので、少しだけおしりが痛い。

　ここでローラが死んだんだ。

　たまに、そんなことも脳のう裏りをよぎる。

　あたしはここで、ハーヴェイを殺したんだ。

　ずっと憎にくんできた、うとましかった、あの力で、あたしは人を殺したんだ。

　悔くいてはいない。どんな理由があったにせよ、ローラの命を奪うばったハーヴェイのことは絶対に許せない。力がなくたって、殺そうとしたと思う。力がなければ、できなかったかもしれないけれど。でも、それだけの違いだ。たしかに、あの感かん触しよくを思い出して、吐はき気に襲おそわれることもあるし、夜、夢に見て、飛び起きることもあるけれど、後こう悔かいはしていない。

　あんなことにならなければ、どんなによかったか、とは思うけれど。

　ハーヴェイがあんなひどいことをしなければ。

　ローラが生きていたら。

　リクがここにいれば。

　それこそ、夢だ。

　あたしは夢ばかり見ている。わかっているけれど。

「……おじいちゃん、どうしたのかな」

　呟つぶやいてみた。そうだ。回転海豚に連れていったおじいちゃんは、あのまま戻もどってこない。ルカは途と中ちゅうで帰ってきたので、くわしいことはわからないけれど、何か大変な事態に巻きこまれてしまったようだ。それにしても、おじいちゃんが昔、オストロス神しん殿でんのお坊ぼうさんだったことは知っていたけれど、まさか筆頭僧そう主しゅだったなんて。どうやら、あの身体からだの大きな髭ひげを生やした男の人は、おじいちゃんの弟で子しだったらしい。そんなふうに人と人が繋つながっているなんて、ちょっと不思議だ。目には見えないけれど、人と人を結ぶものがあるなんて。

　それは時間がたっても切れずに、人と人を引きあわせる。

　あたしも誰かと繋がっている。

　リク。

　繋がってるよ。

　きっと、繋がってる。

　どうしてだろう。会えなくなってからのほうが、ずっとリクが好きだ。リクの顔が見たい。リクにさわりたい。リクが欲しい。胸が破れそうだよ。会いたい。会いたいよ、リク。リクを感じたい。裸足はだしの海岸で感じたあの視線はリクのものだった。たしかにリクの気配がした。生きている。リクは生きてる。まだ繋がってる。感じるよ、リク。でも、どこに……？

「何やってるの」

　ドアが開く音がしたのと、ほぼ同時だった。

　振ふり返ると、ジョルジュがおもしろくなさそうな表情で立っていた。

「……え。何、って」

「え、じゃないでしょ。寒くないの。そんなとこにずっといて」

「うん。そんなに寒くない……よ。たぶん」

「たぶん、って何」

「あたしはあんまり寒くないけど、他ほかの人だったらどうかは、わからないし」

「僕はルカが寒くないのかどうか訊きいただけだよ」

「それなら、寒くないから、大だい丈じよう夫ぶ」

「そう」

　ジョルジュはドアを閉めると、ルカの隣となりに腰こしを下ろした。それから何も言ってこないので、だんだんいたたまれなくなってきた。

「……あたし、戻ったほうがいいかな。家の中に。やること、あるもんね」

「そうだね」

「ごめん。勝手だね。あたし」

「自覚はあるんだ」

「ある、よ。あたし、わがままだから……みんなに悪いなって、思うよ」

「わかってるなら、いいんじゃないの」

「そう、かな」

「わかってないと、なおすこともできないだろうし」

「だね」

「リクを、待ってるんでしょ」

　すごくやさしい声こわ音ねでそんなことを言ってみせたジョルジュは、自分よりもずっと大人なのかもしれないと思った。だから、素す直なおにうなずくことができたのだろう。

「うん」

　それだけじゃなくて、考えていることを口にもできた。

「でも、ね……待ってるだけじゃダメかもって、ちょっと思ってる。待ってるってことは、なんていうか、受け身、だよね。何かを欲しがってるだけだから。それでいいのかなって、思う。そうじゃなくて、自分から何かしてあげないといけないんじゃないかな、って」

「雛ひな鳥どりは、親鳥が餌えさを運んできてくれないと、死んじゃうんだ」

　ジョルジュはこちらを見ずに前を向いたまま、自分の両りよう肩かたをぎゅっとつかんだ。

「僕たちはもう、雛鳥じゃないよね。雛鳥でいていいのは、アンナとミミだけだよ」

「……そ、だね」

「飛んでいけるんだ。僕たちはもう。いつかは飛んでいかないといけないんだ」

「なんか、寂さびしい……かも」

「そうかな」

「だって、ばらばらになっちゃうよ」

「仕方ないよ。僕たちはもともと一人一人、別々の人間なんだから」

「でも──」

「それでも」

　ジョルジュは一つ息をついてから、ルカを見た。

　ほんの少しだけ、だけれど、笑え顔がおだった。

「家族だって思うことは、できるよ」

　何か返事をしたら、何かがあふれてきそうで、黙だまって聞いていることしかできなかった。

「全員がばらばらになっても。どんなに離はなれていても。みんなローラのこどもだって思うことはできる。だから、僕はそんなに寂しくないような気がするけど。ローラだって、この家でみんなずっと一いつ緒しよに暮らせるなんて、きっと考えてなかったんじゃないかな。だけど、変わらないでしょ。ローラが、僕たちの━母さんだってことは。その事実さえあれば、離ればなれになっても、寂しくなんかないよ」

　ジョルジュに背中を押おしてもらったようなかんじがした。

　ルカは鼻をすすって、ジョルジュのキャラメル色をしたやわらかそうな髪かみの毛を軽く引っぱった。ジョルジュは少しだけいやがるそぶりを見せたけれど、抱だきよせてもあらがわなかった。あたたかかった。ルカは自分の身体が冷えていることにようやく気づいた。

4

「━気のせいじゃないと思うんだけどさ」

　マリアローズは足を止めて振ふり向き、ロム・フォウに背負われているムソー老人をにらみつけた。

「ここ、さっき通ったよね？」

「……ほうかのう」

「通ったよ。間ま違ちがいなく。絶対。三万パーセント。ほら、あれ、すぐ先の分かれ道になってるとこの上に、長い鍾しよう乳にゆ

う石せきみたいなのがあるでしょ。あの形、すっごい覚えてるから」

「言われてみれば、しょうね……」

「はイ」

「あたしは同じところを二度通る必要があるのかと思っていたよ」

「む？　俺はとくに何も考えてなかったな」

「弟で子しとして、師父がおっしゃったことに疑義を差し挟はさむわけには──」

「ダメだ、この人たち……」

　マリアローズは首を振って頭を抱かかえた。だが、嘆なげいていても隠かくし通路にはたどりつけない。これ以上、ムソー老人を頼たよりにしていいのかどうかも定さだかではない。

「とりあえず」

　そのあたりをはっきりさせておくべきだろう。

「おじいちゃんさ、次、この先の分かれ道、どっちに行くつもりだったわけ？」

「ひょへ。右……かのう」

「それってさっきと一緒だよね？　てゆうことは、必然的にまたここに戻もどってくることになると思うんだけど、僕の予想が間違ってるって断言できるだけの根こん拠きよはある？」

「あぁ、せやったら、左──」

「せやったらぁ？」

「いやあ、さっきのんはなあ、わしの間違いじゃった。ほうじゃほうじゃ。思い出した。間ま違ちごうたんじゃ。しばらくしてから気づいてのう。せやけどなあ、ほんなことゆうたら、ぬしが怒おこるじゃろ。ぬしゃ怖こわいからのう。ほいで黙っとったんじゃ」

「怒られるからとか、いい年して、そういうのやめてくれる？　百

二十四歳でしょ？　こどもじゃないんだからさ」

「わしもまだまだ修しゆ行ぎようが足らんのう」

「いつまで修行すれば気がすむんだよ！」

「生きとるかぎり修行じゃ。ひょへほほ」

「わかった。もういいよ。これから先、おじいちゃんの意見は参考にするだけにして、進む方向は僕が決めるから。いいよね、トマトクン？　みんなも。それで」

　反対する者は誰だれもいなかった。もしいたとしても、適当な代案でもなければ認めるつもりはない。焦あせっているのかもしれない、とは思う。まだ時間はたっぷりある。今からテンパっていたらもたない。だから、トマトクンや髭ひげやロム・フォウあたりは、あえて少々気をゆるめているのかもしれない。こんなにかつかつしているのは、僕だけじゃないか。

　でも、こう見えて、このメンツは意外と頼りないのだ。戦せん闘とう能力の面ではこれ以上を望むべくもないほどだし、髭などの頭脳明めい晰せきな人員だっているのに、計画を立てて、いろいろなことに気を配りながら、慎しん重ちように物事を進めるような場合は、どうも心こころ許もとない。だいたい力押しでどうにかなってしまうので、まあなんとかなるさ、みたいな考え方が根底にあるのだろうか。以前からそんなふうに感じてはいたのだが、仮にそうだとしても、少なくともマリアローズだけは流されるわけにはゆかない。だって、皆みなとは違うのだ。マリアローズは、トマトクンのような剛ごう剣けん使いでもなければ、元アッサシンでもないし、髭みたいな怪かい力りきの持ち主でもなく、武術の達人でもないから、あんな体格で大男たちを軽々と薙なぎ倒してみせるユリカの真似まねはできない。正直、ロム・フォウなんて、マリアローズにしてみれば、ほんとに僕と同じ人間なの？　というかんじだ。明らかに人間じゃないアルファだって、その気になればマリアローズの喉のど笛ぶえを簡単に掻かき切ってしまうに違いないから、種族の問題ではないのだろうが。

　マリアローズは少し首を傾かたむけて、左の道へと進もうとしているトマトクンの後頭部を見た。

　お前には今までやってきたやり方もあるんだ。

　そうトマトクンに言われたのは、いつのことだったか。

　ずいぶん昔の出来事のように思えるけれど、実際は半年もたっていない。

　あれから僕はどれだけ変わっただろう。変わることができただろう。

　でも、トマトクンが言ったとおり、捨てるべきじゃないことだってある。

　なぜなら、どうしたって変わらない、変わりようがない部分も確実にあるからだ。

　僕は僕以外の何かにはなれない。

　みんなと一いつ緒しよにいても、僕は僕だ。

　多少すばしっこいものの、人一倍非力で、精せい一いつ杯ぱい頭を使ってなんとかおぎなおうとしても、自分一人ではせいぜい人並み程度か、そのちょっと下くらい。侵入者クラツカーとしての僕はそんなものだったし、今だって同じだろう。べつに卑ひ下げしているわけじゃない。本当はもう少しマシだと思いたいけれど、冷静に、客観的に自分自身を見つめれば、どうやってもこれ以上の評価は下せない。だからこそ、だ。一人きりだったころは、それがわかりすぎるほどわかっていたからこそ、少しでもリスクを減らして、一ダラーでも多く稼かせぐために、自分に何ができるか、何をするべきか、考えに考え抜ぬく毎日だった。自分に対しては、厳しすぎるくらい厳しい見方をする習慣がしっかりと身についていた。他人に対してもそうだった。期待なんかこれっぽっちもしていなかったから、一人でいた。

　僕は甘くなった。

　いいとか、悪いとか、そういう問題じゃなくて、事実は事実として認めないといけない。

　今の僕は甘い。

　こんなときに、カタリの助けがあれば、と思ってしまう。カタリは、おそらく天性のものだろう方向感覚を持っていて、道順はめちゃくちゃでも、目的地に到とう達たつしてしまうような才能が

あったし、記き憶おく力もよかった。もちろん、無理だ。カタリの力は借りられない。どうにもならないことを、つい考えてしまう。それが甘さだ。何のかの言って、何かあれば周りのみんなが戦ってくれる、守ってもらえると、心の底では思っている。それもまた甘さだ。

　もう僕は一人じゃないんだから、仲間に頼たよったっていい、信じて任せる部分は任せていい。

　カタリにも言われた。そのとおりなのだろう。まだ少しだけ抵てい抗こうは感じるけれど、同時に心地ここちよさもある。背せ伸のびをしても届かなかったあの場所に、肩かた車ぐるまをしてもらって、よじのぼることができるかもしれない。一人ではできなかったことができるかもしれない。いや、かもしれない、ではなくて、実際にできるようになったことがたくさんある。

　ただ、身の程ほどはわきまえていないといけない。

　僕は肩車をしてもらえるようになっただけで、背が高くなったわけじゃない。

　そして、それは僕だけじゃないんだ。

　みんなも同じなんだ。

　マリアローズから見れば誰も彼も超ちよう人じんみたいだし、そんな彼らが力をあわせれば、何でもできてしまいそうだけれど、そんなことはない。それぞれ、すごいとしかいいようがない長所を備えていて、マリアローズにしてみれば雲の上の存在みたいなものだから、下から見上げてばかりだとよくわからないが、彼らにだってできないことは当然ある。たくさんある。

　彼らのどこがすごいのか、どこはすごくないのか、凡ぼん人じんの目でちゃんと見て、把は握あくする。そうすれば、もしかしたら、彼らに足りない部分を見つけることができるかもしれない。マリアローズでも力ちから添ぞえできることが、何かあるかもしれない。ケチくさい話だが、もともとケチだ。ケチで何が悪い。悪くない。ぜんぜん悪くないと、他ほかの誰でもない、マリアローズ自身がそう決めた。

　まあ、現状だと、何が足りないかなんて、考えるまでもない気が

してしょうがないけれど。

「ええと、この先は――」

　マリアローズは振ふり返ってムソー老人をちらりと見た。さっきの分かれ道で左を選んでから、五分ばかりも歩いただろうか。幅はばがぐんと広くなったのはいいが、また分かれ道だ。

「み、右……かのう」

「ずいぶん自信なさげだね」

「右じゃ。いや……左、じゃったかのう」

「どっちだよ」

「やっぱり左じゃ」

「ふうん」

「……右、のような気もするのう……」

「へえ」

　ダメだ、こりゃ。

　マリアローズは覚かく悟ごを決めて、背負い袋ぶくろの中から鉛えん筆ぴつと方眼紙、それから白いチョークを取りだした。あとは、これだ、小さな円い磁気コン羅針盤パス。エルデンのアンダーグラウンドでは役に立たないが、ここではちゃんと南北を指している。進むべき方向は、洞どう窟くつの位置と神しん殿でんの位置から考えれば、南南東といったところか。まあ、御おん年とし百二十四歳のいつ大往生を遂とげてもおかしくないご老体におんぶにだっこ――いや、おんぶしているのは確実にこっちだが、とにかく、本来、いたわって甲斐かい甲斐がいしく世話してやらなければならないお年寄りを、頼りにしすぎていたのがそもそも間ま違ちがいなのだ。蘇そ生せい式だけは何がなんでも絶対にやりとげてもらわないと困るが、それ以外は若い者たちができるかぎり力をつくすべきだろう。

「ここからは、僕が先頭に立つから。何かあったら、トマトクン、カバーお願い」

「うむ」

「あ、ピンパーネルもね」

「はイ」

「ごめんね、ロム・フォウ。おじいちゃん押おしつけちゃって」

「あたしは平気だよ。重くないから」

「わしが軽うて、ぬしらえらい助かったのう。ひょへひょへ」

「あーそーですねー。ほんっとすっごい助かっちゃってるし、ついでにその口ふさいでてくれるともっと助かるんだけど。てゆうか、黙だまってて？　おじいちゃんに教えてもらいたいことがあるときは、僕が尋じん問もんじゃなくてこっちから丁てい重ちようにお尋たずね申しあげるから」

　隊列の先頭に立ったマリアローズは、さっきの分かれ道と目の前の分かれ道を方眼紙にざっと書きこんでから、白いチョークで近くの岩に印をつけた。あれ、と思った。岩いわ肌はだが、なめらかとまではゆかないけれど、妙みように平らだ。思えば、地面にもそれほど凹おう凸とつがなく、わりあい歩きやすい。ぱっと見た印象は天然の洞ほら穴あなだが、もしかして人の手が入っているのか。ただ、少なくとも今のところ、人間がここを通った形けい跡せきは皆かい無むだ。考えすぎだろうか。

「どうしたのだ、マリアローズ」

「え、うん」

　無む駄だ無駄蘊うん蓄ちく野や郎ろうの髭ひげなら、以前はジェードリにいたわけだし、何か知っているだろうか。

「──なんか、ここって……自然にできた洞窟じゃないような気が、なんとなくして。べつに、決定的な証しよう拠ことかがあるわけじゃないんだけどさ」

「フム。もっとも多い自然の洞窟はいわゆる鍾しよう乳にゆう洞どうだが、鍾乳石こそ見られるものの、ここはどうも違うようだな。この深さでは海食洞でもなかろうし──いや、あるいは、さまざまな原因によってできた洞窟群が、何らかの現象によって繋つながった

ものとも考えられる。むしろ、そうでなければ、これだけ広大な地下迷めい宮きゆうめいた洞窟とはなりえぬであろう」

「広大な──って、どれくらい広いの？」

「しかとはわからぬ。いくつかの洞窟は海かい賊ぞくの根こん拠きょ地として用いられたりもしたが、アンダーグラウンドのように異界の扉とびらがあるわけではなかろうし、積極的な探たん索さくは行われておらぬようだ。洞窟をめぐるありがちな怪かい談だん奇き談だんのたぐいは昔から無数に流る布ふしておるがな」

「……怪談って」

「たとえば、ある探索者の一行が、洞窟の深部で見たこともない怪物に遭そう遇ぐうして食われてしまい、一人も帰らなかった──などという、まあ、これは要約だが、じつにくだらぬ話だ」

「そりゃたしかにくだらないね。誰だれも生き残らなかったのに、話だけ残るなんて」

「他にもあるぞ。その昔、洞窟に迷いこんだ一人のこどもが──」

「や、いいよ、もう。きりがないから、きみの話は」

　マリアローズは磁気コン羅針盤パスを確かく認にんした。右の道はほぼ西、左の道はだいたい南に向かってのびている。西は海の方向だから、とりあえず左を選ぶのが無難だろう。

「じゃ、左に」

　前方の闇やみに目を凝こらしつつ、ときおり磁気コン羅針盤パスを見て、道の曲がり具合を確かめながら進む。十歩ごとに方眼紙に点を打ってゆけば、完かん璧ぺきには程ほど遠とおいが、それなりの地図ができあがる。こういう作業が嫌きらいかといえば、そうでもない、なんて言ったら、カタリは「細かいやっちゃのう」と笑うだろうか。僕が特別細かいわけじゃなくて、きみが大おお雑ざっ把ぱすぎるだけだと思うんだけど。ＺＯＯはわりとみんなそうだけどさ。おかげで、僕まで引きずられて、適当になってしまいがちで。それがよくない。自分の持ち味を、自分自身が殺してしまっている。

　僕に何ができるだろう。

　僕は何を与あたえられて生まれてきて、今まで何をつかみとってきたんだろう。

　僕はこれからどこを目指して歩いてゆくんだろう。

　今わかることと、わからないことがあって、明日になったら何か忘れているかもしれないし、新しく何かがわかるかもしれない。

　一度に抱かかえられる量には限界があるから、欲を張って持てるだけ持とうとしたあげく、大事なものを落としてしまったりして。

　相変わらず僕はちっぽけで、ずっとちっぽけなままかもしれなくて、そんなことを考えるとちょっぴり鬱うつになったりもするけれど、この足を止めるわけにはゆかない。

「待っテ」

　止まっている場合ではないのだが、ピンパーネルが少し尖とがり気味の声を出して、トマトクンが低く「むう」と唸うなったもので、立ち止まらざるをえなかった。

　背筋がぞくっとした。

　なんかもう、やめて欲しいんですけど。

　振ふり返ると、ピンパーネルは目を閉じて耳を澄すましていた。

「……な、何？」

「音・しマス」

「べつに、何も聞こえないけど……」

「いえ・聞こえマス」

　わかっている。マリアローズの聴ちよう覚かくなんて、ピンパーネルのそれと比べれば、まるであてにならない。ちょっと否定してみただけだ。できれば否定したかったのだ。

　まあ、道に迷いさえしなければ、平へい穏おん無事に隠かくし通路までたどりつけるだろう、問題はその先だ、なんて考えは虫がよすぎたのかもしれない。虫がよすぎたということを証明するよう

に、まもなくそれはマリアローズの耳にも聞こえてきた。音だ。たしかに、音が聞こえる。ああ、本当に虫がよかった。反省するしかない。でも、なんだろう、この音。どうやらまだ遠いようだが、だんだんと近づいてくる。それも、結構な速度だ。何かと何かがこすれあっているような、もしくは、何かが何かの上を滑すべっているかのような──とにかく、かなり耳みみ障ざわりな種類の音で、マリアローズは思わず顔をしかめてしまった。なんだか、これとよく似た音を聞いたことがあるような、ないような。

　いや、ある。

　間ま違ちがいなくある。

「……足音？」

　だけじゃない。

　羽音らしきものも混じっている。

　いくら虫がよすぎたからって、それはないだろうに。

「速いな」

　トマトクンが舌打ちをして大たい剣けんの柄つかに手をかけた。前からだ。行く手から、それは迫せまってきている。急速度でこっちへ向かってくる。アルファがあげた恐おそろしげな唸り声は、もう半分くらいかき消されそうだった。嘘うそ。もう？　それはちょっと速すぎじゃない？

「──顔をかばえ！」

　たぶん、トマトクンはそう叫さけんだのだろう。よく聞こえなかったが。

　マントを引っつかんで顔を覆おおう間ま際ぎわに、できれば見たくなかったのだけれど、うっかりばっちり見てしまった。

　虫だ。でっかい。何あれ。蠅はえ？　蚊か？　違う。うわ。最悪。よりにもよって、アレだ。エルデンにいるやつより断然大きいし、とはいえ、アンダーグラウンドにいるやつほど大きくはなく、少し姿形も違うものの、おそらくアレだろう。なんでだよ。どうしてこんなところに。いや、いるんだ。アレは寒い地域以外どこに

だっている。ものすごい生命力でとてつもなく繁はん殖しよくする。だからタチが悪い。悪すぎる。だって、バサバサバサバサ飛んでくるやつもいる。岩いわ肌はだをサカサカサカサカ這はってくるやつもいる。飛んだり跳はねたり走ったり、何でもありだ。やめて欲しい。どうかやめて。数はわからない。わかるはずもないが、とんでもない数だ。マリアローズは悲鳴をあげそうになった。というか、きっと思いっきり叫んでいた。

　助けて。

　お願いだから誰がだずげで。

　足音と羽音の奔ほん流りゆうに押おし潰つぶされそうになりながら、やつらとの接せつ触しよくを待ちかまえる時間は、永遠のようでもあり、一いつ瞬しゆんのようでもあった。

　そして、やつらはきた。

　きちゃった。きまくりやがった。押しよせてきた。

　大脂羽蟲ゴツキーの大群だ。

「あばばばわばばわばあああばわやめでやだやだいいいいやああああああぁぁ……！」

　一匹ぴきが右足をかすめてゆく。別の一匹は顔のすぐそばを飛んでいった。さらに違う一匹は腹に体当たりしてきて、よろめいた隙すきに脇わきをすり抜ぬけていった。肩かたにぶつかってきたやつもいた。いっそしゃがみこんでしまいたい。むしろ、伏ふせたい。でも、それも怖こわい。地面の上を駆かけてゆくやつらに轢ひかれる。それどころか、ブワワワアァッと群がられてカジカジガシガシかじられまくって食べられてしまう。やだ。冗じよう談だんじゃない。大脂羽蟲ゴツキーに食べられて終わる人生なんてみじめすぎる。だけど、気のせいだろうか。大脂羽蟲ゴツキーにガッツンガッツンあたられるたびに、そんな最悪の結末がどんどん近づいてきているように感じられてならない。対照的に、気はだんだん遠くなってきて、もういいか、とも思う。耐たえられない。これは無理。あまりにもきつすぎる。だって、仕方ないじゃないか。我が慢まんとか忍にん耐たいとか、そういう問題じゃない。生理的にダメなのだ。一匹や二匹ならいいが、いや、ぜんぜんよくないが、まあ、なんとか気力をふりしぼって正気を保っていられるけれど、ここまで

くると、もうどうしようもない。

　ズゾッ、と憎にくき大脂羽蟲ゴツキーに足あし払ばらいをかけられて、身体からだが前のめりになった。

　ああ──、

　名残なごり惜おしいけど、さよなら、僕。

　これから僕は、大脂羽蟲ゴツキーの海に飛びこんで、骨になっちゃうかもしれない。

「──って」

　それでいいのか。

　本当に？

　考えるまでもない。

「いいわけあるかぁっ……！」

　マリアローズはとっさに身体を丸めた。前方宙返りと呼ぶには不ぶ恰かつ好こうすぎるが、それでもなんとかしゃがんだ体勢で着地できた。もっとも、大脂羽蟲ゴツキーたちはどんどん突つっこんでくる。彼らのたぶん清潔とはいいがたいんじゃないかと思えるギットギトボディが、身体のあちこちにバッツバツあたる。マリアローズはよろめいてはこらえて、ええい、すっごいヤだけどしょうがない、と偽にせ劫ごう火かを抜き放はなった。

「もおぉぉっ……！　散れ散れ散れ散れえぇぇぇ……！」

　できれば斬きりたくない。気持ち悪いから。ついでにあなたがたの身の安全のためにも、よけて欲しい。どうかこっちに近づいてこないでいただきたい。

　偽劫火を振ふり回しながらの真しん摯しな願いは、だが、残念ながら叶かなわなかった。グジャッ。ミチャッ。ジチョッ。ああ。いい手て応ごたえだ。最高に超最低ＳＵＣＫだ。今までこれほど剣を振るう自分に嫌けん悪お感を覚えたことはない。ここはサンランド無統治王国だし、自分で自分の身を守ることができない者はだいたい早死にするし、殺すより殺されるほうがいいと考える人はそもそ

もこの国にあわないのでさっさと出てゆくべきだと思うが、何でもかんでも暴力に訴うつたえるのって、やっぱりよくないよ。よくない。無む駄だな殺せつ生しようはしないほうがいい。本当に。

「ハアー……ハァー……ゼェー……ハアー……ううぅ……」

　でも、どうやら、なんとか生きてる。

　──みたいだ。

　自分の周りに散乱している元生物たちの残ざん骸がいについては、あえて意識の外へと追いやることにした。そこに間ま違ちがいなくある、ありまくるものを無視するとなると、それほど簡単ではないが、そうしないと、肉体はともかく、心が死んでしまいそうだ。

「……み、みんな……だ、大だい丈じよう夫ぶ……？」

「うむ」

「はイ」

「わたしも平気よ。かばってくれてありがとう、トワニング」

「何のこれしき」

「大きいね。ここのゴキは。アルファ、匂においなんか嗅かいで、まさか食べるのかい」

　おぅん！

　マリアローズはロム・フォウと違ってイヌの気持ちなんてわからないが、おそらくアルファは「いや、食べないよ」と返事をしたのに違いない。そう思いたい。しかし、アルファが何をしているのか、この目で確かく認にんする度胸はない。というか、アルファだけじゃなく、皆みなの姿もざっとしか見られない。ちらりと見ただけで、目もあてられないスプラッタ状態だということはわかりすぎるくらいわかった。自分も同じだろう。ああ、洗せん濯たくしたいお風ふ呂ろに入りたい。

「くっそ……なんであんなにいっぱい……」

「ひょへひょへ。ツクダ煮ににしよったら結構うんまいらしいぞ」

「食べたいなら勝手に食べればいいだろ。冗談じゃないよ、ったく、ううう、鳥とり肌はだが……」

　とりあえず、せめて顔だけでもふいておこうと、偽劫火を鞘さやに納め、背負い袋ぶくろからタオルをとりだそうとした手が止まった。

　トマトクンが大たい剣けんをかつぐように構えたままだ。

　ピンパーネルも雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣を両手にぶら下げて、前方をじっと見すえている。

「……な、何？　まだ、なんか──」

「みたいだな」

　トマトクンは片方の眉まゆをつり上げて、少しだけ首をかしげてみせた。

「次はもっとでかそうだぞ」

　失神しようかな。

　いい？　ちょっと失神して。

「……や、だから、いいわけないし」

　体長三メーテルくらいの巨きょ大だいな大脂羽蟲ゴツキーの雄ゆう姿しを想像してしまい、あやうく自分に人事不省に陥おちいる許可を与あたえてしまうところだった。いけない。こんなことじゃダメだ。しっかりしろ。虫がなんだ。たかが虫じゃないか。そうだ。だいたい、虫にしてみれば、人間こそ怖い相手なんじゃないか。怯おびえるな。気を強く持て。ガンバレ。頼たのむからガンバって、僕。

「俺とピンプ、髭ひげでやる。あとはカタリとご老公を」

「はイ」

「ウム。マリアローズ、ユリカ。カタリを」

「任しぇて」

「うん」

　マリアローズはユリカと二人で髭からカタリを受けとり、ムソー老人を背負っているロム・フォウとアルファの隣となりまで下がった。前は中央がトマトクンで、右やや下がり目に髭、ピンパーネルは左についている。道の幅はばは、だんだんと広がってきていて、ここだともう五メーテルほどもあるだろうか。高さは四メーテルくらいだから、三メーテルの大脂羽蟲ゴツキーだって十分通行可能――いやいや、考えるな。考えちゃいけない。それに、大脂羽蟲ゴツキーってやつは、どういうわけか気持ち悪いくらい薄うすっぺらいから、幅さえあれば――って、考えるなっていってるのに、なんでわかんないのかな、僕。

　考えたってどうしようもない。

　どのみち、そいつはやってくるのだ。

　ずる、ずず、ずる、ずず、ずる、と、何やら重々しい不快で恐おそろしげな音を立てて、やつは闇やみの向こうから姿を現しつつある。

　すごい威圧感プレッシャーだ。

　何だろう、この圧力は。というか、なまぬるくて、なまぐさい、これは――、

「大脂羽蟲ゴツキーじゃ……ない」

　よかった。

　いや、ぜんぜんよくない。

　何と言えばいいか、とにかく、そいつは口だ。

　圧あつ倒とう的な口だ。

　でかい。

　どのくらいでかいかというと、縦が四メーテル足らず、横は五メーテルには届かないくらいで、洞どう窟くつのサイズよりは少し

小さいかな、というかんじの、まぎれもなくそれは大きく開けられた口だった。

　つまり、息なのだ。

　このなまあたたかくてくさい風は、やつが吐はきだしている息だ。

「……もしかして、あの大脂羽蟲ゴツキーの大群、こいつから逃にげて……？」

「たしかに、かなりたくしゃん食べしょうね……」

「あたしたちのことも食べるつもりなのかな」

　ぐるうううううぅぅぅぅぅぅぅぅぅ。

　全身の毛を逆立てて威い嚇かくの姿勢をとっているアルファも、獣けものとしてはかなり大きい部類に入るが、やつの前ではかわいらしく見える。まさか、アンダーグラウンド以外でこんな化物に出くわすなんて。魔ま術じゆつ的な背景が考えられるサリア・ベルよりも、ある意味、驚きよう異い的だ。

「ほんとにいたんだね、怪かい物ぶつ……」

「火のないところに煙けむりは立たぬというわけか」

　上衣を脱ぬぎ捨てて上半身裸はだかになった髭が、前に進みでようとして、足を止めた。

「──ムウウ。どこを殴なぐればよいのやら」

「バカ……？」

「くるぞ」

　トマトクンがそう言って重心を低くした瞬しゆん間かんだった。

　口の中からだ。

　モリッと盛りあがった粘ねん膜まくの一部が、ものすごい速度ですさまじく膨ぼう張ちようしてのびてきた。あれは、舌なのか。そうだとしたら、口こう腔こうの上側の部分についていて、しかも普

ふ段だんはどこかに収まっていて、必要なときだけにょろっと出てくるなんて、ずいぶん奇き妙みようで便利な舌だ。しかも、そうとう迷めい惑わくな舌でもあるが、トマトクンは見事に反応した。

「──ぬおおぉっ……！」

　鋭するどく振ふり下ろされた大剣が舌を直ちよく撃げきすると、何か猛もう烈れつにいやなかんじの液体が飛び散って、やはり大迷惑だった。切断された舌が地面に落ちてビチビチ跳はね回っている様子は、精神衛生上、あまり見ないほうがいいだろう。それ以前に、そんなものを悠ゆう長ちように観察している余よ裕ゆうなんてなかった。

　風だ。



　いや、これは風というべきなのか。

　吹ふきつけてくるのではない。引っぱられる。身体からだが前方へ引っぱられてゆく。

　え？　何？　いったいどういうこと？

　一瞬、パニクりそうになったが、すぐに理解した。

　あいつだ。あの口野や郎ろうの仕し業わざだ。

　やつが、思いっきり息を吸っている。

　舌がぶった斬ぎられてしまったので、空気と一いつ緒しよに、マリアローズたちまで吸いこんでしまおうとしているのか。

「わ、わわわわわわ……！」

「マリア！　わたしにちゅかまって！」

「や、ユリカこそ僕につかまって！　てゆうか、カタリを……！」

　さすがに前の三人は腰こしをぐっと落として地面に根を張ったように耐たえているが、マリアローズとユリカは体重が軽いぶん、あっさり体勢が崩くずれた。今は二人で両りよう脇わきからカタリを抱だきしめてなんとかこらえているけれど、この状態でいつまでもつか。何しろ、とんでもない吸引力だ。べつにわかりたくもないが、少しだけ大脂羽蟲ゴツキーの気持ちがわかった。そりゃ必死で逃げもする。逃げないと、食べられるというかのみこまれてしまう。こっちとしては一刻も早く絶ぜつ滅めつして欲しいくらいだけれど、連中も生きているのだ。死にたくはないのだろう。マリアローズだってそうだが、ロム・フォウは。アルファは。おじいちゃんは。

「アルファ！　おじいさんをつかまえているんだ……！」

　横目で見ると、ロム・フォウがムソー老人を背中から下ろして、構えた弓に矢をつがえようとしているところだった。ムソー老人は地面にしがみつくように伏ふせて、その衣服の裾すそをアルファがしっかり噛かみしめている。矢が放たれた。一本。二本。三本。飛んでいったというより、吸いこまれていった。そんなかんじにしか見えなかったし、矢が大口の奥に消えても、口野郎はびくともしなかった。ダメか。それはそうだろう。いくらロム・フォウが弓の名手でも、相手はでかいだけじゃなく、口以外、狙ねらいどころがない。もし急所らしきものがあっても、この状じよう況きようで命中させるのはいくらなんでも無理というものだ。そもそも、普通の矢なんかでは棘とげが刺ささった程度にしか感じないだろう。

　じゃあ、矢以外なら……？

「──みんな、合図したら伏せて！」

　ああ、僕は間ま抜ぬけだ。

　なんですぐに思いつかなかったんだ。

　べつに、ぼけっとしていたわけじゃない。ということは、鈍にぶいんだ。僕は僕らしく、自分にできることをきっちりとやる。だったら、いの一番にこいつのことを考えつかないでどうするんだ。製法を編みだしたクモソウ野フ郎オには絶対に感謝なんかしたくないし、しないけれど、実際、こいつは何度も僕を救ってきた。今となっては、なくてはならない装備の一つだ。少し大おお袈げ裟さにいえば、相棒といってもいい。そう。こいつだ。

　マリアローズはベルトのホルダーから小こ瓶びんを二本抜きとった。

　距きょ離りは、どれくらいだろう。最前列のトマトクンから七、八メーテルといったところか。力ちからーいつ杯ぱい投げる必要はないし、狙いもだいたいでいい。ポイッと放ほうれば、あとは勝手にやつの口の奥へと吸いこまれてゆくはずだ。

　爆ばく薬やく液ハーレム・ゴードン入りの小瓶を投げてから、一、二まで数えた。

「伏せて……！」

　マリアローズが合図するやいなや、トマトクンは大たい剣けんを地面にブッ刺してマントで身をかばい、ピンパーネルは壁かべに飛びついて、髭ひげはおぞましく膨ふくれあがらせた筋肉の鎧よろいで自分自身を守ろうとした。マリアローズとユリカは抱きあってカタリをがっちり押おさえ、ロム・フォウとアルファがムソー老人をかばうべく地面に組み敷しいた。その直後だった。

　閃せん光こうは一瞬で、爆風らしきものは感じなかった。

　爆発音はなんだかやけに遠く、こもって聞こえた。

　やつは相変わらずあんぐりと大口を開けたままだ。

　拍ひよう子し抜けしてしまうような爆発だったが、吸いこむ息は止まった。

かわりに、口の奥から薄うすい煙けむりがもれ出てきている。

チャンスだ。

—とは、正直、思わない。だって、やつは動かないけれど、死んだようには見えないし。近づいたら、ガバッとやられるかもしれないし。むしろ、間ま違ちがいなくやられそうだし。

「ピンプッ！　髭ッ……！」

だから、トマトクンたちはすごいと素す直なおに感心してしまう。それがたとえ無む謀ぼうなだけだとしても、ときには恐おそれず前へ進まないと、行く手に立ちふさがる敵を切り裂さき、突つき破ることはできないのだ。

とはいえ、彼らの真似まねをするのはおすすめできない。すすめられても、大半のまともな人間にはできっこないだろう。

「—うおおおおおおおあああぁぁぁぁぁ……ッ！」

トマトクンが跳とびあがって振ふりかぶった大剣を口野郎に叩たたきつけた。あの琥こ珀はく色いろの剣身波打つ大剣だからこそ、長身のトマトクンだからこそ可能な、強きよう烈れつきわまわりないーいち撃げきだった。マリアローズはほとんど呆ぼう然ぜんとするしかなかった。口野郎が縦にぶった斬られた。といっても、上うわ唇くちびると下唇にあたる部分に深い切れ目が入って変な液体が飛び散っただけなのだが、そんな芸当をやってのけられる者が地上にどれだけいるだろう。

まあ、二つに割れた下唇の一方を引っつかんで、ヌオオオオオオオレエェェェェェェイと引きちぎってみせるなんてことも、髭以外にはそうそうできないだろうが。

口野郎も、さすがにこれはたまらなかったのか、激しく身（？）をよじりながら、ずるずるあとずさりしはじめた。口を閉じようとしているみたいだが、唇が切れているせいでちゃんと閉じていない。それでも、大口を開けていたときと比べれば、結構縮んだ。今はもう、高さも幅はばも三メーテルくらいだろうか。そこに突とつ進しんしていったのが元アッサシンだった。

ピンパーネルは洞どう窟くつの岩がん壁ぺきを斜ななめに駆かけて、口野や郎ろうの背に跳び乗った。そのあと、マリアローズの位

置からは見えなくなったが、少しすると、口野郎の暴れっぷりが尋じん常じようではなくなった。ピンパーネルの雄おすのグレアデと雌めすのリレッザがやつの泣き所でも斬きり刻んだのか。おおおんおおんおおおおん。おんおおおんおおんおおおおおん。あれは悲鳴というより、轟ごう音おんというべきだろう。口野郎は叫さけびながら、さかんに上だの下だの横だのに身体からだをぶつけている。洞窟が揺ゆれている。ピンパーネルは大だい丈じよう夫ぶだろうか。というか、このままでは洞窟自体が崩ほう落らくしてしまうんじゃないか。

　だが、トマトクンはかまわず突っこんでいって、大剣を振り回した。やつが下がるとそのぶん前に出て、どんどん斬った。斬りまくった。

　やつはもうスダレみたいな有様で、もがきつつひたすら後退するのみだ。いや、そのスダレの一いつ端たんを髭がわしづかみにして引っぱったりするので、思うように下がることもできない。思うようにといっても、あんな怪かい物ぶつが何を思っているのかなんてわかるはずもないが、やつが完全に逃にげ腰ごしになっていることは間違いないだろう。徐じよ々じよに弱ってきてもいる。さっきよりも少し動きが鈍い。おかげで、ようやくやつの形状がわかってきた。やつの身体は筒つつみたいな形をしていて、その側面にたくさん生えている短い突起状のものが、どうやら手足の働きをしているようだ。巨きよ大だいな大口蚯蚓百足みみずむかでとでもいえばいいか。今や死にかけ大口蚯蚓百足だ。どうかそのまま死んで欲しい。やつには悪気なんてなかったのかもしれないし、罪だってないのかもしれないけれど、マリアローズたちにとっては迷めい惑わくな存在だ。息絶えて。お願い。

　ほとんど祈いのるような気持ちだった。

　その甲斐かいあってか、大口蚯蚓百足はやがてぐったりして動かなくなった。

　とりあえず、よかった。

　胸を撫なで下ろすのはまだ早いが。

「──ピンパーネル！」

　マリアローズは大口蚯蚓百足に駆けよった。ちょっと熟成された

生ゴミのようなものすごい臭においがしたが、そんなものは鼻をつまめばいい。ベルトに吊つるしてあったランプが無事だったので、怪物の肉にく片へんやら、褐かつ色しょくのねばねばした謎なぞの液体やらにまみれたトマトクンと髭の壮そう絶ぜつな姿にはちょっと怯ひるみかけたが、それより今はピンパーネルだ。ピンパーネルはいったいどこに。マリアローズは大口蚰蜒百足の死し骸がいを見まわした。まだ少し呼吸が乱れているトマトクンと髭も捜さがしてくれているようだ。でも──あれ……？

　気のせいだろうか。今、声が聞こえたような。

　たしか、はイ、みたいな。

　そうだ。

　あれは間違いなくピンパーネルの声だ。

　ピンパーネルが返事をした。

「……でも、どこから？」

「ここ・でス」

　ぐちゃぐちゃになった大口蚰蜒百足の口の部分がいきなり蠢うごめきだしたので、一いつ瞬しゅん、まだ生きていたのかと思ってめちゃくちゃ焦あせった。まあ、世の中、何があるかわからないから、大口蚰蜒百足がピンパーネルの声で喋しゃべりだすようなファンタスティックな出来事が起こってもおかしくない。

　や、おかしいって。

　そんなことあるわけないでしょ？

　マリアローズは心の中でボケた自分にみずからツッコミを入れて冷静さをとりもどし、一いち抹まつの寂さびしさを感じながら大口蚰蜒百足の口に手をかけた。わ。ひどい感かん触しょく。気持ち悪い──が、そんなことはいっていられない。トマトクンと髭ひげの手も借りて、助けだしてあげないと。いつまでもそんな場所にいるのはあまりにもかわいそうだ。怪物の口の中なんかに。けど、どうして口の中なのだろう。

　途と中ちゅうからほぼ自力で這はいだしてきたピンパーネルは、

あの謎の液体によって頭の先から足の先まで褐色に染まり、何やら球形の物体を小こ脇わきに抱かかえていた。

「……無事──みたいでよかったけど、何それ？」

「ワかりま・セン。これ・とったラおとなシク・なりまシタ」

「とったって、どこから？」

「頭・ありまシタ。小サイの。ソコに・これあッテ・ソコから口に・入りまシタ」

「へえ──って、や、いいよ、こっちによこさなくても。あんまり見たくないし……」

「はイ」

「フム。拙せつ僧そうに見せよ」

　ピンパーネルは髭に球形の物体を渡わたすと、もとは砂色だった衣ころもを脱ぬいでしまった。さすがの元アッサシンもそのままでは気持ち悪かったのだろう。中に黒いボディスーツを着ているので、衣は捨ててゆくようだ。マリアローズも捨ててしまいたいくらいだが、奮発して購こう入にゅうした結構いい品物を着ているのでもったいないし、ここで脱ぐわけにもゆかない。あとで目め一いつ杯ぱい洗って洗って洗いまくらないと……。

「おお。これは──」

　上半身裸はだかの髭は、そんな心配は下半分だけでいいわけだから、少しは気楽だろうが。というか、そんなに脱ぐのが好きなら、いっそのことずっと裸で歩いていればいいのに。

「竜りゅう玉ぎよく、あるいは竜りゅう蓋がい骨こつとも呼ばれるものだな」

「……りゅう？」

「左様。竜は頭蓋骨とはまた別に、脳を保護する硬かたい骨を持っておるのだ。竜玉の有う無むは、その生物が竜であるか否いなかを判断するための決め手の一つでもある」

「え、ってことは──」

「この怪物は竜だ。下等竜の一種であろうな。暗黒大陸には竜界ドラガンドへの扉とびらがあるとされ、事実、多数の竜が確かく認にんされておる。おそらくは、海を渡ってこの地に棲すみついたのであろう」

「で、餌えさは大脂羽蟲ゴツキー……」

「竜は雑食だという。不思議はない」

「不思議っていうかね……」

　ただいやなだけだ。

　だって、もし本当にこいつの主食が大脂羽蟲ゴツキーだったのであれば、こいつの身体は大脂羽蟲ゴツキーでできていることになる。こいつの肉も、体液も、何もかも、すべてだ。つまり、それらを頭からひっかぶって、ぐしょぐしょのドロドロになっているマリアローズたちは、大脂羽蟲ゴツキーまみれというわけだ。なんてことだ。

　マリアローズはユリカが大事そうに抱だきしめている保温袋ぶくろに目をやった。

　カタリ。カタリめ。半魚人のやつ。こんな目に遭あって、きみにまた会えないなんて冗じよう談だんじゃない。冗談じゃないよ。本当に。こうなったらもう、どれだけ困難でも、苦しくても、何があっても、絶対の絶対の絶対にきみを生き返らせてやる。きみはせいぜい感謝すればいいんだ。すまんかったなあ、とか言って、平謝りで、土下座でもなんでもして、しばらくの間、みんなに頭が上がらなくて。そして、今度こそ死にマニアの称しよう号ごう返上のために精一杯努力することを誓ちかってもらう。きみに死んでもらっちゃ困るんだ。きみがいなくて、みんな、すごく困ってる。そのことをきみに伝えたい。きみがいないと、こんなに寂しいんだってことを、きみに話してあげたい。

　出発をうながすべく声をかけようとしたら、トマトクンはもう大たい剣けんを背中に戻もどして前を見ていた。トマトクンも同じ気持ちなんだ。そう思った。

5

「大たい佐さ、よろしいのですか」

　デフ・マグネーズ中隊長補とはもうずいぶん長いつきあいになる。決して従順ではなく忠実で、何をやらせてもそつなくこなす便利な男だが、ファー・セルジナ王国軍で傭よう兵へい働きをしていたころの癖くせがいまだに抜ぬけないのは困りものだ。

「大佐はよせ」

「申し訳ありません、中隊長」

「で、何だ」

「あの男のことです。おわかりでしょうに」

「ジャン・ジャック・ド・ジョーカー、か……」

　ヘンドリック・カルマンは紙巻き煙草たばこをくわえて燐寸マッチで火をつけ、愛いとしい煙けむりを肺一杯に吸いこんで吐はきだした。

「気に入らんか」

「当然です。あんな得体の知れない男を指揮系統に組み入れられては、やりづらくてかないませんよ。我々には我々のやり方があります」

「ここの水に慣れたか、マグネーズ。おれたちにはやり方なんてものはないさ」

　ファー・セルジナの雇やとわれ大佐を辞やめて、バルモア商会のスカウトに応じてから、もう三年になる。十七で戦場の味を覚えて以来、殺やるか殺られるかの二十余年間、四十を前にしてそろそろ潮時と思い、金目当ての楽な仕事に鞍くら替がえしたのだが、負け戦いくさの悪夢と勝ち戦の甘い夢を交こう互ごに見る毎日だ。

　こんなはずじゃなかった、とは思わない。どうせこんなことだろうと思っていた。

だから、自分より若いマグネーズが「大佐についていっていいですか」などと言いだしたときには、「やめておけ」と一応止めた。まだ前線で露つゆと消える望みがあるのなら、何も好きこのんで戦場を離はなれることはない。どのみち、傭兵はあの場所から離れられないのだ。嫌いや気けが差しても、逃にげだしても、また戻ってくる。それでしょうがなく、割りにあわないちっぽけな金と引き換かえに血肉が煮にえ立つ大おお鍋なべの上を綱つな渡わたりして、怖こわいだの死ぬだのやばいだのとわめきながら、結局、楽しくて楽しくて仕方ない。カルマンが思うに、傭兵とはそうしたものだ。そんな傭兵が、命に見あうだけの大金をもらうようになったらおしまいだ。死ぬのが惜おしくなるからだ。命を惜しむ傭兵は屑くず以下だ。何の役にも立たないからだ。

おそらく、大佐などと呼ばれるようになって、並みの傭兵の十倍もの給料を懐ふところに突つっこむようになった瞬しゅん間かん、傭兵としてのヘンドリック・カルマンは終わった。

傭兵ではなく、ただの職業人になった。

傭兵としての性さがよりも、金のために働くのであれば、より多く金をくれる職場に行くのが筋というものだ。

だが、マグネーズ、おまえはまだ傭兵だろう。傭兵として生き、死にたくはないのか。

そう思ったが、雇われ先での待たい遇ぐうや階級に差があっても、辞めてしまえば対等だ。カルマンにマグネーズを制止する権利はなかったし、そこまでする義理もなかった。ようするに、ただかつて傭兵だった男が二人、慣れ親しんだ戦場に背中を向けて、若じゃっ干かん早いかもしれないが、余生を送りはじめたというだけの話だ。そのうち、酒を飲めば、二人して昔話ばかりするようになるだろう。反吐へどが出そうだが、死に場所はいくらでもあったはずなのに、無む駄だに生き残ってしまったのが運の尽つきだ。自分で選んだ道でもある。やむをえない。あきらめろ、元傭兵。そう死ぬまで自分自身に言い聞かせる日々がつづいたとしても、何のことはない。あの戦場に斃たおれて獣けものに食われて骨になるのと、どっちがマシか考えろ。わかりきったことだ。

もちろん、戦場で無む駄だ死にするほうが千倍マシに決まっている。

考えるまでもないことだ。

「上からのお達しがあれば、おれたちは地じ獄ごくにでも出かけていく。ハイキング気分でな。まあ、行ければの話だが。脳天気な大将の勝手気ままな指図で右往左往するのも、おれたちの特技で、趣しゅ味みで、しかも仕事だ。鼻歌交じりでな。もう忘れたのか、マグネーズ」

「忘れてはいませんが」

「ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。あの男を臨時作戦参さん謀ぼうとして雇い入れるよう、社長に進言したのはおれだ」

「……は？　大佐が、ですか」

「大佐はよせ」

カルマンは低い天てん井じようを仰あおいで紫し煙えんを吐いた。

ロックバード中隊駐ちゆう屯とん所じよは、バルモア商会本社ビルの近くにある、こぎれいだが張りぼてめいた玩具おもちや箱のような三階建てだ。一階の隅すみに位置する脂やにくさいこの中隊司令室は、まるで揺ゆり籠かごみたいな豚ぶた箱ばこだ。

こうして豚箱の中で妙みように立派な革かわ張ばりの椅い子すにふんぞりかえっていると、なんだかすべてが悪い冗じよう談だんのように思えて、どうも居い心地ごこちが悪い。

「おれがラフレシアの外人部隊にいたことは知っているな」

「はい。十七歳で入隊して十年近くいらっしゃったと、以前、お聞きしました」

「キャリアのスタートとしては絶好だった。何しろ、ひどい任務ばかりだったからな。とくに、東南国境地帯は楽しくて涙なみだが出るくらい超最低ＳＵＣＫだったよ。オークリッドのケナ族、ロロ族、あいつらは最悪のゲリラ戦士で、おれにとっては最高の教師だった。トーロク山さん岳がく戦でおれが生き残ったのは、密林で連中とやりあった経験のおかげだ」

「あの山のことはもう忘れました。ろくな思い出がありませんか

ら」

「そうか。おれは忘れようにも忘れられないがね。トーロク山岳戦と、ヨナ樹海戦線。この二つがおれの人生を変えたといっても過言じゃない。あの森で生きのびたせいで深みにはまり、あの山から生せい還かんしたおかげで出世した。傭兵の分際でな。どっちも間ま違ちがいのもとさ。おれを生かし、狂くるわせた戦いだ」

　もっとも、後こう悔かいはしていないどころか、懐なつかしく思う。マグネーズとは正反対だ。今になってみれば、当時の苦しさや痛みなどこれっぽっちも覚えていないし、いい思い出ばかりが頭に浮うかぶ。

「──ド・ラスペードという名の若い指揮官の下もとで働いたことがあってな」

「はい？」

「ヨナ樹海戦線での話だ。そんな顔をするな。少しつきあえ。べつに自じ慢まん話じゃない。名前のとおり貴族で、残念ながら、フルネームは覚えていないが、たしか……何とかかんとかカリエール・ド・ラスペードだったかな。そんな名だった」

「そのラスペードとかいう男が、何か？」

「奇き術じゆつ師、と呼ばれていた」

「いい指揮官だったんですか」

「そんなレベルじゃない。ド・ラスペードの部隊はゲリラに襲おそわれなかった。逆に、密林の奥深くにあったゲリラの陣じん地ちをいくつも壊かい滅めつさせた。捕ほ虜りよに偽にせの情報を教えてわざと脱だつ走そうさせ、敵を陽動するような謀ぼう略りやくも得意だった」

「そいつはすごい。傭よう兵へいにとっては拝みたくなるような上官ですね」

「崇すう拝はいされていたよ。中でも圧巻だったのは、一時的にとはいえ、オークリッド五十七部族の一つヨギ族を寝ね返がえらせて、連中と共同で行った女め豹ひよう作戦だ。かつて戦場の女豹と呼ばれた姫ひめ君ぎみがオークリッドにいて、彼女はヨギ族出身

だったらしい。それにちなんだ作戦名だ」

「知っていますよ。有名人じゃないですか。祖国に裏切られてラフレシアに捕とらえられたあと、脱走して、世界中の反政府組織を支し援えんして回った、あの女豹でしょう。もう三十年以上前に引退したという話ですが」

「そうだ。ド・ラスペードは、女豹にならってみずからオークリッド軍に捕ほ縛ばくされ、独力で脱出して敵将の寝込みを襲ってみせた。これに呼応したヨギ族が内部から敵陣を荒あらし回り、外からは我々が攻せめ立てて、結果は馬ば鹿か馬鹿しいほどの大勝利だった」

「しかし、それは……正規軍がやることじゃありませんね。まるで盗とう賊ぞく団だ」

「負けて兵を大勢死なせるよりはいい」

「上のほうでそっくりかえっている偉えらい人たちがそう思ってくれればいいんですが」

「何かする前に他人の顔色をうかがうような男ではなかったな。上にも、下にも、だ。目の前で兵が何人死んでも平然としていた。ただ、安全な場所から兵を動かすだけの指揮官でもなかった。軍人は腐くさるほど見てきたが、あんな指揮官にはお目にかかったことがない」

　あのとき、まだ若かったヘンドリック・カルマンは、密林で大樹の陰かげに身を隠かくし、息をひそめていたのだ。約百メーテル先には、ロロ族のゲリラたちが木と皮で築きあげた巨きょ大だいな砦とりでがそびえ立っていた。ロロ族は弓の達人ぞろいだから、見つかれば狙そ撃げきされる。目玉から矢を生やして動かなくなった仲間は数知れない。たった五百人で、あの砦を落とすだって？　正気の沙さ汰たじゃない。冗談じゃない。死にたくない。わざわざ死にに行くような作戦に駆かりだしやがって。外人部隊だからって、使い捨てかよ。ふざけるな。やってられるか。逃にげちまうか。

　どうした、怖こわいのか、と、隣となりから声をかけられた。

　驚おどろいた。なんで指揮官がおれのすぐそばに。しかも、指揮官は栓せんが抜ぬかれた酒さか瓶びんを差しだしてきた。飲やる

か。どうした。いらんのか。一応葡ワ萄イ酒ンだぞ。糞くそ不味まずい安酒だがな。カルマンは、いりません、と返事をしたのだったか。覚えていないが、葡ワ萄イ酒ンは飲まなかった。それだけは確実だ。

「──ジャン・ジャック・ド・ジョーカー、あの男は」

　昨日、顔をあわせたときに、何かが引っかかった。

　おれはこの男と会ったことがあるのではないか。

　あとで思い出した。

　あの森のことを。

「どこか似ている」

「その……ラスペードという男に、ですか」

「気のせいだろうがな。ただ、言うことは案外まともだったよ。あの男はおそらく部隊を指揮したことがある。それも、大規模な部隊をな」

「大たい佐さがそうおっしゃるのなら、そうなんでしょうが」

「何度言わせる。大佐はよせ」

「ですが、やはり中隊長より大佐が似合います。そのうち社長に頼たのんでみますよ。この私兵隊にも階級はあったほうがいい。ごっこ遊びの領域かもしれませんが、一応軍隊ですから」

「その社長もな。あのド・ジョーカーという御ご仁じんはどうやら会長の友人らしくて、頭が上がらない様子だった」

「会長の。そいつはすごいコネだ」

「例の化物の件でも、そうとう好き勝手やってくれたようだからな」

「あの夜、こき使われたスネイクバード中隊とレイディーバード中隊の連中が、さんざんぼやいてましたよ」

「今回も同じだろうさ。どうせ現場に介かい入にゅうしてくるのな

ら、こっちが用意した枠わくの中で動いてもらったほうがまだいい」

「なるほど。了りよう解かいしました」

　マグネーズはうなずいて腕うで時ど計けいを見た。

「そろそろ仕事の時間です、大佐」

「ああ」

　カルマンは苦く笑しようしながら机き上じようの書類にサインをして煙草たばこを灰皿で消し、椅い子すから立って一つ伸のびをした。どうも腰こしに張りがある。年か。それもあるだろうが、楽をしすぎたのだろう。いつの間にか少々腹も出てきた。身体からだも鈍どん重じゆうに感じる。先に部屋から出てゆこうとしているマグネーズの背中を眺ながめながら、おれは今日生き残れるのか、と思った。久しぶりの感覚だった。全身が震ふるえた。生き残れるか、だと？　知ったことか。戦場だ。あの戦場がおれを待っている。その予感のほうが、女を抱だくより遥はるかにいいとは。傭兵は所しよ詮せん、死ぬまで傭兵か。

6

　いくつめか数える気にもなれない分かれ道を右に行って、南に三十メーテルくらい進んだあたりで道が極きよく端たんに西に曲がりはじめたので引き返し、今度は左の道を行って、行き止まりだったから戻もどって、前の分かれ道までとって返し、逆の道を進んで、いい具合に南へまっすぐのびていると思ったら、またもや行き止まりだった。そりゃもうめちゃくちゃ頭にはきたけれど、冷静に、落ちついて、落ちつけ、怒おこったって何も解決しない、いいことなんて一つもないんだから、深呼吸だ、吸って、吐はいて、吸って、吐いて、なんてことをやっていると、ロム・フォウにおんぶされているおじいちゃんが、しょんぼりと言った。

「なんだかわしゃもう疲つかれたのう……」

「うん。ごめんね。ほんっとにごめん。いくらでも謝るから許し

て？」

「ひへひへ。わしの心が海のように広うてえかったなあ」

　きみがちゃんと道順覚えてれば、こんなことにはなってないんだけどね。

　━とは言えない。相手は百二十四歳だ。あてにするのがそもそも間ま違ちがっている。それは最初からわかっていたことだし、何度も考えたことでもあるし、いやというほど思い知らされたことでもあるから、今さら蒸し返しても時間の無む駄だにしかならない。じゃあ、こうして洞どう窟くつの中をうろつき回っている時間は無駄じゃないのかと訊きかれたら、答えに窮きゅうしてしまうが。

「しょんなに落ちこまないで。マリアのしぇいじゃないわ」

「……ありがと、ユリカ」

　がっくりと肩かたを落とした瞬しゅん間かん、ユリカが後ろから慰なぐさめの声をかけてくれて、それは本当にありがたいのだけれど、もう洞窟に入ってから三時間以上たっている。方眼紙を確かめるまでもなく、少なくとも後あと戻もどりはしていないはずだが、果たしてちゃんと神しん殿でんに近づいているのかどうか。さすがに焦あせりもあるし、どこまで行っても同じような眺めの洞窟内で、似たようなことを延々繰くり返していると、本当にこれでいいのかと自分を疑いたくもなる。

　いっそのこと、いったん入口まで戻ったほうがいいんじゃないか。

　それも一つの手だと思うが、ここまで時間がたってしまうと、やや遅おそきに失した感がなきにしもあらずだ。

　いや、その方法はもっと前から何度も頭をよぎっていた。でも、決断することが怖こわかった。だって、距きょ離り的にはいいかげん神殿の真下に到とう達たつしていてもおかしくないのだ。もしかしたら、引き返すと決めた地点のすぐそばにゴールがあるかもしれない。引き返したせいで、間に合わなくなってしまうかもしれない。その可能性を考えると、とても言いだせなかった。

　ようするに、優ゆう柔じゅう不ふ断だんなんだ。結果に対して責任をとる覚かく悟ごが僕にはない。

　だけど、しょうがないじゃないか。重すぎるよ。かかっているのは仲間の命なんだ。一か八ばちかの賭かけに打って出る選せん択たくは必要最小限にとどめたい。それとも、こんなときだからこそ、恐おそれずにどんどん勝負をかけるべきなんだろうか。僕はどうすれば……？

　ともあれ、行き止まりで休んでいても何がどうなるわけでもないから、前の前の分かれ道までてくてく歩いた。

　行ったことのない道に足を踏ふみ入れる瞬間は、少しの期待と大きな不安とで心がごちゃごちゃにかき乱されて、息がつまる。

「大だい丈じよう夫ぶだ」

　不意にすぐ後ろのトマトクンが呟つぶやくように言った。

「俺たちはちゃんと目的地に向かってる」

「……それ、なんか根こん拠きよでもあるの」

「うむ」

　答えるまでに間があった。

　悪い予感がした。

　というより、それは予想だった。

「なんとなくだ」

「まあ、そんなことだろうと思ったけどね！」

「それは誉ほめ言葉か」

「違うよ！　少なくとも誉めてはないから！　けなしてるってほどでもないけど！　呆あきれてはいるけどね、ものすっごく！」

「何だ。結構元気じゃないか」

「空元気だよ！」

「そうか」

「や、なんかもう変に元気出てきたけどさ！　きみのおかげっていうかきみのせいで！」

「そいつはよかった」

「あくまで結果論だけどね！」

　それでもいい。しょぼくれている場合ではないのだ。迷うのはいい。ためらってもいい。でも、前に進む足を止めてはならない。立ち止まって考えこむのではなく、進みながら頭を回転させろ。歩きながら途と方ほうに暮れて、後こう悔かいして、反省すればいい。

　やや下り勾こう配ばいの道をしばらく進むと、アルファが「うおう」と短く吠ほえて、ロム・フォウが通訳してくれた。

「水の匂においがするって」

「へえ。水ね。ふうん」

　上等だ。火でも水でもどんとこいだ。気にせずマリアローズはずんずん突つき進んだ。そのうちアルファが教えてくれた水とやらの正体が判明した。水。たしかに、水だ。行く手が浸しん水すいしている。下りの道なので水の深さはどんどん増してゆき、ここから見たかぎりだと天てん井じようまでは達していないみたいだが、ずっと先はほとんど水路のようだ。でも、それがどうした。ぜんぜん問題ない。かえってちょうどいいくらいだ。大脂羽蟲ゴツキーどもや大口蚯蚓百足みみずむかで下等竜りゆうのせいで、全身汚よごれまくってくさくてたまらなかった。洗せん濯たくがてら泳げばいい。

「アルファは泳げるよね。イヌだし。おじいちゃんは浮うくよね。スカスカで軽そうだし。濡ぬれちゃうけど、がまんしてね。泳げない人っている？　いないね」

　マリアローズは素す早ばやく皆みなを見まわしてから、手早く方眼紙と鉛えん筆ぴつとチョークを背負い袋ぶくろにしまい、ベルトのホルダーなども点検した。どれもモノはいいから、きちんと口を閉めておきさえすれば、それなりの防水性はある。用意はできた。もちろん、心の準備もバッチリだ。

「じゃ、行くよ」

　有う無むは言わさない。マリアローズはスタスタというよりペ

チャペチャ歩きだした。水深は最初、水たまり程度だったが、一歩進むごとに少しずつ深くなってゆき、十歩目で膝ひざくらい、二十歩目で腿ももの半ばほどになり、三十歩目では腰こしまできた。

「みんな、ついてきてる？　きてるね」

「……まだ拙せつ僧そうをはじめ誰だれ一人として返事をしておらぬぞ」

「はイ……」

「や、べつに返事なんて聞かなくても、見ればわかるから」

「であれば、最初から尋たずねずともよいのではないか」

「うっさいな。きみなんか、くだらないことばっかりいっぱい知ってるくせに、いっつも一に筋肉二に髭ひげ三も四も五も六も七も筋肉で大おお雑ざつ把ぱすぎでしょ。無理してそんな細かいこと気にしてる暇ひまがあったら、大脂羽蟲ゴツキー液でねとねとしてる身体からだでも水で流したら？」

「ム、ムウ……」

　いちいち後ろなんて見ていないが、水をかきわける音以外に、何やらジャバジャバやっているのが聞こえる。本当に髭が水をすくって身体にかけているのだろうか。なんだかマリアローズもザブザブ洗いたくなってきたが、その必要はないかもしれない。五十歩目になると、水はマリアローズの胸あたりまで達した。これだともう、歩くよりも泳いだほうが楽なくらいの深さだ。ユリカのことが少し気になって、ちらりと振ふり返ってみたら、もはや指定席のごとき髭の肩かたの上にちょこんと座っていた。右肩にカタリ、左肩にユリカをのせた髭は、マリアローズよりは遥はるかに、トマトクンよりも若じゃっ干かん背が高いので、まだまだ余よ裕ゆうがありそうだ。なんてことを考えていたら、トマトクンが片方の眉まゆを大おお仰ぎょうにつり上げてみせた。

「む？　お前も俺の肩にのるか」

「のらないよ！　なんで僕がきみに肩車とかしてもらわなきゃいけないのさ！　お父さんじゃあるまいし！」

「ああ、そういえば、あたしも昔、よく父に肩車してもらったよ」

「しょうね。お父しゃんといったら、やっぱり肩車よね」

「わしもしてもろうたなあ。ひょほひょほ。というか、今してもらいたいのう。フォウちゃん、ちょっとお願いでけんかのう」

「そこそこ！　そこのジジイ！　どさくさにまぎれて何要求してるんだよ！」

「ま、マリアローズッ！　師父をジジイ呼ばわりするのは」

「ドグサレエロエロおジジ様！　これでいいでしょ！　てゆうか——」

　マリアローズはいきなり水の中を猛もう進しんしてきた正体不明の生き物をガバッとわしづかみにして、その頭部に籠こ手ての矢を叩たたきこんでやった。そいつが何ものかなんて、いちいち確かめたりしなかった。矢にしこんだ即そつ効こう性神経毒Ｐ９ドウター＋の効果ですぐに痙けい攣れんしはじめたそいつをポイッと放ほうり投げ、全員を順々に見た。

「しばらく私語厳禁！　何があるかわかんないんだから！　あの下等竜みたいなやつがもういないともかぎらないし！　水の中にだって、変なやつが棲すんでるかもしれないでしょ！」

「……今の・変なノ・でシタ」

「少しゆくなくとも……おし魚やかなの形はしてなかったわ……」

　うぉん！

「たしかに、見たことがない生き物だったね。アルファは興味があるって」

「ひへひへ。焼いて食うたらうまいんかのう」

「師父……おなかを壊こわしてしまいますぞ……」

「まあ、カレーの具にすれば、たいてい食えるだろう」

「あーだからうっさいってゆってるのに、こいつらはもう……！」

　ドタマにきたので、ちょうど水中からビョンッと跳とびあがって

襲おそいかかってきた生き物に腹立ちをぶつけてやった。そいつは籠手の矢を食くらいながらもマリアローズめがけて飛びかかってきたが、何のことはない。蚊かの止まるような速度だ。首をひねってひょいとよけてしまえば、それで終わりだった。

「いい？　無む駄だなことは一いつ切さい喋しやべらない！　黙だまって進む！　何かあったときだけ言って！　発言はハッキリ、わかりやすく、手短に！　わかった？　オーケー？」

「……はい」

「ウム……」

「はイ」

「うん」

　ぅぉん。

「ほへ」

「ああ」

　愛らしく首をすくめてすまなそうにしているユリカや、うつむいて反省している様子のピンパーネルは少々かわいそうだったけれど、誰であろうと特別扱あつかいはしない。今は非常事態なのだ。みんなで仲よく楽しく、というわけにはゆかない。そんなことはあとでいくらでもできる。いや、できるかどうかがこれからに懸かかっているのだ。

　マリアローズはふたたび進みはじめた。水の深さは首のすぐ下あたりだ。そのうち足がつかなくなるかと思いきや、水深はそれからあまり変わらない。流れはなく、味もないので、地下水か。ランプは、髭の肩の上にいるユリカが持っているものと、ロム・フォウとマリアローズが持っているものとで、あわせて三つだ。その明かりだけを頼たよりに闇やみをかきわけながら、マリアローズたちは先の見えない地下水路を往いく。

　すでに、ムソー老人の記き憶おくにある道順と一いつ致ちしていないことはわかっている。だいたい、その記憶自体、あるのかないのかも定さだかではないのだから、あてにしてもしょうがない。ただ、ジェードリの地下洞どう窟くつは複雑に入り組んでいるので、

ムソー老人がかつて覚えていたという奥おく殿どのへの隠かくし通路にたどりつく道順は、複数あるうちの一つにすぎないらしい──というのもムソー老人の証言だから、信じていいのかどうか。不安要素ばかりというか、不安要素しかないが、そうかといって、怖おじ気づいたり絶望したりしている暇ひまはない。

　進め。

　水を押おしのけるようにして、進め。

　時折、水中から、あるいは跳はねあがって襲いかかってくる謎なぞ生物を払はらいのけ、叩き落としながら、進んでゆけ。

「……光だ」

　最初は見み間ま違ちがいかと思った。

　でも、違う。

　遥か前方だ。どれくらい先だろう。正直、さっぱり見当がつかないけれど、行く手に闇以外の成分が存在することは間違いない。その事実が何を意味するのか。つい楽観してしまいそうになるが、気をゆるめるな。油断大敵というやつだ。たぶん、みんな同じ気持ちなのだろう。誰も声を発しない。もっとも、心持ち全員の速度が上がった気がする。それくらいはやむをえまい。光。あれが希望の灯ともし火びなのか。それとも失望の袋ふくろ小こう路じへと導く誘さそい火なのか。

　知りたい。

　確かめたい。

　早くはっきりさせたくて、マリアローズたちは急いだ。

　次し第だいに水深が浅くなってきた。

　首から、胸、腰こし、膝ひざ、もう水たまりに毛が生えた程度だ。

　途と中ちゆう、右へ折れる道があったが、無視してまっすぐ進んだ。

　気がつけば、駆かけ足に近くなっている。

　かまうもんか。

　水から上がったのだから、また地図を作ったほうがいいんじゃないか。

　いいや。

　今はいい。

　それよりも、知りたい。

　息が乱れているのは、走っているせいじゃなくて、この動どう悸きのせいだ。

　光。

　二十メーテルくらい先だろうか。

　かなりきつい上りになっているようだ。

　その向こうだ。

「……風？」

　誰だれの声だろう。よくわからない。マリアローズはもうしがみつくようにして登っていた。ごつごつした冷たい岩だ。この上に光がある。なんてまぶしい。風。たしかに、風だ。ああ。気持ちいい。新しん鮮せんな空気だ。そして、あれは──、

　空だ。

　青くはない。

　赤みがかった夕暮れの空だ。

　マリアローズはその空をつかみとるようにして、外に出た。

　そう、そこは外だった。

「──え……？」

　すぐ先に海が広がっている。

　見上げれば、岩がん壁ぺきがほぼ垂直に切り立っていた。

　下の岩いわ浜はままでは、せいぜい三メーテルくらいだろうか。

　万が一転落しても、死ぬような高さではない。まあ、落っこちてしまっても、それほど苦労せずに、また登ってこられるだろう。

「や、てゆうか、ここって……」

「む」

　隣となりからにゅっと首を突つきだしてきたトマトクンが、右のほうを見て少しだけうなった。

「惜おしかったな」

　たしかに。

　だって、右の方向、つまり、西の方角に目を転じれば、目的地がばっちり見える。

　人にん魚ぎよ岬みさきの上にそびえ立つあの建物は、まぎれもなくオストロス神しん殿でんだ。

　マリアローズはくらくらする頭をなんとか働かせて、ジェードリの地図を思い浮うかべた。マーマン地区は海に向かって張りだしていて、その先せん端たんというか、出っぱりが二つある。そのうちの一つが人魚岬で、もう一つの名前は知らないが、ようするに、ここだ。何を隠かくそう、今、マリアローズたちがいる場所こそがそれにあたる。

「……なんか、すっごく疲つかれちゃったよ、僕……」

「ん？　なんでだ」

「なんでだろうね……説明するのもめんどくさいんだけど……徒労感がさ……ここ、下からも登ってこられそうだしね……あんな遠くから迷ったり大脂羽蟲ゴツキーに襲おそわれたりしながらずっと地下通ってきて……何やってたんだろとか、バッカじゃないのとか、思ったりね……」

「ふむ。だが」

　トマトクンの手がのびてきて、頭を撫なでられた。

　髪かみがぐちゃぐちゃになっちゃうから、やめて欲しいんだけど、それ。

　まあ、今日はすでに汚よごれまくってるし、いいけどさ。べつに。

「だいぶ近づいただろう。もうすぐそこだ」

「……それは――」

　わかっている。

　無む駄だ骨ぼねを悔くやんだり、気落ちしたりしている場合じゃないってことは、わかっているんだ。

「それは、そうだけど」

「お前のおかげだぞ」

「……僕の？」

「ああ。俺は実際、こういうときにはたいして役に立たん。頼たよりない園長マスターだな」

「そんな、こと――」

　自分でもどうしてかわからない。泣きそうになった。

　寸前のところでこらえたが、危なかった。

「そんなこと、ないよ」

「だといいんだがな」

「戻もどろ。さっきのとこを曲がれば、西に進めそうだったから」

「ああ」

「きみにはあとでいっぱい働いてもらうしさ」

「そうだな」

　トマトクンは少しだけ笑って先に降りはじめた。かなり急な斜しや面めんなので、登ってきた体勢のまま、梯子はしごを下りるような要領で戻らないといけない。狭せまい穴だから、他ほかの皆みなは下で待機しているようだ。時刻は十六時を回っている。太陽は沈しずもうとしていた。もうすぐ日にち没ぼつだ。

7

　大いなる祈いのりの場から拝殿を貫つらぬいて正門に達する大だい柱ちゆう廊ろうを歩いていると、遠き日のことを思い出す。

　足を止めて、日が沈みゆく海の果てに目を向け、故郷に思いを馳はせた。

　暗黒大陸。あの地で聖なる暗Alune 黒の人間Lamunとして生まれ育ち、かつて竜りゆうが棲すんでいたという山の頂に至る長い階段で遊びほうけていた幼い兄弟は、運命の悪戯いたずらで生みの親を失い、養い親に捨てられ、海を渡わたり、やがて引き裂さかれた。

　兄よ。

　あなたはもう生きてはいまい。

　生きていたとしても、ふたたび会うことは叶かなわぬのだろう。

　あなたと離はなればなれになってから、私は生きるために、ただひたすら生き抜ぬくために、いくつもの罪を犯おかし、悔い改あらためロシュに帰き依えしてからも、戦場で人を殺す鬼おにとして生きた。

　兄よ。

　あなたの汚けがれのない目が忘れられない。

　リリアン、それは悪いことだ。悪いことはしちゃいけない。

　あなたの声がいまだに耳にこびりついている。

　ひもじくても盗ぬすんではいけない。

　憎にくいだけで叩たたいてはいけない。

　つらくても泣いてはいけない。

　兄よ。

　私が守ることができている言葉は、結局、最後の一つだけだ。

　二度とあなたに会うことができないのだとしても、私は泣かない。

　罪深い私には、涙なみだを流す資格などない。

　涙自体、すでに私の中には存在しないのかもしれない。

「──この世に生を受けてより、命果て死するその日まで、正しくあることができうるのならば、あるいは……」

　呟つぶやく声が大柱廊の両りよう脇わきに一定の間かん隔かくを置いて立っている兵たちの耳に届いたとしても、彼らがその言葉に何かを感じ、考えることはもはやないだろう。サー・ジューダスが彼らに対して何を為なし、それがどのように作用して、どうなったのか。リリアンは知らないし、知る必要もないと思っている。とにかく、今の彼らは神の戦士であり、神の代弁者であるサー・ジューダスが命じるままに動き、神の意に反することは決してない。
サー・ジューダスによって神の使徒に任ぜられたリリアンとヘンリーは、神に背そむかぬかぎり、彼らに協力を仰あおぐことができる。彼らは従うだろう。それが神の思おぼし召めしであるからだ。サー・ジューダスの〝裁き〟は神の御み心こころに添そうもので、それが成し遂とげられたとき、この世界が救われるからだ。

　兄よ。

　あなたのように清らかではありえなかった弟がようやく見つけた、これが正義だ。

　だが、すでにさまざまな汚れに冒おかされている私は、この正義にすら疑いを抱いだいている。

サー・ジューダスには、その疑心さえも見み透すかされているような気がして恐おそろしい。

懐かい疑ぎを隠かくして盲もう信しんを装よそおい、信じることで救われようとしている我が身が呪のろわしい。

ヘンリー・ブラックモア。結局、リリアン・イヌテロはあの男がうらやましいのだ。

戦いつづけることだけでおのれを証明できるあの男の愚おろかさと強さは、リリアンがいくら望んでも手に入れられないものだ。

救いを欲ほつして神にすがることはできても、サー・ジューダスのように神にすべてをゆだねることはできない。

「私は不全だ」

中ちゆう途と半はん端ぱなのだ。

「ふぜぇんだよ」

言ってみただけだ。

今のはさすがにうまくなかった。ヘンリーがいなくてよかった。

「……どうも調子が出んな」

小こ粋いきな冗じよう談だんも、聞かせる相手がいなければ切れ味が鈍にぶる。無駄な独り言も増えた。おそらく、ヘンリーも同じだろう。変わらないのはサー・ジューダスだけか。いや──、

あの方も以前と同じではない。

人は変わってゆくのだ。変わらざるをえない。あのトーロク山さん岳がく戦から幾いく星せい霜そう。当時の戦友たちは皆、逝いった。もはや生き残っているのはリリアンとヘンリーとサー・ジューダスだけだ。我らが歩む救済という名の修しゆ羅らの一本道は、背負った罪をすすぐべく前のめりに倒たおれていった同志たちと、罪を罪とも知らぬ無知で哀あわれな罪人たちの血と肉でできている。それゆえに、サー・ジューダスはあえてこのまがまがしき名をみずからの軍団に与あたえたのだ。

血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。

罪から逃のがれられぬ人の子は死して汚けがれを洗うべし。

我らはそのための手助けをせん。

身命賭として人の子に救いをもたらさんとす。

嗚呼ああ、ロシュとサー・ジューダスに栄光なき潔白の勝利あれ。

「私も救われたいのだ、兄よ」

おのれが救われたいから、他者を救わんとする。救いがたい罪の連れん鎖さだ。断たち切るためには、人が全ぜん滅めつする以外にない。単純明快だが、困難きわまりない道の、まだ途中だった。

大柱廊を駆かけ足でのぼってくる兵がいる。

リリアンは大柱廊をゆっくりと下りてゆき、自分のほうからも兵に近づいていった。

兵はリリアンの前で立ち止まると、死人のようなうつろな目で淡たん々たんと異変を報告した。

「──わかった。貴公は持ち場に戻もどれ。団長には私からお伝えする」

8

何をさがしているのですか。

考えつづけないと、それすらもわからなくなってしまいそうだ。

怖こわい。

放ほうっておけば、押おし流されてしまうことがわかっているから。

　ただ腹はら一いつ杯ぱい喰くらって、眠ねむくなったら寝ねて、目が覚めたら空腹で、だから喰って、それだけではいけないのかよ。

　いいだろう？

　何も悪いことはないだろう？

　高望みするなよ。自分を見誤るなよ。おまえはどうせ、たいしたものじゃない。ろくなものじゃない。喰らうしか能がない生き物だ。そうじゃないと思いたいだけだ。やつのせいだよ。アジアン。アジアン。アァァァァァァジアァァァァァァァァン。あの呪のろわれた王子のせいだ。やつの呪いだ。あんなやつに出会わなければよかった。夢を見ずにすんだ。おれはもう満たされない。いっそ、あいつを喰ってしまいたいな。あの美しい王子様を平らげてしまえば、この呪いもとけるかもしれないな。なんだか、それしかないような気さえする。そうすれば、片がつく。おれは戻れる。本来のおれに。ひどく醜みにくい喰らって喰らって喰らうだけの生き物に。

　もう日が沈しずんだ海にぷかぷか浮ういていると、叫さけびだしたくてたまらなくなる。

　助けてくれ。

　おれを救ってくれよ。

　裸足はだしの海岸に流れついたあの日のように、おれを拾いあげて、あたためてくれ。

　無理だ。

　わかっている。そんなことは夢物語だ。あの日のおれが今のおれのようだったら、よってたかって殺されていただろう。それか、一人で勝手に目を覚ましたおれは、獲え物ものを求めてジェードリをうろつき回る人食いの化物となっていただろう。ジェードリで知りあったあの人も、あの人も、おれはこの手にかけて、喰らっていたかもしれない。夜道でローラに襲おそいかかって喰らったり、ステラを骨までしゃぶりつくしたり、ラッチャやテッドを骨ごと喰らったり、アンナやミミを丸のみにしていたかもしれない。ありえない、なんていえない。おれなら、やる。やりかねない。今はその可能性を考えただけで気が狂くるいそうになるけれど、明日はどうか

わからない。明後日あさつてには、彼女たちを、彼らを喰らうことを妄もう想そうして笑っているかもしれない。それどころか、実際、喰らうことを計画しているかもしれない。もう喰らってしまっているかもしれない。

　それが習性なんだ。

　おれはそういういのちなんだ。

　いいかげん、認めろ。

　帰りたい、なんて考えるな。

　戻りたい、なんておこがましい。

　喰らいたい。

　誰だれも彼も喰ってしまいたい。

　そうだ。

　それがお似合いだ。

「……いや、だ……」

　痛い。痛すぎる。胸が。思い出した。この痛みを消すために、何かしようと考えていたはずだ。何かしなければ、と。でも、それがわからなくて。どうしたらいいか、見当もつかなくて。海に飛びこんだ。沈んでしまおうとした。ところが、知らなかった、おれときたら、水の中でも息ができる。いくらでも潜もぐっていられる。おれってやつは、まったく化物だ。怪かい物ぶつだ。それなのに、助けて欲しいだなんて。この期に及およんで、望まれたいだなんて。

　ルカ。

　虫がよすぎる話だよ。

　おれは憎にくい。あの神しん殿でんから聞こえてくる声が。救う、だと？　おれを？　おまえがおれを救えるとでも？　ふざけるな。おまえの救いなんて求めてない。いらない。おれが欲しいのは、おまえじゃない。ああ。そうだ。それが本音だ。おれはあさましく求めている。おれを望んでくれるものを。おれは岸に向かって

泳ぎはじめた。あの声がうるさくてかなわない。



9

少し前から期待感は膨ふくらんでいた。それも、おおよその距きょ離りや方角がわかっているぶん、根こん拠きよのある期待だったし、そろそろ確信してしまってもよさそうだ。

このあたりは、自然の洞どう窟くつではあるのだろうが、完全に人の手が入っている。段差があれば、岩を削けずって簡単な階段にしてあるし、岩がん壁ぺきをくりぬいて灯火台らしきものを設しつらえた跡あとも見受けられる。ロム・フォウの背中でぴーすか寝ね息いきを立てているムソー老人を叩たたき起こして確かく認にんするまでもない。もうあと三十メーテルほどで洞窟の旅も終わりだ。その先には、何やらぼんやりとした緑色っぽい光を放つ空間が口をあけている。あの先が奥おく殿どのへと通じる隠かくし通路というやつだろう。そうでなかったとしたら、泣く。今度は我が慢まんせずに泣いてやる。でも、どうやら泣かずにすみそうだ。

「……ほひょ」

ムソー老人が目を覚まして、「あー」と邪じや気きのない赤子みたいな声を出した。

「ここじゃ、ここじゃ。間ま違ちがいないわい。こん先にどうむがあってのう、その真ん中に奥殿の下の部屋まで行ける昇しよう降こう機きがありよるのんじゃ」

「ドーム？」

「ほうじゃ。でっかいキ●タマを半分にしたような形の部屋じゃ」

「なんで比ひ喩ゆの対象によりにもよってそんなもの選ぶのかな……」

マリアローズはぼやきながら方眼紙だの鉛えん筆ぴつだのを背負い袋ぶくろの中にしまった。ドームとやらを前にして、準備を万ばん全ぜんにしておかなければならない。そこにいるという門番については、すでにムソー老人が把は握あくしているかぎりの情報を教えてもらっているが、所しよ詮せん、おじいちゃんは坊ぼうさんだ。しかも、無む抵てい抗こう主義を掲かかげていたオストロス神

殿は、暴力とは無む縁えんの場所だった。そういうわけなので、ムソー老人の言葉はあくまで参考にするだけにとどめておいて──まあ、ここまでの道のりもほとんどそうだったわけだが、とにかく、あまり先入観にとらわれず、臨機応変に対応したほうがいいだろう。さいわい、ＺＯＯのメンツはわりあいそういうやり方に慣れている──というか、そろいもそろって先天性行き当たりばったり症しよう候こう群ぐんという、もしかしたら不治かもしれない重病を抱かかえているだけだが、ともかく、ここまできたらガッチリ気合いを入れて、門番だろうが何だろうがやっつけるしかない。覚かく悟ごなんかとっくに決まっているのだ。作戦も立ててある。作戦と呼べるほどの作戦ではないが。

「よし」

　トマトクンが皆みなを見まわした。

「ここからは打ちあわせどおりだ。俺と髭ひげ、ピンプが突とつ入にゅうして、ロム・フォウは後ろから掩えん護ご、ユリカとマリアはご老公とカタリを守れ。アルファは──」

　うおん！

「トマトの指図は受けない、と言っているよ」

「そうか。まあ、好きにしろ。それから、マリアとユリカの位置だが、遠すぎると、いざというときにカバーできん。入口の近くにはいてもらう」

「わかったわ」

「じゃあ、入口付近にロム・フォウ、僕たちがその後ろで、トマトクンたち三人は前に出るってかんじかな」

「うむ。そんなとこだろう。何かあるか」

「拙せつ僧そうはない」

「ありまセン」

「ないわ」

「僕も大だい丈じよう夫ぶ」

「あたしもべつにないよ」

　わおん！

「おおう、ほうじゃ、ちょっとええかのう」

　ロム・フォウの背中から下りて、久々に自分の足で立ったムソー老人が、枯かれ木のような手を挙げた。

　いやな予感がした。

　それはマリアローズだけではなかったらしい。「……どうぞ」とムソー老人を指名したトマトクンも、表情がやや曇くもっていた。

「じつは、今、思い出したんじゃがなあ」

「……とりあえずさ。忘れてたって言うんだからしょうがないし、せっかく思い出したんだから言っといてもらわないと困るけど、これで最後にしてよ？　もうギリギリだからね？　わかるよね？　百二十四年も生きてきて、それくらいわからないわけないよね？」

「ふぉむ。心しよう」

「絶対だよ。で？」

「おお、ええとぉ……何じゃったかのう」

「ふうん」

「じょ、ジョーダンじゃ。ジョーダン。その籠こ手てを向けるのはやめい。矢みたいなのが出よるのじゃろう。ぷすっと刺ささってもうたら大おお事ごとじゃ。そのう……門番のことじゃ」

「門番がどうかしたの」

「わしゃひとっつのことしか教えとらんかったけどなあ」

「一体ってこと？」

「ほうじゃなあ」

　こくんとうなずいてみせたムソー老人の頭を叩き割ってしまいたくなったが、まだこのおじいちゃんには役に立ってもらわないとい

けない。耐たえろ。耐えるんだ、僕。でも、この借りはいつか必ず返してやる。そうしないと、気がすまない。ただ、今はひたすら我慢だ。

「……何体いるわけ。ぜんぶで。怒おこらないから、言ってみて」

「ちっちゃめのが、たぁくさん──」

「忘れないでよ！　そういうことは！　どういう頭の構造してるんだよ、このジジイ！」

「まあ、落ちつけ、マリア」

「だって、トマトクン、このおじいちゃんってば──」

「涙なみだぐむようなことでもなかろう」

「涙ぐんでなんかないよ！」

　マリアローズは袖そでで目の周りをゴシゴシこすってから、あらためてムソー老人をにらみつけた。ムソー老人はとぼけているつもりか、ぼんやりとあらぬ方を見て口をくちゃくちゃさせている。このドグサレクソボケおジジ様め。

「とにかく」

　トマトクンはマリアローズの肩かたを軽く叩たたいて、大たい剣けんの柄つかに手をかけた。

「敵の数が増えたからといって、俺たちのやるべきことが変わるわけじゃない。ドーム突入後は、ご老公とカタリを護衛しつつ、門番を掃そう討とうする。全体的な指示は俺が出すが、乱戦になる可能性もあるし、前にいると見えないこともあるからな。そのあたりは、マリアに任せる。ユリカとロム・フォウはマリアをサポートしてやってくれ」

　ロム・フォウとユリカがそれぞれうなずいて、マリアローズを見た。ためらいはなかった。ぐずぐずしている場合ではないし、もう腹は据すわっている。どうせ戦せん闘とう能力という面ではたいして足しにならないのだから、それ以外の部分で役に立つしかない。

「やってみるよ。てゆうか、やる。できるかぎりのことは」

「じゃあ、行くぞ」

　力強いトマトクンの声だったが、気負いは感じられなかった。マリアローズは気合いが入るのと同時に、やれるんだ、と思えた。緊きん張ちようはしているものの、身体からだがガチガチになったり、足あし許もとがふわふわしたりはしていない。集中していながら、視野が狭せばまったり、周りの音が聞こえなかったりするわけでもない。不安はもちろんある。でも、怖こわくはない。焦あせりもない。

　トマトクンが歩きはじめた。

　雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣を手にしたピンパーネルと髭ひげがそれにつづいた。

　ロム・フォウとユリカとマリアローズは三人がかりでカタリをかつぎ、その後ろについた。

　ムソー老人が杖つえをついてよたよたついてくる。

　アルファは最さい後こう尾びだ。

　およそ三十メーテル先にドームの入口がある。

　マリアローズは六十三歩でそこまでたどりついた。マリアローズの歩ほ幅はばは約五十サンチだから、歩測で三十一・五メーテルということになる。目測はおおよそ正しかったわけだ。

　こうして足を踏ふみ入れたドームは、特とく殊しゆな塗と料りようでも塗ぬられているのか、それとも、材質のせいなのか、その全面が緑色がかったほのかな光を放っていた。

　たしかに、椀わんをひっくり返したような半球形だ。直径は五十メーテルほどもあって、かなり広い。その中心にある天てん井じようまで達する筒つつ状じようのものが、おそらく昇しよう降こう機きだろう。

　そして、やつらは昇降機を囲むように整列して、マリアローズたちを待ちかまえていた。

「──あれが、た魂まし集いあつめ百七号……」

いったいどういう経けい緯いで、オストロス神しん殿でんの地下にあんなものが運びこまれたのか。神殿が建てられたのは、サンランドが成立してほどなくのことらしいので、もうずいぶん昔だ。ムソー老人が言うには、奥おく殿どのにも当時の記録は残っていなかったようだから、そのあたりの事情を知るすべはもはやないのかもしれない。

それにしても、まさかこんな場所で、あの疑ぎ似じ生命体と再会する羽目になるなんて。

いや、いつか閉へい鎖さ魔まき宮ゆうで出くわしたあの魂集めとは、当然、別の個体なのだが、同類であることは間ま違ちがいないだろう。

まず名前が、ムソー老人曰いわく、魂集め百七号だし。

姿形だって、なんとなく似ていなくもない。

百七号は、人に似た形はしているが、本物の人間というよりも、こどもが手作りした人形といったかんじだ。頭はなく、胸のところに口とおぼしき真っ赤な三日月形の裂さけ目があって、その中には黄ばんだ歯が並び、包丁みたいな刃は物ものを両手に一本ずつ握にぎっている。閉鎖魔宮の魂集めと比べればぜんぜん小さいものの、それでも五、六メーテルくらいはあるだろうか。

さらに、百七号の周りに、ほぼ同型で大きさは三分の一くらいの魂集めたちが、七、八、九、十──ぜんぶで十三体もいる。

「……でもさ、べつにあれ、そんなに小さくないから。百七号よりは小さいってだけで」

「わしゃただちっちゃめとゆうただけで！　ものすっごいちっちゃいとはひとっこともゆうとらんわい！」

「や、そんなキレられても」

「ひょへ。先にキレといたったら、怒られんですむかと思うてのう」

「……いいけどさ。もう。年のわりにほんっと元気だよね、おじいちゃん」

「しかし、動かんな」

　先頭のトマトクンと百七号との距きょ離りは二十メーテルといったところだろうか。百七号をはじめ、魂集めたちが動きだす気配はない。ここから眺ながめていると、単なる出来の悪い彫ちよう像ぞうにしか見えないが、もちろん油断は禁物だ。ユリカと一いつ緒しよにドームの入口でカタリとムソー老人を守る態勢をととのえたマリアローズの前で、ロム・フォウが弓をかまえて矢をつがえた。その脇わきでは、アルファも身を低くしていつでも飛びだせそうな姿勢をとっている。髭はトマトクンの右について、ピンパーネルは左だ。トマトクンはさらに百七号に接近しようと足を踏みだしかけて、やめた。

「──む。そういえば、あいつは見たことがある」

「え？」

「魂集めは悪魔どもが作った玩具のトイソル兵隊ジヤーだ。つまり、やつらが捨てていったものを再利用したわけか。魔術に弱いという欠点があったから、あのころはさして脅きよう威いにはならなかったが、今の俺たちにとっては楽な相手じゃない。あいつは見かけより素す早ばやくて厄やつ介かいだぞ」

「百七号……？」

「名は知らん。でかいやつだ。小さいやつらには、あいにく見覚えがない。覚えてないだけかもしれんが」

「きみって──」

「俺はとりあえずでかいやつを狙ねらう。あとは任せる。やるぞ」

　わざとマリアローズの問いかけをさえぎったわけではないと思う。きっと、もう魂集めたちを薙なぎ倒たおすことしか頭にないのだろう。トマトクンが駆かけだすと、マリアローズも口にしかけた疑問のことなんて忘れた。髭とピンパーネルは、少し間をあけてトマトクンを追うつもりのようだ。ロム・フォウはすでに弓を引き絞しぼっている。どのタイミングで矢を放つのか。マリアローズはあえて偽にせ劫ごう火かを抜ぬかず、ベルトのホルダーに手をかけた。視線の先ではトマトクンが大おお股またの四歩目を踏みだしたところだった。

ＡＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ……！

なんだ。この声。叫さけび声？　わからない。いや、やつだ。百七号の口から発せられた声だ。ついに百七号が動きだしたのだ。やつは、速い――なんてものじゃない。トマトクンとの距離はまだ十メーテル以上あったのに、それが無になってしまっていた。攻せめかかろうとしていたはずのトマトクンが、一いつ瞬しゆん後には百七号の包丁をかろうじて大たい剣けんで受け止めているなんて、どんな冗じよう談だんだろう。むろん、冗談でも目の錯さつ覚かくでもないことはマリアローズもわかっているのだが、あの巨きよ体たいであの身のこなしは現実離ばなれしている。絶対おかしいって。

それでも、トマトクンは怯ひるまずに立ち向かってゆく。大剣をひたすら休みなく振ふり回して、まずは百七号を近づけまいとしているのか。ただ、百七号が持つ二本の包丁も、トマトクンの大剣より一回り小さいくらいの大きさはある。身体からだの大きさを考えれば、リーチは百七号のほうが遥はるかに長いだろう。しかも、百七号は二刀流だ。巨大といってもいいだろう三本の刃物がガツガツバツンバツン衝しよう突とつしあって火花を散らしているさまを見ていると、両者一歩も譲ゆずらず互ご角かくの勝負を演じているようにも思えるが、果たして本当にそうなのか。今のところは何ともいえないし、百七号だけに注意を向けているわけにもゆかない。

百七号につづいて、他ほかの魂集めたちも動きはじめたからだ。

マリアローズの真正面にトマトクンと百七号がいて、その右方向へ髭ひげが、左方向へピンパーネルがそれぞれ突とつ進しんしてゆこうとしているが、それより早くロム・フォウが矢を放った。矢は一直線に飛んでいって、百七号の右後ろにいる魂集めに命中した。口のちょっと下あたりだ。しかし、そいつはびくともしない――と、思う間もなかった。ロム・フォウは間を置かずに二連射した。右手首の真ん中あたりに、二本の矢がほとんど重なるようにして突つき刺さった。すごい。すごすぎる。あれはもう神かみ業わざだ。ところが、魂集めは包丁を取り落とすことさえしない。まるできいていないようだ。

傍ぼう観かん者のマリアローズとしてはちょっとショックだったが、当事者のロム・フォウはすでに弓と矢や筒づつを捨てて剣を抜こうとしている。さすが、切り替かえが早い。見習わないと。そうだ。そういう部分ならマリアローズでも真似まねできる。ああいう

のは二百パーセント無理だが。

「──ムゥンッ！　鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術秘闘法〝具グ流ル虞グ留ル磨マ気キ〟ィッ……！」

　髭の全身がパンッパンに膨ふくれあがった。何だよ、あの筋肉。何度見ても気色悪い。そのぶん、こんなときには頼たのもしいといえないこともないのだが、そうくるとは思わなかった。

　髭は握りかためた両の拳こぶしを左右に突きだし、右足を軸じくにして回りはじめたのだ。

「グワッハッハッハッハアァァァァ……！」

　あれはいったい何だ。独楽こまだ。筋肉独楽だ。

　押おしよせる魂集めの群れに、筋肉独楽が突入しようとしている。

　魂集めたちもこれを阻そ止しすべく包丁で迎むかえ撃うとうとしたが、髭はすんでのところで膝ひざを曲げて身を低くした。それでも回転は維い持じされている。筋肉独楽は健在で、まずは先頭の魂集めをドッカーンと盛せい大だいにぶっ飛ばした。その斜ななめ後ろにいた魂集めも犠ぎ牲せいになった。さらに、もう一体。その直後だった。突然、回転軸がぶれた。髭はすっ飛んで転てん倒とうしてしまった。すぐに起きあがったものの、やや足あし許もとがおぼつかない様子だ。

「──もしかして……」

「ヌゥゥ、即そつ興きようの秘闘法ゆえに！　思わぬ欠点がァッ！　拙せつ僧そうの目がァァッ……！」

「そりゃあんなことしたら目くらい回るでしょ！　予想しとこうよ、それくらい！」

「でも、思いちゅきであんな技わじやを出しぇるなんて、やっぱりしゅごいわ！」

「……うん、まあ、すごいとは思うけどね。違ちがう意味でね」

　たまにユリカがわからなくなるときがある。

　ともあれ、髭はふらふらしながらも、なんとか魂集めどもの包丁をかわしているので、見ていて気が気でないといったかんじではない。ただ、そんな髭を無視してこっちに迫せまってこようとしている魂集めもいるし、筋肉独楽がぶっ飛ばした三体も立ちあがろうとしている。髭みたいに馬ば鹿かげたことをしないピンパーネルは、雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを駆く使ししてすでに一体を解体し終え、もう一体を半はん壊かいさせて、今も一人で二体の魂集めを引きつけてくれているが、それが限界のようだ。相変わらずトマトクンとガッツンガッツンやりあっている百七号ほどではないだろうが、あの魂集めたちもかなり手て強ごわい。具体的にどのあたりが手強いのかしっかり分ぶん析せきして、勝利の方程式を立てるための時間があればよかったのだけれど、残念ながら、そうは問屋が卸おろしてくれなかった。

「──右から三、左から二……！」

　マリアローズが叫ぶなり、ロム・フォウが右に進みでて、アルファがそれにつづいた。一人と一頭の動きを見て、すかさず左に出たユリカの背中を眺ながめているだけの自分が悲しい。でも、いざとなったら身を挺ていしてカタリとムソー老人を守る者が一人は必要だし、マリアローズごときがうろちょろしていたら、かえってロム・フォウやユリカの邪じゃ魔まになる。自分がここにいる理由や意味、自分自身の価値なんかどうでもいい。どうしても考えたいのなら、あとで考えろ。余計なことは頭から追い払はらえ。とにかく、願え。声に出して仲間たちの集中を乱してはいけないから、心の中で応おう援えんしろ。それより何より、全体の状じょう況きょうをつぶさに観察して、みんなを少しでも支援しろ。それが僕の仕事だ。今、僕にできることだ。できることをやれ。

　ロム・フォウがモトロール刀を左下から右上に振り上げ、突っこんでくる魂集めをぶった斬ぎろうとしたが、相手は寸前で急停止した。その右足をアルファが一ひと咬かみで食いちぎった。それでも魂集めは倒たおれず、半分になった右足と左足でバランスをとって、包丁を振るおうとした両手が、きれいに斬れ飛んだ。ロム・フォウだ。さすがに種族を超こえて通じあっているだけあって、いいコンビネーションだ。ユリカは極限クライマックス九手ナイン棍ボールで突きまくり、包丁を叩たたき落としたり、足を払って転ばせたりして、二体の魂集めをまったく寄せつけない。ユリカらしい適切な判断で、やつらの活動を停止させるよりも、脅きょう威いを減らし、接近を妨さまたげることに重点を置いているようだ。髭は

ようやく復調したか。いくらぶん殴なぐっても埒らちが明かないとわかり、殴り倒した魂集めをひっつかまえて、腕うでだの足だのをねじ切る方針に変えたみたいだ。しかも、手足がなくなった魂集めも、ぶん投げて他の魂集めを牽けん制せいするなど、ちゃんと有効利用している。かなり強ごう引いんだが。それとは対照的に、一体、また一体と、魂集めを無む駄だなく確実に完全解体してゆくピンパーネルの身のこなしと雄おすのグレアデと雌めすのリレッザの舞まいは、もはや芸術の域に達している。思わず見入ってしまいそうになるが、いけない、それどころじゃない、トマトクンと百七号は膠こう着ちゃく状態か、いや、それよりも、ユリカが相手にしていた二体の魂集めが──、

「飛んだ……！」

　正確にいえば、一体がもう一体の肩かたに跳とび乗り、そこからさらに跳ちよう躍やくしたのだ。くる。やつはこっちにくる。右手に持った包丁を振りかざして、空中から襲おそいかかってこようとしている。カタリとムソー老人が危ない。てゆうか、僕がやばい。

　どうする、とは考えなかった。

　考えている余よ裕ゆうなんかなかったし、ユリカが振り向いた瞬しゆん間かん、身体からだが動いていた。

　マリアローズは偽にせ劫ごう火かを抜ぬきながら駆かけだして、ユリカとすれ違った。

　目の前に、踏ふみ台になったほうの魂集めがいる。

　やつは、突然、自分に背中を向けたユリカに追い打ちをかけるべく、包丁を突つきだそうとしているところだった。

　ユリカのおかげで、やつが持っている包丁も一本だけだ。とはいえ、あんなものでグッサリやられたら無事ではすまない。じゃあ、怖こわいかといえば、そうでもなかった。マリアローズは落ちついていた。冷静にスライディングの要領でやつの足あし許もとに入りこみ、偽劫火を右の足首あたりに叩きこんだ。肉や骨の手て応ごたえではなかった。粘ねん土どでも斬ったようなかんじだった。断面はオレンジ色で、生っぽい質感ではあったが、体液らしいものは見られなかった。とにかく、斬れた。でも、こいつらはこの程度でどうにかなる相手じゃない。マリアローズが立ちあがると、案の定、

やつは右足の丈たけが少々短くなったことなど物ともせず、包丁を振ふり回してきた。速い。目がついてゆかない。よけられない、と思った。とっさに偽劫火で弾はじいた。手が痺しびれた。体勢が崩くずれそうになった。強い。僕はこいつに勝てない。弱気になったわけじゃなく、勝てないものは勝てないのだから、仕方ない。それを認めた上で、何をすればいい？　僕にいったい何ができる？

一つしかない。

時間稼かせぎだ。

ただ、それにしたって簡単じゃない。げんに、やつの包丁ばかりに気をとられていたら、鋭するどい回し蹴げりが飛んできた。左手でガードしたつもりだったが、脳が揺ゆれた。一瞬、自分がどこにいるのかわからなくなった。しっかりしろ。やつがくる。包丁が振り下ろされる。逃にげろ。転がれ。間かん一いつ髪ぱつだ。やつの包丁はマリアローズではなく床ゆかに突き刺さった。その瞬間、偽劫火をやつにぶっ刺そうとしたが、その手をつかまれた。やつの左手だ。痛い。骨が砕くだける。すごい力だ。でも、痛みで我を忘れるな。やつの右手が床から包丁を引き抜いた。あれで脳天でも割られたらお終しまいだ。どうする？　どうするもこうするもない。マリアローズは左手でやつの右手首らしき部分をつかみ、さらに両足をやつの右腕にからめた。何かの拍ひよう子しで右手が自由になったので、偽劫火をやつの脇わき腹ばらに思いきり突き刺し、あとは全身の力をすべて使ってやつの右腕にしがみついた。包丁。包丁だけは封ふうじないと。やつは左手でマリアローズを引き剝はがそうとしたが、すぐに断念して今度は後頭部を何度も殴りつけてきた。連続ですごい音がした。容よう赦しやなさすぎ。いくら頭ず蓋がい骨こつは硬かたいからって、そんなにされたら割れちゃうって。頭悪くなっちゃうって。けど、放さない。放すもんか。なんだかもうよくわからないけれど、放したらやばい気がする。もうやばいけど。や、ほんと、やばいから。これ、まじ、しぬ。

後頭部をかばおうとして、マリアローズの左手がやつの右腕から離はなれた。

しまった、と思った。

我に返って、もとの体勢に戻もどそうとした。

「離れて、マリア！」

「──にゃれ？　あ……！」

　マリアローズの身体が、魂集めの右腕からするりと抜け落ちるような恰かつ好こうになった。着地は無様だった。どこをどう打ったのか自分でもわからないが、あちこち痛かった。痛いということは、生きている。助かった。違ちがう。助けられたのだ。

「排はい、排、排、排、排、排、排、排、排っ！」

　ユリカの棍こんが、魂集めの右肩から始まって、右の脇腹、両足の付け根、左脇腹から左肩まで、円を描えがくように突いていった。最後はその円のちょうど中心、腹の真ん中あたりだった。

「──砕さいっ……！」

　さすがに目を疑った。

　風船じゃあるまいし、魂集めの胴どう体たいが内側から破は裂れつするなんて、にわかには信じがたい。

　でも、マリアローズのすぐそばにオレンジ色の物体を大量にぶちまけながらバッタリ倒れたのは、間違いなく魂集めだ。

「鵺流古式戦闘術奥おう義ぎ、威い天てん烈れつ砕しやい。──大だい丈じよう夫ぶ、マリア？」

「……うん、だぃ──」

　マリアローズは言いかけてやめ、後頭部を押おさえた。危なかった。同じあやまちを繰くり返すところだった。自分はまだ冷たい石か金属の床に横たわっていて、そのこともよくわかっていない状態で、こんなに頭が痛い。それなのに、軽々しく大丈夫なんて言っちゃだめだ。

「頭がちょっと──だいぶ、痛いかも。後ろのほうが。あとは、自分でもわかんなくて」

「診みしぇて」

「や……待って」

　マリアローズはなんとか片かた膝ひざ立ちになって、周りに目を

配った。ロム・フォウとアルファはすでに三体の魂集めをやっつけて、すぐそばにいる。髭ひげが放ほうり投げた魂集めは何体目なのだろう。とりあえず、髭のそばに立って動いている魂集めはいない。ピンパーネルも最後の魂集めをバラバラの残ざん骸がいに変えたところだ。振ふり返ると、入口のところで杖つえを抱かかえるようにしてムソー老人がしゃがみこんでいた。その足許にはカタリ入りの保温袋ぶくろが横たわっている。ムソー老人が杖の先でかき混ぜているのは、破裂した魂集めだろう。結局、ユリカが二体とも片づけてくれたわけだ。若じゃっ干かん情けないが、予定どおりではある。つまり、ユリカは先にムソー老人らを危機に陥おとしいれていたかもしれない一体をしとめて、その間、マリアローズがもう一体を引きつけておく。あのとき、ユリカと目があった瞬間、マリアローズは、ああ、そういうことか、と理解したし、ユリカもマリアローズを信じてくれたのだと思う。結局、どうにかうまくいったのだ。よかったよかったと喜んでなんかいられないが。

「お願い、ユリカ」

「任しぇて」

　ユリカに医術式を施ほどこしてもらいながら、マリアローズは決して目を離さなかった。

　戦いはまだ終わっていないのだ。

　トマトクンと百七号が飽あくことなく打ちあっている。一進一退。互ご角かく。一見、そう思えないこともないが、違う。第一に、少々息が乱れているトマトクンに対して、生き物ではない百七号のほうはまったくそんなことはない。だったら、百七号が優勢なのか。いや、そうとはいいきれない。なぜなら、トマトクンの大たい剣けんは刃はこぼれ一つしていないが、百七号の包丁は二本ともボロボロだ。さらに、百七号が従えていた十三体の魂集めたちはすでに壊かい滅めつした。あの巨きょ体たいには似合わない表現だが、百七号は孤こ立りつ無む援えんだ。それに比べて、こちらは髭とピンパーネルがトマトクンに加勢しようとしてる。

「──でやあああぁぁっ……！」

　そして、ついに、トマトクンの大剣を受け止めた百七号の包丁が、粉々に砕け散った。

　これで百七号の包丁は左手の一本だけだ。トマトクンはこの機を逃のがさず、百七号を激しく攻せめたてた。百七号にしてみれば、これまで包丁で弾はじき返せばよかった斬ざん撃げきを、かわさなければならないケースが増えることになる。しかも、ここにきてトマトクンは加速していた。疲つかれているはずなのに、さっきよりも明らかに速い。髭とピンパーネルが近づけないほど、トマトクンは猛もう烈れつな勢いで百七号を押しこんでいる。今までわざと力を抑おさえていたんじゃないか。そんな印象さえ受けるくらいの圧あつ倒とう的な攻こう勢せいで、百七号の黒い身体からだはみるみるうちにオレンジ色の傷だらけになっていった。ひょっとして、このまま押し切ってしまうかもしれない。あるいは、百七号もそういう気配を感じとって、このままではいけないと思ったのか。まあ、魂集めに何か思ったり考えたりする機能が備わっているのかどうか、マリアローズは知らないが。

　百七号がいきなり飛び退すさった。

　十メーテル以上の大ジャンプだ。一っ飛びであっち側の壁かべまでいった。ただ、いったん距きょ離りがあいたことをきっかけに、髭とピンパーネルが左右から百七号に迫せまろうとしている。もちろん、トマトクンは言わずもがなだ。三対一に持ちこめる。トマトクン一人でも百七号を押しまくっていたわけだし、形勢が不利になるとは思えない。治ち療りように専念してくれているユリカには申し訳ないが、思わず拳こぶしを握にぎりしめて叫さけびそうになった。よし。勝てる。いけ。やっちゃえ。そうだ。もうじたばたしたってどうせ無む駄だなんだから、観念しておとなしくしてればいいんだ。そう、そこで、大きく口を開けて、ＵＵＵＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ□□って、え？　何？　ねえ、何それ？　何しようとしてるわけ？　嘘うそ。ちょっと。マジ？　マジ、らしい。トマトクンたちは足を止めた。でも、引き返せばいいのか、散ればいいのか、それともやっぱり突つき進むべきか、迷うところだろう。というか、迷う間もなく、百七号はやってくれた。ＧＯＢＡＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨ……！

　嘔おう吐としたのだ。それも、すさまじい勢いだった。吐はいた、なんてかわいらしいものじゃない。それは百七号の口から噴ふん出しゅつした。ねばりけがありそうなオレンジ色の液体だ。降りそそいだというより、トマトクンたちを猛もう襲しゅうした。持ち前の敏びん捷しようさをいかして逃にげおおせたのはピンパーネル

だけだった。トマトクンと髭はほとんどまともに浴びた。うわ。ひどい。実害はたいしてないかもしれないが、あんまりだ──と思ったのだが、何、あの湯気。というよりも、大量の蒸気だ。上半身裸はだかの髭が跳とびあがった。「アヅゥアアアアアァァァァァァァッ……！」

「トワニング……！」「髭！」「──トワニング！　トマト……！」

　ユリカに後ろからしがみつかれた。ロム・フォウも叫んだ。マリアローズは自分の首に巻きついたユリカの腕うでをしっかりとつかんで、だが、少し安あん堵どした。トマトクンは大剣を振って顔をぬぐい、髭は地じ団だん駄だを踏ふみながら身体をパシパシパシパシ叩たたいている。オレンジ色の液体をふき落とした髭の肌はだは真っ赤になっているが、どうやら大おお火傷やけどを負うほどの高温ではないようだ。とはいえ、熱いものは熱いだろうし、慣れれば平気、我が慢まんしようと思えばできるという温度でもなさそうで、その証しよう拠こに、一人難を逃れたピンパーネルが百七号に再接近を試みたときだった。またた。またやりやがった。ＧＯＢＵＳＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨ……！　さっきのが奔ほん流りゆうだとしたら、今度のは噴ふん霧むだ。トワニングがまたもや「ヅァヅゥゥォッ！」と跳びあがって、トマトクンもたまらず低く呻うめいて飛び下がり、今度は頭から浴びる羽目になったピンパーネルまで足が止まった。やはり、そうとう熱いらしい。しかも、それで味を占しめたのか、百七号はＧＯＢＡＡＡＡＨＨ！　ＧＵＥＥＥＥＥＥＥ！　ＤＯＢＡＡＡＡＡＡＨＨＨ！　ＢＵＳＨＡＡＡＡＡＡＨＨＨと吐きまくった。なんて卑ひ怯きような。いや、ずるいとか、潔いさぎよくないとか、そういう問題ではないのかもしれないが、汚きたないことは間ま違ちがいない。百七号はあっち側の端はしにいるため、嘔吐物はマリアローズたちがいるあたりまでは飛んでこないが、やたらとなまぐさい胸の悪くなる異い臭しゆうがするし、立ちこめる水蒸気で視界も悪いしで、もう何がなんだか。かろうじて、髭が飛び跳はねながら逃げ回っていることだけは声でわかるけれど、トマトクンは？　ピンパーネルは……？

「──ええい、髭ひげ、ピンプ！　いったん離はなれるぞ！　引き返せ……！」

「はイ！」

「ヌウウウウアヅアァァッ……！」

　しばらくすると、トマトクンたちが水蒸気の向こうから姿を現した。頭からペンキでもひっかぶったような有様だが、その液体の正体を考えると、悲ひ惨さんというか哀あわれというか。

　ただ、三人に同情してばかりもいられない。マリアローズはユリカと一いつ緒しよに立ちあがって目を凝こらした。ロム・フォウもアルファを脇わきに従えて剣を構えている。そのすぐ前で足を止めたトマトクンと髭、ピンパーネルも、また前を向いてそれぞれ身構えた。百七号は水蒸気の向こうでまだゲーゲーやっているようだ。やつは少しずつ近づいてくる。こなくていいのに。できれば、きて欲しくない。てゆうか、くるな。そんなマリアローズの祈いのりもむなしく、やつの影かげらしきものが見えてきた。あの不ふ愉ゆ快かいな音や足音もだいぶ近い。

「マリアとユリカは通路まで下がれ。ロム・フォウもだ」

　トマトクンが大剣をかつぐように構えた。

「髭とピンプは左右からやつの後ろに回りこめ。俺が囮おとりになる。いいな」

　ピンパーネルは即そく座ざにうなずいたものの、髭が唸うなりながら首を振ふった方向は縦というより斜ななめだった。その気持ちはわかるが、がんばって、としか言えない。それも、心の中で。マリアローズは涙なみだをのんでユリカとともに入口あたりまで引き返そうとして、途と中ちゆうでやめた。

「──あれ？」

　振り返ると、百七号が立ち止まっていた。は？　何？　なんで？　どうしたの？　おかげで、今まさに動きだそうとしていたトマトクンたちは気勢をくじかれた恰かつ好こうだ。でも、トマトクンは指示を撤てつ回かいしていない。やっぱりここはさっさと退くべきだろう。マリアローズはもう一度、踵きびすを返そうとした。そのときだった。ＧＯＯＵＵＥＥＥ…………ＰＰＵ！

　それは、盛せい大だいな──げっぷだった。

　まるでそのげっぷが断だん末まつ魔まの叫びだったかのように、

百七号は仰あお向むけにぶっ倒たおれた。

　その後、十秒たっても二十秒たっても、ぴくりともしない。

　玩具のトイソル兵隊ジヤーとやらの魂集めに、死ぬという言い方があてはまるのかどうかわからないが、まさか、死んだのか。

　それにしても、動かなくなった百七号をじっと観察していて気づいたのだけれど、なんか、妙みょうに小さくない？　あいつ、あんなに小さかったっけ……？

　いや、そんなはずはない。初めて見たときは五、六メーテルくらいあった。今は、倒れているからはっきりしたことはいえないが、せいぜい四メーテルといったところだろう。

　百七号は明らかに縮んだ。縮んで、死んだ。そう考えると、不思議でもなんでもない。何しろ、あれだけ大量に吐いたのだ。体内から出したぶんは、当然、減る。減らないとおかしい。身体からだの構成物のうち、三分の一を排はい出しゆつしてしまったら、普ふ通つう、生きてはいられまい。百七号はあまり普通に見えないが、その意味では普通だった。ようするに、そういうことだろう。

「……終わった━んだよね？」

「しゃあ……しょう思いたいわね」

　ユリカは苦く笑しようしながら肩かたをすくめてみせた。本当にそのとおりだ。そう思いたい。だが、必ずしも思いたいことが事実とはかぎらない。トマトクンが大きなため息をついて振り向いた。こっちを見たのではない。マリアローズたちのさらに後ろだ。カタリか。

「まったく、こいつは高い貸しだぞ。一生かけて分割で返してもらわんとな」

「利子モ・高いデス」

「とうてい払はらいきれぬかもしれぬな」

「でも、せめて元金くらいは返済してもらわないとね」

「そうだな」

　トマトクンが百七号に向きなおって、大たい剣けんの平で肩を叩たたいた。

「こいつを解体する。閉へい鎖さ魔まき宮ゆうの魂集めもしぶとかったしな。面めん倒どうだが、昇しよう降こう機きに乗っている間にまた動きだされでもしたら事だ。賭かけに出なけりゃならん局面はいくらでもあるだろうが、こんなことでリスクは冒おかせんからな」

　反対する者は一人もいなかった。作業のことを考えると鬱うつになるけれど、トマトクンは正しい。もしトマトクンが言いださなければ、マリアローズがしぶしぶ提案していただろう。これでカタリへの貸しつけはいったいいくらになったのか。あとでちゃんと計算しないと。そして、耳をそろえてきっちり払ってもらう。踏み倒そうったってそうはゆかないんだから。

10

「間もなく十八時です」

「ああ」

　ヘンドリック・カルマンの声に、左手で顎あごを撫なでながら軽くうなずいてみせた。右手は地面に突つっ立てた剣の柄つか頭がしらに置いている。五年前、惟い凰ほう院いん遺い跡せきから発はつ掘くつした霊れい刀とう〝大ダイ懺ザン悔ゲ嘯シヨウ〟だ。鞘さやから刀身から柄にいたるまで黄こ金がね色に輝かがやく〝東の原野の魔導王〟天テン正セイ具グ象シヨウの遺刀で、刃は渡わたり一・二メーテルの大おお太刀たちだが、羽根のように軽い。軽すぎるあまり、慣れるまで扱あつかいづらいくらいだ。数多あまたある秘蔵の品々の中でも、その稀き少しよう価値は十指に入るだろう。さらに、身にまとっている鎧よろいは魔導王〝鴉大帝グレイト・クロウ〟ギュンツァーが遺のこした〝摩訶マハーク鴉ロウ一式スーツ〟で、これも判明しているだけで世界に三着しかないうちの一着だ。幻まぼろしの巨きよ鳥ちよう、摩訶鴉マカガラスをモチーフにしたという、黒と金をあしらったややどぎつい外観だが、性能は一級以上といっても過言ではない。

　左を見れば、バルモア商会私兵隊の軍服を着て盾たてと弩剣ラバイユを持ったロックバード、ハミングバード、スネイクバード各中隊のそこそこ訓練された兵士たち千名余と、トレンチコート姿のパンカロ・ファミリーの約五十名が、それなりに整然とした隊列を組んでいる。

　右に目を向ければ、坂道の上にそびえ立つオストロス神しん殿でんの前に、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの兵どもが同じように列をなして、今か今かとその瞬しゅん間かんを待ちわびているかのようだった。

　私兵隊とパンカロ・ファミリーの混成部隊が、表参道と裏参道が交わる地点に集結し終えたのは、今から三十分前のことだ。刻限を早めたことによって、ジェードリを離はなれていたハミングバード中隊が合流できないのではないかと懸け念ねんされていたが、急ぎに急がせてなんとか間に合った。一方で、サリア・ベルとの戦せん闘とうで多数の死傷者を出したスネイクバード中隊は三分の一しか参加できず、レイディーバード中隊の再編制は結局、終わらなかった。これを、予定していた千三百人には届かなかったものの、四桁けたの大台には乗せた、と見るべきか。それとも、千には達したが、予定の数はそろえられなかった、と見るべきか。

　いずれにしても、時は満ちようとしている。

　あとは幕を切って落とすだけだ。

「よかろう」

　隊列の前に並んでいるのは、各中隊長および中隊長補三名ずつと、チーロ・パンカロにカルロ・ボッシ、そして、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーだ。

「諸君」

　ジョーカーが大懺悔嘯を鞘から抜ぬくと、低いどよめきが起こった。

「──諸君。己おれはジャン・ジャック・ド・ジョーカーだ。私兵隊の諸君には、貴様らの雇やとい主に臨時作戦参さん謀ぼうとして雇われた身だと見知りおいてもらおう。何？　知っている？　結構だ。情報に貪どん欲よくでない者は大たい抵てい早死にする。知り

すぎた者も時に死ぬことになるがな。今、笑った者。いいぞ。笑え。戦場で笑いながら死ぬ。痛快な死に様だ。そうは思わんか、ん？」

　隊列の両りよう端たんと真ん中に焚たかれた篝かがり火びに照らされて、不敵な薄うす笑わらいを浮うかべている顔がある。困こん惑わくの表情も見受けられる。明らかに意気ごみすぎた猪いのしし武む者しやがいる。過度の緊きん張ちようで強こわ張ばった顔もある。ジョーカーはそれらを眺ながめながら、ゆっくりと隊列の前を横切っていった。

「パンカロ・ファミリーの諸君には、亡なきエンツォ・パンカロの知ち己きであったと言っておこう。まあ、それこそ知っている者も多かろうがな。一応だ。そう━面と向かって彼奴あやつに言ったことはないが、いい男だった。おい、泣くな。カレーナの男が死んで泣く馬ば鹿かがどこにいる。笑い、愛し、憎にくみ、殺し、殺されるのがカレーナ男の華はなだろうが。そうだ、笑え。笑え！　笑ってみせろ！　己おれとともに、さあ、笑うがいい……！」

　笑い声がそこかしこで弾はじけた。私兵隊の者も大勢つられて笑っている。しかし、ジョーカーが大懺悔嘯の切っ先を坂の上に向けると、水を打ったように静まりかえった。

「そして、だ。そして貴様らは、己おれたちは、今、もうすぐだ、大輪の笑えみを浮かべて征ゆくだろう。見ろ！　あれが敵だ。殺すべき、蹂じゆう躙りんすべき、殲せん滅めつすべき、敵だ。よいか、決して敵を侮あなどるな。だが、恐おそれる必要は微み塵じんもない。なぜなら、貴様の左右を見ろ、そこに誰だれがいる、さあ、誰だ？　そう、戦友がいる。貴様は一人きりではない。己おれが真に恐れるべきものを教えてやろう。それは、惨みじめに、怯きよう懦だに、惰だ弱じやくに、敵ではなく、貴様自身に敗れることだ、戦友を見殺しにすることだ、戦友を守る盾にならぬことだ、戦友のために敵を殺す矛ほこにならぬことだ、戦友たちとわかちあうことになる勝利を信じぬことだ、雄お々おしく戦わぬことだ、その他のことは一いつ切さい、恐れるに値あたいせん！　貴様らはひたすら戦え！　戦っておのれの価値を証明せよ！」

　オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォ……！

　誰が命じたわけでも、合図したわけでもない。兵士たちは自然に

大声で叫さけびながら弩剣ラバイユや剣けんを天に向かって突きあげた。

　ジョーカーは両りよう腕うでを広げて、さらに声を張りあげた。

「無論！　勝利すれば、私兵隊の諸君には多額の特別賞しよう与よが出る！　そうだな？　だが、貴様らの社長はとんだ吝りん嗇しよく家かではないか！　この戦場で命を懸かけて勝利をつかみとろうとしている勇士たちに、二十万ダラーではあまりに安すぎる！　五十万ダラーだ！　約束しよう！　己おれは前社長のボリス・バルモアとは旧知の仲だ、任せておけ！　それから、パンカロ・ファミリーの諸君！　貴様らも蚊帳かやの外には置かぬ、安心しろ！　貴様らには、この己おれが直々に出してやる！　全員、五十万ダラーだ……！」

　兵士たちの叫び声はやまない。誰かが足を踏ふみ鳴らしはじめると、それはまたたく間に全体に広がった。ジョーカーは大懺悔嘯を振ふり上げた。

「敵を撃げき滅めつして神殿を奪だつ還かんすれば、貴様らはジェードリの英えい雄ゆうだ！　老人や餓が鬼きどもが拍はく手しゆ喝かつ采さいし、女たちは貴様らに群がるだろう！　名めい誉よのため、金のため、この街のため、いい女を抱だくため、戦友たちのため！　存分に戦うがいい！　すべてのために！　勝利を……！」

「勝利を！」「勝利をッ！」「──勝利を！」「勝利を！」「勝利を！」「勝利を……！」

「我が名はジャン・ジャック・ド・ジョーカーだ……！」

「ジョォォォォォォォォォォォカァァァァァァァァァァァァァァァァァッ……！」

「この己おれが貴様らを勝利へと導いてやる！　己おれを信じろ！　貴様自身と戦友たちを信じろ！　貴様らが欲ほつする勝利はすぐそこにある……！」

　ジョーカーはふたたび大懺悔嘯の剣先を坂の上に差し向けた。

　また静まりかえった。

「──手に入れるのではない、奪うばいとるぞ、勝利を。全軍、慌あわてず、急がず、ゆったりと、己おれのあとにつづけ。前進開始」

　ジョーカーが歩きだすと、今の今まで猛たけり狂くるう寸前だった兵士たちが、打って変わってひっそりと、だが、威い風ふう堂どう々どうと行進しはじめた。幅はばおよそ三十メーテルの坂道で、私兵隊は二十列縦隊、パンカロ・ファミリーはその右に二列縦隊を作っている。各中隊長、中隊長補、チーロとカルロがそれぞれ縦隊の前に位置し、彼らを引き連れる形で最先頭に立っているジョーカーに、一人、早足で歩みよってくる者がいた。

「臨時作戦参謀」

　わざわざ振り返る必要はなかった。ジョーカーはそれが誰かわかっている。

「何だ」

「あなたは、あくまで臨時作戦参謀です」

「それがどうかしたか」

「指揮官ではない」

「貴様は勝ちたくはないのか」

「もちろん、負け戦いくさより勝ち戦のほうが好みですが」

「己おれはやるとなったら勝つこと以外興味はない。そのために最善をつくす。あの酒は──」

「……は？」

「貴様、飲まんで正解だったぞ。えらく不味まずかった。保存も糞くそもない状じよう況きようだったから、やむをえんがな」

　いい兵隊はだいたい覚えている。よく戦い、なおかつ生き残る兵隊は、じつに少ない。

「これが終わったら、今度は旨うまい酒を飲ませてやる。楽しみにしていろ」

「浴びるほど飲ませていただきます」

　ヘンドリック・カルマンは一礼して自分がいるべき場所へと戻もどっていった。これだから人を使うのは面めん倒どうだ。その才能はありあまるほどにあるが、必ずしもおのれに向いてはいないことをジョーカーはよく知っている。駄だ馬ばにあわせて走る駿しゅん馬めは、鬱うつ憤ぷんがたまるのみならず、やがて脚あしを痛め、飛ぶように速く走ることはできなくなるのだ。そして、駄馬は脚を折るだろう。余人は知らぬ。だが、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーのそばには、ともに駆けることができる者だけいればいい。振り返りながら走るのはもうたくさんだ。ついてこられぬ者は置いてゆく。前のめりに斃たおれた友の名のみを心に刻もう。不確かな愛など語らぬ。それがもし愛ならば、黙だまって胸に抱いて死ねばいい。

　クローディア。

　貴様が傍かたわらにおらぬせいで、今の己おれはひどく残ざん忍にんな気分だ。

「全軍停止」

　ジョーカーが足を止めると、兵士たちも足並みをそろえて立ち止まった。

　オストロス神しん殿でんの約二百五十メーテル手前だ。その前に展開している血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの最前列までの距きょ離りは二百メーテルほどだろうか。すでに弩剣ラバイユの射程内だが、相手は盾たてを持ち槍やりを構え全身鎧よろいを身にまとった二百人程度の重装歩兵を前列に並べている。その後ろに控ひかえる百騎きほどの騎兵は、いつ突とつ撃げきしてくるのか。両りよう翼よくに配置されたおよそ三百人の軽装歩兵の動きにも、注意しなければならない。

　我が部隊は約千で、敵部隊はおよそ六百。

　もとより、相手を上回る物量で圧あつ倒とうするのが兵法の常道だ。ジョーカーとて、それが叶かなう状況ならば、好きこのんで奇き策さくを用いたりはしない。いたずらに戦せん況きようを複雑化させることなく、単純明快に、勝つべくして勝つ。他ほかの選せん択たく肢しはない。

だが、静かすぎる。

異様な敵だ。

チーロから聞いた話を、どう解かい釈しやくするべきか。

いかなる推論を立てようと、断定するための材料はないのだが、この戦いに臨のぞむにあたり、ジョーカーはいくつかの情報と論理的な推測といくばくかの勘かんに基づいて、敵を次のように規定した。

彼らは真の熱ねつ狂きよう的な狂信者である。

すなわち、彼らは恐おそれを知らない。死をも恐れない。なぜなら、『神は聖なる土地ゲヘナで、汚お物ぶつ、愚おろかな動物、罪人等、穢けがれし者共全すべてを焼き払はらい、穢れなき純じゆん粋すい者として作り直す』というユーバー・マリックの〝預言プロフエシー〟がロシュ聖教の根本であり、彼らはその原理主義者だからだ。彼らは決して降こう伏ふくせず、敵の投降も受け入れないだろう。彼らは神の名を唱えながら、一人でも多くの人の子を救うために、つまり、殺すために、おのれが斃れるまで戦いつづける。彼らの戦意を喪そう失しつさせる方法は一つしかない。

殺すことだ。

従って、心理的な駆け引きを前提とした戦術でもって彼らにあたるのは愚ぐの骨こつ頂ちようだ。彼らに勝利するためには、皆みな殺ごろしにする以外ない。

最悪の敵だ。

間ま違ちがいなく凄せい惨さんな戦いになる。

味方もむごたらしく大勢死ぬだろう。

それがどうした。

ジョーカーは大懺悔嘯を振ふりかざした。

「一列二列弩剣ラバイユ構え。三列四列用ヨオォー意」

私兵隊の一列目が盾と弩剣ラバイユを前に出し、二列目はその脇

わきから弩剣ラバイユのみを突つきだした。三列目、四列目は、前二列の射撃後、すぐさま入れ替かわれるように準備している。そうして射撃、交こう替たい、射撃、交替を繰くり返しながら敵に肉にく薄はくし、最後は白兵戦で片をつけるのが弩剣タクテイカ・戦術ラバイエルだ。

「──走らんでいい。満ち潮のごとく迫せまるぞ。全軍優ゆう雅がに突撃せよ……！」

　ジョーカーは大懺悔嘯を振り下ろすなり、大おお股またで歩きはじめた。ふたたび坂道を揺ゆるがしはじめた我が部隊の足音に、先刻よりもやや力みが感じられる。千人の息づかいが徐じょ々じょに荒あらくなってゆくのがわかる。あと百九十メーテル。敵は動かない。指揮官はどこにいる。重装歩兵どもの後ろで金属製らしい巨きょ大だいな戦せん槌ついをかついでいる小山のようなあの巨漢か。それとも、兜かぶとの面めん頬ぼおを下ろしていない中央の騎兵か。百八十メーテル。まだ敵に動きはない。百七十メーテル。まだか。百六十メーテル。そろそろだな。百五十メーテル。やつか。面頬を下ろしていない騎兵の、隣となりの騎兵だ。そいつが右手を高々とあげた。ジョーカーはその手が下ろされる前に、大懺悔嘯で前方を示した。

「一列二列撃うてェーッ！」

　第一射目は少々ばらついた。照準もまずい。低すぎて地面に突き刺さる矢があり、山なりに飛ぶ矢もあって、敵部隊の前面に降りそそいだ矢はせいぜい半分程度か。そのほとんどは重装歩兵の盾に弾はじかれた。倒たおれた兵はごくわずかだ。

「──以後号令は各中隊長に任せる！　己おれに当てるなよ！」

「三列四列テェッ！」「五列六列テェーッ！」「──ぼやぼやするな、七列八列テェッ！」

　射撃の間かん隔かくは想像していたより短い。撃って下がる、前に出て撃つという単純な動作を集団で連動させることに関しては、よく訓練されているらしいが、敵は堅けん固ごだ。たまに一人二人が倒れても、崩くずれる様子は微み塵じんもない。軽々と矢の洪こう水ずいを堰せき止めているように見える。

　さながら、壁かべだ。人の壁のようだ。

指揮官とおぼしき騎兵の右手が、ついに振り下ろされた。

壁が動きだした。

「フォォォォォォロオオオオオオオオオォォォォォォ
――――――――――――シュッ……！」

仕える神の名を一いつ斉せいに叫さけびながら、血塗れブラツド聖堂テンプル騎士団ナイツが押おしよせてくる。

その直後、ほんの一いつ瞬しゆんだが、射撃が遅おくれた。味方は怯ひるんでいる。このままでは、のまれてしまう。負ける。この己おれが、己おれの率ひきいる部隊が負けるだと？　冗じよう談だんではない。ジョーカーは駆かけだした。冷静に、単独で突とつ出しゆつした。敵最前列との距きよ離りは約百メーテルだ。このまま突っこむ。突っこんで、ひっかきまわしてやる。だが、繰り返すが、あくまでジョーカーは冷静だ。見えている。行く手の壁がひび割れて、そこから激流が流れだそうとしている。騎兵だ。騎兵の突撃でこちらの隊列をめちゃくちゃに踏ふみにじるつもりだろう。騎兵がいれば、敵はいつかその手を打ってくる。それはもうわかっていた。わかっていて真正面から受け止める馬ば鹿かはいない。
ジョーカーは足をゆるめずに叫んだ。

「撃ち方やめェェィ！　全軍散開……！」

矢はたちどころにやんだ。振り返らずとも、兵たちが坂道の両側に分かれてゆく様子が目に浮うかぶ。騎兵どもはもう次々と重装歩兵の列を抜ぬけて飛びだしている。さあ、どうする。貴様らの真ん前にいるのは己おれだけだ。百騎でよってたかって己おれを殺すか。それも一興だ。やってみるがいい。こい。きてみろ。だいたい、気に食わんのだ。まったく、気に食わん連中だ。

「――その手で剣けんを振るうのに、いちいち神の名など持ちだすな、阿あ呆ほう……！」

ジョーカーは突進してくる騎き兵へいの群れにまっすぐ向かっていった。すぐだった。あっという間だ。もう目と鼻の先だ。もちろん、このまま正面衝しよう突とつすれば、ジョーカーといえども轢ひかれる。騎兵による突撃の利点は、まさにその粉ふん砕さい力にあるのだ。しかし、騎兵は万ばん能のうではない。それどころか、多くの欠点を抱かかえている。騎兵が機動力を発揮するためには地

形を選ぶし、馬の調教にも手間がかかるし、いくつかの条件を満たして有効に運用されうる場合でも、状じよう況きようによっては、機動性にすぐれているはずの騎兵が、歩兵よりも鈍どん重じゆうになってしまう。ただ馬上にあるというだけで、人はすでに自由を奪うばわれているのだ。

ジョーカーは高く、鋭するどく、跳ちよう躍やくした。

すり抜けた。

馬と馬の間だ。

その瞬しゆん間かん、大懺悔嘯が閃ひらめいて、右の馬に乗っていた兵士の首と右手が斬きれ飛んだ。

同時に、左の馬に乗っていた兵士が落馬していた。

ジョーカーが蹴け倒たおしたのだ。

そして、蹴った。

右の馬の尻しりを踏み切り台にして、さらに高く飛んだ。

宙高く舞まいあがって一回転したジョーカーは、そこから猛もう禽きん類るいのように急降下した。

獲え物ものは直下の騎兵だ。

鞍あん上じようの兵士は、思うように身体からだをひねることさえできず、死角だらけで隙すきだらけだった。

そいつをまっぷたつにしたあとは、馬から馬へと飛び移りながら、騎兵どもを次から次へと撫なで斬ぎりにしてやった。

大懺悔嘯。

羽根のごとく軽い古き霊れい刀とうがあったればこその芸当だ。

それは長大にして鋭えい利りで、そのうえ身体の一部のようにジョーカーの動きを妨さまたげない。

ジョーカーは都合九人の騎兵を斬り捨てて着地した。

「ジャン・ジャック・ド・ジョーカーここにあり……！　全軍死力を尽つくして狂きよう信しん者どもを鏖おう殺さつしろ！　一人として討ちもらすな……！」

　叫びながら、猪ちよ突とつしてきた敵重装歩兵を袈け裟さ懸がけに斬った。離はなれた場所で味方の兵士たちが雄お叫たけびをあげて応こたえている。中隊長たちが突撃を命じる怒ど鳴なり声も聞こえる。ふん。馬鹿め。ド・ジョーカーを救え、だと？　節穴の目しか持たん愚おろか者が考えそうなことだ。この己おれに助けが要いるように見えるか。要らん、要らん、不要だ、完全に不必要だ。自分の面めん倒どうくらい自分で見る。迫せまりくる重装歩兵など、槍やりを叩たたき斬り、盾たてを蹴ったくって体勢を崩させ、首を刎はねてやる。素す早ばやく身を沈しずめて、足を斬り払はらってやるのもいい。兜のバイザーの隙すき間まに剣けん先さきをねじこんでやるのも手軽な始末法だ。もっとも、目の前にいる雑兵どもの処理にかまけて、戦せん況きようの把は握あくをおろそかにしたりはしない。戦場はもう乱戦の様相を呈ていしはじめている。どのみちそうならざるをえない。本番はこれからだ。そう──こいつは少々骨がありそうではないか。

「──天てん罰ばつ覿てき面めんンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンン……ッ！」

　雷らい鳴めいのような大だい音おん声じようだった。石いし畳だたみを粉こな微み塵じんにした戦せん槌ついの一撃も自然の猛もう威いに似ていた。いや、粉砕されたのは石畳だけではない。見境のない奴やつめ。そのひしゃげた重装歩兵は貴様の味方ではないのか。とてつもない破は壊かい力だ。当然、そんなことは万が一にもありえないが、身をかわすのが一瞬でも遅れていたら、ジョーカーもああなっていただろう。

　何しろ、あの巨きよ体たいだ。遠目にもずいぶん大きかったが、近くで見ると、とても人間とは思えない。おそらく二・五メーテル以上ある巨きよ軀くが全身鎧よろいをまとった姿は、鉄の巨人といったおもむきだ。そんな化物が振ふりまわす全金属製の長さ二メーテルに届こうかという巨大な戦槌は、もはや凶きよう器きとは呼べまい。武器とも、兵器ともいえまい。それはむしろ、天災に等しい。

「恐おそレヲ知ラァァヌ罪人ヨォォ！　我ガァァァ〝砕キノハンマーオブ鉄槌クラツシユ〟ノ餌え食じきトナリィィ！　ロシュノ裁

キノ許もとニィィソノ汚けがラワシキ身ィィィヲ差シダァァスガヨォォォォォイ！」

「黙だまれ、人語もあやしい下衆げす下げ郎ろうの分際で、裁きなどと──ぬっ……！」

　ジョーカーはたしかに横よこ薙なぎの戦槌をよけたはずだった。余よ裕ゆうさえあったのにもかかわらず、ジョーカーの身体は強風に煽あおられたように揺ゆれた。化物め。なんという馬鹿力だ。唯ゆい一いつの光明は戦槌を振りきったあとに生じる隙か。ただ、懐ふところに入りこんだとしても、鉄てつ塊かいのごときあの巨漢に致ち命めい傷しようを与あたえるのは容易ではあるまい。ジョーカーは飛び跳はねるようにして戦槌をかわしながら、舌打ちをした。むろん勝てぬ相手ではないが、己おれ向きではないな。トマトか髭ひげ達磨だるまに似合いの単純馬鹿だ。まったく、馬鹿の相手は疲つかれる。糞食らMelde aえだ man.。畜生めDaisch.。死に腐れBustum.。

11

「疲れたか」

　壁かべ側に顔を向け、壁に手をついて黙っていたから、トマトクンはそう訊きいてきたのだと思う。昇しよう降こう機きの中は、直径三メーテルほどの円えん筒とう形の部屋で、なんとなく上昇している感覚はあるのだが、動いていないようにも感じられる。材質はドームと同じだ。全面が緑色っぽく光っていて、その少し不気味な薄うす明あかるさと閉へい塞そく感のせいか、どうも息苦しい。

「ううん。疲れてないよ、ぜんぜん」

「そうか」

「大だい丈じよう夫ぶ」

　嘘うそじゃない。本当に、疲れてなんかいない。疲れている場合じゃないし。だって、もうすぐなのだ。奥おく殿どのはこの上にある。時刻は十八時十五分。今から一時間四十五分以内に、ムソー老

人と髭、それからカタリを旧式しき殿でんにたどりつかせることができなければ、すべてが水すい泡ほうに帰してしまう。オストロス神殿は大きいが、とんでもなく広大なわけではない。時間的には余裕がある。ただ、内部の警備については、ピンパーネルが一度侵しん入にゅうしたときの情報だけが頼たよりだ。ジョーカーはもう攻こう撃げきを開始しているだろうが、その影えい響きようがどう出るかも未知数だ。敵の手が中にまで回らなくなっているのが理想だけれど、理想と現実は違ちがう。楽観は禁物だ。

　はっきりいって、猛もう烈れつに胃が痛い。

　気がついたら、何もかもが終わっていて、あれ？　ああ、よかった、ぜんぶうまくいったんだ、みたいになっちゃわないかな。絶対ありえないけど。わかっているけれど、ついそんなことさえ考えてしまう。ダメだ。ダメだ、ダメだ。こんなことじゃいけない。胃が痛いからどうしたって？　ストレス性の胃い潰かい瘍ようなんて怖こわくない。吐と血けつでも下血でも何でもこいだ。あとでユリカに治してもらえばいいんだから。バックンバックンうるさい心臓なんて放ほうっておけ。心臓くらい破れたってかまうものか。いや、それはさすがに困るけれど、この程度で壊こわれてしまうほど僕の心臓はヤワじゃない。おそらく。

「うまくいくわ、絶じえつ対たい」

　ユリカの声は少し震ふるえていたが、力強かった。

　髭がカタリをかつぎなおして、うなずいた。

「蘇そ生せい式は拙せつ僧そうと師父とで必ず成功させる」

「まあ、わしも道順よりかはいくらか覚えとると思うぞ。あの祭さい壇だんはわしの息子むすこみたいなもんじゃったからなあ。下のんが一人目で、あれが二人目でなあ。ひょへひょへ」

「大丈夫かな、ほんとに……このおじいちゃんで……」

「……な、なんとか成功させてみせる。拙僧が持てるすべてを懸かけよう。心配は無用だ」

「ふひょへ。トワニンがおればどうにかなるじゃろ」

「そういうテキトーなとこがものっすごく心配なんだけど」

「マリアは心配性しようなんだね」

　ロム・フォウにあっけらかんとそう言われて、ちょっとだけグサッときた。

「……そ、そう？」

「でも、ＺＯＯのみんなはちょっと楽観的すぎるから、マリアはそれくらいのほうがバランスがとれていいと思うよ。あたしもあまり深く考えない性分だからね」

「あー……か、考えないんだ」

「何かやると決めたら、成功を疑わないことにしているよ。失敗が怖いなら、やらないほうがいい。今回は、絶対にやりとげないといけないから、必ず成功する。いいかげんに聞こえるかもしれないけれど」

「や、そんなことないよ。理にかなってると思うし。うん。そうだよね。うまくいかなかったら、なんて考えてもしょうがないしね。どうせやるしかないわけだし──」

「はイ。全力・尽つくしマス」

　ピンパーネルは微笑ほほえんでいた。一点の曇くもりもない、すがすがしいとさえいってもいいような表情だった。ピンパーネルはもう覚かく悟ごを決めているのだ。自分は、自分たちは、何があろうと目的を達成する。そのためなら、どんな犠ぎ牲せいでも払はらう。たぶん、ピンパーネルは命を捨てることさえいとわないだろう。それはいけないと思う。仲間の命と自分の命を引きかえにするのでは、同じことが繰くり返されるだけだ。でも、その気持ちはわかる。わかるけれど、そんな結果はごめんだ。そうならないように、僕は僕にできることを、それ以上のことをやらないと。

「誰だれも」

　マリアローズは壁に押おしつけている手に力をこめて、唇くちびるを噛かんだ。

「──誰も、失いたくないんだ。生きてれば、そうもいかないだろうし、僕はただ自分が傷つきたくないだけで、卑ひ怯きようで、おまけに贅ぜい沢たくなのかもしれないけど、でも……たいせつな人が

目の前からいなくなるのは、もうやなんだ。少なくとも、ＺＯＯのみんなは死んで欲しくない。僕も死なない。それで、カタリを生き返らせる。みんなで、笑って……笑いたい。笑うだけでいいんだ。バカみたいだけど、ただ、笑うだけで。だから──」

「うまくいかせる」

　トマトクンの大きな手がマリアローズの髪かみの毛をぐしゃぐしゃにした。

「マリアの言うとおりだ。全員死ぬな。というより、俺が死なせん。決着は俺がつける」

「──決着……って？」

　マリアローズが頭を撫なでられながら振ふり向いて尋たずねると、トマトクンはヒヒヒと笑ってみせた。なんだか変だ。まるで何かごまかそうとしているみたいだ。気になった。確かめるべきなんじゃないかと思った。だが、不意に昇降機が停とまって、音もなく前面の壁が左右に開いたせいで、それどころではなくなった。

　昇降機から我先に飛びだしたのはアルファだった。こういうときに一番乗りを果たそうとするのは、正直、やめて欲しいのだが、人間より鋭えい敏びんな感覚を持つアルファがためらわずに出てゆくということは、とりあえず安全なのか。

「人のにおいはしないな」

　本当に匂においを嗅かいでいるわけでもないだろうに、トマトクンが鼻をくんくんさせてから、昇しよう降こう機きを出た。ロム・フォウ、ピンパーネル、カタリをかついだ髭ひげの順でそれにつづいた。ユリカがムソー老人の手を引いてゆっくりと昇降機をあとにして、最後にマリアローズが出ると、そこは直径六、七メーテルの冷え冷えとした半球状の部屋だった。下のドームを縮小したような形状だが、どうやら壁かべも床ゆかもただの石でできているようだ。たった今、マリアローズが出てきた半分壁に埋うまっている昇降機から、緑色の光がもれている以外、他ほかに明かりはない。暗いので、ランプをつけようとしたら、ユリカの手を借りて壁を探さぐっていたムソー老人が何か見つけたらしい。カチリ、と音がするなり、天てん井じようから白い光が降りそそいできて、ちょっとびっくりした。

「ひょほふひょ。この奥おく殿どの秘ひ室むろに立ち入った僧主以外のもんは、ここを造りよったもんをのぞけば、おそらくぬしらが初めてじゃろうのう」

「奥殿、秘室……」

　髭が眉まゆ根ねをよせて低く呻うめいた。かつてこの神しん殿でんの僧そう侶りょだった髭にしてみれば、特別の感かん慨がいがあるのだろうか。でも、マリアローズにしてみれば、壁や床に何か絵のようなものが彫ほられている他は、とくに変わったところがあるようには見えない。むしろ、秘密の部屋というわりには殺風景で、せめて昼ひる寝ねくらいできるように寝しん台だいの一つでも置いたらどうかと思うくらいだ。まあ、そもそも居住性なんて求められていない場所なのだろうが。

「──で、肝かん心じんの鍵かぎはどこ？」

「ふぉむ……」

　ムソー老人がユリカから離はなれて部屋のちょうど中央あたりで腰こしをかがめた。何やら床のくぼみを指でしきりになぞっている。そのくぼみは床に彫られた絵の一部のようだが、他の部分に比べて明らかに深い。

　一いつ瞬しゅん、まさか、と思った。

　マリアローズの心臓を止めかけておいて、だが、ムソー老人は絶ぜつ妙みようのタイミングでよっこらせと身を起こし、昇降機がある壁の反対側に向かってよたよた歩きだした。何だよ。もしかして、ただ懐なつかしんでただけ？　久しぶりだろうし、そりゃあ懐かしいのかもしれないけどさ。驚おどろかせないでよ。若者でも、ショック死とか、絶対にないとはいいきれないんだから。それ、マジでシャレになってないから。冗じよう談だんが悪いとはいわないけどさ。時と場合くらいわきまえてくれないと、いくら海より遥はるかに心が広い僕でも、さすがに怒おこっちゃうよ……？

　本当は、マリアローズもわかっていた。

　ムソー老人は床の感かん触しよくを確かめて昔を思い出していたわけじゃない。ふざけていたのでも、もちろんない。ムソー老人の足どりは断じてよたよたなんかしていなかった。百二十四歳の老人

とは思えないほど、しっかりしていた。冗談めかしてまぎらそうとしていたのは、マリアローズのほうだった。馬ば鹿かなことを。まぎらすって、何を？　僕がどう思おうと、どう取り繕つくろおうと、現実は変わらないのに。変わるはずがないのに。

「……残念じゃが、ぬしらが初めてじゃあなさそうじゃのう」

　ムソー老人が反対側の壁にはめこまれた金属らしい板に手でふれると、そのすぐそばの壁が左右に開いた。あれは──昇降機か。そういえば、何かが埋めこまれているかのようにそのあたりの壁が盛りあがっているし、ドームから秘室までのぼってきた昇降機に似ている。よく似ているが、同じではない。

　空だ。

　筒つつだけで、中身がない。

　マリアローズたちが乗ってきたような昇降機の本体が、そこにはない。

「どういう……こと？」

「何ものかが」

　ムソー老人は振り返らずに大きく深いため息をついて、上を向いた。

「──何ものかが、この秘室より式殿の鍵を持ちだしよった。ほやつはこの昇降機を使つこうて、上にのぼったんじゃろう。ほうとしか考えられよらんのう」

「じゃあ、鍵は」

「ここにはない」

「そんなことはわかってるよ！　それくらい！　そうじゃなくて、僕が訊ききたいのは、今、どこにあるのかってことで──」

「無茶ゆうな。わしにゃあそこまではわかりよらん」

　僕が立っているのはどこだろう。そもそも、僕は立っているんだろうか。今まで見えていたものが見えない。最初から見えてなんか

いなかったのかもしれない。見えているように勘かん違ちがいしていただけじゃないのか。きっと、ありもしないものを信じていたんだ。滑こつ稽けいだ。ひどい間ま抜ぬけだ。笑いたいよ。笑う気力もないよ。どうしよう。どうすればいいのか。いきなり天と地が逆さまになってしまったかのようだった。こんな世界では、自分がここにいるのかどうかもわからない。僕が希き薄はくになってゆく。そうやって逃とう避ひしようとする。逃にげる？　逃げるって、いったいどこへ？　逃げ場なんてないのに。

「上には行けますか」

　トマトクンがムソー老人の隣となりに立って、壁にはめこまれた板をそっとさわった。

「操作は簡単そうだ。これなら俺でも動かせる。エレベーターは上がったままか。ここまで下ろせばいいんだな」

「……えれべえたあ？　昇降機のことかのう」

「まあ、そうです。確かく認にんしてください」

　トマトクンは板の出っぱりを指で押おした。何か光る文字みたいなものが見える。よくわからないが、上古ハイロ高位語メオンか。さっき、ドームからこの秘室まで上がってきたときも、ムソー老人が同じようなことをしていた。

「これでいいですか」

「操作はそれであっとるが……ぬしゃあ」

「何か乗ってるかもしれん。ご老公は一応、下がっててください。全員、警けい戒かいしろ」

　トマトクンはそう言ってムソー老人を下がらせると、大たい剣けんの柄つかに手をかけた。マリアローズもはっとして偽にせ劫ごう火かの柄を握にぎったが、他の皆みなはとうに身構えていた。遅おそい。遅すぎる。何やってるんだ。ぼんやりして。でも、上？　上に行くって？　行ってどうするんだろう。鍵がないのに。鍵は誰だれかに持ち去られてしまったのに。けれど、かといって、何もせずにすごすご引き返すのか。もうあきらめるのか。

　冗談じゃない。

　そうだ。だから、上に行くんだ。奥殿へ。

　間もなく、ぽっかり口をあけている筒の中に昇しよう降こう機きの本体が降りてきた。

　本体の前面が左右に開きはじめた瞬間は、息がつまった。

　がらんどうだった。

　ぼんやりと緑色に光る本体の中には、誰も、何も乗っていない。

「行くぞ。乗れ」

　トマトクンにうながされて、マリアローズたちは次々と本体に乗りこんでいった。その順番をまるで意識していない自分に気づいて、愕がく然ぜんとした。僕は逆上のぼせている。というか、盛りあがったり落ちこんだりで、何がなんだかわからなくなりかけている。今、僕は何をしようとしてるんだっけ。僕たちは。ここはどこだろう。昇降機の中だ。なんで？　奥殿へ行こうとしている。何のために？　それは──ダメだ。落ちつけ。深呼吸だ。落ちついて、集中しろ。

　鍵かぎだ。鍵を探さないと。誰だ。誰が持っていった？　上だ。上から、下に。そうだ。そいつは奥殿から秘ひ室むろに入って鍵を持ちだした。秘室の床ゆかの中央にはめこまれていた鍵を、わざわざ。どうして？　使うためか？　旧式しき殿でんに入るために？　でも、それはオストロス神殿の僧そう主しゆしか知らない秘密だった。鍵を持ち去った者は、おそらく血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの誰かだろうけれど、そいつが知っているわけがない。おかしい。何かがおかしい。繋つながらない部分がある。理り屈くつでは説明できない何かが。それとも、僕がバカなだけ？　そうかもしれない。だけど、どっちにしても、鍵はそいつが持っている。それか、もう捨てたか。処分したか。だとしたら、そいつを、絶対に──許さない。許すもんか。殺す。殺してやる。八つ裂ざきにしてやる。

　昇降機はすぐに停とまった。

　前面が左右に開くと、秘室よりもやや大きい円形の部屋が目の前に広がった。

　荒あらされた形けい跡せきは一いつ切さいなく、とくに目立つ装

そう飾しよくが施ほどこされているわけでも、値打ちのありそうなものが置いてあるわけでもないが、不信心なマリアローズでも自然と気が引き締しまるような、神聖さと荘そう厳ごんさとに支配された部屋だ。

　左右に二つずつある螺ら旋せん階段は、僧主たちの居室にでも通じているのか。

　正面の扉とびらは開け放たれていて、その先には壁かべのない石の廊ろう下かがのびている。

　見たところ、今は無人のようだが、壁に備えつけられたランプに灯ひがともっているので、たぶん、少し前まで誰かがここにいたのだろう。

　あるいは、部屋の中央の床石を剝はがして積みあげたのも、そいつの仕し業わざか。

「あそこに昇降機の制せい御ぎよ盤ばんがあるんじゃ。床石はえらい重くてのう。僧主とゆうたらじじいぞろいじゃから、みんなしても持ちあげるんは一苦労じゃった」

　マリアローズはムソー老人の話を聞きながら、トマトクンを先頭に立てて慎しん重ちように床石が剝がされている場所に近づいた。積まれている床石は七つだ。おそらく、そのうち四つが表面の床石で、あわせると円形になる。あとの三つは、その下に二つ、一つといった具合に重ねて敷しかれていたのだろう。それで、制御盤とやらを隠かくしていたらしい。

「……こんなの、知ってなきゃ見つけられるものじゃないよね」

「普ふ通つうに考えればそうだろうな」

　どこがどうとはいえない。ただ、トマトクンの顔つきはなんだか妙みようだった。覚えがある。つい最近だ。マリアローズはたしかにこの表情を見た。

「普通じゃないのかもしれん」

　トマトクンは荒あらっぽく息をついて、正面の扉の先に黄玉トパーズの目を向けた。身み震ぶるいがした。最初、原因がわからなかった。嘘うそだ。わかっていた。認めたくなかったのだ。先行き

の不ふ透とう明めいさでも、頭をよぎるよくない未来でもなく、目の前にいる仲間が怖こわくてたまらないなんて。

「……トマト、クン？」

「ああ」

　トマトクンはただうなずいてみせただけで、全身から放散させているまがまがしい殺気のようなものを隠そうともしなかった。

「ピンプとロム・フォウは俺の後ろにつけ。アルファ、お前もだ。マリアとユリカは最さい後こう尾びの髭ひげとご老公を死守しろ。いいな」

　やっぱり変だ。トマトクンは返事も聞かずにさっさと歩きだした。理由なんてわかりはしないけれど、この先に待ち受けている何かがトマトクンをそうさせているのに違ちがいない。マリアローズだけではなく、皆みなだった。誰も彼も口をつぐみ、硬かたい表情でトマトクンを追いかけた。追いかけなければならないくらい、トマトクンは速かった。身体からだが小さいマリアローズやユリカは、小走りしないとたちまち遅おくれてしまう。これだと、ムソー老人の足ではとてもついてこられない。

「ちょっ――と、トマトクン」

　トマトクンはもう奥殿を出ようとしている。声をかけているのに、振ふり返るどころか、足をゆるめる様子さえない。

「トマトクンってば！」

「何だ」

　二度目でようやく立ち止まってくれたが、振り向いてはくれなかった。声も怖かった。何でもない、と言いそうになって、マリアローズは首を振った。違う。何でもなくない。

「ダメ……だよ、それじゃあ。きみがそんなかんじだと――ほら、みんな、硬くなってる。何かあるなら言ってくれないとわからないし、わからないと不安になっちゃうだろ。速すぎだし。自分が決着をつけるとか、ぜんぶ一人でやるみたいな言い方されるのも、なんか――」

「すまん」

　トマトクンは顔を半分だけ後ろに向けて、少しだけ口くち許もとをゆるめてみせた。

「悪かった。俺にもはっきりしたことはわからん。やつの言葉が本当だとはかぎらんしな。ただ、いやなにおいがする。不ふ愉ゆ快かいなにおいだ。やばい相手かもしれん。用心してくれ」

「……うん。わかった」

　すべて納なつ得とくできたわけではない。でも、皆がうなずいたのを確かめてからふたたび歩きはじめたトマトクンは、ムソー老人でもついてこられそうな速度で進んでくれた。それに、一つ明確になったこともある。この先にはやばい相手とやらがいるのだ。トマトクンの勘かんにすぎないといっても、こういう場合はまず間違いなく的中する。さらに、あてになるかどうかわからないマリアローズの勘では、そいつはたぶん、少なくとも旧式殿の鍵の行方ゆくえを知っている。そいつが鍵を持っているか、もしくは──。

　きっと、皆、似たようなことを考えて、程度の差こそあれ、頭が割れそうだったり、心臓がどうにかなってしまいそうだったり、地に足がつかないような感覚を味わったりしているのだと思う。

　奥おく殿どのを出ると、壁のない廊下の両側は断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきで、強い風に乗って遠くの喚かん声せいらしきものが聞こえてきた。

　ジョーカー率ひきいるバルモア商会私兵隊とパンカロ・ファミリーが血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツと激げき突とつしているはずだから、その双そう方ほうの声だろう。

　長い廊ろう下かだ。三十メーテルくらいはあるだろうか。

　その先にある大いなる祈いのりの場は、数十本の柱だけで天てん井じようを支えている円形の建物で、ここから見たかぎりでは真っ暗だ。

　旧式殿はあの下にある。

　鍵かぎが必要だ。

今、あそこには誰だれかいるのか。

ピンパーネルはあの場所に侵しん入にゅうしようとして、見つかった。

大いなる祈りの場の中央に片かた膝ひざをつき、両手を組みあわせて頭こうべを垂れていた男とは、いったい何者なのか。

いい。答えはすぐにわかる。もうすぐだ。廊下が終わる。あと七、八メーテルだ。この石段を最後まで下りれば、そこはもう大いなる祈りの場だ。トマトクンが一度、足を止めて、皆を見まわした。声には出さなかったが、行くぞ、と言われたような気がした。マリアローズは静かに深呼吸をしてから、前のアルファにつづいて足を踏ふみだした。足音が耳に障さわる。自分の心臓の音さえうるさい。でも、ほどなくそれも終わる。何もかもがはっきりする。きみに会えないかもしれないなんて、思ったりしない。絶対に、思わない。信じたい。強く信じるための力が欲しい。モリー。ベアトリーチェ。お父さん。お母さん。それから——ああ、なんだかもう、泣いちゃいそうだ。怖い。怖いよ。寒い。身体が硬くなって、足がすくんでしまいそうだ。どうしよう。どうすればいい……？

『大だい丈じよう夫ぶだヨ』

——うるさい。

なんできみの顔なんか思い浮うかぶんだ。きみごときに言われるまでもない。大丈夫。そう。大丈夫に決まってる。大丈夫じゃなくたって、大丈夫にするんだ。その意気だヨ、とか言うな。邪じや魔まくさい。僕は平気なんだから。ほら。石段はもう終わりだ。あと三段。二段。一段。ついた。あっさりついちゃった。ここは大いなる祈りの場だ。すべての答えがある場所だ。いや、場所じゃない。答えを握にぎっているのは、あいつだ。

男は大いなる祈りの場の中央に一人きりで立っていた。

直径六十メーテルほどもある大いなる祈りの場に射さしこむ光は、月明かりだけだ。男の容姿はよくわからない。

ただ、男はこちらを向いている。

待っていたとでもいうのか。

「ロシュの声を聞いていました」

　風が強い。まるで海流同士が激しくぶつかりあう海底のようだ。それなのに、男のなまあたたかくて低い声はよく通った。まるで頭の中に直接染しみ入ってくるような声だった。それが、ぜんぜん不快ではないのだ。不快ではないことが、とてつもなく気持ち悪かった。

「ロシュが教えてくれたのです。あなたがたがここにやってくることを。そして──」

　男がゆっくりと右手を持ちあげた。

　その手に何か持っているのか。

　確かめないと。

　トマトクンは大たい剣けんの柄つかに手をかけて、じりじりと男に近づいてゆこうとしている。でも、男はまだ二十メーテルくらい先にいる。暗いし、よく見えない。ちゃんと見たい。それが何か、知りたい。知らないといけない。

「あなたがたが求めているものを」

　男はそれを人差し指と親指でつまんでいるようだ。長方形から細長い棒が突つきでているような形状で、大きさは掌てのひらくらいだろうか。

「私にはこれが何をするためのものかわからない。興味もない。ただ、あなたがたがこれを必要としているということは知っています」

　たぶん、鍵だ。

　ムソー老人からだいたいの形を教えてもらっている。あれは鍵だ。きっと間違いない。

「私はロシュの声を聞く者です。ロシュの意思に従う者です。ロシュに成り代わり〝裁き〟を為なす者です。私はアロンズ・ニードルスピア。ロシュは人の子に救いをもたらすべく私をこの地上へとつかわしました。私はあなたがたを救うでしょう。あなたがたは救いをえるためにここへやってきたのです。ロシュに導かれるがまま

に」

　喉のどから手が出るほど欲しくてたまらない鍵を持った男が、約十五メーテル前方にいる。

　アロンズ・ニードルスピア、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの団長が――、

「さあ、あなたがたが欲ほつするものです。私には必要ない。さしあげましょう」

　鍵を放ほうった。

　マリアローズはその鍵だけを見ていた。他ほかのものは何も目に入っていなかった。何も聞こえなかった。何も感じなかった。石の床ゆかに落ちた鍵がどんどん大きくなってきた。自分のほうから鍵に近づいていっているのだという実感さえなかった。ただ、途と中ちゆう、何かに身体からだをつかまれそうになって、振ふり払はらったような覚えはある。だってさ、鍵だよ？　鍵がすぐそこにあるんだよ？　邪魔しないでよ。アロンズだかニードルだかスピアだか知らないけど、あの男の言うとおり、僕らにはあの鍵が必要なんだから。絶対に、ないと困るんだから。僕はカタリにもう一度会いたい。明日、みんなで一いつ緒しよに笑いたい。そのためには、あの鍵を手に入れないと。鍵が欲しい。

　あの鍵が。

　この鍵が。

　飛びついて、右手の人差し指の先にふれた。

　何か硬かたいものをつかんだ感かん触しよくは、だが、すぐに消えてしまった。

　鍵はあるのに、僕の右手はたしかに鍵をつかんでいるのに、感触だけがない。

「――あ……」

　どうしてだろう。

　僕の右手が。

　繋つながっていない。

　鍵かぎを握ったまま、床に転がっている。

　変だな、とは思った。でも、そんなことよりも今は鍵だ。左手で自分の右手ごと鍵を拾いあげて、しっかりと抱かかえこんだ。もう放さない。死んでも放さない。放すもんか。やった。どうだ。ざまあみろ。マリアローズは顔を上げた。見下ろされていた。アロンズ・ニードルスピア。神の代弁者を名乗る男は、微笑ほほえみさえ浮うかべて、片かた刃ばの大剣を振りかざしていた。剣身全体が湾わん曲きよくしていて、刃先が二ふた股またに分かれたその大剣は、すでに血ち塗ぬられている。血。その血は。そうか。ようやく気づいた。

　斬きられたんだ。僕の手。右手。肘ひじと手首の中間あたりで、籠こ手てごとすっぱり斬られた。

　そして、今度は頭のてっぺんからまっぷたつにされようとしている。

　後こう悔かいはしていない。

　ただ、せっかく手に入れた鍵は、どうにかして守らないと。仲間に渡わたさないと。

　それから、ごめん。

　これでカタリが生き返っても、そのために僕が死んだなんて話になったら、ちょっと重いよね。いらんことすんなやボケ、とか言われそう。そんなんちっとも嬉うれしーないわ、とか。僕もだよ。正直、あんまり嬉しくない。結果的に重荷を背負わせちゃいそうで、かえって悪いっていうか。だから、ごめん。みんなに謝らないと。ごめんなさい。先立つ不孝をお許しください。ちょっと違ちがうかな。とにかく、ごめ━って。

「━ひうっ……！」

　腰こしのあたりに何かが巻きついてきて、後ろに引っぱられた。見る間に遠ざかってゆくアロンズ・ニードルスピアが、湾曲した大剣を振り下ろした。その前に、アロンズに向かって何かが突とつ進しんしていった。何かじゃない。誰だれかだ。いや、誰かじゃなくて、トマトクンだ。トマトクンの琥こ珀はく色いろの剣身波打つ大

剣が、アロンズの刃先が二股に割れた大剣をガッチリ受け止めて、弾はじき返した。で、僕は……？　僕は、もちろん生きてる。ピンパーネルだ。危き機きーいつ髪ぱつ、助けられたんだ。そうして、自分の右手と鍵を抱えたまま、ピンパーネルに抱だきかかえられて、あっという間に十メーテルばかり後退した。というか、連れ戻もどされた。血相を変えて駆かけよってきたユリカとピンパーネルが同時に叫さけんだ。

「バカ……！」「馬鹿なD'on ことをna jiis！」

　ピンパーネルが口にした言葉は意味がわからなかったが、おそらくユリカと似たようなことを言ったのだろう。ピンパーネルがそんなふうに感情をあらわにするなんて、珍めずらしい。それくらい、怒おこっているということか。怒らせたのは？　もしかして、僕？

「……ご、ご、ごめんなさい」

「いいから早く！　手を診みしぇなしゃい！」

「は、はい……」

　マリアローズはピンパーネルの腕うでから下ろしてもらって、ユリカに右手を渡した。自分の右手を他人に渡すなんて変なかんじだ。そんなに痛くもないし。や、痛い。痛いって。マジで。

　ただ、切断面がきれいで、腕がぶち斬られたわりに出血は多くない。筋肉が収縮して、うまい具合に血管をふさいでくれているのか。とはいえ、太い動脈もあるし、放っておけば間違いなくそのうち失血死だろう。せっかく命拾いしたのだから、死にたくはない。でも、それより何より、まずはこれだ。マリアローズは髭ひげに鍵を渡した。

「ちょっと、汚よごれちゃったけど」

「ウム。師父、ご確かく認にんを」

「どれどれ。ひょへ。これじゃこれじゃ」

　うなずくムソー老人を見た瞬しゅん間かん、気が遠くなりかけた。でも、まだだ。こんなところで失神して皆みなの足を引っぱるわけにはゆかない。気をしっかり持て。痛いけれど、すっごく痛くてたまらないけれど、今は痛いくらいでちょうどいい。かえって目

が覚める。本格的な治ち療りように入ろうとしてたユリカに、止血だけでいいから、と言ったつもりだが、ちゃんと伝わっただろうか。なんだかふらふらする。ダメだ。ふらついている場合じゃない。マリアローズは思いきり頭を振った。大いなる祈いのりの場の中央あたりに目をやると、トマトクンとアロンズが三、四メーテルの距きょ離りを挟はさんでにらみあっていた。

「そうだ。あなただ」

　アロンズは湾曲した大剣の切っ先を床ゆかすれすれまで下げている。身体に力が入っているようには見えないし、無防備にさえ思えるが、トマトクンが踏ふみこんでゆかないということは、隙すきがありそうでないのだろう。

「炎ほのおをまといし者。彼かの世の輝かがやきを宿した刃やいばを持ちたる者。天と万ばん象しようを破らんとする七星の一。ロシュと私を妨さまたげるあなたの存在には気づいていました」

「何のことだかわからんな」

「あなたがわからなくても、ロシュと私は知っている。それで十分です」

「御ご託たくはいい」

　トマトクンは大剣をかつぐように構えて、ぐっと腰を落とした。その瞬間だった。何か熱気のような、あるいは冷気のようなものが押おしよせてきた。何だろう。これは、でも、風じゃない。やけに息苦しいし、鳥とり肌はだが立っている。さっきと同じだ。それ以上だ。あのときの十倍、いや、百倍、ひょっとしたら千倍、怖こわい。

「仲間が一人殺やられて、今、もう一人傷つけられた」

　他ほかの誰でもない。トマトクンだ。トマトクンが恐おそろしいんだ。

「貴様は殺す」

「あなたにはできない」

　アロンズが滑すべるように飛び下がって左手を口にあてた。高く

鋭するどい音がした。口笛だ。その直後だった。硬かたいものが石を叩たたく音が聞こえてきた。何、あれ。向こう側から大いなる祈りの場に駆けこんできた、あの生き物は──馬か。馬なのだろうが、やたらとでかい。それから、馬につづいて人、人、人。アロンズはかすかに笑ったようだ。声が少しだけ揺ゆれた。

「私は死なない」

12

　いや、そりゃあね。オレ様ってばたしかにケッコー不死身だけどよ。さすがにアレはまずいべ。アレは死ねるって。つーかもう何人も、もしかしたら何十人も殺られてるしね？

「──だあああああぁぁぁっ……！」

　紙かみ一ひと重えだった。ぶっ叩いて粉々に砕くだく音がした。たった今、ズダズダのグザグザになった場所には、一瞬前までチーロがいた。それで安心していたら死ぬ。殺される。チーロはさらに横っ跳とびして、ズガンゴボンゴッシャンというものすごい音を聞いた。だいぶ慣れてきたせいか、一発目よりは少しだけ余よ裕ゆうをもってかわせたが、色気を出して反はん撃げきに転じようとしたら、あっさりオダブツしそうだ。オダブツってなんだっけ？　ま、いっか。いや、よくねーし。パンカロ・ファミリーのドドンが首ド領ンたるチーロ・パンカロ様が、女一人相手にやられっぱなしで逃にげ回る一方ってどうよ？　ダセッ。でもなあ。マジでただの女じゃねえぞ、あれ。

　何しろ、露ろ出しゆつ度どの高いエロいかんじの皮かわ鎧よろいを身にまとい、豪ごう奢しやな金きん髪ぱつを振ふり乱しながら、二本の鉄てつ鞭べんで休みなく石いし畳だたみを粉ふん砕さいしたり人間を挽ひき肉にくにしたりしている変わり者の働き者だ。

　正直、こいつとはやりたくなかった。だが、運悪く、パンカロ・ファミリーが配置された左さ翼よくの正面に、あの女が率ひきいる軽装歩兵の部隊がいた。チーロがあの女を引き受けて、きっちり引きつけておかないと、兄弟たちが大勢死ぬ羽目になるというわけ

だ。

「損な役回りだよなあ、チックショウ！　ヒイイッ……！」

　兄弟たちのことは、カルロとイビツに任せておけば大だい丈じょう夫ぶだと思う。まあ、気がつくと混戦になっていたから、二人も苦労しているだろうが、こっちほどじゃねえだろ？　しょうがねーけどな。首ド領ンだし。やるっきゃねーんだけどさ。オレがね。頼たよれる首ド領ンにならんとね？　ただひたすら女にケツ向けて逃げるだけの男が頼りになるかどうかっつーと、かなり、そうとう微び妙みようなとこだけどな。オレはオレなりに足りない頭で考えてるっつーの。

「──フオッヒャァァァ────ッ……！」

　とか叫さけびながら飛び跳はねてたりするもんだから、そうは見えないかもしんねーけどよ。

　あの女には欠点がある。それが何かといえば、やつは一度何かに狙ねらいをつけると、そいつをしとめるまであきらめようとしない。異常にしつこすぎるのだ。それだけならこっちにとって迷めい惑わくなだけだが、やつは標的を挽肉にするべく振り下ろした鉄鞭で、敵だろうが味方だろうが関係なく巻き添ぞえにしてしまう。

　さらに、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ全体がイカれている。

　やつらは全員、非人間的なまでに恐れを知らない狂きよ信うしんの狂戦士と成り果ててしまった。敵としては最悪に近いくらいで、最高にやりづらいが、その弊へい害がいなのか、あの女が振り回す鉄鞭にも、連中はまったく怯ひるまない。味方が味方にぶっ殺されても、怒おこったり恐れたり恐きよう慌こうに陥おちいったりしないかわりに、同士討うちをさけるための行動を自発的にとることもないのだ。人としてどうかと思うが、チーロとしてはこれを利用しない手はない。

　つまり、チーロは敵が密集している場所にどんどん逃げこめばいいのだ。そうすれば、チーロが直接手を下さなくても、あの女が勝手に敵の兵隊を始末してくれる。見た目はちょっと情けないが、クレバリィーでスマートリィーなやり方っつーフィーリングリィーじゃね？　なんか言葉はおかしいかもしんねーけど、オレも単純馬

ば鹿かのムキムキマッチョマーンからぺろっと一皮ズル剝むけして成長したってわけよ。ズッダアアアァァァァァァンとまたまた敵兵一人と石畳をいいかんじで破は壊かいした鉄鞭が頰ほおの肉をごっそり削そいでいって、やっべ、今のは惜おしい、じゃなくて危なかった、調子ぶっコイてたら死ぬぞこりゃ、みたいに焦あせりまくったりもしてっけどね？　そこはまだまだ修しゆ業ぎようが足りてないってことか。つーか、十分修業して立派なオトナになるまで、オレ、生きのびられんのか？　跪ひざまずきなさいだの、足をお嘗なめだの、そんなことを叫びながら鉄鞭をブンブンぶん回して追いかけてくる、疲つかれ知らずで間ま違ちがいなく超ちようＳのあの女から、ずっと逃げつづけるなんて不可能じゃね？

　いつかは勝負をかけないといけない。鉄鞭をかいくぐってあの女に一撃お見み舞まいいしてやる。ダメだ。無理だろ。接近しようとした途と端たん、ミートボールの材料になる未来しか想像できない。はっきりいって、自信がない。親おや父じだったらどうするだろう。兄貴たちだったら。剣けんの腕うでが立つカルロなら、どうにかできるだろうか。ジョーカーっちだったら。

「──お、ちょうどいいとこに……」

　いた。すぐ近くだ。やってる、やってる。さすがジョーカーっち。派手だな、おい。あれ、派手すぎじゃね？　つっても、派手にやってんのは、ジョーカーっちじゃないけどね？

　あいつだ。あの──たしか、〝向デこアうデ見ビずル〟だったか。とにかく、デカデビル野や郎ろうだ。ジョーカーっちは、デカデビル野郎がガッヅンガッヅン振ふり下ろす戦せん槌ついからひらりひらりと身をかわしている。華か麗れいなステップだ。まるでダンスでもしているみたいだ。石畳はへこんだりめくれあがったりしているし、人肉の残ざん骸がいやさまざまな体液も散らばっているしで、ひどく足場が悪いのに、よくもあんな真似まねができるものだ。ともあれ、ジョーカーっちも、チーロが鉄鞭女相手にやっているのと同じようなことをしているのか。うん？　待てよ。ということは、だ。ピッキーン。いいこと思いついちまったぞ。チーロは鉄鞭女が二本の鉄鞭を手て許もとに引きよせようとした隙すきにジョーカーっちのほうへと駆かけだして、声を張りあげた。

「ジョーカーさん、ジョーカーさん、ジョーカーさんってばっ！　ターッチ！　交代！　そっちはオレがやるっす！　んで、こっちお願いしゃーす……！」

「──ああ？」

　ジョーカーっちはチーロに一いち瞥べつをくれて、デカデビル野郎をまた見て、一・五メーテルくらいポーンと後ろに跳んでから、もう一度、チーロを見て、いまいましげに舌打ちをした。

「ええい、ようやく糸口が見えかけてきたところだというのに、この馬鹿者め！」

「すんません！　怒んのはあとっつーことで！」

「あとがあればいいがな……！」

　毒づきながらも、即そく断だん即決してくれたらしいジョーカーっちの行動は迅じん速そくだった。疾しつ風ぷうのように駆けてきて、チーロとすれ違う間ま際ぎわ、よく聞こえなかったが、何か言ったようだった。

　死ぬなよ、みたいなことを。

　気のせいか。だよな。そんな言葉、ジョーカーっちには似合わない。

　とにかく、鉄鞭女はもうジョーカーっちに任せた。きっと、なんとかしてくれるだろう。オレはあいつをやる。デカデビル野郎。思えば、あのとき、かなり優勢気味だったのに、いろいろあって決着をつけられなかった。今度こそぶっ殺してやる。なーに、余よ裕ゆうだ。こいつは馬鹿でかくて馬鹿力なだけだ。あの戦槌だって、チーロのハンマーパンチ壱いち號ごうで破は壊かい寸前まで追いこんだ。おかげで骨がバラバラになってしまったが、今のチーロはあのときのチーロとは違う。死の淵ふちから抜ぬけだしたことで、パワーアップしている。やれる。勝てる。ぶっちぎるぜ。

「──おっしゃあああぁぁ！　デカデビル野郎、オレが相手だぁぁぁぁッ……！」

「ウウウウウウウンムウウウウ貴様ハアアアアアァァァァ……！」

　デカデビル野郎もあの勝負を覚えているのか、うまくこっちに目をつけてくれた。両手持ちの戦槌を振り上げるモーションが大きい。あまりにも大きすぎる。隙だらけだ。だからデカデビル野郎なんだよ、てめえはよ。チーロはためらわずにデカデビル野郎の懐ふ

ところに飛びこみ、その股こ間かんめがけてハンマーパンチ壱號を下から振り上げた。こんなデカブツはここらで絶滅させとかねえと、邪じゃ魔までしょうがねえ！　棒もキ●タマも両方潰つぶれちまえ……ッ！

「…………ありゃ？」

　直撃だった。それなりにいい手て応ごたえもあった。鎧よろいの装そう甲こう板ばん越ごしでも、ダメージがないわけはない。自分だったら確実に悶もん絶ぜつしている。それなのに、やつはビクともしていない。

　おっかしいな。人として、男として、おかしいだろ。ひょっとして、こいつ、男じゃなかったり？　いや、それはねーよ。こないだはかなり効いてたし──なんて、動どう揺ようしている間に、反はん撃げきがきた。

「天てん罰ばつウウウウウウウゥゥゥ……！」

　すごい音がした。何だ？　オレは何された？　わからない。さっぱりだ。遠くで誰だれかが、坊ぼつちゃん、と叫さけんでいる。だーかーらー。坊ちゃんはやめろって、カルロの兄貴よぉ。おっと。オレもカルロの兄貴はやめるんだった。つーか、そんなことよりも、目ぇ開けろ、オレ。感じろ。どうなってる？　オレはどうなった？　死んだ？　生きてる。息はある。うへ。ひでえ。世界がぐるぐる回ってやがる。おまけに、すぐに何も見えなくなった。息づかい。自分の呼吸。動け。動けって。そうだ。顔をぬぐえ。血だ。流血しちゃってる。あいつがくる。デカデビル野郎が戦槌を振り下ろそうとしている。やばい。死ぬって。よけろ。転がって、這はって、なんとかよけろ。よけたか？　よけた。立て。立ちあがれ。何だ。クソッ。雑魚ざこめ。邪魔すんな。そいつに飛びかかり、首をゴキッとやって、左手でそいつが持っていた剣を奪うばいとり、わーわー喚わめきながらそれを振り回して、近くの雑兵どもを追い払はらいつつ、デカデビルから逃にげる。逃げる。逃げる。雑兵を突つき倒たおして、ハンマーパンチ壱號で蹴け散ちらして、剣でぶった斬ぎりながら、とにかく逃げる。逃げるしかない。だって、無理だ。勝てねーって。オレ、やっぱアホだ。デカデビルの戦槌見ろって。あれ、前のやつと違う。木じゃねえ。鉄だ。鋼鉄のかたまりだ。あんなの破壊できるわけねー。オレが破壊される。死ぬ。本格的に死んじまう。

　坊ちゃん。ボス。坊ちゃん。ボス。声が聞こえる。でも、今のチーロには、声がする方向をちらりと見る余裕もない。まだ頭がはっきりしない。頭。そうだ。オレは頭突きされた。それから、蹴飛ばされた。流れでる血ですぐ前が見えなくなる。たまに足がふらつく。雑兵の剣や槍やりすらかわしきれないことがある。もう傷だらけだ。やっべーかも。これはやべー。いやいや。あきらめんな、オレ。首ド領ンだべ。ドドンが首ド領ンだろ。どうすんだよ。まだミンチになるわけにはいかねーんだよ。ファミリーがある。背負っているものが。親おや父じから受け継ついだものが。親父が築きあげたものが。チーロ。チーロ・パンカロ。しっかりしろ。てめえ、ちゃんとしねえと、ウーゴ兄ちゃんとお兄ちゃんに怒おこられんぞ。殺されんぞ。いいのか、こら。よくねえ。すぐ真ん前の雑魚に飛びかかれ。そいつの頭をハンマーパンチ壱號で粉ふん砕さいしろ。さあ、くるぞ。後ろからだ。デカデビルの鉄てつ槌ついがくる。跳とべ。前だ。即そく座ざに起きあがれ。立って、走れ。走ろうとしたのだが、横合いから行く手に大勢がなだれこんできた。敵だ。クソッタレ。タイミング悪すぎじゃねーか。オレの日ひ頃ごろの行いって、そんなに悪いかよ……？

「━また会ったな……！」

　そいつらの先頭にいる騎き兵へいが叫んだ。聞き覚えがある声だ。どうでもいいけどな。それどころじゃねーんだわ、実際。前には騎兵の群れ。後ろにはデカデビル。さすがのチーロ・パンカロ様も少々お困りの様子だぜ。こりゃまいったわ。先頭の騎兵が騎兵槍を突きだしてくる。かわせるか。かわせる。けど、そのあとは？　襲おそいくる騎兵どもに対処しきれるか？　弱気になりかけたときだった。先頭の騎兵が急に落馬した。またかよ、とそいつが叫んだ。

13

　見えない手で心臓をわしづかみにされて、ぎゅっと握にぎられたような感覚だった。

　最近はラッチャとテッドの帰りがかなり遅おそいので、あとの皆みなは早めに夕ご飯を食べてしまうことにしている。それから食器を洗って、ダイニングテーブルに突っ伏ぷしていたら、みっともないからここで休みなよ、とジョルジュに言われて、窓まど際ぎわの寝ね椅い子すを譲ゆずってもらった。うとうとしていたとは思うけれど、夢を見た記き憶おくはない。

　何の前まえ触ぶれもなかった。いきなりだった。

　胸に手をあてると、まだ心臓がどきどきしているし、呼吸も乱れている。

「どうかしたの？」

　ダイニングテーブルの椅子に座って本を読んでいたらしいジョルジュが、こっちを見ている。ステラはアンナと一いつ緒しょにミミをあやしていたのだろう。床ゆかに腰こしを下ろしてミミを抱だいたまま、やはりルカのほうへ顔を向けて首をかしげてみせた。

「あんた、うたた寝してたでしょう。寒いなら、上から毛布か何かとってきたら」

「……うん」

　寒い。そう。たしかに、少し寒い。でも、そのせいなんかじゃない。違ちがう。

　そうじゃなくて。

「……ルカ？」

「ちょっと、あんた――」

「ルカ……おねえちゃん……」

ジョルジュが眉まゆをひそめている。ステラは目を瞠みはっているし、アンナも戸と惑まどったように表情を曇くもらせている。ミミまでこっちをじっと見ている。

だけれど、どうしてか、恥はずかしくなかった。

あたしの目からあふれているのは、涙なみだだ。

あたしは泣いている。

どうしてだと思う？　あたしがなんで泣いているんだと思う？

リク。

そうだよ。

リクのためだよ。

ごめんね。

時間がかかっちゃった。その間、リクは一人で苦しまないといけなかった。苦しかったんだよね。こんなに。胸が破れそうなくらい。痛かったんだよね。この痛みを消すためなら、何をしてもいいと思うくらい。あたしはわかってあげられなかった。感じていたのに。この痛みをずっと感じていたのに。リクがいなくなって以来、あたしも胸が痛かった。リクがいないせいだと思っていた。それだけのせいだって。

違ったんだ。

これはリクの痛みだった。たぶん、誰だれに言っても理解してもらえないかもしれないし、べつに理解してもらえなくたっていい。あたしにはわかる。この胸はリクに繋つながっている。リクを思えば思うほど痛みが増すのは、リクがそれだけ痛がっているからだ。こんなにも痛いんだ。耐たえられないほど痛いんだ。

ルカは袖そでで涙をぬぐいながら、寝椅子から下りた。迷いはなかった。棚たなの引きだしを開け、自分の財さい布ふをとりだしてズボンのポケットに入れると、布でいくつもの小部屋に仕切られた二階に上がった。ローラの小部屋はそのままにしてあった。その隅すみにある小さな簞たん笥すの引きだしの裏に布ぬの袋ぶくろがいくつも隠かくしてあることは、まだ幼いアンナとミミをのぞいた家

族全員が知っている。ルカは自分の名前が刺し繍しゆうされているピンク色の布袋を手にとった。リクの痛みとは別の痛みで、また涙が出てきそうになった。我が慢まんして、リクの名前が刺繍されている水色の布袋もとりだし、自分の小部屋に向かった。用意なんてたいしていらない。一つしか持っていないバッグの底に二つの布袋をしまって、下着と着る物をつめこめば、それでおしまいだ。途と中ちゆうでステラがきて、何なの、とか、何やってるのよ、とか、ごちゃごちゃ言いはじめたけれど、無視した。バッグを持ってまた一階に下り、コートを着ると、少し不安になって、ちょっとだけ寂さびしさみたいなものも感じた。でも、あたしはもう、雛ひな鳥どりじゃないんだ。飛んでゆける。自分の羽で、どこまでだって飛んでゆける。そして、つかまえるんだ。しっかりとつかまえて、大だい丈じよう夫ぶだよって言ってあげないといけない。

「ルカ、あんた……！　いったいどういうつもりよ、そんな恰かつ好こうして──」

　ばたばた階段を下りてきて、すごい勢いで迫せまってきたステラを、思いきり抱きしめた。

　ありがと、ステラ。あたしは最初、うるさくてうざったいあなたが嫌きらいだったけど、ちょっと素す直なおじゃなかったり、しっかりしていたり、本当にやさしかったり、今は好きなところがたくさんある。少し年上だから、お姉ちゃんかな。ステラお姉ちゃん。さすがに、言えないね。恥ずかしくて。

「……ルカ？」

「うん」

　ルカはうなずくなり、ぱっとステラから離はなれて、今度はすぐ後ろに突つっ立っていたジョルジュをぎゅっと抱いた。ジョルジュは予想していたみたいで、あらがわなかった。それどころか、抱き返してくれた。三つも年下なんだけどな。かなわない。背、少しのびた？　もっとのびるね。次に会うときは、あたしよりもずっと大きかったりして。

　それから、ミミの頭をなでて、ほっぺたにキスをしたあと、アンナをきつく抱きしめた。

「アンナ。あんまり無理しちゃだめだよ。力、抜ぬいてね。がんば

りすぎないで」

「……ルカおねえちゃん、どこかに、行くの？」

「変な男に騙だまされちゃ、だめだよ」

「なんか……ローラみたい」

「あ、嬉うれしいかも。それ」

　飛び立つ前に、心の底から笑うことができた。あたし、幸せだ。ローラがくれたんだ。何もかも、ローラのおかげだ。そして、みんなのおかげだ。家族のおかげだ。海で死んでしまったお父さんも、今ごろ安心しているに違ちがいない。ローラもかな。きっと、そうだね。

　ルカは玄げん関かんのドアを開けた。

　振ふり返ってしまうと、つらくなりそうだったけれど、やっぱり振り向いた。

　ステラとアンナは呆ぼう然ぜんとしている。ミミはよくわかっていないらしい。ジョルジュは少しふてくされているような顔つきだけれど、なんとなく察してくれているのだと思う。

「ラッチャとテッドに、よろしくね」

「わかった。言っとく」

　ジョルジュは目をそらして、不ふ機き嫌げんそうな声こわ音ねでそう答えた。

「言っとくって……何を？」

　この期ごに及およんでそんなことを訊きいてくるステラには、たぶん、説明しても今はわかってもらえないだろう。きちんと説明できる自信もない。ただ、この胸が痛くて。痛くて、仕方ないから。これはリクの痛みだから。たぶん、リクを助けてあげられるのは、あたしだけだから。

「じゃあ──」

雛鳥じゃないあたしは、巣から飛び立つんだ。せめて笑え顔がおでちゃんとさよならを言おうとして、失敗しそうだったから、あたしは駆かけだした。寂しくなんてない。だって、どんなに離れても、あたしたちはローラのこどもだから。それは絶対に変わらないから。

14

相変わらずだ。相も変わらず役立たずだ。いや、それ以下だ。

だって、右手が動かない。ユリカが応急処置として繋つなぐだけ繋いでくれたのだが、脂あぶら汗あせが止まらないくらい痛いし、本当にただくっついているというだけだ。しかも、組織同士をちゃんと接合させたわけではないから、乱暴に扱あつかうと、またとれてしまうかもしれないらしい。さすがにそんな事態は御ご免めんこうむりたいので、布でぐるぐる巻きにして固定しているけれど、利きき手が使いものにならないことには変わりない。こんなことなら、左手で剣けんを扱う練習をしておけばよかったか。利き手でもろくに使えないのに？　無む駄だだ。無駄なことを考えるな。今、自分にできることを考えろ。まず見るんだ。何が起こっている？　状じよう況きようを把は握あくしろ。

アロンズ・ニードルスピアが口笛の合図で馬と増ぞう援えん部隊を呼びよせたあと、マリアローズはユリカや髭ひげと一いつ緒しよにムソー老人を連れて廊ろう下かまで下がろうとした。でも、無理だった。連中が聖なる炎ほのおがどうしたとかなんだとか叫さけびながら松明たいまつに火をつけてあちこちに放ったせいで、増援部隊の数がだいたいわかった。多かった。十人や二十人ではきかなかった。少なくとも三十人はいた。やつらはロシュロシュロシュロシュ大声で呼ばわりつつ、アロンズにかかりっきりのトマトクンを迂う回かいしてこっちに押おしよせてきた。すぐにピンパーネルが飛びだして、ロム・フォウも弓を構え、アルファは威い嚇かくの姿勢をとったが、明らかに多勢に無勢だった。

「━カタリを……！」

二人と一頭に加勢するべく、髭がカタリを床ゆかに置いて突とつ

進しんしはじめたときにはもう、ピンパーネルは先頭の敵兵と斬きり結んでいた。解体したのでも、斬り刻んだのでも、斬り捨てたのでもない。にわかには信じがたかった。雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣と二本の長剣が激しくぶつかりあっている。ピンパーネルの攻こう撃げきを防いでいるなんて。

「私はァァァ！　力をえたァァァ！　我々のォォォ！　行く手を阻はばむ者にィィィ！　裁きと救いの死をォォォ！　与あたえる力ァァァァ！　ロシュのためにィィィィヤアアァァァァ……！」

　それも、狂くるったように叫びながら、左右の手に一本ずつ持った長剣を縦じゆう横おう無む尽じんに振り回して、ピンパーネルと互ご角かくに渡わたりあっている。何だよ、あいつ。ひょっとして、とんでもなく腕うでが立つ剣士なのか。まぐれや気合いや根こん性じようだけであれだけやれるとは思えないし、実際、かなりの使い手なのだろうが、それだけではないのかもしれない。

　ロム・フォウが驚おどろくような速さで立てつづけに弓を引いて、ほとんどの矢を敵兵に命中させている。しかし、敵兵は盾たてと兜かぶとと全身鎧よろいで完全武装しているから、よほどの強ごう弓きゆうでないと、装そう甲こうを貫かん通つうして手傷を負わせることはできない。そもそも防具とは刀とう槍そうや矢から身を守るためにあるのだから当然だが、ロム・フォウにかかると形無しだ。ロム・フォウは、なんと、兜のバイザーの隙すき間まを狙ねらって矢を撃うちこんでいた。もちろん、標的は動いているので、外れることもあるが、かなりの率で当てているように見える。

　間違いなく、当たってはいるのだ。

　それなのに、やつらは止まらない。兜の前面から矢を生やしたまま、やはりロシュロシュロシュロシュ叫びながら、剣を振り上げ槍を突きだして駆けてくる。痛くないのか。やたらと我が慢まん強いとか。我慢比べ大会の優勝者をそろえた精せい鋭えい部隊だとか。いや、そういう問題じゃないはずだ。人間には、歯を食いしばって耐たえようとしても、耐えられないことだってある。いきなり重傷を負えば、ショックで失神してしまったりするし、そのまま死んでしまう場合だってあるだろう。まともな人間なら、そのはずだ。じゃあ、まともじゃなかったら……？

　つまり、これがチーロ・パンカロやカルロ・ボッシが言っていた「異状」というやつか。

彼らも薄うす気き味み悪そうに話していたけれど、こうして目まの当たりにすると、たしかにかなり不気味だ。

さらに、現実的な問題として、そうとう厄やつ介かいだ。

ピンパーネルはまだあの剣士と一対一でやりあっている。二人とも身のこなしが人間離ばなれしていて、派手に斬りあったり距きよ離りをとったりしているうちに、ずいぶん遠くに行ってしまった。もうすっかり二人きりの世界というかんじだ。あの剣士についてはピンパーネルに頑がん張ばってもらうしかないが、そのぶん、他ほかの者たちが奮ふん闘とうしないといけない。ロム・フォウは弓をあきらめて、剣を抜ぬいた。アルファもやる気のようだ。髭が敵の群れに正面からぶつかってゆこうとしている。ユリカも前に出てゆきたそうだ。カタリやムソー老人、それにマリアローズを守らないといけないから、必死に自分を押しとどめている。そんなかんじがありありと見てとれて、正直、ものすごく心苦しかった。僕はいいから。大だい丈じよう夫ぶ。そう言いたいけど。でも。

きっと、いや、絶対に大丈夫じゃない。悔くやしいけれど、今の僕は動かないカタリやろくに動けないムソー老人とさして変わらない。剣は使えないし、籠こ手ての矢は片手では撃てないし、敵味方が入り乱れかけているこの状況だと爆ばく弾だんもダメだ。痛い。右手が痛い。痛いだけで役に立たないなんて、本当にどうしようもない。だけど、痛いなんて言っていられない。見ろ。見るんだ。
しっかり見ろ。僕にできることはそれしかない。

髭がすっと身を沈しずめて二、三人にまとめて足あし払ばらいをかけた。ロム・フォウが転てん倒とうした敵兵を飛び越こえていって一人の首を刎はね、アルファが一人に体当たりを食くらわせて吹ふっ飛ばした。ピンパーネルが雄おすのグレアデで剣士の肩かたの装甲を剝はぎとって、あらわになった腕の付け根に雌めすのリレッザをねじこもうとしたが、惜おしい！　すんでのところでそれをかわした剣士が、猛もう反はん撃げきに出た。「天てん罰ばつッ天罰ッ天罰ゥゥッ！　アハアハアハハアアァァッ……！」太刀たち筋がほとんど見えない。たまらず飛び下がったピンパーネルに、剣士が迫せまる。ピンパーネルは下がる。どんどん距離が狭せばまってゆく。ピンパーネルの後ろはもう柱だ。これ以上、下がれない。そこでピンパーネルはいきなり前に出た。すごい。マリアローズには見えない速度で振ふり回されていた二本の長剣を、雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣がバッチリとらえて弾はじいた。剣士が体勢を崩くずした。終わりだ。そう思った瞬しゆん間かんだった。剣士は剣を

手放してピンパーネルに組みついていった。ピンパーネルの剣けん捌さばきを見て、あんな大だい胆たんな捨て身の戦法に打って出られる者は稀まれだろう。それだけに、ピンパーネルにも油断があった、とは思わない。剣士は、やつらは、何も恐おそれていないのだ。自分の死すら怖こわがっていない。連中を止める方法は一つだけだ。息の根を止めるしかない。

まさにその道の専門家といってもいいだろうピンパーネルは、剣士に押し倒たおされながらも、雄のグレアデと雌のリレッザを鎧の隙間に突つき刺さした。だが、剣士はまったく怯ひるまない。それどころか、ピンパーネルの両りよう腕うでを肘ひじや膝ひざで押さえつけて、笑いながら両手で首を絞しめはじめた。ピンパーネルはすかさず剣士の首に足をからめ、力ずくで押しのけてこの危機から逃のがれたが、今のは本当に危なかった。一歩間ま違ちがえば、喉のどが握にぎり潰つぶされていたかもしれない。ピンパーネルもそうとう苦しかったようで、咳せきこみながら距離をとろうとしたが、剣士は許さなかった。長剣を拾うなり、猛然とピンパーネルに突っかかっていった。ずいぶん出血しているのに、怪け我がの影えい響きようは微み塵じんもないらしい。まったく、とんでもない敵だ。その親玉があいつだ。

アロンズ・ニードルスピア。松明たいまつの火に照らされた男の顔は、意外なほど端たん整せいで、たぶん三十歳は超こえているだろうが、年ねん齢れい不ふ詳しようだった。整っているだけでなく、身につけている何やらまがまがしい形の赤黒い鎧や、黒と赤と金色の陣じん羽ば織おり、それから手に持っている先が二ふた股またに分かれた大剣に似つかわしくない、やさしげですらある面おも立だちだ。道に迷っているときに、あの男とすれ違ったら、つい声をかけてしまうだろう。顔だけ見れば、どう考えてもよさそうな人だ。そんな男が、どうして。少し不思議に思わないでもないが、そんなことはどうでもいい。理由だとか経けい緯いだとか動機だとか思想信条だとかよりも重要なことがある。それは、あの男がしでかしたことの結果だ。

人が大勢死んだ。

やつは単なる大量虐ぎやく殺さつ者しやどもの元もと締じめだ。

もちろん、ここはサンランド無統治王国だ。やつが連続殺さつ人じん鬼きだろうと変態強ごう姦かん殺人魔だろうと虐殺者だろうと、お縄なわを頂ちよう戴だいすることはない。マリアローズも、

遠くから見物するだけなら、眉まゆをひそめておしまいだろう。でも、被ひ害がい者しや名めい簿ぼの中に、仲間の名前が書き加えられたとなれば、話は別だ。あの男は許しがたい。とはいえ、僕の力じゃどうにもできないから、是ぜ非ひとも始末してしまって欲しい。というわけで、お願い、トマトクン。

「──があああああぁぁぁぁ……！」

　いや、マリアローズなんかにお願いされるまでもなく、トマトクンは絶え間なく大剣を振り回して、アロンズを追いつめようとしているが──なんだか、おかしい。二人は大いなる祈いのりの場のあっち側の端はし近くで激しく斬きり結んでいる。アロンズの身のこなしはちょっと独特で、ほとんど頭を上下させず、大おお股またと小股の使い分けで緩かん急きゆうをつけて滑すべるように動く。しかも、背筋をのばしたまま、ほとんどノーモーションで大剣を繰くりだしてくるから、やりづらそうな相手ではあるが、それにしてもトマトクンの攻せめ口は少々鈍にぶくないか。まるで手加減しているみたいだ。バカな。そんなはずがないし、そうじゃない。違う。

「なぜ神の意思にあらがうのですか。抵てい抗こうしても無む駄だです。神は人の上にあります」

「あいにく反抗期でな……！」

　トマトクンは鋭するどく踏ふみこんで大剣を振り下ろしたが、必ずしもアロンズを一刀両断しようとはしていない。だから、アロンズも軽々とよけられる。そうせざるをえないのだ。なぜなら、トマトクンの相手はアロンズだけじゃない。

　馬だ。黒々とした巨きよ軀くの馬が竿さお立だちになってトマトクンを蹄ひづめにかけようとしている。トマトクンが大剣を振りきった直後だ。なんてタイミングだ。トマトクンはとっさに横っ跳とびしてよけるしかなかった。その隙すきに、アロンズが馬に近づこうとしている。乗るつもりか。だが、すぐさま態勢を立てなおしたトマトクンが、そうはさせまいとしてアロンズを狙ねらった。アロンズはこの斬ざん撃げきを前もってわかっていたかのように楽々とかわした──が、おかしい。そうだ。やっぱり、おかしい。

　たしかにトマトクンは、馬とアロンズ、両方を相手にしないといけない。アロンズの愛馬なのか、賢かしこそうだし、とにかく体格がすさまじいから、ただの馬だと思って嘗なめてかかるとひどい目

に遭あいそうだが、それにしても、さっきは馬を斬るべきだった。馬をさっさと始末して、一対一に持ちこむべきだ。トマトクンはそうしなかった。できなかったのではないと思う。あえてしなかったのだ。たぶん、何か理由がある。トマトクンは何か別のことを気にしている。たとえ先に馬を殺しても、防げない何かがあるのか。たとえば、生きていようと死んでいようと、馬にアロンズが接せつ触しよくしてしまったら、まずいことが起こるとか。あるいは、馬自体ではなくて、馬にまつわるものが問題だとか。馬の所持品。荷物。馬うま鎧よろい。鞍くら。鞍……？

　ダメだ。考え事なんかしている場合じゃない。右手が痛い。痛くても我が慢まんしろ。

　髭ひげとロム・フォウとアルファは、巧たくみな連れん繋けいで敵を堰せき止めてくれている。髭が敵の密集地帯に飛びこんで、ロム・フォウはアルファの支し援えんを受けながら一人一人確実にとどめを刺してゆくというやり方だが、場所も広いし、完全に防ぎきるなんてどだい無理な話だ。

「マリアはムソしよーしゃんとカタリをお願い」

　ユリカは棍こんを握る両手に力をこめてそう言ってくれたけれど、是が非でも自分一人でどうにかしてしまいたいというのが本音だろう。当然だ。マリアローズは戦力にならない。そんなことは百も承知だ。それでも、強がってみせないといけないときだってある。

「……一人までなら、僕が絶対なんとかするから」

　マリアローズは左手で偽にせ劫ごう火かを抜ぬいた。刺さし違える覚かく悟ごでぶつかってゆけば、一人くらいは道連れにできるだろう。できなくても、しないといけない。右前方からこっちへ向かってくる敵兵は四人だ。髭に吹ふっ飛ばされでもしたのか、無傷に見えるのは一人だけで、一人は左ひだり腕うでがぶらぶらしていて、もう一人は兜かぶとがなく、あとの一人は剣を持っていない。

「──赴ふっ……！」

　鋭い息を吐はいて飛びだしたユリカは、ほとんど横並びだった無傷野や郎ろうとぶらぶら野郎の足をまとめて棍で一薙なぎした。二人は見事にすっ転んだが、ユリカはそれ以上、前に進まなかった。

後退した。ユリカは予測していたのだろう。無傷野郎とぶらぶら野郎がすぐに起きあがることを。そのとおりだった。ユリカは起きあがりばなの無傷野郎の前頭部を一ひと突つきして、立ちあがりかけていたぶらぶら野郎の首筋に棍を叩たたきこんだ。二人はよろめいたが、それだけだ。さらに、兜なし野郎と剣なし野郎が目前に迫せまっている。マリアローズは息をのんだ。それとほぼ同時だった。ユリカが棍で床ゆかを叩いて、低く叫さけんだ。

「開きなしゃい、鵺ヌエノノ血ケちゆ涙ルイノノ門モン……！」



物、というよりも、生き物みたいだった。大きく膨ふくれあがって、ボコボコ盛りあがり、突きだしたりへこんだりしながら、一いつ瞬しゅんで形を整えた。

初めて見た。

完かん璧ぺきに使いこなすことができれば、斬ざん、砕さい、掛かい、抉けつ、突、払ふつ、打、流、弾だんの攻こう防ぼう動作を自在に行うことができるという、鵺流古式戦せん闘とう術独自の多目的変形棍、極限クライマックス九手ナイン棍ボールの先せん端たんが幾いく股またにも分かれる決定的瞬間だった。

ユリカはその性能をいかんなく発揮させた。無傷野郎の兜を剝はぎとって首を搔かき斬り、ぶらぶら野郎のバイザーの隙すき間まからやつの目玉を深々と抉えぐって、兜なし野郎の顔面を滅めつ多た打ちにし、剣けんなし野郎を突き倒たおすまで、本当にあっという間だった。でも、連中はしぶとい。どれだけ負傷しようが、たとえそれが致ち命めい傷しようだとしても、やつらにはまったく関係ない。ユリカは間を置かずに無傷野郎の喉のど仏ぼとけを突き砕くだいて、ぶらぶら野郎をぶっ飛ばし、兜なし野郎の口に棍をめりこませた。あれ、だけど、剣なし野郎が消え──るはずがない。下だ。やつは大脂羽蟲ゴツキーみたいに這はってきた。ユリカの足に飛びついて、しがみつき、棍でぶん殴なぐられてもぶった斬られても放そうとしない。他ほかの三人はまだ絶命していない。やばい、と思う前に、マリアローズは決断していた。走っていって、剣なし野郎のバイザーの隙間に偽劫火を突き入れ、思いきりかきまわした。すかさず剣なし野郎の腕を振ふりほどいたユリカが、飛び退すさって三人を迎むかえ撃うとうとしているが、間に合うか。いや、大だい丈じよう夫ぶだ。ユリカが剣なし野郎に絡からみつかれたままだと、タイミング的に結構きわどかったかもしれないけれど、間に合った。

「──砲ほおオオオォォォ羅らアアアァァァァァ……！」

もはや無傷ではない無傷野郎とぶらぶら野郎と兜なし野郎が一いっ斉せいにぶっ飛んだ。尋じん常じようではない威い力りよくの回し蹴げりだった。もちろん、そんな芸当ができるのは髭しかいない。ユリカの危機を知って放ほうっておけなくなった髭が、急いで駆かけつけてきて、後ろからあの三人に超ちよう重量級の蹴りをお見み舞まいしたのだ。

「無事か、ユリカ！」

「ありがとう！　わたしは大丈夫よ！　でも、前が……！」

「わかっておる！　拙せつ僧そうの筋肉に任せておけ！」

髭はすぐに最前線へと引き返すべく、やたらと広くて逞たくましすぎる背中をこちらに向けた。ユリカがマリアローズに何か言おうとした。ぞくっとした。見てしまったからだ。とうとうアロンズが黒馬の鞍に手をかけた。そう。やっぱり鞍だ。それは鞍に固定されていた。槍やりだろうか。でも、何かが足りない。閉じた傘かさみたいな形をしている穂ほ先さきだ。尖とがっていない。あんなもの、役に立つのか。遠目にもずいぶん古びているように見えるし。古い。古いだって……？　トマトクンが大剣の陰かげに自分の身を隠かくすような姿勢になって、絶ぜつ叫きょうした。

「ロンギヌスだ……！　伏ふせろ……！」

何それ。ろんぎぬす？　意味不明だが、頭よりも身体からだが反応した。マリアローズはユリカを押おし倒すようにして伏せた。その直後だった。光を見た。幾いく筋もの光だった。アロンズが手にしている槍から放たれたのか。とにかく、何かが起こった。それだけは間ま違ちがいない。

「……ムウ……」

髭ひげが足を止めていた。うずくまりかけて、すぐに立ちあがったものの、背中から鮮せん血けつが噴ふきだしている。右の肩けん胛こう骨こつのあたりだ。何かに貫つらぬかれたような傷だった。まさか、あの光か。いや、まさかじゃない。とっさに体勢を低くしたロム・フォウやアルファ、それからまだ遠くで剣けん士しとやりあっているピンパーネルは無事のようだが、被ひ害がい者しやは髭以外にもいた。

敵の兵士たちだ。少なくとも三人か四人はバタバタ倒れたと思う。彼らは運悪く、頭だの心臓だのを打ち貫かれてしまったらしい。その他にも、あの光によるものとおぼしき傷を負っている兵士は大勢いる。すごい勢いで真っ赤な血を撒まき散らしている者も少なくない。自分たちの血と肉とに塗まみれながら、神の名を連呼し、剣を振り上げて、力つきるまで行進する──、

「血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ……」

アロンズ・ニードルスピアが黒馬にまたがって左手で手た綱づなを握にぎり、右手に持った槍を高々と掲かかげてみせた。

「ロシュよ！　あなたが与あたえてくれた古き大いなる力に感謝し

ます……！」

「━何がロシュだ……！」

　跳とびあがってアロンズに大剣を浴びせようとしたトマトクンは、負傷していないようだ。至近距きょ離りにいたのに、当たらなかったのか。ただ、トマトクンの一いち撃げきも空振りに終わった。黒馬が小こ癪しゃくにも器用にバックステップを踏ふんで大剣をかわしたのだ。アロンズはすぐさま馬をあおった。黒馬が突とつ進しんする。あの巨きょ体たいだ。ぶった斬ぎっても止められない。轢ひかれてしまう。

「ぐっ……！」

　かわせなかった。トマトクンが黒馬に撥はねられた。でも、正面衝しょう突とつじゃない。ぎりぎりのところで身をひねったおかげで、左方向に弾はじき飛ばされるだけですんだ。トマトクンはうまく受け身をとって即そく座ざに起きあがり、黒馬を追った。アロンズの背後をとった恰かっ好こうだが、馬は速い。追いつけない。というか、黒馬の進行方向にはマリアローズたちがいる。もしかして、そのままこっちに……？　そうはならなかった。よかった。いや、べつによくもない。アロンズは手綱を引いて黒馬に方向転てん換かんさせた。トマトクンを迎え撃つ気だ。

「やはりあなたは危険だ！　ロシュも言っています！　あなたを始末せよと……！」

「ユピクラトムのロンギヌス！　そんな骨こつ董とう品で俺をやれると思うか……！」

「あなたが身にまとう炎ほのお！　その炎を払はらえばいい……！」

　アロンズに槍の穂先を向けられても、トマトクンは足をゆるめなかった。顔だけだ。顔だけは大剣でかばっている。穂先から放たれた光が身体のあちこちに降りそそいでも、トマトクンの突進は止まらなかった。光が当たっている箇か所しょは熱されたように赤くなっているが、それ以上の影えい響きょうはないようだ。鎧よろいか。トマトクンの鎧が光を防いでいるのか。とにかく、もうすぐだ。あと二歩で間合いに入る。本当に、もう少しだったのに。

光が。

何条もの光が──、

収束する。

「──ッ……！」

腹の真ん中あたりだった。溶とけた。鎧が。トマトクンは低く呻うめいて膝ひざをつきかけ、すぐに横へ転がったが、その場所めがけて黒馬が蹄ひづめをぶちこもうとした。トマトクンは逃にげた。転がって、跳んで、這って、逃げた。逃げるトマトクンに、敵の兵隊までもが群がろうとしている。ピンパーネルが相手をしている剣士以外は、今や標的をトマトクンにしぼったようだ。マリアローズは走りだした。ユリカに呼び止められたが、おじいちゃんとカタリを、みたいなことを言い捨てただけで、振ふり返りもしなかった。マリアローズの目には、やや呆ぼう然ぜんとしている様子のロム・フォウしか入っていない。ダメだよ。しっかりしてよ。ぼうっとしてる場合じゃないよ。あの光の射程はかなり長い。正直、対処しようがない。当たったら終わりだ。そりゃあ怖こわいよ。怖いけど、どうにかしないと。それができるのは、もしかして、きみだけかもしれないんだから。

「ロム・フォウ……！」

「──え」

ぎょっとしたように目を丸くしているロム・フォウに、早口で説明した。要点だけを簡潔に伝えようとしたつもりだけれど、途と中ちゆうから自分でも何を言っているのかよくわからなくなった。こんなので理解してもらえるのかな。かなり不安だったが、ロム・フォウはあっさりうなずいてくれた。やってみるよ。そう言ったロム・フォウはもうすっかり落ちついていて、頼たのもしく見えた。信じるしかない。いや、信じるんだ。信じることに決めた。

とはいえ、いざロム・フォウがアルファを引き連れて駆かけだすと、次々と悪い結果ばかりが頭に浮うかんで、呼吸がめちゃくちゃになった。自分には何もできない。他人任せだから、余計につらい。でも、見届けないといけない。その義務が僕にはある。

ロム・フォウがよどみない足どりでするするとアロンズに接近し

てゆく。すでに弓に矢をつがえている。十五メーテル。いや、十二、三メーテルくらいか。トマトクンはたまに大剣で邪じや魔まな敵兵を薙なぎ払うだけで、ほとんど逃げる一方だ。アロンズがまた馬上から槍やりの穂ほ先さきをトマトクンに向けた。穂先が静止した。その直前だった。ロム・フォウが弓ゆ弦づるから手を放した。そして、その直後だった。不意にアロンズが身体からだを傾かたむけた。

　矢はアロンズの手て許もとをかすめただけだった。

　外れてしまった。

　ロム・フォウはもう次の矢を用意しているが、アロンズも槍の穂先をロム・フォウに向けようとしている。

　光と二本目の矢はほぼ同時くらいだった。

　マリアローズにはそう見えたのだが、実際は光のほうが遅おそかったのだろう。

　つまり、こういうことだ。二本目の矢は、槍の穂先の穴に命中した。ぜんぶでいくつあるか知らないが、あの奇き妙みような穂先には穴があいていたのだ。マリアローズが見たところ、光はどうもそこから放出されているらしい。だったら、その穴をふさいでしまえばどうか。もちろん、マリアローズには無理だが、ロム・フォウならできるかもしれない。弓矢を使えば。

　単なる思いつきだ。冷静な状態だったら、たぶん、考えついても実行に移すことはないだろう。非常事態だからこそ、これしかないと思いこんで、勢いでロム・フォウに頼んだ。他ほかに何かいい方法があるわけでもなかったから、ロム・フォウも引き受けてくれた。ロム・フォウはさすがだった。一本目は外したが、二本目を見事に命中させた。小さい穴なのに。まさしくピンポイント・ショットだ。いくつもある穴のうちの一つだった。そして、アロンズは光を放とうとした。いや、実際、放ったのだ。おそらく、そのせいだろう。

　穂先が爆ばく発はつした。

　ただ、それと同時に、他の穴からは置き土産みやげのような、あるいは、断だん末まつ魔まのような光が放たれていた。

　ロム・フォウに向けて。

「──あ……」

　でも、ロム・フォウは無事だ。

　ロム・フォウの前に飛びだして、その身を盾たてにして、身代わりになって、光を浴びたものがいたからだ。

　彼は身体のそこかしこを切り裂さかれていた。床ゆかに倒たおれこんで、すぐに起きあがったが、崩くずれ落ちるように横倒しになった。腹が上下しているから、息はあるのだろう。けれど、出血がすごい。あふれ、噴ふきだす血のせいで、どこが傷なのかよくわからないくらいだ。真っ白くて美しかった被毛が、もう真っ赤だ。

「アルファ……！」

　ロム・フォウが弓を放ほうり投げてアルファに駆けよった。何だろう。地面が揺ゆれているようなかんじがする。僕は大変なことをしてしまったのかもしれない。だって、僕のせいだ。僕だ。僕が悪い。僕があんなことをロム・フォウに頼まなければ。たしかに、アロンズの槍を破は壊かいすることはできた。成功だ。成功したけれど、でも、こんなことになるなんて思っていなかった。痛い。右手が。泣きそうだ。泣いてどうする。いや、いい。泣けばいい。泣いてもわめいてもいい。ただ、やることはやらないと。苦しくても、痛くても、つらくても、今は前を向いて、その果てにあるものだけをひたすらにらみつけていないといけない。

「──ロム・フォウ、剣を……！　髭ひげ！　ユリカ！　一気にたたみこんで……！」

　マリアローズは叫さけびながら右手に巻いた布で目のあたりをぬぐって、ムソー老人とカタリがいる場所に向かって走りだした。髭とユリカはマリアローズが言わんとしていることをわかってくれたみたいだ。流れだ。流れがこっちに傾いている。この機に乗じて一気に勝負をつけないといけない。もともと多勢に無勢だし、その状じよう況きようは同じだ。動ける敵兵はまだ十人以上いる。二十人近くいるかもしれない。ここを逃のがすと、また逆転するのは大変だ。まごまごしているうちに、さらなる犠ぎ牲せい者しやが出ないともかぎらない。マリアローズはムソー老人のそばまで戻もどって戦況をうかがった。髭とユリカは敵兵の掃そう討とうにかかってい

る。ロム・フォウも遅まきながらそれに加わろうとしているようだ。馬上でふたたび大剣を抜ぬいたアロンズに、トマトクンが猛もう然ぜんと斬きりかかろうとしている。あとは──、

　ピンパーネルだ。

　胸が締しめつけられたように苦しくなって、思わず歯は軋ぎしりしてしまった。

　だって、傷だらけだ。

　ピンパーネルは満まん身しん創そう痍いだった。顔なんてボコボコに腫はれているし、右みぎ眉まゆの脇わきあたりがザックリ裂けていて、左ひだ頬りほおにも大きな切り傷がある。左手はだらりと下がっていて、一応、雌めすのリレッザを持ってはいるものの、本当に持っているだけというかんじだ。黒いボディスーツはあちこちが破れていて、ぐっしょりと血に濡ぬれている。

　相手の剣けん士しもそうとうひどいが。

　というか、人間はあんな状態になっても立っていられるものなのか。

　剣士の頭部はもう、赤い何かのぐじゃぐじゃしたかたまりにすぎない。その右みぎ腕うではすでに腕とは呼べない物体に成り果てていて、腹の傷からは管みたいなものがはみだしている。さすがにそれは剣士にとっても邪魔なのか、長剣を持った右手でしきりと押おし戻そうとしているが、どうもうまくゆかないようだ。

「……神……神……神……神……神……フ……ハハハハハ……神ィィィ……！」

　なんだか悲ひ惨さんだし、それを通り越こして無残だ。

　どうして、あそこまで。何がそうさせるんだよ。そんなになるまで神様なんかに義理立てする必要が、いったいどこにあるっていうのさ。ひどい。ひどいよ。よくわからないけれど、ひどすぎるよ。

　マリアローズの思いを汲くんでくれたわけではないだろうが、ピンパーネルが雌のリレッザの柄つかを口にくわえて、雄おすのグレアデを逆手に持った。

剣士が長剣を構えるよりも早かった。

ピンパーネルは血を振ふりまきながら駆かけだして、一いつ瞬しゅん後には剣士の脇をすり抜けていた。

雄のグレアデが舞まい踊おどり、剣士の右腕がきれいに斬り外された。

とどめは口にくわえた雌のリレッザだった。

首筋に深々と雌のリレッザを埋うめこまれた剣士は、最さい期ごに何か言ったようだった。

それが神を讃たたえる言葉だったとしたら、あまりにも救いがない話だと思う。

ロシュだか何だか知らないけれど、そんなもののために、生きるのはまだしも、死ぬなんて馬ば鹿かげている。

マリアローズごときに馬鹿げているとか言われたくないだろうが、正直な気持ちだ。

こんなのって、おかしい。

絶対、変だよ。

終わらせないといけない。といっても、マリアローズに何ができるわけでもないが、もう邪じや魔まにならないように、じっとしていたほうがいいかもしれない。髭とユリカとロム・フォウが敵兵を次々と一人一人確実にしとめている。ピンパーネルもすでに一人か二人、斃たおしたようだ。トマトクンが獣けもののような咆ほう哮こうとともに放った大剣の一いち撃げきが、黒馬の首をかすめた。黒馬が嘶いななないて体勢を崩しかけた。アロンズが手た綱づなを引いた。黒馬が馬首を巡めぐらせた。逃にげるつもりか。

15

その矢先の出来事だった。カルロ・ボッシの視線の先で、兜かぶ

との面めん頬ぼおを下ろしていない敵の騎き兵へいが、チーロ・パンカロの顔面めがけて騎兵槍やりを突つきだした。その直後にそれは起こった。

　騎兵が落馬した。そいつが「──またかよ……！」と叫ぶ声が聞こえた。そいつは叩たたき落とされたのだ。いや、蹴け落おとされたといったほうがいいか。何に？　あれだ。顔にも身体からだにも布きれを巻きつけているので、どんな姿をしているのかよくわからないが、少なくとも胴どう体たいから腕と脚あしが二本ずつのびていて、首の上に頭がある。ごく一いつ般ぱん的な人間とは体形がやや違ちがうものの、人間に近い。やつは、騎手がいなくなった馬を踏ふみ台にして跳ちよう躍やくし、すぐ近くの騎兵を右腕で一ひと薙なぎして吹ふっ飛ばすと、さらに別の騎兵の頭を足蹴にして着地した。もっとも、地面に両足をついていたのは一瞬だけで、やつはもう手近の騎兵に襲おそいかかっている。次々と、間を置かず、騎兵だろうが歩兵だろうが手当たり次し第だいにぶん殴なぐり、蹴け倒たおして、あるいはつかまえて腕だの足だの首だのをありえない方向に折り曲げ、投げ飛ばしつづける、やつは──、

「味方だ……！　いいか、間違えンな！　あいつは俺たちの味方だ！　パンカロ・ファミリーはあいつを掩えん護ごしろ！　イビツ、全員に徹てつ底ていさせろ、わかったな……！」

「へ、へい……！」

「坊ぼつちゃん！　平気ですか！」

「──だーからっ！　坊ちゃんはやーめろっつーの！」

　チーロはハンマーパンチ壱いち號ごうで近くの歩兵の兜をひしゃげさせてから、振り向いて笑ってみせた。頭頂部付近に手傷を負っていて、血だらけの凄せい惨さんな顔だが、不思議と奇き妙みような愛あい嬌きようがある。人の上に立つ者として、それは一つの武器になるかもしれない。ただ、この局面を打開しなければ、人の上に立つどころか、皆みなで仲よく墓の下で眠ねむる羽目になる。冗じよう談だんじゃねえ。カルロは愛刀の蓮れん華げで二人ばかりぶった斬ぎって、チーロと背中合わせになった。

「ったくてめーらはよ。オレの計算ぶち壊こわしだろ。テキトーに逃げ回ってれっつったべ」

「私は坊ちゃんと一いつ緒しよに暴れ回るって話でした」

「予定は未定なんだよ。状じよう況きよう次第ってやつだよ。ファミリーのことはカルロ、てめーに任せたんだからさ。うまくやってくんねーと」

「命タマァ惜おしんでボスを見捨てようなんてやつはうちにはいませンよ」

「バーカ。オレってばケッコー不死身だぜ？」

「ですが、やばかったでしょう」

　その相手が目前に迫せまっている。でかい。身の丈たけ約二メーテル五十サンチ。全身をほとんど隙すき間まなく装そう甲こうで覆おおい、金属製らしい巨きよ大だいな戦せん槌ついを軽々と振り回す化物だ。あんなやつを相手にしないといけないのか。頭痛がする。常識外のことばかりだ。ようするに、俺はまともなンだろうな。だが、あの化物はやばすぎる。殺とるしかない。残念なことに、殺とれる気はぜんぜんしないが。

「カルロ、てめえが懐ふところ入って蓮華でぶった斬れ。オレは囮おとりになっから」

「はい」

「行っくぞ、デカデビル野や郎ろう！　おらあああぁぁ……！」

　化物に真正面から突とつ進しんしてゆくチーロの意図を、カルロは正確に理解していた。もう長いつきあいだ。チーロの考えることは手にとるようにわかる。チーロはあえて化物の間合いに入って戦槌を待ち受けた。戦槌は横からきた。まるで横殴りの突風だ。チーロは地面に伏ふせて紙かみ一ひと重えの差でそれをかわしたが、そんな体勢では次の動きがとりづらい。化物はこれ幸いと戦槌を振ふり上げて、大上段からの一撃をチーロに見み舞まおうとした。そのときにはもうカルロは化物の横に回りこんでいた。がら空きになった脇わきに身体ごと突っこむくらいの勢いで踏みこみ、だが、無む駄だな力を一いつ切さい入れず、蓮華を叩きつけた。膝ひざだ。化物の左膝を破は壊かいしてやる。

「――くっ……！」

　当たることは当たった。肉までは達したが、骨を断たつところまではゆかなかった。おまけに、蓮華が盛せい大だいに刃はこぼれした。カルロはすかさず化物の背後に逃のがれたが、そこには敵の騎兵が待ちかまえていた。冷えた肝きもがあたたまる前に、身体は勝手に動いていた。止まらずに馬の前ぜん肢しを斬り払はらって、とっさに鞍くらから跳とびあがった兵士に浴びせようとした斬ざん撃げきは弾はじかれた。いい読みをしている敵だ。雑魚ざこじゃない。そんな相手にかかずらっている場合ではないのだが、敵は見み逃のがしてくれなかった。突っかかってきた。鋭するどい太刀たち筋だ。冷静で理り詰づめの剣だ。強い。だが、こいつは尋じん常じようだ。まともな人間の剣だ。

「サー・ジューダスの理想を！　ロシュの裁きを！　貴様らごときに邪魔はさせん……！」

「ぐだぐだうるせえ……！」

　だったら、こんな真似まねも通用するか。カルロは蓮華を振り上げ、振り下ろすと見せかけて、そのまま前に出た。やつは完全に意表を突かれたのだろう。少し腰こしが引けたやつの足の甲こうを右足で踏んづけ、蓮華の柄つか頭がしらで兜かぶとを弾き飛ばしてやった。黒い肌はだ。暗黒大陸の出身か。このまま組み敷しくか。いや、今はそれどころじゃない。カルロはやつの胸を左足で蹴って突き飛ばすなり、踵きびすを返した。余分な手間がかかった。その間も、チーロは化物の戦槌から逃にげ回っていたのだ。化物の動きはまったく鈍にぶっていない。左膝の傷はそこまで浅くないはずだが、痛いとか苦しいとか、そういったあたりまえの感覚は持ちあわせていない連中なのだろう。あんなやつをどうやって殺とればいい。無駄だ。考えても意味がない。化物が戦槌を振りかざした。カルロはもう一度、化物に肉にく薄はくしようとした。足が止まった。

　何かが、ものすごい、目にもとまらぬ速さで、横合いから化物に飛びかかっていった。

　そいつは化物の上半身にしがみついて、あっという間に兜を剝はぎとった。そして、殴った。殴って、殴って、殴りまくった。化物の顔面はすぐに原形が想像できないような有様になった。それでも化物は倒たおれなかった。少しの間、状況が把は握あくできていないかのようにやられるがままだったが、やがて反撃に転じた。化物は戦槌の柄えで自分にしがみついているやつをさかんに殴おう打だ

した。柄から放した右手の拳こぶしで何度も何度も殴りつけた。強きよう烈れつな肘ひじ鉄てつを食くらわせ、とうとうそいつを引きはがして、振り落とした。

「──リクゥッ……！」

　我知らず叫さけんでいた。チーロがこっちを見た。あいつを、とカルロは目で伝えた。チーロはすぐに反応して、リクに戦槌を叩きつけようとしている化物に組みついていった。捨て身だった。危険だが、一いつ瞬しゆん、化物の動きが止まった。殺す。殺してやる。必ず殺とる。柄がらにもなく大声を出した。雄お叫たけびをあげながら、カルロは化物の喉のどに蓮華を突つき刺さした。ねじこんで、突き通した。貫つらぬいて、ねじ斬った。大量の鮮せん血けつが噴ふきだして、降りそそいだ。雨だ。血の豪ごう雨うだった。図ずう体たいがでかいぶん、血の量もただごとじゃねえってことか。糞くそが。

「気ィ抜ぬくな！　まだ終わってねえ……！」

　カルロは袖そでで目の周りをぬぐいながら、おのれの命と同じくらい大事なファミリーを捜さがした。イビツがいる。ボボ・ファッチョも生きている。イビツを中心にかたまって、数人がかりで敵一人を相手にするやり方を守っているようだ。それから、命よりも大事なチーロ・パンカロは、血の噴ふん水すいみたいな化物の死体を蹴け倒たおして、後ろから近づいてきた敵の重装歩兵をハンマーパンチ壱いち號ごうでぶん殴なぐったところだった。

　リクは地べたに座りこんだままだ。

「立てるか、リク」

　カルロはボロボロになった蓮華でまた一人斬った。

「──立てンのかって訊きいてるンだ！　返事くらいしろ！」

　ふらふらしながらもなんとか立ちあがってみせたのが、返事代わりというわけか。

　なんてことだ。

　巻きつけていた布がほどけて、リクの顔がのぞいている。あのやたらときれいな顔の名残なごりをとどめているから、余計に無残

だ。あれは生傷なのか。傷きず跡あとなのか。わからない。とにかく、リクの顔面は傷だらけで、それらはすべて不気味な色に変色し、引き攣つれて、ひどくゆがんでいた。化物にやられたのだろう真新しい傷は、皮ひ膚ふだのその内側の組織だのが粟あわ立だつように蠢うごめいて、驚おどろいたことに、急速にふさがってゆきつつある。耳の近くまで裂さけた口は、人ではなくまるで肉にく食しよく獣じゆうのそれだ。歯も醜みにくく迫せまりだしている。そんな顔がん貌ぼうに、以前と変わらない真っ赤な両眼がやけに似合いすぎていて、そんなことを意外なほど冷静に考えている自分がひどく冷血な人間に思えた。

　実際、俺は驚いちゃいない。ここまでとは予想していなかったが、ある程度、覚かく悟ごはしていた。自分の中では結論も出ている。ただ、他ほかの者たちがどう思い、リクは何をどう考えていて、どうしたいのか。それはまた別の問題だ。

「……ちが……う……」

　獣けものが無理やり人間の言葉を喋しやべっているかのような、聞きとりづらい声だった。

「おれ……は……もう……ちがう……」

　それがお前の答えなのか。

　ということは、つまり、お前は━戻もどれないのか。

　いや、今は詮せん索さくしている場合じゃない。

　カルロは蓮れん華げを振るいながら、あたりを見まわした。気のせいか。化物をしとめたことで、敵の勢いが弱まったように思える。相手はあんな連中だから、そんなことはありえないか。だとしたら、こっち側の士気が上がったのか。あるいは、ここにきて、数の差が効いてきたのかもしれない。たとえば、五人と三人で争ったとして、一人ずつ順々に潰つぶしあっていったとしたら、五対三が四対二になって、三対一になる。多数の有利とは、ようするにそういうことだ。あとは、こっち側が相手の対処に慣れてきたという面もあるだろう。やつらは怖こわいもの知らずの驚きよう異い的な戦士だが、逆にいえば無む謀ぼうだし、反応は獣並みでも、よほど頭に血がのぼっているのか、まともにものを考えているとは思えないほど単純だ。馬ば鹿か正直に正面からぶつかりあっていたら、粉ふ

ん砕さいされ、蹂じゆう躙りんされていたかもしれないが、最初にこっちの兵隊を左右に分けたせいで、相手の圧力が分散されたぶん、緒しよ戦せんの被ひ害がいは最小限で抑おさえられた。

　まさか、あの男はそこまで考えていたのか。

　俺たちは必死になってあの男が描えがいた絵図をなぞっているだけなのか。

　敵も味方もあの男の掌てのひらの上で踊おどらされているのか。

　ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。

　やつは大ダイ懺ザン悔ゲ嘯シヨウとかいうふざけた金ピカの大刀を手に、金きん髪ぱつの女が振ふるう二本の鉄てつ鞭べんを巧たくみにかわしつづけている。鉄鞭の長さや速度を正確に見切った上で、周囲の状じよう況きようを把握していないとやってのけられない芸当だ。しかも、鉄鞭が石いし畳だたみを粉々にしまくっているため、足場もかなり悪いのに、よくもあんなふうにひょいひょい跳はね回れるものだ。

「──そろそろ貴様の不作法で不調法なダンスにつきあっているのにも飽あきてきた」

　あげく、薄うす笑わらいさえ浮うかべて、そんなことを言ってみせるとは。

「初めは新しん鮮せんで少々愉ゆ快かいだったがな。もういい。貴様は進歩がない。己おれは女にはやや甘いが、我が慢まんにも自おのずと限度というものがある。冥めい土どの土産みやげだ。東方の稀け有うにして妙たえなる技わざで、せめて華か麗れいに死ぬがいい……！」

　大口をたたいて、いったい何をしようというのか。

　あの男の無む駄だ口ぐちが癪しやくに障さわったのか、鉄鞭女が豪ごう奢しやな金髪を逆立てて顔の半面をゆがめ、二本の鉄鞭を手て許もとに引きよせた。

「黙だまれ汚きたなくて罪深く欲深い豚ぶため！　跪ひざまずいて足をお嘗なめ尻しりをお出し引き裂いてやる！　ＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ

ＨＨ……！」

　女が振り下ろす鉄鞭はさながら濁だく流りゆうだ。のみこまれてしまえば一巻の終わりだ。ジョーカーは、だが、下がらない。向かってゆく。なぜだ。何を考えてるンだ。しかも、あの足どり。走っているのでも歩いているのでもない。浮いている？　違ちがう。身体からだが上下して、左右にも揺ゆれている。ゆっくりではない。特別速いようにも見えない。だが、速い。とはいえ、鉄鞭ほど速くはない。ジョーカーは鉄鞭の濁流にゆらゆらと突っこんでいった。いや──、

　馬鹿な。

　すり抜けた。

「──〝幽ユウ歩ホ〟」

　気がつけば、鉄鞭を振りきった女の前にあの男が直立していた。

「……ッ……！」

「ふん」

　ジョーカーは鼻を鳴らしてかすかに首を傾かしげてみせてから、大懺悔嘯で斬きり上げ、斬り下ろし、薙ないで、斜ななめに斬り下ろし、返す刀でやはり斜めに斬り上げた。

「──〝散サン華ゲ〟」

　鉄鞭女はバラバラになって、風に散る花のように崩くずれ落ちた。

　なんて野や郎ろうだ。

　ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。

　やつは勝ち誇ほこったように大懺悔嘯を振りかざして、大声を張りあげた。

「ロックバード中隊！　ヘンドリック・カルマン中隊長！　健在か……！」

「ヘンドリック・カルマンここにあり……！」

「ハミングバード中隊！　アイザック・ダニング中隊長……！」

「ここにおります……！」

「スネイクバード中隊！　ガイル・ライリー中隊長……！」

「ガイル・ライリー！　お陰かげ様さまでぴんぴんしております！」

「パンカロ・ファミリー！　チーロ・パンカロ……！」

「生きてるに決まってんじゃないすか！　バリバリのブリブリでゴーだっつーの……！」

「よかろう！　もはや勝利は八割方我らの手中にあると思え！　あと二割だ！　これより敵を駆く逐ちくしつつ神しん殿でんに突とつ入にゅうし奪だつ還かんする！　ジェードリを救うぞ！　心配はいらん、もう貴様らは死んでも英えい雄ゆうだ！　後こう顧この憂うれいなく存分に戦い尽つくせ……！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オォォォォォォォォォォォ────ッ……！」

　天地を揺るがすような男たちの声だった。

　大懺悔嘯で敵兵を斬り払はらいながら、ジョーカーが神殿に向かって悠ゆう然ぜんと歩いてゆく。

　私兵隊の制服を身にまとい、弩剣ラバイユと盾たてで武装した兵士たちが、群れをなしてそれにつづこうとしている。

　気にくわない男だった。頭のどこかで目の敵かたきにしていた。エンツォ・パンカロに、今は亡なき親おや父じに特別扱あつかいされていたことに、ことさら高く評価され、友の中の友として遇ぐうされていたことに、反感を抱いだいていた。安っぽい嫉しつ妬とだったのかもしれない。そうだ。俺は器うつわが小さい。ファミリーを率ひきいるなんてどだい無理だ。俺にはできない。チーロ坊ぼつちゃんのほうが何十倍も、何百倍もふさわしい。わかっていたことだ。

所しよ詮せん、役者が違うってことか。そういうことなンだろうな。

「よっしゃー！　パンカロ・ファミリーも行っくぞーらぁっ！　カマーンだ野郎ども！　オレにつづけやファッキンガーイズ……！」

チーロがハンマーパンチ壱いち號ごうを振り上げて走りはじめた。それが首ド領ンの意志であり命令であるのなら、パンカロ・ファミリーは全員ただついてゆくだけだ。命いのち懸がけで従うのみだ。

カルロはぐずぐずしているリクの肩かたを右手でつかんだ。身体に巻きつけてある布がめくれてしまったが、かまわなかった。

「こい！」

「……おれ……は……」

「てめえは俺の弟だ！　誰だれが何と言おうと、そいつは変わらねえンだよ！　たとえ何があってもな……！」

リクはうなずきはしなかった。どのみち何を考え、何を思っているのかなんて、本当のところはわからない。それらしいものを信じることしかできない。ただ、カルロがチーロを追って駆かけだすと、リクは黙ってついてきた。それでいい。とにかく、今はそれで。一方で、イビツたちが警けい戒かいして少し距きよ離りをとろうとしていることにも気づいていた。何をびびってやがるンだ。そうは思う。仕方ないのか、とも。この先、俺はリクに何をしてやれる。わからない。すべてはけりがついてからだ。カルロは斬れ味が鈍にぶった蓮れん華げで敵兵を押おしのけながら、神殿を目指した。途と中ちゆう、あの黒い肌はだの男を見たような気がした。妙みようだった。やつは見覚えのある別の兵隊に腕うでをつかまれて、引っぱられていた。大将の命令だろうが。しかし。しかしもかかしもあるか。連中はそんなことを怒ど鳴なりあっていた。やつらは他ほかの敵兵とは明らかに違う。気になったが、少々遠かった。いい。放ほうっておけ。ジョーカーはもう大だい柱ちゆう廊ろうに足を踏ふみ入れようとしている。前を行くチーロにもやや離はなされた。神殿前はお仕着せの装備を身につけた私兵隊の兵隊たちに制圧されつつある。カルロは足を速めた。こいつは勝ったな、と思っていた。

「━よし……！」

　思わず叫さけんでしまった。トマトクンの大剣が黒馬の首に負わせた傷は決して浅くなかった。アロンズは、だが、黒馬を乗り捨てようとはしなかった。馬に乗ったまま逃にげるつもりのようだ。馬もアロンズの手た綱づな捌さばきにこたえて、踊おどるようにトマトクンに尻しりを向けて駆けだした。さすがに馬だけあって速い。トマトクンがすかさず追いすがって大剣を振ふるったが、わずかに届かなかった。アロンズを乗せた黒馬は、神殿の入口から拝殿を貫つらぬいてこの大いなる祈いのりの場に達する大柱廊へと飛びこんでゆく。下りの階段のはずだが、馬で下りられるのか。上ってきたのだから、下りられるか。トマトクンはそのままアロンズを追う気らしい。一人で大だい丈じよう夫ぶだろうか。ちょっと心配だけれど、それよりも今は達成感のほうがまさっていた。懐かい中ちゅう時計を確かく認にんした。時刻は十九時二十五分。余よ裕ゆうだ。余裕で間に合った。

「髭ひげ……！　戻もどって！　おじいちゃんと一いつ緒しよに、旧式殿へ……！」

「━ムッ……！オオ！」

　マリアローズは髭の返事を聞きながら、ムソー老人の手をとった。待て。落ちつけ。何か忘れてないか。そうだ。

「髭、アルファも……！」

　イヌに蘇そ生せい式を施ほどこすなんて聞いたことがないけれど、人間以外には施せ式しきできないという話も聞いたことがない。元筆頭僧そう主しゆ様のムソー老人に確認すればいいのかもしれないが、髭が迷わずアルファをかつぎ上げて走ってきた。おそらくそれが答えだろう。

「ええと……で、どこだっけ、柱！」

「わしの記き憶おくが間ま違ちごうとらんかったら、真西にある柱

じゃ」

「西──って、あっちかな。てゆうかさ、間違ってたら今度こそほんっとうにマジでものっすごく怒おこるからね？」

「ひょひへ。わしを信じるがよい。大船に乗ったつもりでのう。ほれ、あれじゃ」

　大船どころか丸まる木き舟ぶねよりも頼たよりないムソー老人が杖つえで示した方向に一本の柱がある。大いなる祈りの場の天てん井じようを支えている数十本の柱のうちの一本で、見たところ、他の柱と何か違ちがいがあるようには見えないが、それを言ったら全部の柱がそうだ。いずれにしても、どれかは当たりなのだろうから、もし間違っていても、すべて確かめればいい。マリアローズはカタリとアルファを両りよう肩かたにかついだ髭とムソー老人を従えて、問題の柱に近づいた。ムソー老人にとっては幸いなことに、一発で当たりだった。ムソー老人が柱の裏側に回って根元あたりに鍵かぎを挿さしこむと、何かが起こった。何だろう。でも、間違いなく何かが起こったのだ。そう感じた。マリアローズはそれを探して振り向いた。すぐに見つけることができた。

　大いなる祈りの場の中央だ。

　さっきまでなかったものがある。

　円えん筒とう形の物体だ。

「……昇しよう降こう機き」

「ほうじゃ。あれで式殿にゆける」

「師父、では参りましょう」

「ふぉむ。久しぶりの蘇生式じゃなあ。腕が錆さびついとらんとよいが」

　この期ごに及およんで、人を不安にさせることを言うなんて。

　本当に一ひと筋すじ縄なわではゆかないおじいちゃんだが、昇降機に乗りこむ直前だった。もう大いなる祈りの場には立って動いている敵兵はいない。ピンパーネルはトマトクンを追ったのか。ユリカとロム・フォウは大柱廊の前でこっちを見ている。ムソー老人は

ユリカとロム・フォウに目をやって、顔をくしゃっとさせてから、マリアローズをじっと見つめた。

「ぬしゃ口は悪いが、なかなかに根こん性じようもありよるし、顔はほんまにえらいめんこいのう」

「……殴なぐらないよ？　殴らないけど、かなり殴りたいよ？」

「ひょへひょへ」

「このジジイ……」

「心配はせんでええ。わしに任せとけ」

　ムソー老人が昇降機の中の制せい御ぎょ盤ばんを何やら操作した。昇降機の扉とびらが閉じてゆく。髭が力強くうなずいてくれた。なぜだか泣きそうになった。涙るい腺せんがゆるみすぎだ。泣かないけどさ。泣く場面じゃないし。

「こう見えても、わしゃ天才じゃ」

　昇降機の扉が完全に閉まった。昇降機が重い音を立てて床ゆかにのみこまれるように沈しずんでゆく。最後まで見届けることはしなかった。あとはムソー老人と髭に任せるしかない。どうにもつかみどころのないおじいちゃんと筋肉至上主義者の髭だけれど、昔から天才と何とかは紙かみ一ひと重えというし、こういう普ふ通つうじゃない仕事においては、まともじゃないくらいのほうがかえって信しん頼らいできる──ような気がする。それに、決着はまだついていない。マリアローズが見届けるべきはむしろそっちのほうだろう。

「アルファもきっと大丈夫だから！」

　先に大だい柱ちゆう廊ろうを下りはじめたロム・フォウの背中にそう声をかけた。ロム・フォウは振り向かなかったが、うなずいたようだった。大柱廊の両側にずらっと並ぶ柱には篝かがり籠かごが据すえつけられていて、火が焚たかれているので、かなり明るい。階段の上り下りが若じやつ干かん苦手なユリカにはじきに追いついた。アロンズとトマトクンはすでに拝はい殿でんか。ピンパーネルの姿も見えない。しかし、長い階段だ。百メーテルはゆうにあるだろう。右手が痛い。手だけでなく、こめかみのあたりがズンズン疼うずいて仕方ない。もげちゃわないといいけど。いいか。もげたっ

ていい。もうすぐ何もかもが終わる。僕たちの園長マスターがアロンズ・ニードルスピアを討うちとって、すべてを終わらせる。この悲劇に、惨さん劇げきに、終しゆう止し符ふを打つ。楽観的すぎる見方とはいえないと思う。遠くで喚かん声せいが聞こえた。確証はないが、たぶん、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツのものではない。きっとジョーカーたちだ。勝ち鬨どきみたいな声だった。僕らは勝っている。勝利しつつある。そして──、

ここだ。

この拝殿が終幕の舞ぶ台たいになる。

かつて神殿を訪おとずれた者たちが集つどって大海王神オストロスに祈りを捧ささげていたという拝殿は、大いなる祈りの場の倍どころか四倍ほどもある円形の大広間だ。やはり壁かべはなく、柱だけで天井を支えている構造で、神殿の背骨ともいうべき大柱廊の巨きよ大だいな踊おどり場にあたるという言い方もできるだろう。無数といってもいい数の風よけ付きの大きな燭しよく台だいが外周に設置されているが、何しろ広いので明るいとまではとてもいえない。屋根の中央にぼんやりと緑色っぽく光る球体が吊つり下げられていなければ、中心あたりはほとんど真っ暗だろう。

二人はその淡あわい光の下で火花を散らしていた。

正確にいえば、二人と一頭か。

アロンズ・ニードルスピアは左手に握にぎった手た綱づなと鐙あぶみとで黒馬を御ぎよしながら、右手一本であの二ふた股またに分かれた大たい剣けんを振ふるっている。全身から湯気を立ちのぼらせて激しく身を躍おどらせる黒馬は、身体からだの大きさからいっても、驚きよう異い的な俊しゆん敏びんさからいっても、とても馬には見えない。馬でなければ何だと訊きかれると困るのだが、仮にあれが馬以外の何か別の生き物だったとしても、マリアローズは驚おどろかない。かえって納なつ得とくするだろう。はっきりいって、アロンズが駆かるあの黒馬には絶対に近づきたくない。文字通り一いつ蹴しゆうされるのが目に見えている。こうして二、三十メーテル離はなれた場所にいても、一っ飛びで襲おそいかかってきそうな脅きよう威いを感じる。それで、ピンパーネルもロム・フォウもユリカも、息をのんで見守っているのだろう。

いや、それだけじゃない。

　みんな、信じているんだ。

　僕らの園長マスターは絶対に負けない。負けるはずがない。

　実際、トマトクンはまったく怯ひるむことなく、むしろ自分のほうから積極的にアロンズと黒馬を攻せめている。攻め立てている。とにかく黒馬がでかいので惑まどわされそうになるが、よく見れば、アロンズは明らかに受け身だ。トマトクンの大剣から逃にげるために黒馬を走らせ、ほとんど牽けん制せいや防御のためだけに剣を振っている。嫌いや味みなほど平静そのものだったアロンズの表情がゆがんでいた。呼吸も乱れている。もちろん、トマトクンだって肩かたで息をしているけれど、うちの園長マスターはここからが強いんだ。どれだけ疲つかれても、傷ついても、鈍にぶらない。衰おとろえない。大剣の一振りごとに、鋭するどく、速く、力強く、大だい胆たん不ふ敵てきになる。

「──なぜだ！　なぜあなたはそれほどまでに……！」

「くだらんことを！　貴様が弱いだけだ……！」

　ついでに、ちょっと柄がらが悪くなって、微び妙みように怖こわくなる。

　でも、どうなっても、トマトクンはトマトクンだ。

「雑魚ざこの分際で──」

　トマトクンが不意に足を止めて大剣の切っ先を下げた。完全に誘さそいだ。マリアローズでもわかるくらいなのに、アロンズは引きよせられるようにして黒馬を突とつ進しんさせた。傍はた目めから見ても今のアロンズには余よ裕ゆうがない。とっさに反応してしまったのか。その代だい償しようは大きかった。

「──俺の身内に手を出した！　その報むくいを受けろ……！」

　トマトクンは突つっこんできた黒馬の右側に踏ふみこんで、身体を一回転させた。琥こ珀はく色いろの剣身波打つ大剣の一いち撃げきは、斬きったというより炸さく裂れつした。ほとんど爆ばく発はつ音だった。黒馬の胸が馬うま鎧よろいごと盛せい大だいにえぐられて陥かん没ぼつした。それまで手傷を負いながらも騎き手しゆによくこたえていた黒馬だが、さすがに体勢が崩くずれた。というか、あれは無理だ。ものすごい勢いで血が噴ふきだしているし、あ

んな場所があれだけ損傷したら少なくとも前まえ肢あしは立たないだろう。黒馬は傾かしぎながら前のめりになって、とうとう石の床ゆかに倒たおれこんだ。アロンズはその前に鞍くらから飛び離れていたが、トマトクンはすかさず追い打ちをかけるべく横倒しになった黒馬を飛び越こえようとした。それを邪じや魔ましようとしたのか、黒馬が首を振りながら身をよじった。トマトクンは馬の背につまずいて転んだが、すぐに起きあがった。それで少し時間を稼かせがれてしまった。アロンズはその間に距きよ離りをとって、しかし、逃げだそうとはしなかった。どうせ逃げたって無む駄だだ。だいたい、逃げ場所なんかない。

　マリアローズが下りてきた方向のちょうど逆だった。

　一人じゃない。大勢だ。

　続々と大柱廊を上って拝殿になだれこんでくる。

　その先頭に立っている者は、一応、知りあいだった。仲間とはちょっと呼びづらい。派手な黒い鎧だか服だかよくわからないものを身にまとい、金ピカの大刀を振りかざしている、しかもその恰かつ好こうがやけに似合ってしまっているあんな男が、仲間だなんて。

「……ジョーカー！」

「なんだか、しゅごい恰好ね……」

「はイ……」

「目立ちたがり屋なんだよ。あの男は」

　ユリカやロム・フォウ、ピンパーネルまでも、声こわ音ねや言葉に余裕がうかがえる。当然だと思う。ジョーカーがあとに従える兵隊は数十人の規模じゃない。百人、いや、それ以上だ。装備をそろえたバルモア商会の私兵隊が列をなしている様さまは威圧感があるし、トレンチコートに身をつつんだパンカロ・ファミリーの連中も荒あらくれ者風でそれなりに頼たのもしく見える。あの鉄球みたいな義手を振り回している禿とく頭とうの巨きよ漢かんはチーロ・パンカロか。人相が悪いカルロ・ボッシもいる。その隣となりにいるのは──何だろう。あれは、人間？　体形が変だし、身体中に布を巻きつけているなんて、なんとも奇き妙みようなファッションだ。と

いうか、見覚えがある。そうだ。たしかに、見た。

　あいつと瓜うり二ふたつの顔をしていた。

　眩暈めまいがした。

　トマトクンとアロンズの一騎討うちに集中するあまり、しばらくどこかに吹ふっ飛んでいた痛みがまたぶり返してきた。

　考えたくない。思い出したくないんだ。あいつのことは。混乱してしまいそうだから。それどころじゃないんだ。本当に今はそれどころじゃない。もう少しなんだから。

　トマトクンは大剣をかつぐように構えて、アロンズを一撃必殺の間合いにとらえるべく、少しずつ距離をつめている。

　アロンズは。

「……アバドン……」

　その両眼が一いつ杯ぱいに見開かれていた。

　剣けんはちゃんと持っている。突っ立っているわけでもない。ただ、アロンズが視線をそそいでいるのは、向かいあっているトマトクンではなく、腹を激しく上下させて、今まさに息絶えようとしている黒馬だった。

「……友よ……すまない……」

　男は悲しんでいるようだった。いや、間ま違ちがいなく、悲しんでいた。だって、すごい量だ。滂ぼう沱だとあふれている。涙なみだだ。泣いている。嗚お咽えつどころじゃない。正しよう真しん正しよう銘めい、泣き声をあげている。あの男はいったい何歳なのだろう。三十歳は超こえていると思うが、四十歳とか五十歳には見えない。それとも、年ねん齢れい不ふ詳しようの端たん整せいな顔立ちだから、四十歳くらいになっているのだろうか。いずれにせよ、大人だ。大の大人があんな泣き方をするものか。こどもみたいに泣きじゃくるなんて。しかも、ここは戦場だ。ただの戦場じゃない。男はたった一人きりで、数百人の敵に包囲されつつある。まさに絶体絶命というやつだ。そんな状じよう況きようで泣くなんて。

　どうかしている。

あの男は変だ。

「こうなることは、わかっていました」

あげく、わけのわからないことを言って、笑うなんて。

男は泣きながら笑いだした。

異様だった。

マリアローズだけではないだろう。誰だれも彼もが呆あつ気けにとられていた。もしかしたら、あの男だけが冷静だったのかもしれない。正気とはとても思えないが、あの男はおそらく自分が何をなすべきか知っていて、それを行おうとしていた。最初にそのことに気づいたのはトマトクンだった。トマトクンは一歩踏ふみこんで大剣を振ふり下ろしたが、あまりに直線的で工夫も何もない、らしくない平へい凡ぼんな斬ざん撃げきだった。アロンズは飛び退すさって軽々と大剣をかわし、顔の前に左手をかざしてみせた。

「すべて……！　ロシュの言うとおりだ……！」

雷かみなりが落ちたのかと思った。

何かとんでもなく巨大な光が上から降ってきて、視界が白一色に染められ、耳が馬ば鹿かになるくらいの轟ごう音おんが響ひびき渡わたったからだ。

身体からだが後ろに飛ばされた。突とつ風ぷうみたいなものを感じたような気がする。でも、正直、よくわからない。とにかく、石の床に腰こしと背中を打って、息がつまった。頭は打たなかったようだ。反射的に受け身をとったのか。何だよ。何、これ。自分の声がやけに遠く聞こえた。僕が遠くにいる……？　そんなわけがない。ここだ。僕はここにいる。

目を凝こらしてみた。

うっすらと何かが見えた。

少しずつはっきりしてきた。

拝はい殿でんの天てん井じように巨大な穴があいていた。

光だ。

光の柱がそびえ立っている。

あの男はその中にいた。

浮ういている。

両りよう腕うでを左右に広げて、天を仰あおいでいる。

何やってるんだ。

自分の声がまだ遠い。

「……何だよ、あれ」

さっきよりもいくらか近くなった。

声が聞こえる。

僕のじゃない。

誰の声だろう。

あの男か。

あの男の声だ。

ああ……ああああ……ああ……あああ……ああ……ああ……あああ……ああ……ああ……ロシュロシュよ……ロシュよ……ロロロロシュよ……ロシュよロシュよ……ロシュよ……今今こそ今こそ誓ちかいの誓いの刻ときです……誓いの刻です刻です……今こそ誓いの刻です……古き力で古き力で戒いましめを破り……古き古き力力で戒めを破り……古き力で戒めを破り……ああああなたをあなたを迎むかえる刻です……ああああなたを……あなたを迎える刻です……聖聖聖なるこここ刻印によってよって清められし……聖なる刻印によって清められし……あなたのあなたの忠実なる僕たちの血血血血血血血血血と肉肉肉を捧ささげ捧げ捧げます……血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血と……肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉肉を……ロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロシュよロシュよロシュよロシュ

よよよよよよ……。

　痛い。右手じゃない。背中でも腰でもない。頭が痛い。ひどく痛い。割れそうだ。この声のせいだろうか。そうかもしれない。わからない。それどころじゃない。でも、見ていないといけない気がした。目を離はなしちゃダメだ。今、何が起ころうとしているのか、見るんだ。いや、もう起こっている。何だ、あれ。馬が。黒馬が──嘘うそでしょ？　そんな──、

　溶とけてゆく。赤黒い、何か霧きりのようなものに変わってゆく。その霧のようなものが、光の柱に吸いよせられてゆく。見れば、霧の流れみたいなものはそれだけじゃない。大だい柱ちゆう廊ろうから下りてくる。上ってくるものもある。そこらじゅう霧だらけだ。光の柱はそれらすべてを吸いこんで、赤黒く変色してゆく。そして、脈打っている。ドクドクドクドク脈動している。

「言ったはずです」

　あの男がマリアローズたちを見下ろして、穏おだやかな笑えみを浮かべた。

「私は死なない」

　天に向かって突つきだしたあの男の左手の人差し指が、まがまがしく燦きらめいていた。赤黒い光の柱の中にあっても、その輝かがやきはひときわ目を引いた。「下がれ！」と誰かが叫さけんだ。トマトクンの声だった。その直後だった。まただ。空から光が降ってきて、石の床ゆかに炸さく裂れつした。雷だ。でも、小さい雷だった。数は多かった。立てつづけに何度も何度も落らく雷らいした。雷はあの赤黒い光の柱を取り囲むように落ちた。その間も霧がどんどん光の柱に流れこんでいった。光の柱は次し第だいに赤黒い竜たつ巻まきのようなものへと化していった。もうあの男の姿は見えなかった。竜巻は回転速度を増してゆき、それと反比例して細くなっていった。雷は落ちつづけた。心が麻ま痺ひしてしまっているのか、恐きよう怖ふは感じなかった。落ちついているわけでもない。マリアローズはただ見ていた。

　不意に雷がやんだ。

　赤黒い竜巻が静止した。

音が消失した。

時間が止まってしまったかのようだった。

そんなはずがなかった。

すぐに動きだした。

竜巻だと思っていたものは、もはや固体化して、何か得体の知れないものでできた柱状の物体になっていた。

それが収縮しはじめた。急速だった。ものの数秒だったと思う。それはあっという間に縮んで人型のものになった。そう。人だ。人にしか見えない。男だ。彫ちよう刻こくのように均整のとれた身体からだつきをしている。頭とう髪はつや睫毛まつげや抜ぬけるように白い肌はだは燐りん光こうを発していて、奇き異いには感じるものの、美しい。股こ間かんや肩かた、手足や首などに鎧よろいらしきものをつけているだけで、見ようによっては滑こつ稽けいな恰かつ好こうなのだが、似合うとか似合わないとか、それ以前の問題だ。とにかく、そこにあるものとして、きれいなのだ。理り屈くつなんてわからない。ただ、奇き跡せきだと思う。あんな造形はありえない。存在しえない。男の顔はアロンズ・ニードルスピアによく似ている。だが、違ちがう。別人というより、あれは別物だ。まあ、そんなことは誰だれの目にも明らかなのだが。

大きいからだ。

といっても、たとえばサリア・ベルみたいにものすごく巨きよ大だいなわけではない。

たぶん、三メーテルには届かないだろう。

そうはいっても、やはりでかい。

アロンズ・ニードルスピアは巨大化して、何か別の存在になってしまった。

いったい何になったっていうんだ。

自分でいくら考えても、正解にはたどりつけないような気がする。

　そんなことだろうと思って自じ己こ紹しよう介かいしてくれるほど、あいつは果たして親切なのか。

「How do you do? Enchanté! Sehr erfreut! Piacere! Encantado! Como vai? Aangenaam kennis te maken! Ut vales?　初次見面！　今日ハ！　初メマシテ？　初めまして」

　声というにはあまりに奇き妙みような声だった。それはむしろ思念と呼ぶべきものなのかもしれない。聞き覚えのない言葉が頭の中で一いつ斉せいに響ひびいて、やがて一つの形をなし、あれが何を言ったのかは理解したが、どうやって言ったのかさっぱりわからない。唇くちびるは動いていたけれど、あんなにたくさんの言語らしきものを一いつ緒しよくたに発音したようにはとうてい見えなかった。

「わワワワわ私はあああああアロろろろろンズズズにににニードルスピスピスピああア」

　誰かどうにかして欲しい。とてつもなく不快だ。マリアローズは耳を押おさえて声をさえぎろうとした。アアアアアアロロロロロロロンンンズズズズニイイイイイイイドルドルドドドドルスピイイイイイイイアアアア。ダメだ。聞こえる。どうやっても聞こえてくる。アアアアアロオオオオンズウウウウウ。気が狂くるいそうだ。助けて。突とつ然ぜんだった。

「──否いな」

　声が一つになった。おかしな言い方かもしれないが、そんなかんじだった。

「吾わが名はロシュ。汝なんじら人の子が神と呼ぶ者なり。初めまして、人の子よ」

　正直、ぽかんとしてしまった。

だって、神──って。

ロシュを名乗った者は、ぐるりとあたりを見まわして、まるで人間みたいに小首を傾かしげてみせた。

「カァァミが地上に受肉したァァァというのに、こんなものか。リリリリリアークションが反応が薄うすいな。人の子はにに鈍にぶいウスノロか。カカカ神がここにいるというのに。ひひひ人の子の上にある神が目の前にいるというのに。おおお拝まぬのか、たたた讃たたえぬのか。アアアウウうまく喋しゃべれェェぬ。シシシしばし待て。じきに慣れるだろう。もう慣れた。大だい丈じよう夫ぶだ。この身体はどうかな。試ためしてみるとしよう」

あれが神だなんて。神？　あんなやつが？　美しくは見えるが、ただちょっとでかいだけの人じゃないか。いや、やっぱり人とはいえないだろう。ロシュが膝ひざを曲げて跳ちよう躍やくした。すごい跳躍力だった。着地した先は、ジョーカー率ひきいるバルモア商会私兵隊の隊列の真っ直ただ中なかだった。ジョーカーがとっさに「散開……！」と指示を出して、みずからもその場を離はなれたが、逃にげ遅おくれた者がいた。三人くらいグジュシャッと踏ふみ潰つぶされて、二人、つかまった。ロシュが右手と左手でそれぞれ一人ずつわしづかみにして、あっさりと握にぎり潰した。

凄せい惨さんな光景だった。それなのに、どうも現実感がわいてこない。ロシュがあまりにも平然としているからか。もっとも、仲間をやられた私兵隊の連中は違った。誰かがロシュに向けて矢を放った。誰かがそれにつづいた。あとは連れん鎖さ反応だった。おそらく、数十本の矢がロシュに降りそそいだと思う。ロシュは、しかし、手で払はらうことさえしなかった。その必要がないようだった。

どういうわけか、刺さらないのだ。

何本となく命中しているのに、どうしてだ。

ロシュの皮ひ膚ふを突つき破やぶる矢は一本たりともなかった。すべて弾はじかれてしまった。

「──無む駄だだ、よせ……！」

トマトクンは射手たちに向けて怒ど鳴なったのか。

　それとも、あいつを止めようとしたのか。

　マリアローズは視界の隅すみのほうであいつの姿をとらえた。ちょうどそのとき、息せき切って大だい柱ちゆう廊ろうを上ってきた一人の少女を見たように思った。気のせいかもしれない。だって、おかしい。なんでこんなときに、こんな場所に、あの娘こが。たしか、ルカ。ルカっていったっけ。いるはずがない。きっと、幻げん覚かくか何かだ。でも、あの娘この声も聞こえた。

「──リク……！」

　それがあいつの名前なんだろうと、なぜだかすんなり理解してしまった。ということは、ルカは幻まぼろしなんかじゃない。あそこにいる。きたんだ。わざわざこんな危険きわまりない場所まで、何のために？　知らない。知るわけがない。もうごちゃごちゃだ。わけがわからない。ただ、ルカにリクと呼ばれたあいつが今しようとしていることは明白だった。リクはピンパーネルにまさるとも劣おとらない速さで駆かけて、ロシュに突とつ進しんしようとしていた。というか、もう飛びかかっていた。矢がやんでいた。リクはそのかわりに自身を特大の矢にしてロシュに襲おそいかかった。本当に矢のように速かった。目で追いきれないほどだった。ロシュも反応しなかった。できなかったのか、あえてしなかったのか。とにかく、ロシュはじっとしていた。上半身に飛びつかれて、首筋に噛かみつかれても、平気な顔をしていた。実際、平気だったのだろう。

　不思議だった。

　リクが布の合間からのぞかせたおぞましい牙きばを突き立てようが、両手の爪つめで引っかこうが、殴なぐろうが、蹴け飛とばそうが、何も起こらない。

　まるで、たしかに、間ま違ちがいなくそこにあるのに、存在していないかのようだった。

「吾われは神だぞ」

　ロシュはリクの首をやすやすとつかんで、塵ちりでも捨てるように放ほうった。

「不ふ遜そんなり、穢けがれし者よ。汝の振ふる舞まいは神への冒ぼう瀆とくである」

それほど力をこめたようには見えなかったのに、リクの身体からだはくるくる回りながら高々と宙に舞った。

急な放物線を描えがいて、落ちてくる。

あのまま石の床ゆかに叩たたきつけられたら、無事ではすまない。

でも、僕にはどうしようもない。

たぶん、誰にも打つ手がない。

ルカが両手を広げて悲鳴をあげた。

いや、違う。

あれは悲鳴じゃない。

ルカの髪かみの毛が逆立って、コートの裾すそがひるがえっている。

リクの落下速度がいきなり遅おそくなった。

ルカの全身が小刻みに震ふるえだした。

白目を剝むいている。

鼻から、目から、血が流れだした。

「──オーバリストか……！」

誰かが叫さけんだ。誰の声かはわからなかった。リクは空中で体勢を立てなおして、床に着地した。恐おそろしい叫び声が轟とどろいた。リクの声らしかった。リクがルカに駆けよっていった。トマトクンが、おそらくジョーカーに向かって大声で命じた。「下がらせろ……！」ジョーカーは言われる前から全員に後退を指示しはじめていた。リクとルカはすぐに見えなくなった。はっとした。マリアローズはロム・フォウとユリカとピンパーネルに声をかけて、ジョーカーたちとは逆の方向へ、つまり、大いなる祈いのりの場方面へ十メーテルくらい下がった。でも、トマトクンは。振り返ると、トマトクンは一人でロシュと対たい峙じしていた。残るつもりなのか。逃げないのか。だけど、逃げてどうなる？　ロシュが追い

かけてこないという保証はない。というか、めちゃくちゃ追いかけてきそうだ。だから、なのか。まさか、トマトクンは一人でロシュを食い止めるつもりなのか。無茶だ。だって、なんでか知らないけれど、あいつには矢がきかない。リクの鋭するどい牙や爪でも傷一つつけられなかった。あいつの身体は金剛石ダイヤモンドか、それよりもっと硬かたいものでできているかのようだった。そんな相手に、一人きりで立ち向かおうなんて。

　トマトクンは、きっと、マリアローズたちが立ち止まったことに気づいている。

「こいつは俺がやる」

　ようするに、だから逃げろ、と言いたいのだろう。

「──普ふ通つうの手段では殺せん相手だ」

　じゃあ、トマトクンは？　きみならどうにかできるっていうの？　たった一人で……？

　この場から立ち去る決心がどうしてもつかなかった。ロム・フォウとピンパーネルは、そもそもこれ以上、トマトクンから離はなれる気がない様子だった。ユリカもマリアローズの左ひだり腕うでに手をかけたまま動こうとしない。息がつまる。トマトクンは大たい剣けんをかつぐように構えて、いつでも斬きりかかれる体勢だが、ロシュは突っ立っているだけだ。どうやら、トマトクンをしげしげと観察しているらしい。

「そうだ。汝なんじだ」

　ロシュはかすかな笑えみを浮うかべた。

「炎ほのおを身にまといし者。その刃やいばに宿りし人の子には過ぎたる輝かがやき。天を、万ばん象しようを、破らんとする七星の一よ。汝は目め障ざわりである」

「貴様の都合なんぞ知ったことか」

「吾も人の子らの都合などには興味がない。汝らのごとき鬼おに子ごを生む、愚おろかにして傲ごう岸がん不遜なる人の子は消し去らねばならぬ」

「大原則はどうした」

「吾は人の子の生みだしたる力によって地上に受肉した」

「……エニグマ・リングか」

「好きこのんで地上に現れる神などおらぬ。吾はむしろ被害者なり」

「屁へ理り屈くつを」

「否いな。否だ。汝らは三千大千世界の管理者たる吾ら神にすら災わざわいをなす」

　ロシュが一歩前に出た。

　それにあわせてトマトクンは二歩下がった。

「汝らを捨て置けば、やがて身の程ほど知らずにも、三千大千世界を破は壊かいせんとするであろうことは明々白々なり。管理者の末席にあるものとしてとうてい見過ごせぬ。人の子は一度滅ほろぶべし。そののちに穢れなき純じゆん粋すいなる麗うるわし子を、吾が新たにつくろう」

「そいつらを貴様が管理するわけか」

「吾は、管理者なれば」

「余計なお世話だ……！」

　今度はトマトクンが前に出た。突とつ進しんした。ロシュは下がらなかった。トマトクンが大剣を振り下ろす寸前だった。ロシュは跳とびあがった。上だ。トマトクンは大剣を止め、身体を傾かたむけて前へ転がった。起きあがったときには百八十度方向転てん換かんしていた。トマトクンは落ちてくるロシュめがけて大剣を斜ななめに鋭く振り上げた。

「━があああああああああああぁぁぁ……！」

　当たった。そう思った。どうやったのか知らないが、ロシュが空中を蹴って、後ろに飛び下がらなければ、トマトクンの大剣はやつを直ちよく撃げきしていただろう。

　希望の灯ともしびが仄ほの見みえたような気がした。

　不可解な後方宙返りを決めて着地したロシュは、自分の右足を見て首を傾かしげた。

「吾わが肉体を損傷させるとは」

　たしかに、ロシュの右みぎ脛すねに一筋の傷が刻まれていて、そこから脈打つ赤黒い何かがのぞいている。傷はこうしている間にもふさがりつつあるが、トマトクンの大剣はやつを傷つけた。それはまぎれもない事実だ。

「汝の持つ刃はやはり吾われらの肉体と同じ種類の結合体で構成されているのだな。いずこでそのようなものを手に入れたのだ。それは人の子の手には余る刃なり」

「さあな……！」

　トマトクンはすっと踏ふみこんで身体からだごと大剣を二回転させた。二回転目は一回転目よりそうとう鋭く速かった。ロシュは飛び退すさったが、二回転目をかわしきれず、胸に真一文字の傷がついた。トマトクンは手を、足を休めなかった。どんどん距きょ離りをつめてすくいあげるように大剣を振ふり上げ、叩たたきつけるように振り下ろし、柄つかから左手を放して右手だけで振り回した。大剣が急に伸のびたように見えた。片手持ちだと、上体を存分にひねることができるぶん、剣が遠くまで届くのだ。それで目測をあやまったのか、ロシュはまた手傷を負った。左ひだり肩かたから右の脇わき腹ばらにかけてザックリ斬れた。深い傷に見えた。何だ、たいしたことないじゃないか。神なんていっても、この程度か。それとも、トマトクンがすごいのか。どっちでもいい。このまま勝負をつけてしまって欲しい。でも、なんでだろう。どうして僕は焦あせってるんだろう。

　すぐにわかった。

　誰だれよりもじれているのは、僕じゃない。トマトクンだ。だから、僕まで焦っている。

「人の子はげに不可解だ」

　それとは正反対に、防戦一方になって追い立てられようが、多少負傷しようが、ロシュは動じない。激しく動き回っているのに、

ゆったりとくつろいでいるようにさえ見える。それどころか、考えごとでもしているのか。

「汝らが相争う理由が吾には理解できぬ。欲得のためか。感情によるのか。そうして汝らは我が身を滅ぼし果ては三千大千世界を紊みださんとする。不条理ではないか」

「──黙だまれ……！」

　トマトクンが放った大剣は、だが、わずかに届かなかった。惜おしかった。もう少しだったのに。本当に？　わからない。ただ、疑念がある。トマトクンはロシュを追いつめつつある。ロシュは逃にげ回っているだけだ。トマトクンの太刀たち筋は、呼吸ほど乱れていない。むしろ、刻一刻と正確さと速度を増している。大剣がロシュを一刀両断する瞬しゅん間かんがそのうち訪おとずれるだろう。このままゆけばトマトクンが勝つ。そう思う。でも、そう思いたいだけかもしれない。

「……なんだか、変だよ」

　ロム・フォウが呟つぶやいた。無理やり肺の奥のほうから絞しぼりだしたような声だった。

「あたしの気のせいかもしれないけれど、トマトは……ありもしない壁かべを壊こわそうとしているみたいに見える」

「ありもしない……壁？」

「わからない。ごめん。あたしもうまく説明できないんだ」

「あノ怪け我が・ワザとでス」

　ピンパーネルの声こわ音ねも暗かった。怯おびえているようでさえあった。

「……わじゃとって……しょれ、どういう意味なの？」

「本当ハ・よけらレル。あエテ・よけなかっタ」

「でも──」

　マリアローズは何をどう反論しようとしたのだろう。自分でもよ

くわからない。きっと、認めたくなかっただけだ。結局、僕はいつもそうだ。都合の悪い現実から目をそらそうとして、そらしきれなくなってから、おろおろする。

「──ああ、なるほど。そういうことか」

　不意にロシュが床ゆかに張りつくような姿勢をとった。目を瞠みはるような素す早ばやさで、気味が悪いほどの平べったさだった。トマトクンがロシュの右足に蹴つまずいてバランスを崩くずした。ロシュはその間に超ちよう高こう速そくで床を這はってトマトクンから離はなれた。まるでヤモリみたいな動きだった。少なくとも人間には不可能な身のこなしだ。全身をバネみたいに縮めて一気に跳びあがるような起きあがり方も気色が悪かった。気持ちが悪いだけでなく、脅きよう威いだった。

「憑より代しろが人の子だけに、知らず知らずのうちに人の子の形にこだわっていたようだ。何も吾が汝なんじらごときにあわせる必要はない。吾は神であるというのに」

　あいつは何を言っているんだ。おかしいんじゃないのか。そう、おかしいんだ。おかしいものと考えなきゃいけなかったんだ。

　ロシュがいきなり顎あごが外れているんじゃないかと思えるくらい大口を開けた。かなりグロテスクだった。それ以上に危険な雰ふん囲い気きが漂ただよいまくりだった。あいつは何か出そうとしている。それは間ま違ちがいなかった。でも、何を？　考えても無む駄だだ。あいつはおかしいんだ。マリアローズの範はん囲いが狭せまい常識なんかでは判断できない。ロシュに突つっこんでゆこうとしていたトマトクンが足を止めた。まさか、観念したとか？　そんな馬ば鹿かな。そんなはずがない。だけど、もうロシュはそれを吐はきだそうとしている。それはロシュの口こう腔こう内で燦さん然ぜんと輝かがやきはじめていた。白い光のかたまりだった。あの槍やりから放出された光に少し似ていた。ただ、もっと大きかった。すさまじい勢いで膨ぼう張ちようして、ロシュが「ＫＡＨＡ□□□□□□□□□□□□□□ッ……！」と喉のどかどこかを鳴らすと同時に、さらに膨ふくれあがりながら放たれた。マリアローズはとっさに目を閉じた。それでも瞼まぶたの裏が真っ白に染め抜ぬかれた。すぐに瞼を押おしあげた。ちゃんと見えるようになるまで少し時間がかかった。マリアローズはその前に叫さけんだ。

「──トマトクン……！」

　直ちよく撃げきだった。目を閉じる寸前、光にのみこまれてゆくトマトクンの姿をたしかに見た。拝はい殿でんの石の床は丸くへこんでいた。湯気か煙けむりのようなものが立ちのぼってた。焦こげくさいとも埃ほこりくさいともいいようがない妙みような匂においがした。半径十メーテルほどのへこみの前に、ロシュが口を開けたまま立っていた。

　トマトクンはへこみの中央あたりにいた。

　全身鎧よろいが頭部まで覆おおいつくして、猛たけ々だけしく変形している。

　片かた膝ひざをついているが、肩かたが上下していた。

　生きている。

　もちろん、本当に、いつもどおり大だい丈じよう夫ぶだと思っていたけれど、正直、ほっとした。

　ロシュがようやく口を閉じて首をひねった。

「汝が身にまといし炎ほのおの、それが真の姿というわけか」

「……どうだかな」

「吾われにあらがうは無益だぞ」

「貴様が決めることじゃない」

「否いなだ。吾が決める」

　目の錯さつ覚かくかと思った。違う。ロシュの腕うでが急激に伸のびた。それも、少しじゃない。思いっきりだ。あっという間に何倍もの長さになって、両側からトマトクンに襲おそいかかった。当然、トマトクンもじっとしていなかった。跳とびあがってよけようとしたが、トマトクンの真下で衝しよう突とつしたロシュの両腕がその勢いで絡からみあった。ゴムじゃあるまいし、そんなのありか。できるものなら猛もう烈れつに抗こう議ぎしたいが、受け付けてはもらえないだろう。絡みあった両腕の先のほうがとんでもない速度でぐるぐる回転して、トマトクンをはたき落とした。

「──吾は神であるがゆえに」

　腕はすでにもとの長さに戻もどっている。いつの間に。トマトクンもすぐに起きあがったが、ロシュが迫せまっていた。何だ、あの走り方。足をグィーングィーン伸ばしながら走っている。むろん、速い。速いというのも馬ば鹿か馬ば鹿かしくなるくらい速い。気がつくと、ロシュはトマトクンの目の前にいた。もっとも、ロシュは依い然ぜんとして丸まる腰ごしだ。トマトクンは大たい剣けんを振ふるおうとした。その両手がつかまれた。

「おとなしく吾に従え」

　何本もの手だった。

　ロシュの肩から、胸から、腹から、何本、いや、十本以上の手が生えて、トマトクンの両手をがっちりとつかまえ、身体からだごと持ちあげていた。

「さすれば、吾が手厚く滅ほろぼしてくれる」

「──滅ぼされて……」

　トマトクンが足あ掻がいている。なぜかマリアローズはちっとも絶望なんてしていなかった。大丈夫だと思っていた。トマトクンがものすごい怪かい力りきを発揮して、あの手をぜんぶ引きちぎってしまうくらいの勢いでロシュから離れる光景を想像していた。おかしい、と思った。なかなかそうならない。変だ。

「たまるかァァァァァ？」

　それもトマトクンの声ではなかった。

　ほんの少しだけ愉ゆ快かいそうに、ロシュが言ったのだ。

　ロシュはもとからある左手でトマトクンの左ひだり肩かたを押さえ、右手で左腕をわしづかみにした。

　ロム・フォウが息をのんで、ユリカは短く悲鳴をあげた。ピンパーネルも低い唸うなり声をもらした。

　やけに簡単だった。

　簡単すぎて、自分の目が信じられなかった。

「――ぐうううあああああ……！」

　トマトクンの左腕がねじ切られた。

　十数本の手が消えるようにロシュの体内へと引っこんだ。

　支えを失ったトマトクンが落下する。

　ロシュの身体がまた変化していた。

　下半身がやたらと大きい。

　その倍ほどにまで太くなった右みぎ脚あしをしなわせて、ロシュはトマトクンを蹴け飛とばした。

　心が砕くだけてしまいそうなやばい音がした。

　トマトクンが飛んできた。

　そう思ったときにはもう、後ろのほうで何かが石の床ゆかに叩たたきつけられる音がした。

　いやな音だった。

　砕けた心を、さらに木こっ端ぱ微み塵じんにするような音だった。

　残ざん酷こくな音だった。

　マリアローズは振り向くことができなかった。自分の目で確かく認にんする勇気がなかった。それに、ゆっくりとこっちへ向かって歩いてくるロシュから目を離はなすことができなかった。本当は見たくない。それどころか、今すぐ逃にげだしたいとさえ思う。でも、足が動かない。というより、全身だ。金かな縛しばりにでもあったように身動きがとれない。僕は震ふるえている。歯の根があわない。怖こわいんだかなんだか、もうよくわからない。そういうレベルじゃないような気もする。たぶん、これは恐れじゃない。畏れだ。圧あつ倒とう的な存在を前にして、自分の無力さを痛感し、何をしても無意味だと、頭が、身体が、血が、肉が、魂たましいまでもが感じている。だから、マリアローズだけではなかった。他ほかの三人も同様だった。ユリカもピンパーネルもロム・フォウもマリアローズのすぐそばに突つっ立っていた。

　だから、さ。

　しょうがないよ。あきらめるとか、あきらめないとか、そういう問題でもない。ただ、世の中にはどうしようもないことってあるんだ。いきなり上空三千メーテルくらいまで運ばれて、そこから投げ落とされたら、もうおしまいだ。打つ手なんかない。黙だまって落ちてゆくしかないじゃないか。これは、そういう種類の出来事なんだ。運が悪かったんだ。超最低ＳＵＣＫな運勢だ。そう考えるしかない。仕方ない。

　何をしても無む駄だだ。

　徹てつ底てい的に、完全に無駄だ。

　──じゃあ。

　何をしてもいいってことだ。

　決して平気じゃなかった。震えは止まらなかったし、膝ひざがカクンカクンいって今にも座りこんでしまいそうだった。涙なみだも出てきた。それでもマリアローズは左手でベルトのホルダーをまさぐり、爆ばく薬やく液ハーレム・ゴードン入りの小こ瓶びんを三本抜ぬきとった。まだロシュは十メーテル以上先にいる。あんなところからトマトクンをぶっ飛ばしたんだ。僕たちの園長マスターをよくもやってくれた。怒いかりがわいてきた。あんなやつ。あんなやつ。冗じよう談だんじゃない。爆ばく弾だんを投げた。ロシュは左右の手で三本ともキャッチした。手の中で爆発したが、やつは「何かあったか？」みたいな顔つきだ。むかつく。ふざけやがって。畜生ＦＵＣＫ。畜生ＦＵＣＫ。畜生ＦＵＣＫ。マリアローズは左手で偽にせ劫ごう火かを抜いて前に出た。涙があとからあとからあふれてきて止まらなかった。でも、ロシュは止まった。約五メーテル前方だった。ロシュが立ち止まって首を傾かしげた。マリアローズは鼻をすすって右手の布で顔をぬぐった。あー痛い。この右手。どうしてくれるんだ。さらに怒りが増ぞう幅ふくされて、もう頭にのぼった血が沸ふつ騰とうしそうだった。

「お前なんかの好きにはさせない……！」

　言ってやった。

　気持ちよかった。

　ざまあみろ。

　相手が何だろうと、言いたいことは言わせてもらう。

　僕は怒おこってるんだ。

「神だか何だか知らないけどさ。いきなり出てきて、何？　人の子を消し去る？　滅ぼす？　バカなこと言わないでくれる？　ふざけるな！　いい？　ふざけるなっていうんだ！　だいたい、人の子ってなんだよ？　人なんだから人の子に決まってるでしょ？　持って回ったような言い方すれば偉えらそうに見えるとでも思ってるわけ？　はっ。かっこわるっ。マジで、すっごく、びっくりするくらいかっこわるいよ？　ねえ、自覚してる？　自分がありえないくらいかっこわるいって。たとえば、その恰かつ好こう。何、その裸はだかにちょびっとプロテクターみたいな、完全に露ろし出ゆつ狂きよう入っちゃってる系のコスチューム！　トレンドとか知らないのかもしれないけど、はっきりいってかわいそうな人にしか見えないよ？　人じゃないみたいだけどさ。拝まないのかとか讃たたえないのかとか言ってたよね。それは無理。絶対、無理だから。わかる？　わからない？　わかるように嚙かみ砕いて説明するとさ。やっぱり、尊敬とかされるためには、それなりの見てくれとか態度とか能書きとか実績とか、いろいろ必要だと思うんだよね。見たかんじ、そういうの、まったくないよね。ゼロじゃない？　おこがましいんだよ。それで拝んでもらおうなんてさ。それくらいのことがわからないって、言っちゃなんだけど、頭悪いんじゃないの？　知らなかったよ。大発見！　神様って頭悪くてもなれるものなんだね。僕でもなれるかもね？　てゆうか、僕のほうがきみなんかより一兆倍くらいマシな神様になれそうな気がするよ。少なくとも、ファッションセンスはきみよりいいしね。きみほど押おしつけがましくもないし。きみほど気色悪くないし、傍はた迷めい惑わくじゃないし、思いどおりにならないからってすぐ滅ほろぼしちゃえとか、そんな短気なこと言ったりしないしさ！」

　マリアローズは気づいていた。

　僕は一人じゃない。

　ユリカが極限クライマックス九手ナイン棍ボールを構えてマリアローズの右みぎ脇わきをかためてくれていた。

　ピンパーネルは雄おすのグレアデを逆手に持って左脇にぴったり

とついている。

　ロム・フォウも剣けんを抜いてユリカの右側に進みでてきた。

　涙は止まっていた。

　マリアローズはロシュをにらみつけて叫さけんだ。

「人間を見くびるな……！」

　もちろん、そんなことを勇ましく言い放ったところで、何がどうなるわけでもない。

　そのはずだった。

　予想外だった。

　ロシュが眉まゆをひそめた。

「……に、ん……げん……？」

　その瞬しゅん間かん、ロシュがまるで人間のように見えた。

　もっとはっきりと一番近いものをあげるとするなら、アロンズ・ニードルスピアだ。

「にににににに人間ワワワ吾われわわわわ私ハハハにににあああアロアロアロンズズズズニニニードルドルドルスススススピスピアアアアアイイイイイヤかかかか神神神神わわわわ私は吾はワレワレは吾はロシュ。ロシュ。吾はロシュなり」

　奇き怪かいな声ともつかない声を垂れ流したあと、ロシュはロシュに戻もどった。もうどこからどう見てもロシュ以外の何ものでもなかった。ちょっとだけ何かを期待しなかったといったら嘘うそになるが、落らく胆たんするほどのことでもなかった。もし多少がっかりしたとしても、そんなものはすぐに吹ふき飛んでしまっただろう。

　背後だった。何かが噴ふきあがった。そんなかんじだった。それは熱かった。だが、熱風とはいえなかった。明らかに風ではない。だったら何だと訊きかれると困るのだが、とにかく空気は揺ゆらいでいなかった。ただ熱を感じた。とてつもない熱だった。

マリアローズは振ふり向いた。

トマトクンが上半身だけ起こしていた。

生きているのか死んでいるのか、すぐにはわからなかった。

だって、ひどい状態だった。全身鎧よろいはすでにもとの形に戻っていて、血だらけだった。ねじ切られた左ひだり腕うでの根元からの出血がとくにおびただしいが、顔も血まみれだったし、ほとんど白目を剝むいていて、口も開いていた。よく見れば、息をしているらしいことはわかるものの、それだって目の錯さつ覚かくじゃないとはいいきれなかった。

でも、これはいったい何なんだ。

とめどもなく噴きあがる熱の中心にいるのは、間ま違ちがいなくトマトクンだ。

目には見えない。形も色もない。トマトクンの周りの景色がなんとなくぼんやりと霞かすんでいるような気がするけれど、それだけだ。

それにしても、熱い。なんて熱さだろう。熱は波のごとく間欠的に押しよせてきて、そのたびにどんどん温度が上がる。まるで火であぶられているみたいだ。マリアローズは目を細めてあとずさりかけた。ちょっと待った。ダメだ。そっちにはロシュがいる。いくらなんでも、自分からロシュに近づいてゆくほど大胆にはなれない。というか、やつはどうしたんだろう。マリアローズはちらりとロシュを見た。

「──そんな」

ロシュは両眼を見開いていた。

「馬ば鹿かな、それはァァァ……」

その視線の先に何があるのか。考えるまでもない。

トマトクンだ。トマトクン以外にないだろう。

どこからか音が聞こえてきた。最初は遠く小さかった。次し第だいに近づいてきた。聞き覚えのある音だった。誰だれもが胸の奥で

響ひびかせている音にそっくりだ。心臓の音だった。マリアローズはまた振り向いた。トマトクンが大剣を杖つえにして立ちあがろうとした。音はトマトクンから聞こえてきていた。熱の源もトマトクンだった。気づいたことがあった。熱が押しよせてくるタイミングと音がぴったり一いつ致ちしている。それが何を意味するのかなんてわからなかった。ただ、トマトクンがそうとう無理をしていることはわかった。トマトクンは血の泡あわを吹いていた。目は焦しよう点てんがあっていなかった。苦しそうに呻うめいていた。それにもかかわらず、今のトマトクンは力のかたまりだった。近づくと溶とけてしまいそうだった。小さな太陽みたいだった。

　ロシュよりもずっと恐おそろしかった。

　二つの意味で怖こわかった。

　一つは、あからさまに尋じん常じようではない強大な力自体に対して、単純に戦せん慄りつを覚えていた。

　もう一つは、トマトクンがどうにかなってしまうんじゃないかという恐きよう怖ふだった。

　前者は意志の力でねじ伏ふせることができそうだった。何か根こん拠きよがあるわけではないが、後者のほうが深刻な問題のような気がしてならなかった。ダメだ。止めないと。そうしないと、僕らはトマトクンを失ってしまう。状じよう況きようも考えずに、そんなことを思った。マリアローズはトマトクンの名を呼んだが、巨きよ大だいな心音のせいでもう自分の声なんて聞こえなかった。すごい熱だった。一歩でも近づけば燃えてしまうかもしれない。それでも、駆かけよろうとした。

　突とつ然ぜん、消えた。

　熱が。

　心音が。

　冗じよう談だんみたいに静かになった。

　マリアローズは左手の甲こうで目をこすった。詐さ欺ぎにでも引っかかったような気持ちだった。それとも、夢でも見ているのか。

　さっきまではいなかった。

　断言できる。

　絶対にいなかった。

　誰かがトマトクンを後ろから抱だきしめている。

　そいつはどうやら男のようだ。純白の布を頭からかぶっていて、顔はよく見えない。いや、そんなことはどうでもいい。たいしたことじゃない。それより、あれは──どういうことだろう。どうなっているんだ。

　男の右腕は左腕のようで、左腕は右腕のようだった。

　腕が逆さまだ。

「──まったく無茶をする。際さい涯がいの果てに眠ねむる果てなき力を無理やり引っぱってこようだなんて。本当に君たちはとんでもないことを考える。だいたい、この身体ではとうていもたない。壊こわれてしまうよ。ああ、非ひ道どい。ずいぶん傷いたんでいるじゃないか」

　男は左手のような右手と右手のような左手でいとおしむようにトマトクンの身体を撫なでた。

　トマトクンが荒あらい息をしながら「黙だまれ」と言った。低い、かすれた声だった。

「……俺の……邪じや魔まを、するな」

「すまない。もう十分邪魔をしてしまったようだ。出てくるつもりはなかったのだけれどね。君が無理をするからだよ。友人として、傍ぼう観かんはできなかった」

「つまらん……冗談だ……」

「冗談だと思うのかい？」

　男は左手のような右手の指でトマトクンの髪かみを梳すいて、笑ったようだ。

「あながちそうでもないかもしれないよ」

「汝なんじは──」

　ロシュの声は揺れていた。動どう揺ようしているのか。是ぜ非ひともその顔を拝んでやりたかった。振り返ると、ロシュは眉み間けんと鼻び梁りょうに皺しわをよせて、歯は茎ぐきを剝きだしにしていた。

「汝か、ソオル……！　すべて汝が仕組んだことかァァァ……！」

「違ちがうよ、ロシュ。これはたまたまだ。巡めぐりあわせというやつだよ」

「戯ざれ言を！　汝のごとき堕おちたものがァァァァ……！」

「腐くさっても鯛たい、という言葉が、人間の世界にはあってね」

　ソオルと呼ばれた男がトマトクンの右手に両手をそえた。

「──今回だけだ。今回だけ、力を貸そう。友人としてね」

「そう言って……何度、助けるつもりだ……」

「君の人徳だと思えばいいよ」

　ソオルがさらに手をのばして、大たい剣けんに指をふれさせた。

「 hTx xkxrxBr yHlx

vxrxnCxcxnxt lxsxstx xmdx ETALIHINNA

・」

　あとでこのことを誰かさんに話して聞かせたら、きっとものすごく残念がるだろう。

　でも、ちっとも意外じゃなかった。わかっていた。

　その琥こ珀はく色いろに輝かがやく波打つ刃やいばは見る者を恐怖というより畏い怖ふさせる。

　魔ま導どう王おう時代の秘宝の一つに数えられるような、あるいはもっと貴重でえがたい、人の手にあまるほどの稀まれなる剣だ。



初めて目にしたとき、マリアローズはそう感じたのだ。

道どう化けの大だい公こう爵しやくアウトルマ・ファッルーカは、その剣を指してこう言った。

貴公の持つその剣。剣。剣。それこそ真に刃たる剣、と。

まあ、それについては多少異論を差し挟はさむ余地があると思う。

あれは刃なんてものじゃない。

トマトクンが右手だけで大剣を持ちあげ、切っ先を天てん井じょうに向けた。その瞬しゅん間かんだった。

波打つ剣身が燃えあがった。

七色の炎ほのおだった。

なんてド派手なんだ。

しかも、でかい。長さというか高さは七、八メーテルほどで、幅はばも二メーテルくらいはある。マリアローズは思わず「うわあ」と歓かん声せいをあげてしまった。すぐに、誰だれが言いだしたの

かわからないが、ユリカたちと一いつ緒しよにその場から離はなれるべく走りだした。僕たちがそばにいたら、間違いなく邪魔になる。それは明らかだった。でも、ちゃんと見ていた。見ていないと損をするとさえ思った。トマトクンがもはや大剣とは呼びづらい大剣を手に、ゆっくりと前進しはじめた。ソオルの姿は跡あと形かたもなかった。不思議だったが、あとずさるロシュの姿を目にして、そんなことはどうでもよくなった。トマトクンの足どりが一歩進むごとに確かなものになってゆく。もうほとんど走っている。ロシュは下がる。怯おびえているのか。あの七色に燃えあがる大剣を恐おそれているのだ。そして、ついにトマトクンが大剣を振ふり下ろした。

「──があああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　届かないかと思った。だが、七色の炎が急にのびて、ロシュの左ひだり肩かたをゴッソリそぎとった。ロシュはさらに飛び退すさりながら自分の左肩を見て、顔を醜みにくくゆがめた。

「おォォォのれェェェェィィ人の子の分際でェェェ……！　神を嘗なめるなァァァ……！」

　やつは叫さけぶなり全身を変化させた。胴どう体たいがやたらとふくれていて、手足が細長い。どこか蛙かえるを思わせる姿だが、顔はもとのままで、胸のあたりに口みたいなものがいくつもあった。そこから吐はきだすように放った。あの光だった。連続だった。トマトクンは下がらずに大剣を振り回した。光は七色の炎にふれると呆あつ気けなく四散した。ロシュはそれでも光を放ちつづけた。放ちながら後退した。

「汝は汝は汝はァァァ！　人の子の人の子の人人人の子の癖くせにィィィ！　なぜ神に逆らうのだ馬ば鹿かめ愚おろか者め身の程ほど知らずめ三千大千世界のことわりをなんと心得ェェェェるッ……！」

「貴様の都合など知らんと言ったろうが……！」

「ヒヒヒ卑ひ怯きよう者めェェェェィ！　その刃は汝の力にあらァァァず！　そういうのをなァァァ！　他力本願というのだァァァァァァ……！」

「何とでも言え……！　俺には──」

　トマトクンは不意に低い姿勢になって速度を上げた。ロシュがまた変身した。今度は十二本の手足を備えた細長い昆こん虫ちゆうみたいな姿だった。トマトクンはかまわずに踏ふみこんで、七色に燃えあがる大剣を横よこ薙なぎに振るった。

「守りたいものがある……！」

　まっぷたつだった。

　ロシュは胴体のちょうど真ん中で上下に分かたれた。

　その二つがそれぞれトマトクンに襲おそいかかった。

　六本の手と六本の足が鋭するどい槍やりとなり、あるいは凶きよう悪あくな剣となって迫せまりくる。

　トマトクンが絶ぜつ叫きようした。

　七色の炎がいっそう輝きを増して暴れ狂くるい、炸さく裂れつした。

a denouement

ここにいるよ

窓を開けたままだった。

少し換かん気きをして閉めるつもりだったのに、気がつくと、窓まど際ぎわの椅い子すの上で膝ひざを抱かかえてうとうとしていた。

ちょっと肌はだ寒ざむい。立ちあがって窓を閉め、また椅子に腰こしを下ろした。なんだか頭がぼうっとしている。鼻をすすった。身体からだがだるい。風邪かぜでも引いたのかもしれない。それとも、うたた寝ねしていたせいだろうか。そうかもしれない。まだ眠ねむい。

眠いといえば、我らが園長マスターは、崩ほう落らくした拝はい殿でんの瓦が礫れきの中から救出されて以来、ほとんど寝てばかりだ。たまに起きて、ご飯を食べる。食べ終わったら、寝る。しかも、床ゆかの上だとか椅子だとかで眠ってしまう。熟じゆく睡すいだ。爆ばく睡すいといってもいい。そうなると、もうどうやっても起きない。髭ひげはムソー老人と祭さい壇だんをフル稼か働どうさせているので、長身の園長マスターを寝ね床どこまで運ぶのはかなり骨だ。一度、ロム・フォウと、まだ本調子ではないサフィニアの共同作業という、はらはらして見ていられないような、見み物もののような、微び妙みような光景を拝ませてもらった。どっちが上を持ってどっちが下を持つか、なかなか決まらなくて、ロム・フォウが言いだした。

じゃあ、ジャンケンで決めようか。

ジャンケンはα大陸だけじゃなくて暗黒大陸にもあるらしい。ただ、地方によってルールが違ちがう。そのときは、グーがパーに勝ち、パーがチョキに勝ち、チョキがグーに勝つという暗黒大陸ルールで行われた。あいこがかなりの回数つづいたすえに、サフィニアが負けた。あとでサフィニアが愚ぐ痴ちっていた。パーがチョキに勝つなんて、やっぱりおかしい、と。そうだね、と慰なぐさめておいた。てゆうかさ、あんまり無理しないほうがいいよ。まだ調子悪いんでしょ。そう言うと、サフィニアは、もう大だい丈じよう夫ぶ、と答えながら、預けておいたハニワを差しだしてきて、これ、本当に似てますね、と少しだけ笑った。ハニワは枕まくら元もとに飾かざった。サフィニアには帰ってきてからすぐ、すべてを話した。聞いている間、終始すまなそうにしていて、涙なみだぐんだり

もしたけれど、泣きだすことはなかった。最後に、ありがとう、と、みんなに向けて言った。そのときの笑え顔がおがすごくきれいだった。

　クローディアはもういない。サフィニアによると、いつの間にかいなくなっていたらしい。たぶん、自分の居場所に戻もどったのだろう。ジョーカーは何やら忙いそがしいようで、あれから一度も回転海豚いるかにはきていないし、ジェードリを発たつまでにもう一度、二人に会う機会があるかどうか。まあ、ジョーカーとは建設的な議論を交かわせそうにないので、それでいいのかもしれない。ただ、もとはといえば、あの男に呼ばれてジェードリくんだりまでやってきたわけで、そのことについてはあらためてちゃんと話しておきたい気もする。クローディアとは、いつかもうちょっと仲よくなれれば、と思う。

　一応、同じＺＯＯの仲間だし。

　仲よくなれなくたって、べつにそれは変わらないけれど。

　でも、今朝、食堂で、ロム・フォウの足あし許もとに丸まっていたアルファの頭を撫なでてみたら、吠ほえられなかった。あれは仲よくなれたってことなのかな。違うか。ただ、まだ施せ式しきからあまり時間がたっていなくて、元気がないだけだろう。今を逃のがしたら次の機会はないと思い、さわりまくっていると、どういうわけかピンパーネルまでアルファを撫で回しはじめた。ピンパーネルの手つきはたどたどしかったが、アルファは満まん更ざらでもない様子だった。ロム・フォウが、わりと気持ちいいみたいだよ、と代弁した。少し不公平に感じないでもなかったが、よく考えると、ピンパーネルとアルファはどこか似ているところがあった。というか、ピンパーネルがイヌっぽいのだ。だから、イヌのツボがわかるのかな。そんなバカみたいなことを考えたりもした。ロム・フォウはアルファを連れて、エルデンには行かず、そのうち旅に出るとのことだった。また会えるよ、とロム・フォウは言った。ちょっと散歩に出かけるから、小一時間で帰ってくるよ、とでもいうような口調だった。ロム・フォウにとっては本当にその程度の感覚なのかもしれなかった。

　髭はしばらくジェードリにとどまって、神殿の再興に力を尽つくすことになりそうだ。ムソー老人が筆頭僧そう主しゅに返り咲ざいて、髭は位にはつかず、バルモア商会の手を借りて使えそうな僧そう侶りよを集めるのだという。旧式殿にある祭壇のディーモン召し

よう喚かんプログラムを餌えさにすれば、なんとかなるのではないか。昨夜遅おそく回転海豚を訪おとずれた髭が、そんなことを言っていた。

　ジェードリは動きはじめ、変わりつつある。

　血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツはバルモア商会の私兵隊とパンカロ・ファミリーによって掃そう討とうされ、とくに夜間、外出を控ひかえていた住民たちも、大手を振ふって出歩けるようになったようだ。火災などで破は壊かいされた街の復旧作業も急速度で進むだろう。バルモア商会の手配で腕うでのいい大工たちが大勢やってくるという噂うわさもある。それに対たい抗こうして、ほとんど死に体ていだったパパ・ルオー商会が突とつ然ぜん目を覚ましたように次々と旧市街の住民たちを雇やとい入れ、旧埠ふ頭とうの再建に力をそそぎはじめたとか、バルモア商会もまた、旧市街の取りこみに懸けん命めいらしいとか。近々、赤線地区の支配者であるパンカロ・ファミリーとの間に何らかの協定を結ぶという話も、まことしやかに囁ささやかれている。なんでもその裏には、バルモア商会の前社長にして現会長エドウィン・バルモアの知ち己きにして、パンカロ・ファミリーの亡なき先代エンツォ・パンカロの畏い友ゆうでもあったジャン・ジャック・ド・ジョーカーなる人物の仲ちゅう介かいがあったとか──。

　たまに、ぜんぶ夢だったんじゃないかと思うことがある。

　何かとんでもない出来事に出くわしても、喉のどもとすぎれば何とやらで、いろいろと片がついて、疲つかれ果てて寝て起きれば、そのとき味わったつらさとか苦しみとか痛みとか、そうしたものはだいぶ薄うすれてしまう。かと思えば、何かの拍ひよう子しでやけに生々しく思い出してしまったりして、でも、それだって何かしていればそのうち忘れて。たくさん積み重ねてきたつもりなのに、見まわすと、何もない。僕一人だけがぽつんとたたずんでいる。声をかけてくれる人が、肩かたを叩たたいてくれる人がいないと、僕が僕だということさえ、僕にはわからない。

　マリアローズは椅い子すから立って、寝しん台だいに近づいた。

「名前を呼べばいいのかな。それとも、ほっぺたでも叩けばいい？」

　かがみこんで、頰ほおにそっとふれた。

「そろそろ起きたら？」

　あたたかい。

　ユリカがふいてくれているから、洗顔後みたいにすべすべしている。

　枕元には魚人ハニワが置いてあった。

　きみにそっくりだ。

「……いつになったら目を覚ますの？」

　蘇そ生せい式は成功した、と髭ひげが言ってた。

　ただ、きわどかった。アニマが深層デプスに落ちる寸前であった。とはいえ、十中八九大丈夫だ。九割九分までは。残りの一分は、拙せつ僧そうらの手の届かぬ領域にゆだねられておる。蘇生式はすでに確立した技術だが、完成形の見えぬ芸術のようでもあるのだ。現在も想定外の事例が次々と報告されつづけ、蘇生式はそれに対処するため、絶えず変化してゆかざるをえぬ。必ず目を覚ますと断言したいところだが、正直、拙僧にはわからぬ。万に一つといえど、このままの状態が半永久的につづく可能性も──。

「僕は信じてるけどね」

　疑ってなんかいない。

「カタリ」

　ほら。

　やっぱり。

　ほんの少しだけれど、今、目を開けた。

　気のせいじゃない。間ま違ちがいない。

　唇くちびるも動いた。

　何か言った。

「……さかなばたけ、が……」

「はい？」

　一いつ瞬しゅん、真面目まじめに考えこんでしまった。さかなばたけって何だろう。魚畑？

　すぐに馬ば鹿か馬鹿しくなって、吹ふきだしてしまった。

　本当に、きみってやつは。

「……お」

　ぼんやりとこっちを見て、にへっ、というかんじのだらしない笑えみを浮うかべたりして。

「……何や……マリアローズやん……」

「悪かったね、僕で」

「……ホンマやで……何や……もしかして、わし……生きとんのかい……」

「そう思う？」

「……どないやろ、な……」

「生きてるよ。今は。生き返ったんだよ」

「……そ、か……」

「生きてるよ。ここにいるんだよ。カタリ」

「……はは……」

　カタリは目を閉じて、ゆっくりと息を吐はいた。

「……生きとんのかい……かっこつけて……えらい、損したなぁ……」

「そうだね」

「……みんな……わしのために……骨折って、くれよったんか……？」

「ちょっとね」

「……そ、か……」

　それからしばらくカタリは黙だまってた。短い会話で疲れきったようでもあり、何を言おうか考えているようでもあった。マリアローズは窓の外に目をやった。昼下がりの黄色っぽいジェードリの景色は好きになれそうだった。

「……おおきに」

　それが、ありがとう、という意味だと気づくのに少し時間がかかった。何か返事をしないと、と思ったけれど、言葉が出てこなかった。別のものが出てきそうになって、こらえた。こらえきれなくなって、カタリにしがみつき、肩のあたりに顔を押おしつけた。

「おかえり」

　ちゃんと言えたと思う。

　カタリが「おお」とぶっきらぼうに答えた。

　マリアローズはすぐにカタリから離はなれて、袖そでで顔をぬぐいながらドアのほうへ向かった。ノブに手をかける前に、ドアが開いた。ユリカだった。起きたよ。そう声をかける前に、ユリカは洗面器やタオルを放ほうり投げ、マリアローズを突つき飛ばすようにして、カタリめがけて突とつ進しんしていった。洗面器の中身はぬるま湯だったから、床ゆかだけでなく、マリアローズも少しぬれた。ま、いいか、と思いながら振ふり返ると、ユリカはカタリに抱だきつくというより、ほとんど身体からだの上にのっかって暴れていた。涙なみだ声ごえでさんざん叱しかられて、カタリはひたすら謝るだけだ。お姉さんと弟、いや、お母さんと息子むすこってかんじかな。いい薬になればいいけど。無理かな。無理じゃ困るんだけどね。マリアローズはため息をついた。洗面器や床の始末はあとまわしだ。まずはみんなを呼んでこよう。トマトクンも起こさないと。案外、それが一番の大仕事かもしれない。



a digression

やさしい世界

—声が聞こえる。

何の声だろう。

あの声ではない。

「こやつは本当に役に立つのか、にゃんこ」

「ええ。それはもう。エニグマ・リングというやつはね。ディアランデルという男が作ったものですが、相あい性しようがあるんです。使える者は少ない。貴重ですよ。一つの才能です」

「汝なれの言うことはようわからんし、どうも信用ならん」

「そんな。ひどい。ぼくは嘘うそつきじゃありませんよ。結構正直者です」

「嘘つきが正直者を自じ称しようしたらそれは嘘だからやっぱり嘘つきよの」

嘘つき。

—嘘。

嘘をついていたつもりはない。

よかれと思っていた。信じていた。

「まあ、このままじゃあどうにもなりませんけれどね。さすがに」

「これで生きとるのか」

「一応ね。これからなおすんですよ」

「汝なれは気色の悪いことばかり考えるの」

「素す晴ばらしい発明ばかりでしょう？　ＳＳの叡えい智ちの結けつ晶しようですよ」

「おもろいから、べつにいいけど」

「そう。それが一番大事なことですよ。二番目は──」

　声が言う。

「理想です」

　それを追い求めていた。

　誰だれもがいたわりあい、互たがいを大切にする、汚けがれのない、やさしい世界を。

　そんなものはないと知っていた。

　ありえないと。

　世界はやさしくなどない。冷たい。冷れい酷こくで、酷こく薄はくで、過酷だ。いつからそうだったのか。わからない。ただ、罪はそこらじゅうにある。蔓まん延えんしている。たとえ汚れのない者が一人いたとしても、罪にふれずにはいられない。それは空気のようにいたるところにある。罪は感かん染せんする。罪に染まった者は、罪そのものとなる。その者がまた罪を撒まき散らす。罪は連れん鎖さする。汚れた世界はさらにどこまでも汚れてゆく。

　なんとかしたかった。

「でも、あなたは間ま違ちがえた」

　──間違えた。

「神なんかに頼たよろうとした」

　頼った。

「覚えておくといいですよ。神は人を救ったりしません。彼らが一番好ましく思うもの。それは、安定した世界です。あまねく世界が、このまま、未み来らい永えい劫ごうありつづける。彼らはそのために存在しています。神かみ頼だのみは愚おろか者のすることですよ。あなたは利用されたんです」

　利用された。

「あなたは信じるものを間違えた」

　信じるもの。

「あなたが信じるべきだったのは、神じゃない。あなたの理想です」

　理想。

　やさしい世界。

「もし、よろしければ、力をお貸ししますよ？」

　力。

「騙だまされるな。にゃんこは嘘つきだからの」

「やだなあ。水を差すようなことを言わないでくださいよ、阿ア麼マ李リ」

「呼び捨てはならんと言ったはずだが？」

「阿麼李姫ひめ」

「よかろ」

「ねえ、べつにぼくを信じる必要はないんですよ。あなたはあなたとあなたの理想だけを信じればいい。ただ、お互いの利害が一いつ致ちしたときは、ちょっとだけ手伝って欲しいんです」

　理想がある。

　やさしい世界を夢見ている。

　父と母を救うことができなかった。

　世界がもっと清らかでやさしければ。

　声が言う。

　ひどく甘い声だ。

「ぼくらと一いつ緒しよに世界を再生しませんか」

a sequel

歩いてゆこう

この道はどこまでつづいているのだろう。

大陸北横断道はね、ずっと行くと、テンセイグっていう国まで行けるんだって。ジョルジュが教えてくれたの。あの子、物知りだから。

遠いのかな。その国は。

すごく遠いみたい。でも、行けるよ。道はつづいているんだもの。

そう言って、彼女は手を握にぎってきた。

拒こばもうとした。

この手は汚れているし、爪つめが鋭するどすぎて、彼女まで傷つけてしまいそうだ。

平気だよ、と彼女は言った。怖こわがらなくてもいいよ。あたしは怖くない。自分でも不思議なくらいね、怖くないよ。何も怖くない。

おれは怖いよ、と言おうとした。

声にならなかった。

うまく発音できないんだ。

あたしはわかるから、それも平気、と彼女は笑った。

手をしっかりと握られた。

風が吹ふいていた。

街はもうずいぶん遠い。

夜はどうすればいいだろう。

きっと星がきれいだよ、と彼女は夢見るように言った。お星様に囲まれて眠ねむるなんて、家にいたらできないよ。なんか楽しみ。

寒いかもしれない。

くっつかせてね、彼女ははにかむように笑った。寝ね袋ぶくろとか買ってきたし、大だい丈じよう夫ぶだと思うけど。毛布も余分にあるし。

何か危ないことがあるかもしれない。

そうしたら、守ってね、と彼女は歌うように言った。あたしだって結構、強いよ。練習してるし。うまくなったんだから。

おれのことが嫌きらいになるかもしれない。

ならないよ。

先のことはわからないよ。

わかるよ。

あたしにはわかる。

道がつづいているでしょう、と彼女は前のほうを指さした。でも、本当にテンセイグまでつづいているかどうか、あたしにはわからない。ジョルジュだって記き憶おく違ちがいしてたかもしれない。だけどね、あたしは歩いていく。あたしがそうするって決めて、ちゃんとつづければ、それが本当になるでしょう。

つまり、自分次し第だいか。

そう、そういうこと、と彼女はうなずいた。あたし、決めてることがいくつかあるんだ。それは何があっても絶対そうするの。一つは、ずっと一緒にいること。

おれと？

うん。それからね、と彼女は空を見上げた。いつか、みんなにもう一度会うこと。

おれも？

もちろん。

でも、おれは。

　大丈夫だよ、と彼女は今まで見せたことがないような朗ほがらかな笑え顔がおで言った。みんな、ローラのこどもだもん。ローラなら絶対、おかえりって言って、抱だきしめてくれるから。だから、みんなもそうすると思う。そうしないといけないんだよ。

　それから彼女は足どりを速めて、ね、帰ろうね、いつか、あの街に、と言った。

　おれはうなずいていた。

　彼女の手を、傷つけてしまわないように、強く握り返した。

　この道はどこまでつづいているのだろう。

　どうでもいいと思った。

　だって、おれたちはどこまでででも歩いてゆける。

　たとえ道がなくたって、歩いてゆけるんだ。

　そして、星降る夜に二人で眠ろう。

　朝あさ露つゆにぬれて二人で笑おう。

　二人でどこまでも歩いてゆこう。

『薔薇のマリア　VII. SINBREAKER MAXPAIN』了

あとがき

電話が鳴った。Ｋ氏だった。あとがきを３ページも書けという。あとがきは大の苦手だ。しかも、折悪あしく体調が悪かった。身体中が痛い。風邪かぜだ。僕の風邪はたいてい関節痛から始まり発熱にいたる。幼少時は扁へん桃とう腺せんが腫はれやすく三十九度を超こえる高熱とも馴な染じみだったが、最近は少しでも異状を感じると、食べられるうちに食べられるだけ食べてさっさと眠ねむり、翌朝までには治してしまう。そのときも近所のコンビニエンスストアで食料を買いこんで、ちょうど帰宅したばかりだった。Ｋ氏は僕の身体を気づかいつつ、できれば二日後の朝までになんとか欲しいとのこと。わかったと返事をして電話を切り、つめこむように食事をしてまずは一眠りしてからと床とこについた。泥どろ沼ぬまに陥おちいったかのようにあっという間に意識を失った。僕を目覚めさせたのは電話の音だった。僕は床から這はいだして受話器を手にとった。声がやや遠かった。雑音もあった。おまけに僕は起きがけでぼんやりしている。何、とか、誰だれ、とか、どこ、とか、要領をえないやりとりを繰くり返かえしたあげく、ようやく相手がＨだとわかった。Ｈの声を聞くのは二年ぶりくらいだろうか。で、何。今どこ。ああ、上海シヤンハイ。は？　上海？　なんで上海？

きてくれよ、今すぐ、とＨは言った。行かないよ。行くわけないだろ。いや、頼たのむよ。おまえにしか頼めない。たしかにＨとは腐くされ縁えんで、ずいぶんみっともない姿をさらしあった仲でもあるが、それにしても解げせない。上海は遠い。いや、大だい丈じよう夫ぶだって。そっちの時間で十一時四十分にさ、千ち歳とせから名古屋に飛んで、そっから上海まで、十六時十分着。余よ裕ゆうでしょ。どこが余裕なんだか。外は明るい。もう十時を回っている。かなり眠っていたようだが、本格的に具合が悪い。電話を切ってしまおうかと思った。まさか、とＨが言いだした。忘れてないよな。そうきたか。あれを出してくるとは。僕はあえなく屈くつ服ぷくした。わかったよ。行けばいいんだろ、行けば。上海でもどこでも行ってやるよ。Ｈは上海浦東国際空港からそう遠くないという住所とホテルらしき名前を早口で告げて、頼むよ、と最後に言った。

本当におまえにしか頼めないんだ。妙みように真しん剣けんな口調だったから、事情くらいきくべきかと口を開きかけたとき、電話が切れた。身体が重かった。Ｈにいくつも弱みを握にぎられている我が身を呪のろった。ほとんどは若気の至りの過あやまちで時効ものだろうが、あれだけはそうもゆかない。僕は慌あわてて荷物をまとめ、タクシーを呼んだ。新千歳空港でチケットを買い、中部国際空港へ。そこから中国国際航空４０６便に乗のり換かえて上海浦東国際空港へ。機内や乗り換えの待ち時間はほとんど寝ねていた。睡すい眠みんとも呼べないような不快な眠りだった。覚おぼ束つかない足どりで空港を出てタクシーをつかまえ、運転手に住所を書いた紙を見せると、何かわけのわからないことを言われたが、無視して目をつぶった。しばらくすると目的地にたどりついたようだった。ついたよ、と声をかけられた。日本語だった。飛び起きた僕の額に冷たいものが突つきつけられていた。銃じゆう口こうだった。

　そのあとどうなったか、正確には覚えていないのだが、車のドアが開き、何人かの男たちが車内になだれこんできて、殴なぐられたのか、蹴けられたのか、とにかく僕は失神したようだ。気がつくと、やけに寝心地のいいベッドに横たわっていて、徐と名乗る髭を生やしたあやしげな男に脈だの体温だのを計られた。徐は流りゆう暢ちような日本語で、あなたは客です、我々の指示に従ってくれれば危害は加えないから心配しないよう、と僕に言った。僕は何がなんだかわからず頭がおかしくなりそうだった。風邪の症しよう状じようもひどくなっていた。半分諦あきらめの境地で、原げん稿こうを、と呟つぶやいた。原稿を書かないといけないんだけど。原稿？　徐は目を見開いた。僕はうなずいて、そう、原稿だよ。あとがきを書いて、編集者に渡わたさないといけないんだ。今日は何日？　ああ、もうすぐ締しめ切きりだ。今日の朝までなんだ。徐は肩かたをすくめて、パソコンを使いますか、と言った。相手のアドレスがわかるのなら、イーメールで送ってさしあげますよ。僕はやけくそで是ぜ非ひ使わせて欲しいと頼んだ。そうして今、このあとがきを書いている――わけがないです。

　あとがきは本当に苦手で、実際風邪をひいていて、ひどくだるくて、ネタがないもので、こんなことになってしまいました。ともあれ、これでジェードリ編が終わり、『VIII』はしばらく本編で出番がなかったあの人メインのお話になる予定です。お楽しみに。

　それでは、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関わったすべての方々、そして今、本書を手にとってく

ださっている皆みな様さまへ、胸いっぱいの愛と感謝をこめつつ筆を置いて、寝ね床どこに戻もどります。おやすみなさい。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

薔ば薇らのマリア

VII．SINBREAKER MAXPAIN

十じゆう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　VII．SINBREAKER MAXPAIN』平成19年6月1日初版発行

平成20年9月25日5版発行

BOOK☆WALKER